福岡南バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

第　3　集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)

1 9 7 6

福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第　3　集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)

序

この報告書は，福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて昭和46年度から49年度にかけて実施した一般国道3号線福岡南バイパス建設路線内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集，筑紫郡太宰府町所在の御笠川南条坊遺跡（1）の続編をなすものです。

十分な報告ではありませんが，本報告書を通して年々失われてゆく埋蔵文化財に対し，一層のご理解とご協力をいただければ幸いです。

なお，調査に対してご協力をいただいた地元の方々をはじめ，関係各位のご援助とご配慮により本書を刊行することができましたので，ここに心からの感謝を申し上げます。

昭和51年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　森田　實

例　　言

1．本書は，国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して，昭和47・48年度に実施した御笠川南条坊遺跡の第3次，第4次発掘調査の概要報告です。

2．調査は九州地方建設局福岡国道工事事務所の委託を受けて，福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆分担は次のとおりである。

第3次調査報告

一．……新　原　正　典
二．……新　原　正　典
三．……前　川　威　洋
四．……新　原　正　典
五．1～10……前　川　威　洋
　　11～15……新　原　正　典

第4次調査報告

一．……新　原　正　典
二．……前　川　威　洋
三．……新　原　正　典
四．1～5……前　川　威　洋
　　6～11……新　原　正　典
　　10……倉　住　靖　彦
五．……前川威洋，新原正典

4．付編として第5次調査出土木製品の樹種鑑定報告書を収録した。

5．掲載写真の撮影，実測図の作成および製図は執筆担当者が行なったが，一部は石丸洋・松村登美子氏にお願いした。

6．本書の編集は前川威洋，新原正典が担当した。

第 3 次 調 査

本　文　目　次

頁
一．はじめに……2
二．調査経過……4
三．層位……5
四．遺構……6
　1．建物・柱穴……6
　2．溝……6
　3．土坑……8
　4．井戸……12
五．遺物……13
　1．下層土師器・Ⅰ類……13
　2．上層土師器・Ⅱ類……27
　3．須恵器……48
　4．片口……48
　5．火舎……50
　6．彩釉陶器……50
　7．磁器……51
　8．雑器……57
　9．灰釉陶器，古瀬戸，常滑陶器……60
　10．瓦……60
　11．石製品……60
　12．ガラス製小玉……62
　13．金属製品……62
　14．銅銭……63
　15．木製品……65

図　版　目　次

本文対照頁

図版1　1．遺跡全景航空写真……4
　　2．遺跡全景（北から）……4
2　1．上層遺構全景（東から）……6
　　2．上層遺構全景（西から）……6
3　1．上層遺構全景（西から）……6
　　2．西区上層遺構（北から）……6
4　1．下層遺構全景（東から）……6
　　2．下層遺構全景（西から）……6
5　1．東区下層遺構全景（北から）……6
　　2．西区下層遺構全景（北から）……6
6　1．ＳＤ 301 溝土層……6
　　2．ＳＤ 302 溝（南から）……6
7　1．ＳＫ 310 土坑……8
　　2．ＳＫ 325 土坑……8
8　1．ＳＫ 317 土坑……8
　　2．ＳＫ 318 土坑（右）ＳＫ 319 土坑（左）……8
9　1．ＳＫ 323 土坑……8
　　2．ＳＫ 333 土坑……8
10　1．ＭＫ 29 区土坑……8
　　2．ＳＫ 309 土坑……8
11　1．ＳＤ 301 溝（左）ＳＤ 304 溝（右）土層……6
　　2．ＳＤ 305 溝（左）ＳＤ 306 溝（右）……6
12　1．ＳＫ 345 土坑……8
　　2．ＳＫ 339 土坑……8
13　1．ＳＥ 301 井戸……8
　　2．ＳＥ 301 井戸……8
14　1．ＳＥ 303 井戸……12
　　2．ＳＥ 303 井戸……12
15　　ＳＫ 339 土坑出土遺物……18
16　1．ＳＤ 305 溝出土遺物（右最上はSK 339 土坑出土）……25
　　2．白磁（左上），青磁……51

本文対照頁

図版17　1．彩釉陶器……50
　　2．彩釉陶器……50
18　1．白磁2類，青磁1類……51
　　2．白磁3類……51
19　1．白磁4・5類……51
　　2．白磁……51
20　1．白磁6類……51
　　2．青磁7類（1）……51
21　1．青磁7類（2）……51
　　2．青磁7類（3）……51
22　1．青磁9類（1）……51
　　2　青磁9類（2）……51
23　1．青白磁……51
　　2．高麗青磁……51
24　1．白磁（SK 312土坑下部）……27
　　2．土師器長頸瓶（SK 345土坑），褐釉瓶……48
25　1．雑器……57
　　2．灰釉陶器，古瀬戸……60
26　1．石製品……60
　　2．金属製品……62
27　1．銅銭……63
　　2．下駄……66
28　1．墨書木札（1）……66
　　2．墨書木札（2）……66

挿　図　目　次

頁
1図　遺跡位置図……1
2図　遺跡全図……3
3図　E列東西壁・24列南北壁土層図……5
4図　上層遺構配置図……折込み7～8
5図　下層遺構配置図……折込み7～8
6図　SE 301 井戸実測図……11
7図　SE 303 井戸実測図……12
8図　土師器実測図（SK 341 土坑出土）……14
9図　土師器実測図（MF35区暗灰色粘質土出土）……16
10図　土師器実測図（SK 339 土坑出土—1）……19
11図　土師器実測図（SK 339 土坑出土—2）……20
12図　土師器実測図（SK 339 土坑出土—3）……21
13図　土師器，黒色土器，瓦器，須恵器，緑釉香炉，白磁実測図
（SK 339 土坑出土—4）……22
14図　土師器，黒色土器，瓦器，白磁実測図（SD 305 溝出土）……26
15図　土師器実測図（SK 312 土坑出土—1）上—上部，下—下部……28
16図　土師器実測図（SK 312 土坑出土—2）上—上部，下—下部……29
17図　土師器実測図（SK 312 土坑出土—3）上—上部，下—下部……30
18図　白磁，瓦器実測図（SK 312 土坑出土）上—上部，下—下部……31
19図　土師器実測図（SK 338 土坑出土）……35
20図　土師器実測図（576～585—MI 31・32区SD 305 溝かぶり
黄褐色粘質土出土，586～588—SK340土坑出土）……36
21図　土師器実測図（SK 317 土坑出土）……38
22図　土師器実測図（SK 309 土坑出土）……39
23図　土師器実測図（SK 304 土坑出土）……41
24図　土師器実測図（MF33区暗茶褐色土（4層）上部出土）……42
25図　土師器実測図（SK 333 土坑出土）……43
26図　土師器実測図（SD 301 溝出土）……45
27図　各溝出土土師器実測図……47
28図　土師器実測図（SD 304 溝出土）……48
29図　須恵器，土師器，片口，火舎実測図……49

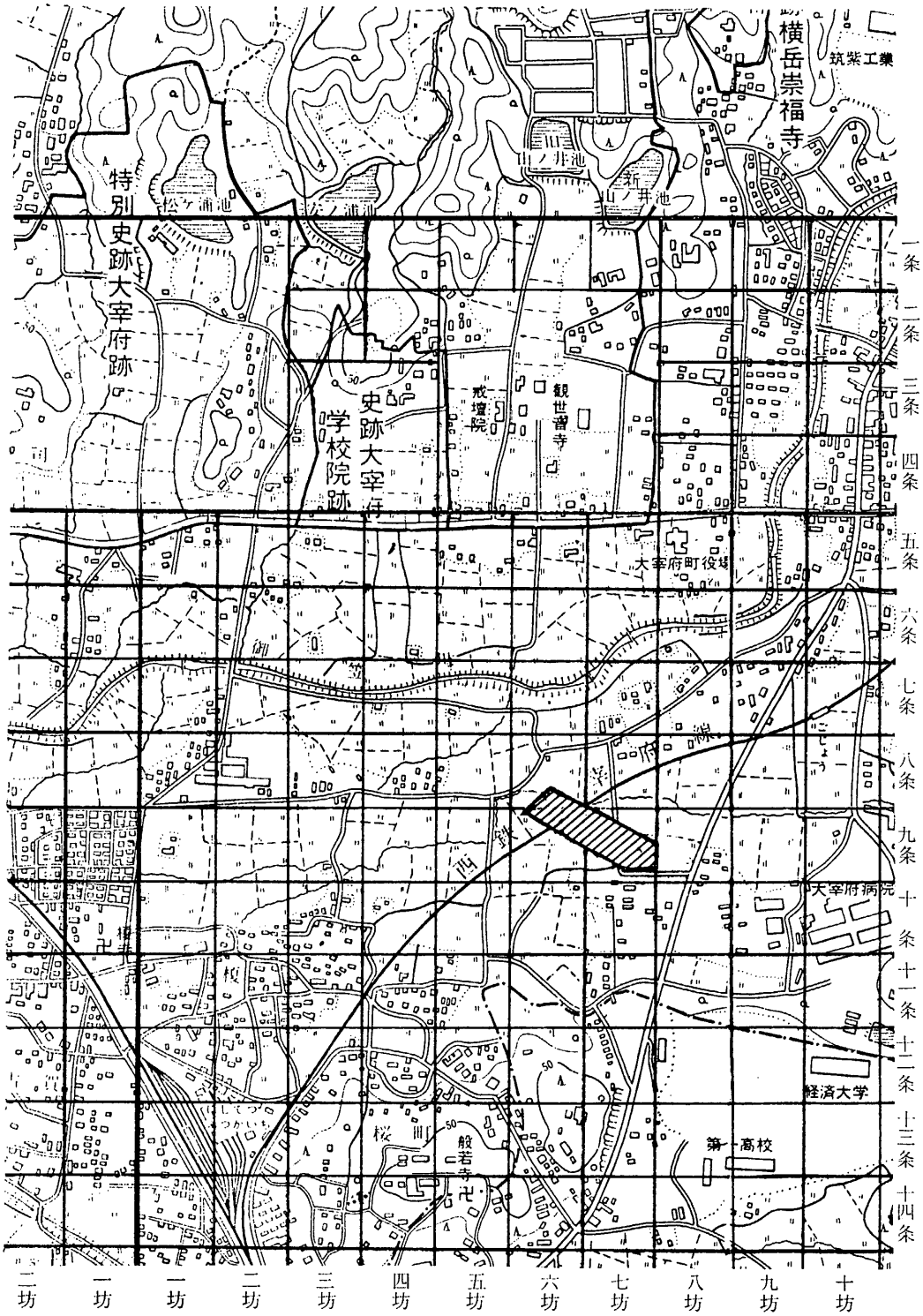
頁

30図　彩釉陶器実測図……50
31図　青磁，白磁実測図……52
32図　白磁実測図……53
33図　青磁，天目，高麗青磁実測図……54
34図　青磁実測図……55
35図　雑器実測図……58
36図　文字瓦拓影……59
37図　石製品実測図……61
38図　金属製品実測図……62
39図　銅銭拓影……64
40図　下駄実測図……66

表　目　次

本文対照頁

1表　発掘調査工程表……2
2表　土坑一覧表……9～10
3表　ＳＫ 341 土坑出土土師器計測表……15
4表　ＳＫ 341 土坑出土土師器の法量……15
5表　ＭＦ35区暗灰色粘質土出土土師器の法量……17
6表　ＭＦ35区暗灰色粘質土出土土師器計測表……17
7表　ＳＫ 339 土坑出土土師器の法量……23
8表　ＳＫ 339 土坑出土土師器計測表……24
9表　ＳＤ 305 溝出土土師器計測表……25
10表　ＳＫ 312 土坑下部出土土師器（Ａ類）の法量……32
11表　ＳＫ 312 土坑上部出土土師器（Ｂ類）の法量……32
12表　ＳＫ 312 土坑下部出土土師器計測表……33
13表　ＳＫ 312 土坑上部出土土師器計測表……34
14表　ＳＫ 338 土坑出土土師器計測表……35
15表　ＳＫ 338 土坑出土土師器の法量……36
16表　ＳＫ 317 土坑出土土師器の法量……37
17表　ＳＫ 317 土坑出土土師器計測表……38
18表　ＳＫ 309 土坑出土土師器の法量……39
19表　ＳＫ 309 土坑出土土師器計測表……40
20表　ＳＫ 304 土坑出土土師器計測表……40
21表　ＭＦ33区暗茶褐色土（４層）出土土師器計測表……42
22表　ＳＫ 333 土坑出土土師器の法量……44
23表　ＳＫ 333 土坑出土土師器の計測表……44
24表　ＳＤ 304 溝出土土師器計測表……47
25表　銅銭計測一覧表……65



1図　遺跡位置図　(1/10,000)　鏡山猛著『大宰府都城の研究』より

一、はじめに

御笠川南条坊遺跡は昭和46年度から昭和49年度にかけて6次にわたる発掘調査を行ない，昭和50年度には第5次調査分の報告として『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集を刊行した。今回の報告はそれに続くもので，昭和47年度第3次調査と48年度第4次調査分についての報告であるが，とくに第4次調査では銅印の出土という成果を上げることができ，九州歴史資料館の倉住靖彦氏に文献面からの考察をお願いした。

また，第5次調査にて出土した木製品の樹種鑑定結果が判明したので併せて報告する。鑑定については九州大学農学部の松本勗，林弘也両先生にお願いした。厚くお礼を申上げる次第である。

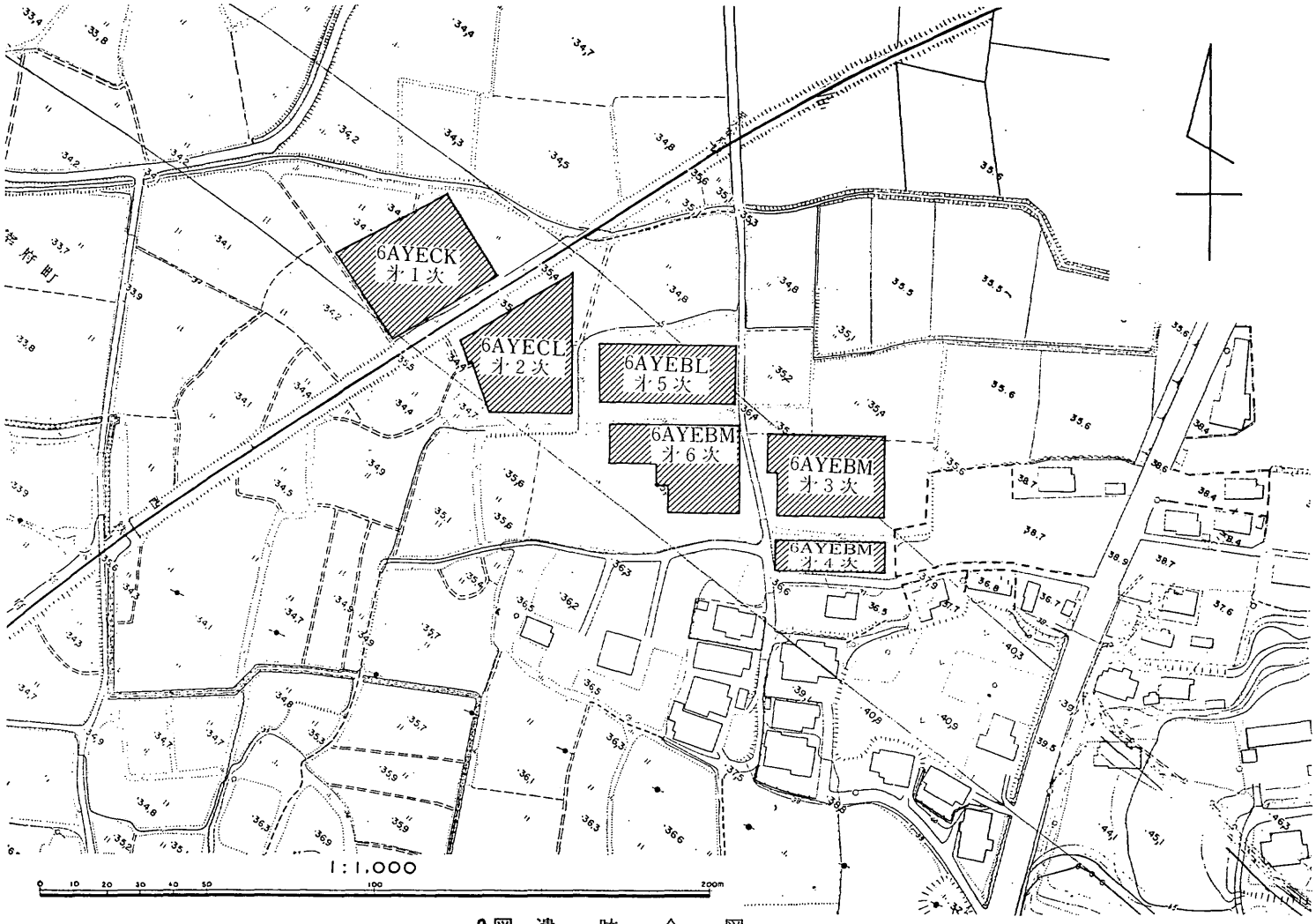
発掘調査関係者は次の通りである。

庶務担当者	福岡県教育庁管理部文化課主査		師岡　満
	同	主事	滝　龍二
	同		大神　新
発掘担当者	同	技師	前川威洋
	同		浜田信也
	同		新原正典
調査補助員（第4次）			赤崎敏男
			菊池法信

なお，本書の作成にあたっては松村登美子，土居隆臣，島田光一氏の，発掘作業には地元の方々の協力を得た。厚く謝意を表する。

調査次	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	6AYECK	2,000㎡	昭和46年10月11日～昭和47年3月20日 昭和47年8月18日～昭和47年9月12日
第2次	6AYECL	1,000㎡	昭和47年9月13日～昭和48年3月17日
第3次	6AYEBM	1,000㎡	昭和48年2月10日～昭和48年6月19日
第4次	6AYEBM	700㎡	昭和48年9月10日～昭和49年1月10日
第5次	6AYEBL	1,400㎡	昭和48年11月22日～昭和49年3月20日
第6次	6AYEBM	1,050㎡	昭和49年4月8日～昭和49年8月24日

1表　発掘調査工程表


6AYECK
オ1次
6AYECL
オ2次
6AYEBL
オ5次
6AYEBM
オ6次
6AYEBM
オ3次
6AYEBM
オ4次
1:1,000
0 10 20 30 40 50 100 200m

2図 遺 跡 全 図

第 3 次 調 査

二、調 査 経 過

第３次調査は昭和48年２月10日より６月19日までの期間で６AYEBM区で行なった。６AYEBM区は前回に報告した６AYEBL区南東の一段高い水田（標高35.6m）で，大宰府政庁中軸線より東へ約730mの地点にあたる。地番は太宰府町大字太宰府字泉水2743-1である。

本発掘に先立ち前年度に耕作土を排除していたので３mグリッドの設定と第２層床土からの発掘作業を行なった。２月19日から３層黒褐色の掘り下げにかかるが，調査区をさらに東側へと拡張するため23日から排土の移動と耕作土からの掘り下げを行ない，３月５日から３層の発掘にかかる。

３月９日より上層焼土混黒褐色土面の遺構検出作業に入り，かなりの柱穴などが発見されるが同一レベルでの北側では遺構はほとんど検出されない。12日より一部遺構の発掘を行ない，ＭＬ29区の長方形土拡からは青磁小皿の完形品７枚が出土する。17日にはＧ列においてほぼ東西に延びる溝と，その南側で井戸の掘り方を検出する。23日には東側溝コーナー底面にて「咒咀」墨書木札を発見する。27，28両日は全景及び遺構の写真撮影を行ない，４月３日より上層遺構の実測作業に入る。

４月５日から実測が終了した地区の上層遺構を順次掘り下げる。その日のうちに早くもＳＤ305溝を確認し，12日はＳＤ304溝，20日にはＳＤ306溝と，下層ではこれらの溝を主体とした遺構を検出するが軟弱な青灰色粘質土に掘り込まれているための発掘作業は困難をきわめた。また溝は平面からは十分に見分けられないために，断面を追いながら発掘を進めた。

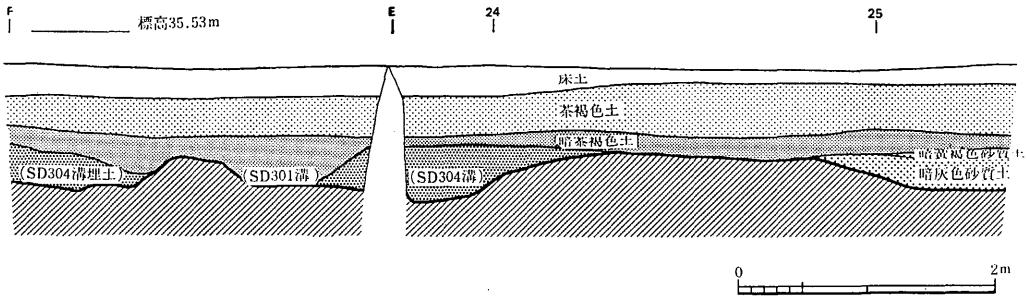
５月９日ＳＥ503井戸の写真撮影を行なう。15日にはＭＫ34区でＳＤ306溝と切り合った井戸を検出するが，軟弱な砂層と激しい湧水のため調査続行は危険性を伴い，抜き跡の確認を行なって調査を断念した。26・27日及び30日にかけて写真撮影を行ない，31日より下層遺構の実測を始める。

６月５日に井戸を取り上げてすべての発掘作業は終了するが，実測はひきつづき行なう。なお，実測と併行して次回調査区の表土除去作業をする。17日にて遺構及び土層図の作成を完了。19日に器材を撤収して第３次の調査を終える。

三、層　　位

土層はほぼ水平であるが，部分的に乱れたり複雑になっている部分もある。しかし大きくみると，**1層**は耕土で約10cm程度である。**2層**は茶褐色の床土で鉄分を多く含んでいて，厚さ約10〜15cmである。**3層**は同じく茶褐色土であるが鉄分を含んでいなく，厚さ30〜40cmである。遺物を含んでいるが細片が多い。**4層**は暗茶褐色土で10〜20cmの厚さがあり，糸切り底の土師器が多く出土し，完形土器や大形破片も多い。**5層**は暗黄褐色砂質土層と暗灰色砂質土層で，大きめの糸切り底土師器杯が出土している。**6層**は暗灰色粘質土でヘラ切り底土師器が出土している。

各層の出土遺物は1・2層は近世の土層で新しい陶磁器類が出土している。3層は鎌倉時代の糸切底土師器が出土しているが，小さな破片が多く，遺構面も認められない。4層はSD301溝や井戸，柱穴，土坑などの遺構があり，糸切り底の土師器，青磁，陶器など多くの遺物が出土している。しかし細部にわたると複雑な層位があり，今後土器型式ともつきあわせて再検討の必要がある。5層は特に北西部で認められるが他の部分では土坑など，遺構として残っているところが多く，大きめの糸切り底土師器，白磁などが出土している。6層は発掘区域の東半の北壁に近い部分に残っているが，溝や土坑としても認められる。出土遺物はヘラ切り底の土師器で高台付椀もある。以上のように各層が認められ，地表から地山までの厚さは約1〜1.2mである。これらの土層のうち，3・4層を**上層**，5層は中層とでもよぶべきであるが，6層とともに**下層**として取扱った。



3図　E列東西壁・24列南北壁土層図

四、遺　　構

第３次調査では上・下の２面において遺構が検出され，上層では東西に延びる大溝と井戸を下層でも溝と井戸を検出している。土坑・柱穴ともに多数みつかっている。

1.　建物・柱穴

径20cm 内外の柱穴は多数見つかっている。とくに調査区の 南側中央部付近で密に見られるが，ＳＤ301 溝の北側においては検出されていない。建物跡として 想定できるものは２棟分確認でき，一つはＭＭ28～30区付近に見られるものと，他はＭＭ35区にて見られるものである。前者は桁行４間（柱間2.0m）梁行２間（柱間2.0m）の東西棟で柱穴内には根石を１～２個据えた比較的大きい建物である。後者は桁行２間（柱間1.8m）梁行１間（柱間1.7m）の南北棟掘立柱建物であるが，南側は調査区外のため更に延びるかどうかは不明である。２ケ所の柱穴には平坦な根石がみられる。またＭＪ35区では根石を配した柱穴が３個東西方向に並び，西側より1.8m×1.9mの柱間をもつものがあるが対になる柱穴は検出できなかった。

以上のように検出した柱穴数に比して建物としてまとまるものは少なく，比較的明確なもののみを取り上げたが 詳細な検討を加えれば 更に建物として まとまるものは 増加するであろうし，併せて構造や規模，尺度の問題など建物については今後解明されるべき点が多い。

2.　溝

上層では調査区の北側において東西に延びる ＳＤ301 とその東端で接する ＳＤ302 及びＳＤ303 溝が，下層では西側に おいて南北に 延びる ＳＤ304 と東西方向に 延びる ＳＤ305・306・308の５条の溝が検出されている。いずれも素掘りの溝である。

ＳＤ301 は調査区北側にて検出された大溝で，東西方向よりやや北へ片寄っている。最大幅3.6m，最少幅1.7mで中央部付近にてやや狭くなる。底面は西の方へわずかながら傾く。断面は中央畦部分では幅2.5m，底面幅0.6m，深さ0.45mを測り，ゆるやかなＵ字状の立ち上がりをなす。また，ＭＧ35 区の東端にてＳＤ302 溝コーナーと続いているが底面は一段高くなって直接には接続していない。溝内にはほぼ全面に黒味を帯びた暗茶褐色土が堆積し，底面は青灰色粘土層に掘り込まれている。溝内からは糸切り底の土師器を主体とし一部ヘラ切リ底土師器も出土しているが溝と切り合った下層土坑のものも混入している。その他に須恵器，青磁，白磁，片口，緑釉，瓦，とりべ，常滑焼，金属片など各種のものが出土している。

ＳＤ302 はＳＤ303 溝東端に溝コーナー部分が接続するもので，調査区の東壁面に接して溝のたち上がり部と思われる地山が確認されており，東西方向から北へと方向を転換する溝西側コーナー部と考えるが，推定では4.5mほどのものと思われ，底面幅も約３ｍと幅広い大溝であ

る。深さは0.7mで底面は平坦面をもってゆるく立ち上がりＳＤ301溝底面より0.1mほど深い。溝内では上から灰褐色砂質土，明黒褐色腐植土，黒褐色腐植土の堆積が見られ，青灰色粘土層まで掘り込んでいる。溝内には40cm前後の礫や大きな流木がみられ，底面にはりついて「急々如律令」などの咒咀を墨書した木札が10点余り発見されている。糸切り底土師器を主体として須恵器や青磁，白磁，下駄歯，箸などが出土している。ＳＤ301溝とほぼ同時期のものである。

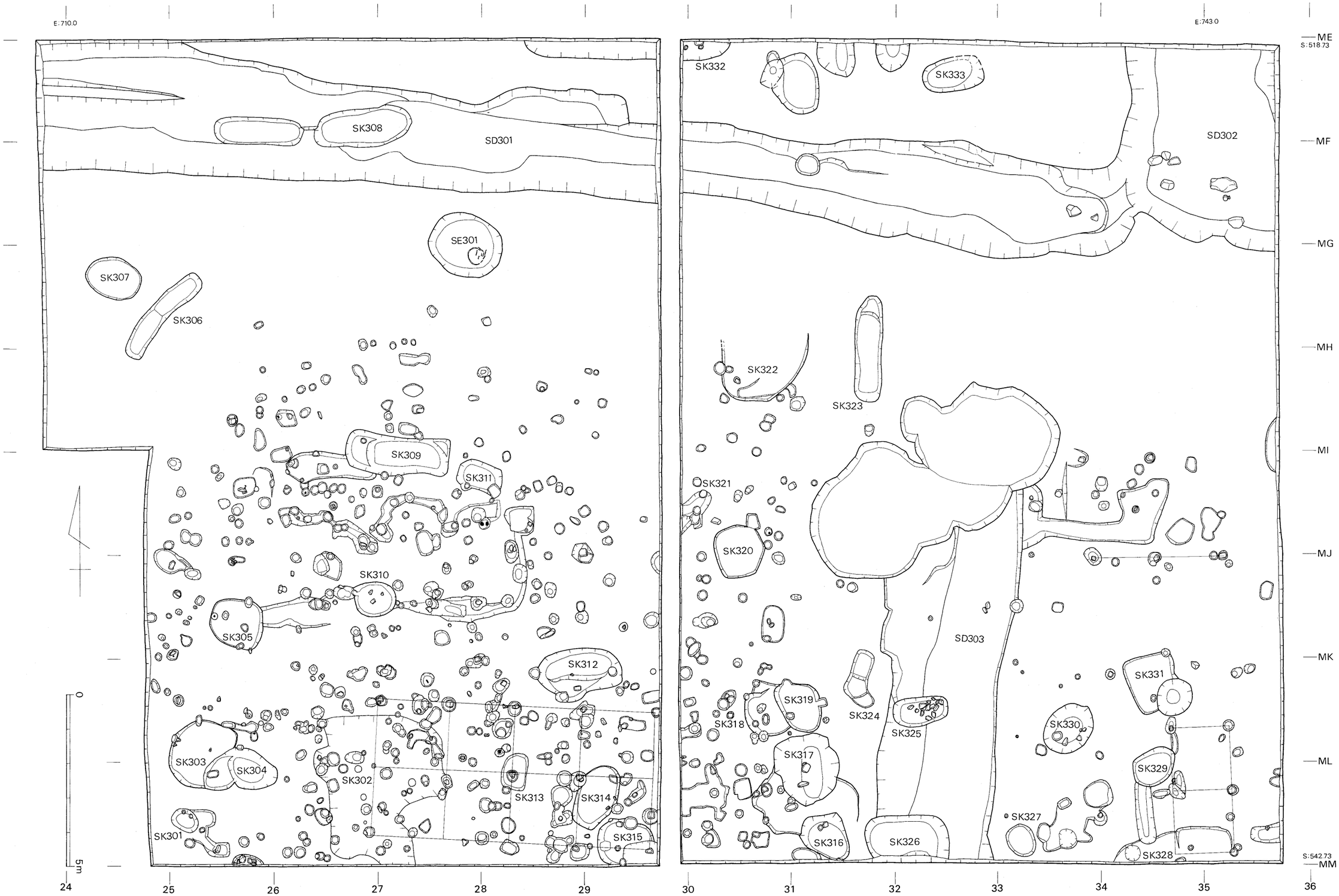
ＳＤ303 は南側にて検出された南北溝で，3.5mほどの幅をもつ広いものであるが深さは0.1mと浅くだらだらと底面へとつづくものである。南端は調査区外へ延びるものであるが北端はＭＪ35区付近にて切られていてそれより北へは延びない。

ＳＤ304 は南北方向に延びる溝でやや東へ偏る。幅約1.4m，深さ0.2mの浅い溝で北へと傾斜している。南端にて東から延びるＳＤ305溝と交わる。灰褐色土の堆積がみられ，ヘラ切り底土師器，黒色土器などやや古い時期のものが多く，瓦類の出土も他の溝に比して多い。なお24列南北壁土層の観察においてもＳＤ304溝の埋土の中にＳＤ301溝が掘り込まれて明らかに溝の切り合い関係が認められた。（３図，図版６の１）

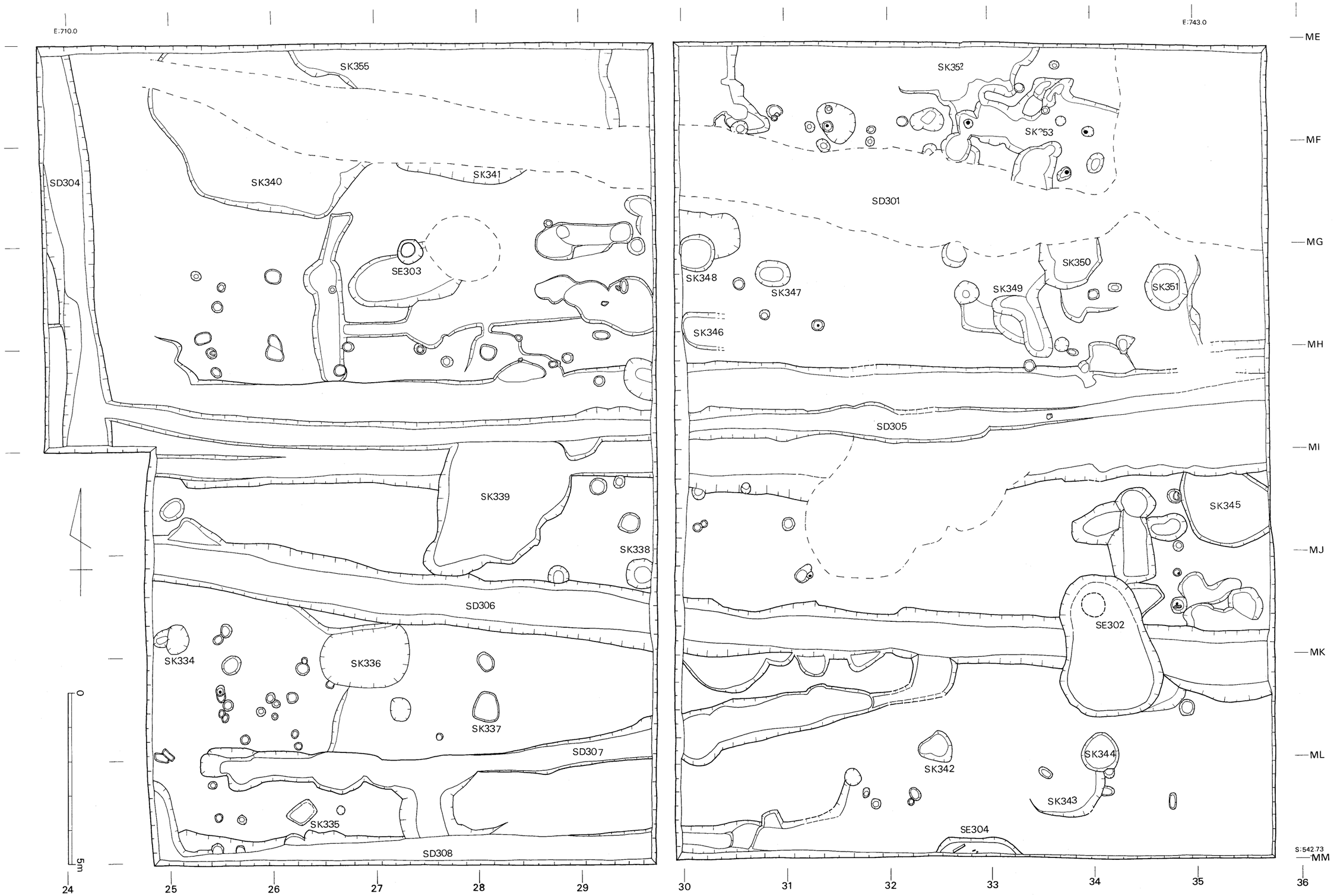
ＳＤ305 は中央部をほぼ東西方向に延びる溝で二段に掘り込まれているが１条の溝としてとらえた。溝内から出土する遺物は上段・下段ともにヘラ切り底土師器と糸切り底土師器を伴出するが，下段掘り込みの最下層ではヘラ切り底土師器のみ出土していて両者は区別できるのかも知れない。下段の溝はヘラ切り底土師器の時期まで遡ることは当然である。規模は上段で幅3.5m，底面幅３m，深さ0.2mと浅くて幅広く，下段のものは幅0.9m，深さ0.5mの立ち上がりのつよいＶ字溝である。上段には褐灰色土，下段上部には暗褐灰色土，下部には暗灰色粘土の堆積がみられ，青灰色砂層の地山面まで掘り込んでいる。西端にてＳＤ304溝と交わるが出土遺物からみてＳＤ304溝の方が先行するかあるいはほぼ同時期の頃のものと考えられる。ＳＤ304溝より西へは延びない。東側では下段の掘り込みは浅くなって上段の底面とほぼ同一となる。西へゆるやかに傾斜している。出土遺物は土師器の他に須恵器，青磁，白磁，黒色土器，瓦，石鍋などが出土している。

ＳＤ306 はＳＤ305溝の南にて検出され，西側では接近するが東側ではやや離れる。幅1.8m深さ0.5mのゆるやかなＵ字状のもので暗灰色粘土の堆積が見られ，西へ傾斜している。東側においてＳＥ402井戸により切られている。ヘラ切り底土師器，須恵器，青磁，緑釉，瓦，石鍋，鉄片などが出土している。

ＳＤ307，308は南端にて検出された浅い小溝で，ともに東西方向に延びるが両端ともに行き止まる。ヘラ切り底土師器などを出土している。



4図　中層遺構配置図（1/100）



5図　下層遺構配置図（1/100）

3. 土　　坑

今回検出した土坑は上層で約50基，下層で約30基を数え，形態，規模などの点でそれぞれ差異を示している。

SK303，305，310，318，327などは円形に近い形をなすものでSK327のように径が1m以下のものからSK303のように2mを越すものまであるが，浅いものが多い。SK318はSK319に切られているが底面に粘りついて銅板，銅製飾金具，鉄片，砥石，鞴羽口，とりべなどを出土している。鍛冶関係の遺物が多く見られるが工房跡とは考えられない。

SK301，304，307，316，322，329，330は楕円形ないし不整円形をし，長径と短径の比が比較的大きいものである。SK301のように小形のものやSK322のように大形のものもあるが概して1.5m内外のものが多く，深さも円形のものに比して深く遺物も多く出土している。

SK311，325，333など長径1.5m前後，短径1m以下の小形長方形土坑は長軸を東西方向にとるものが多い。SK325は20cm内外の礫を底面に雑然と並らべている。遺物の出土はない。SK333は底面に黒色の灰が堆積し，その上部からは約50枚の多量の土師器が出土している。これら一群の土坑は前回報告した第5次調査でも同様なことがいえ，墓坑的な性格をもつものとも考えたが，内から出土する遺物は土師器から瓦，鍛冶関係品まで多種にわたっており，遺物の出土状況からすればそうとは言い切れない。

SK309，312，314，317，319，326は長方形土坑でも大きい部類に属するもので，長径は短径のほぼ倍の長さをもつ。深さも比較的深く，多数の遺物を出土する。SK312は灰黒色土の堆積がみら，完形の土師器約80枚と完形白磁小皿7枚が一括出土している。SK317からも鉄鏃，銅線切りくず，常滑焼などが出土している。

SK306，308，323などは長径が短径の3倍以上ある細長土坑で，比較的浅く遺物の出土も少ない。

SK320，331は方形をなすもので，SK320は不整形で青灰色粘土層まで達する深い掘り込みをもつ。

SK332は調査区北壁に接して検出され，大半は調査区外で完掘できなかったが一辺が6m近くもある大きなもので，深さは0.2mを測る。内には黄褐色砂層をはさんで黒色炭化層が2層にわたって堆積している。炭化層からは土師器とともにとりべが出土している。

下層で検出された土坑の多くは楕円ないし不整円形をなすものが多く，長方形のものはあまりみられなかった。**SK338，344，348**は径1m内外の円形坑でSK338は埋土に炭化物が含まれ，銅製の帯鉤と銅板切りくず，鉄鍋片などが糸切り底土師器と伴出している。

SK339は4mほどの大きな不整形をな落ち込み状の土坑で，SD305溝と切り合っているが溝に先行する。深さは0.45mほどで北へゆるく傾斜し，灰色砂層の堆積がみられる。やや古

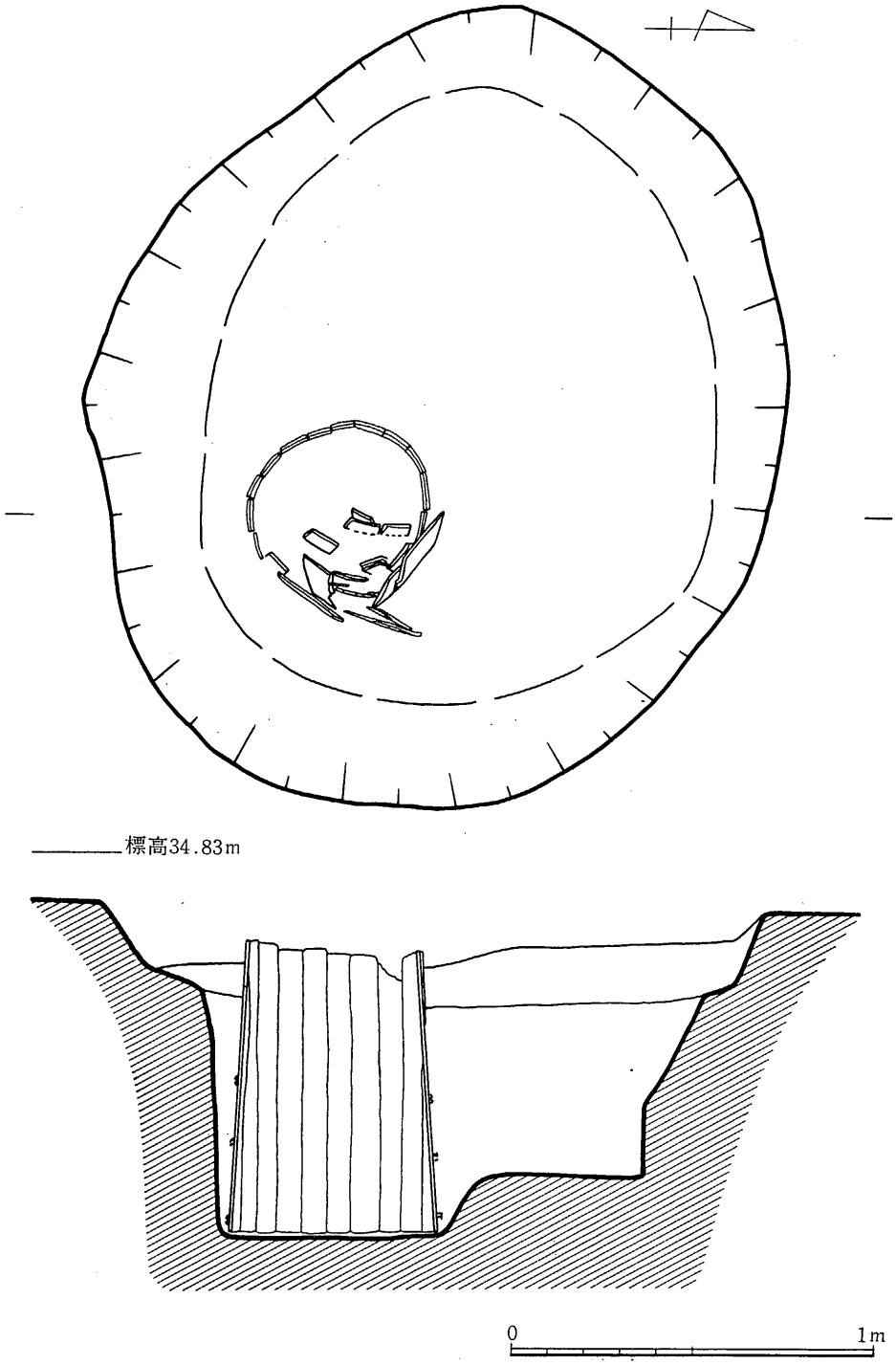
手のヘラ切り底土師器，瓦器椀，「平井」,「佐」などの文字瓦も出土している。**SK345** も長径3mを測る不整形な土坑で浅いものであるが，土師器の長頸瓶が完形のまま出土している。**SK340**，**SK341** も大きな落ち込み状坑でSD301溝に切られている。ともにヘラ切り底土師器を出土。

遺構番号	地区	旧番号	平面形態	規模			出土遺物
				長径	短径	深さ	
SK 301	MM26	P-1	長円形	0.8	×0.63	×0.25	土師器Ⅱ-4類，磁器7類，雑器7類瓦，とりべ
〃 302	MM28		不整形	4.1	×3.8	×0.1	土師器Ⅱ-1類，磁器7C・9類，雑器1類，瓦，支脚
〃 303	ML26	P-3	不整円形	2.03	×(1.7)	×0.12	
〃 304	MM27	P-5 不整円形	不整円形	1.5	×1.12	×0.47	土師器Ⅱ-3類，磁器6・7C・8・9類，砥石，片口
〃 305	MK26・27	P-5	円形	1.59	×1.4	×0.13	土師器Ⅱ-4類，磁器7C類，瓦
〃 306	MH25		長方形	3.06	×0.56	×0.1	
〃 307	MH25	円形坑	楕円形	1.63	×1.2	×0.11	土師器Ⅰ・Ⅱ類，磁器4・7A・7C類，瓦
〃 308	MF28	MH28 土坑	長方形	2.84	×1.11	×0.58	土師器Ⅱ類，とりべ
〃 309	MJ28	長方形坑	長方形	2.41	×1.03	×0.26	土師器Ⅱ-4類，磁器3・6・7C・8類，緑釉，雑器1・7・12類，片口，滑石製品
〃 310	MK28		円形	1.19	×1.02	×0.2	
〃 311	MJ29	長方形坑	楕円形	1.37	×0.78	×0.3	土師器Ⅱ-4類，磁器6・7・7C・8類，雑器7類，瓦，滑石製品
〃 312	ML30	長方形坑	長方形	2.47	×1.28	×0.56	土師器Ⅱ-1類，磁器3・5・9類，雑器1・7・8類，瓦，石鍋，鉱滓，滑石製品
〃 313	MM28	P-6	長方形	1.06	×0.7	×0.24	
〃 314	MM30	P-4	楕円形	1.92	×1.15	×0.22	土師器Ⅱ-4類，須恵器
〃 315	MM30	P-5	円形	1.65	×(1.5)	×0.2	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器3・7C・8類，雑器1・7類，片口，とりべ
〃 316	MM32	P-1	楕円形	1.6	×1.05	×0.58	土師器Ⅱ-3類，石鍋，片口
〃 317	ML32	長方形坑	楕円形	2.08	×1.75	×0.5	土師器Ⅱ-2・3類，磁器3・7・8・9類，雑器1・7・8・12類，滑石製品，片口，鉄鏃，銅切りくず
〃 318	ML32	方形坑	隅丸方形	1.31	×(1.3)	×0.17	土師器Ⅱ-1・3類，磁器5・9類，鉄製品，銅板，銅製品，砥石，片口
〃 319	ML32	P-1	楕円形	1.5	×1.16	×0.18	土師器Ⅱ-2・3・4類，常滑，とりべ，瓦，鉄滓
〃 320	MK31		隅丸方形	1.54	×1.44	×0.63	土師器Ⅱ類，磁器3類，雑器7・12類
〃 321	MJ31				0.57	×0.17	土師器Ⅱ類，須恵器，雑器7類，常滑
〃 322	MI31・32	円形坑	不整形		2.32	×0.1	土師器Ⅱ-1類，磁器8・9類，常滑，片口，とりべ，滑石製品
〃 323	MH32	長方形坑	長方形	3.11	×0.76	×0.29	土師器Ⅱ-3類，須恵器，磁器1・6類瓦，常滑
〃 324	MH32	長方形坑	長方形	1.4	×0.56	×0.2	土師器Ⅱ類
〃 325	ML33	長方形坑	長方形	1.61	×0.85	×0.28	土師器Ⅱ-2類，須恵器，土鍋，常滑，とりべ，石鍋，ふいご羽口

遺構番号	地区	旧番号	平面形態	規模			出土遺物
				長径	短径	深さ	
〃 326	MM33	P-1 長方形坑	長方形	2.45×(1.5)×0.49			土師器Ⅰ-2・Ⅱ-3類，磁器1類，瓦，常滑
〃 327	MM34	P-4 円形坑	円形	0.94×0.83×0.17			土師器Ⅰ-2類
〃 328	MM35・36		不整形			0.11	
〃 329	MM35	P-1	楕円形	1.38×0.98×0.21			土師器Ⅰ-2・Ⅱ類，須恵器，瓦
〃 330	ML34	P-1	楕円形	1.54×1.28×0.27			土師器Ⅱ-2類，磁器5類，雑器7類，瓦
〃 331	ML35	方形坑	方形	1.66×1.49×0.18			
〃 332	MF29・30		長方形	2.96×		0.24	土師器Ⅱ-3類，雑器，とりべ
〃 333	MF33		長方形	1.78×0.98×0.1			土師器Ⅱ-5類，磁器6・9類，須恵器，とりべ，ガラス小玉，片口
〃 334	MJ25		不整円形	0.85×0.64×0.15			土師器Ⅱ類，須恵器，瓦
〃 335	MM27	長方形坑	長方形	0.81×0.56×0.27			土師器Ⅰ-4類，須恵器，瓦
〃 336	MK27・28	落ち込み	楕円形	2.62×(2.0)×0.09			土師器Ⅰ-2類，須恵器，文字瓦，砥石，土鍋
〃 337	ML28	円形坑	不整形	0.87×0.76×0.12			土師器Ⅰ-2類，須恵器，鉄片
〃 338	MK30	円形坑	円形	0.87×(0.85)×0.17			土師器Ⅱ-1類，磁器1・4類，鉄滓，帯鉤，銅板切りくず，石鍋
〃 339	MI・MJ 28・29	落ち込み	不整形	1.8+α×1.95×0.4			土師器Ⅰ-2類，磁器1・3・4類，緑釉，須恵器，文字瓦
〃 340	MG 26・27	落ち込み	不整形	3.2		×0.25	土師器Ⅰ-2，Ⅱ-1・3類，磁器7D類，瓦，須恵器
〃 341	MG28・29	落ち込み		1.93		×0.16	土師器Ⅰ-2類，磁器4・7・7C類，雑器7・8類，須恵器，瓦，片口
〃 342	ML33		不整三角形	1.1	×0.96	×0.34	土師器Ⅰ類，須恵器，瓦
〃 343	MM33・34	落ち込み	円形？	2.3		×0.31	
〃 344	ML34	P-5	円形	1.5	×1.1	×0.24	土師器Ⅰ・Ⅱ類，雑器7類，片口
〃 345	MJ36	P-7	不整形	1.5	×1.17	×0.2	長頸土師器壺，瓦
〃 346	MH31	P-2	長方形？	1.0+α×1.1×0.22			土師器Ⅰ類，須恵器，雑器
〃 347	MH32		長円形	1.01×0.75×0.22			土師器Ⅱ類，磁器1・7C類，土鍋
〃 348	MH31	P-1	円形	1.1	×1.05	×0.19	土師器Ⅰ-2類，瓦
〃 349	MH34	土坑	不整形	1.96×07.4×0.29			土師器Ⅰ-2類，須恵器，瓦
〃 350	MH34		長円形？	1.83×1.3+α		×0.19	
〃 351	MH35	円形坑	円形	1.37×1.23×0.21			土師器Ⅰ-2・(Ⅰ-4)類，磁器1類
〃 352	MF33・34	Npit		4.3		×0.1	土師器Ⅰ-2・Ⅱ類，磁器1類，須恵器，瓦
〃 353	MF34	Spit	不整形			0.5	土師器Ⅰ-2類，磁器1類，須恵器，片口，瓦，雑器
〃 354	ML31	P-3	円形	1.62		×0.22	土師器(Ⅰ-1)Ⅰ-2類，磁器1類，緑釉，石鍋，瓦，須恵器
〃 355	MF27～30					0.18	土師器Ⅱ-1類，須恵器，瓦，磁器1・3類

( ) 内は復元値，単位m

2表 土坑一覧表



6図　ＳＥ301 井戸実測図

4. 井　　戸

井戸は上層にて１基，下層にて３基の計４基を検出した。

ＳＥ301 は上層にみられるもので，ＳＤ301溝の南約１ｍのところで検出された。長径2.2ｍ短径1.9ｍの楕円形をなす掘り方の南東隅に寄せて桶側が設置され，深さは約１ｍで，北側底面は二段による掘り込みである。桶側は長さ80cm，幅８cm，厚さ1.7cmの板材を20枚組み合わせたもので，径約46cmを測り下端はやや開いている。胴中位より下に３ケ所竹タガによる緊束がみられ，下端は褐色砂礫層に達している。桶側上部にやはり桶の部材と思われる折損した板が10枚ほど見られ，さらに上段に桶側様のものが据えられたものであろう。前回報告の区分によればＤタイプに属する形式のものである。掘り方には暗灰色土の堆積がみられ，糸切り土師器，陶器，片口，瓦を，井戸内からも糸切り底土師器，火舎などを出土している。

ＳＥ302 は下層において検出され，ＳＤ306溝を切って造られている。長径4.2ｍ，短径2.3ｍの不整円形掘り方をもつもので，井戸枠は確認されず抜き跡と思われるが，激しい湧水のため調査を断念した。掘り方よりヘラ切り底土師器，糸切り底土師器，青磁，白磁，常滑陶器，緑釉陶器，石鍋，下駄などが出土している。

ＳＥ303 は上層のＳＥ301溝に近接して造られ，径0.7ｍ，深さ0.9ｍの不整円形を呈する掘り方ほぼいっぱいに曲物が２段据えらている。上の曲物は径40cm高さ22cm，下のものは径36cm，高さ21cmで上の曲物に比してやや小形である。ともに外面は上・下二重にまかれている。曲物の上端には竹タガが残存していて桶側の構築が考えられ，上段に桶側，下段に曲物を裾えるＣタイプに属するものである。掘り方底面には腐植した木の葉の堆積がみられ，井戸内

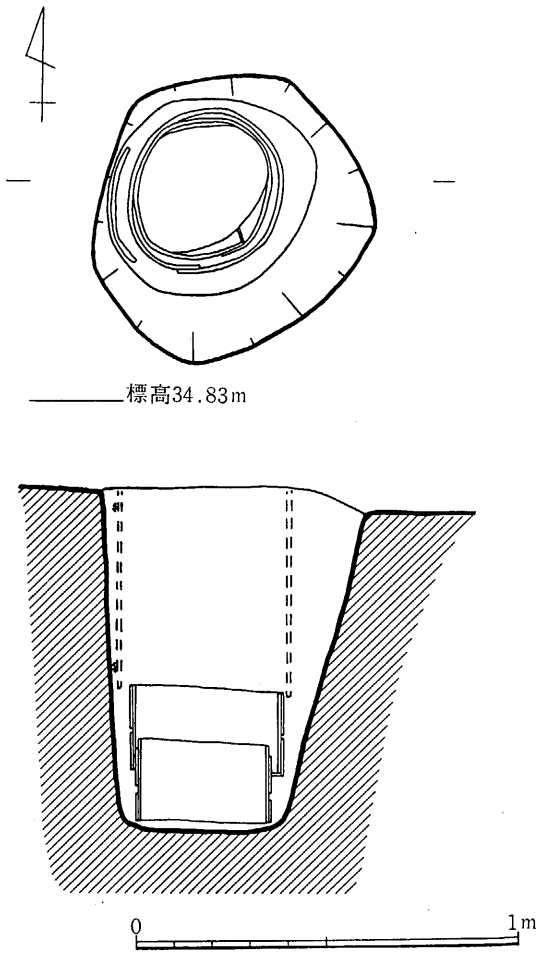


図７　ＳＥ303井戸実測図

からは糸切り底土師器，ヘラ切り底土師器，瓦などが出土している。

SE304 は調査区南端の壁面に接して検出されたが，大半が調査区外にかかるため確認のみ行った。掘り方からは糸切り底土師器，青磁，片口などが出土している。

五、遺　　物

1. 下層土師器・Ⅰ類（8～13図）

下層から出土したヘラ切り離し底（以下ヘラ切り底）の土師器を総称してⅠ類とした。土師器はおもに溝や「落ち込み」ともいえる大きな土坑内からまとまって出土し，部分的に薄い包含層も認められる。なお他の地点からは，第3～5次調査区出土のものよりも古いと考えられるヘラ切り底をもつ土師器群があるので〔**2**〕からはじめることにする。

〔**2**〕

SK341土坑（8図，3・4表）

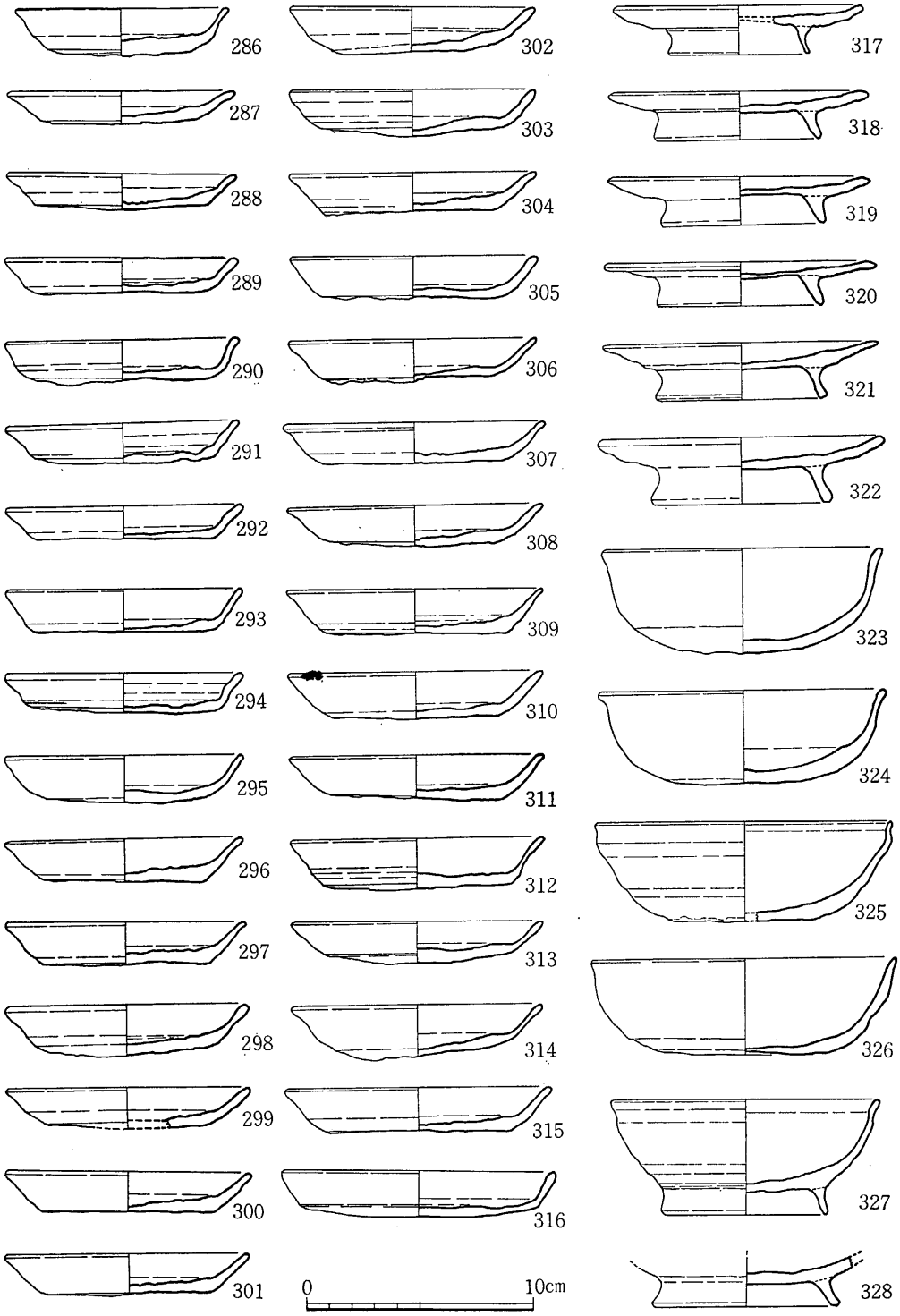
b．小皿（**Ⅰ－2－b**）（287～315）口径は確実なところでは10.0～11.7cm，底径は6.85～8.5cm，器高1.4～2.3cmで，色調は灰褐色ないし暗灰色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面に横ナデ，内底にはナデがみられ，内底中央に同心円状の渦文がついているものも多い。底面にはヘラ切り痕と板目がついている。口縁はやや外反するものもあり，底部はヘラ切り離しのためか，少し丸味を帯びるものも多い。なお**286**と**316**はこのグループから除外した。

f，高台付小皿（**Ⅰ－2－f**）（317～322）単に小皿に高台をつけたものではなく，皿部分に深みはなく，ほとんど平坦に近い。あるいは茶托のような用途に使用されたものかもしれい。口径は11.4～12.1cm，高台径7.2～7.7cm，器高1.95～2.95cmで，灰褐色ないし橙灰色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面に横ナデが，内底にはナデが，みとめられ，内底中央に渦文がついているものも多い。高台内底面にはヘラ切り痕や板目が残っているものもある。

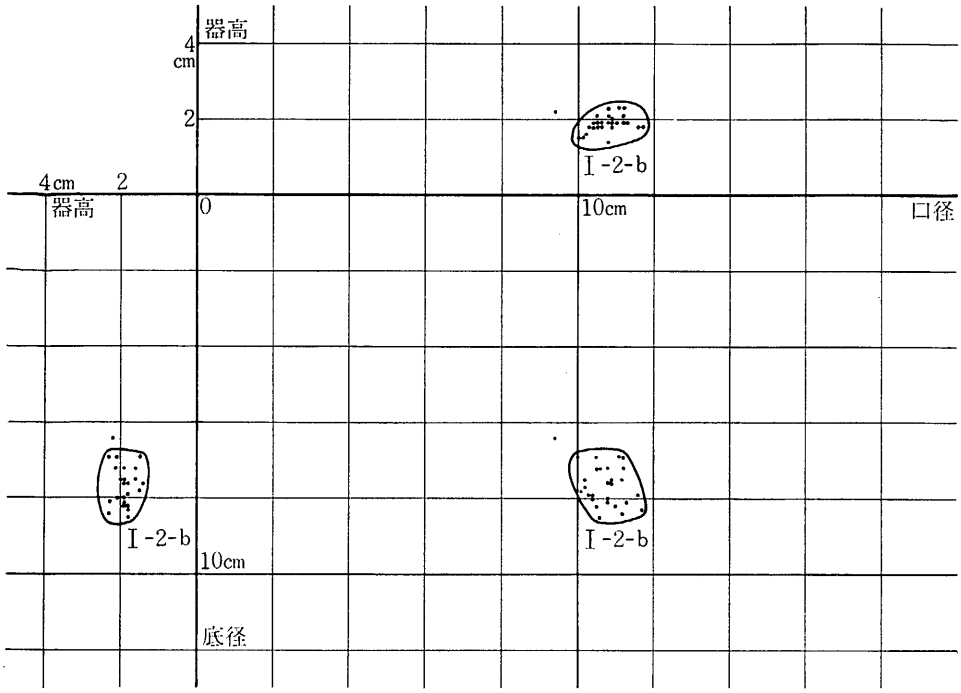
g．椀（**Ⅰ－2－g**）（323～326）口径12.3～13.4cm，器高4.1～4.65cmで，底部にヘラ切り離し部分はあるが，丸底に近いため，底径は特別に計測していない。口縁はやや外反し，底部は丸底に近い形で，暗灰色ないし灰褐色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが内底には渦文とうすいナデがみられる。底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。

i．高台付小椀（**Ⅰ－2－i**）（327）口径11.8cm，高台径7.1cm，器高5.1cmの小椀で，口縁部は外側から力が加えられているため，やや外反している。暗黄白色を呈し，胎土に少量の砂粒を含むが，おおむね良好である。器面に横ナデが，内底には渦文とナデがみうけられる。高台内底面にはヘラ切り痕が残っている。小椀の量はきわめて少ない。

j．高台付椀（**Ⅰ－2－j**）（328）量は多くないが高台付椀がある。高台径は8.2cmである。



8図　土師器実測図（ＳＫ 341 土坑出土）



3表　ＳＫ341土坑出土土師器計測表

小皿				小皿				高台付小皿			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	高台径	器高
1	(9.4)	6.4	2.15	17	10.8	8.0	2.1	1	(11.0)	6.2	2.2
2	10.0	6.85	1.5	18	10.8	8.1	1.9	2	11.4	7.3	2.1
3	10.05	7.8	1.5	19	10.8	8.1	2.3	3	11.5	7.1	2.25
4	10.2	7.5	1.6	20	(10.9)	(7.6)	1.75	4	12.0	7.2	1.95
5	10.2	7.6	1.6	21	10.9	7.6	1.9	5	(12.1)	7.5	2.5
6	10.3	7.9	1.8	22	11.0	8.2	1.9	6	12.6	8.0	2.9
7	10.35	7.9	1.8	23	11.05	6.9	2.3	椀			
8	(10.4)	(8.0)	1.9	24	11.15	7.5	1.9		口径		器高
9	10.5	6.9	2.1	25	11.2	6.9	2.1	1	12.3		4.65
10	10.5	7.2	1.9	26	11.2	7.2	2.1	2	12.6		4.1
11	10.5	7.8	1.5	27	11.2	8.4	2.25	3	(13.1)		4.5
12	(10.6)	7.2	1.9	28	(11.3)	(8.1)	1.85	4	13.4		4.2
13	10.6	8.5	1.8	29	11.6	7.9	1.8	高台付小椀			
14	10.8	7.2	1.85	30	11.7	8.3	1.8		口径	高台径	器高
15	10.8	7.4	2.0	31	12.0	10.6	2.1	1	(11.8)	7.1	5.1
16	10.8	7.6	1.8								

4表　ＳＫ341土坑出土土師器計測表

MF35区暗灰色粘質土（6層）（9図，5・6表）

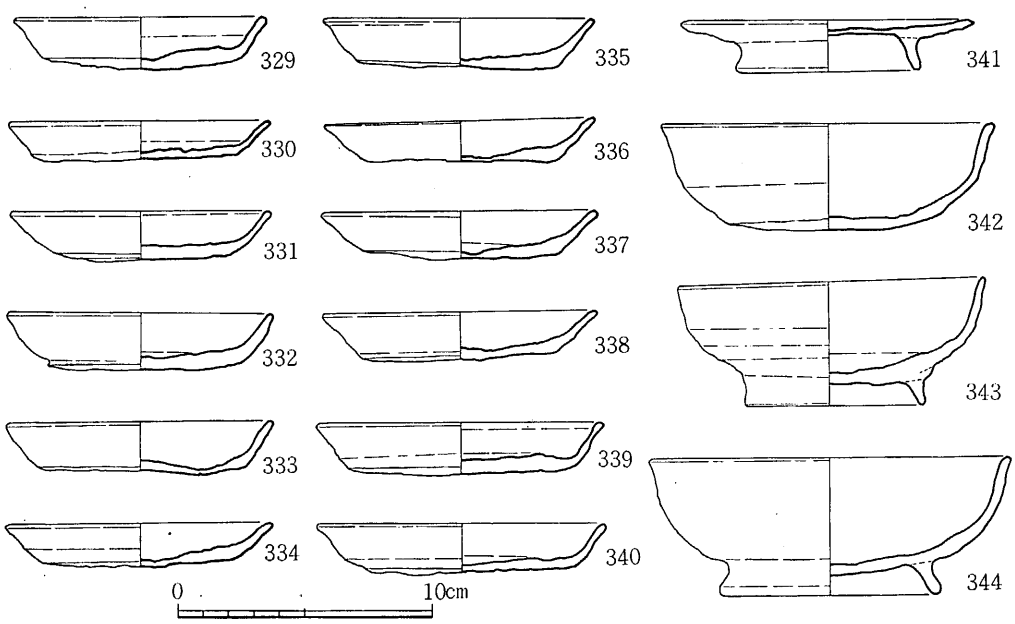
b．小皿（**I－2－b**）(329～340)　口径10.0～11.35cm，底径7.1～9.0cm，器高1.5～2.25cmで，暗灰色ないし褐灰色を呈し少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデが認められる。内底の中央に渦文が残っているものも多い。底面にはヘラ切り痕と板目がついている。

f．高台付小皿（**I－2－f**）(341)　口径11.5cm，高台径7.3cm，器高2.05cmで褐味黄灰色を呈し，胎土は砂粒を多く含み粗い。器面には横ナデが内底にはナデがついている。高台内底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。また高台の床付面にも板目が残っている。

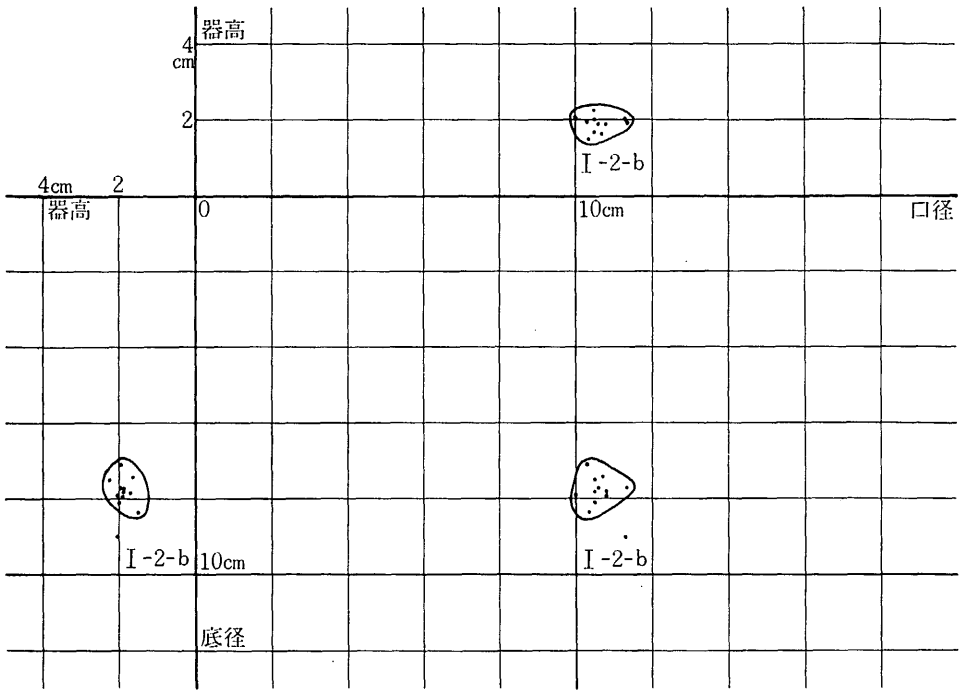
g．椀（**I－2－g**）(342) 口径13.1cm，器高4.2cmで褐味黄灰色を呈し，胎土は砂粒を多く含み粗い。器面には横ナデが内底にはナデがみられる。底面にはヘラ切り痕が残っている。

i．高台付小椀（**I－2－i**）(343)　口径12.1cm，高台径7.1cm，器高4.9cmで，口縁はややまっすぐである。色調は灰黄色で，胎土は砂粒が少なく良好である。器面には横ナデが，内底にはナデが認められ，高台内底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。

j．高台付椀（**I－2－j**）(344)　口径14.2cm，高台径8.7cm，器高5.4cmで褐味灰黄色で胎土は砂粒を多く含み粗い。器面は荒れていて調整ははっきりしないが，高台内底面にヘラ切り痕が残っている。



9図　土師器実測図（MF35区暗灰色粘質土出土）



5表　ＭＦ35区暗灰色粘質土出土土師器の法量

小皿				小皿				椀			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径		器高
1	10.0	7.9	2.05	9	10.8	7.8	1.9	1	13.1		4.2
2	10.35	8.25	1.5	10	10.8	7.9	1.9	高台付椀			
3	10.3	7.1	1.95	11	11.3	9.0	2.05		口径	高台径	器高
4	10.5	7.5	2.25	12	11.35	7.7	1.95	1	12.1	7.1	4.9
5	10.5	7.8	1.7	高台付小皿				2	(14.2)	8.7	5.4
6	10.5	8.1	2.0		口径	高台径	器高				
7	10.6	7.7	1.9	1	11.5	7.3	2.05				
8	10.7	7.4	1.65								

6表　ＭＦ35区暗灰色粘質土出土土師器計測表

ＳＫ339土坑（10～13図，７・８表）

b．小皿（**Ｉ－２－b**）（10図346～367）　口径 10.0～11.0cm，底径 6.9～8.1cm，器高 1.6～2.2cmと比較的小範囲にある。色調は灰色ないし褐灰色で，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ渦文のついたものも多い。底面にはヘラ切り痕と板目が残っている。なお**345**は同じくヘラ切り底の小皿であるが，このグループからは除外した。

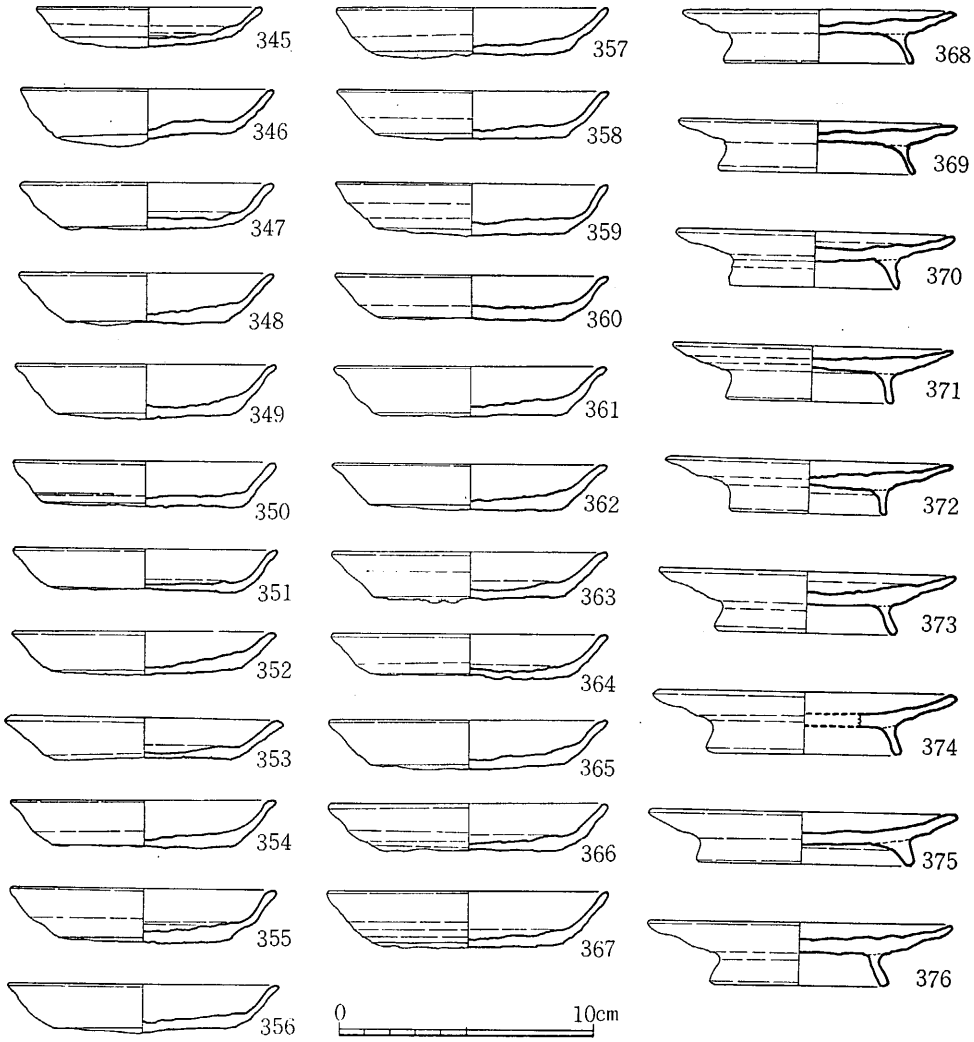
c．杯（**Ｉ－２－c**）（11図378～385）　**377**は糸切り底の杯で口径13.2cm，底径 8.2cm，器高 3.0cmで，明らかにⅡ－**３－c** に属するものである。**378～385**は口径14.8～16.3cm，底径**10.8**～12.2cm，器高2.6～3.2cmである。このうち**381**は糸切り底をもち暗灰色を呈し，胎土に少量の砂粒を含んでいる。残りのすべてはヘラ切り底をもつもので，褐灰色を呈し，胎土は精製されほとんど砂粒を含まない。両者とも器面には横ナデが，内底にはナデが施されている。底面には板目がついている。**382**と**383**は底部の丸味が強く，とくに**382**は浦城Ｉ類に類似し，丸底に近い。これら**378～385**はＳＫ341土坑やＭＦ区暗灰色粘質土からは出土していない。ＳＤ305溝からこのＳＫ339土坑が切られていることから，これらの杯はＳＤ305溝の遺物が混入したものであろうと解釈し，**Ｉ－４－c** に入れてみたい。

高台付杯（11図386）口径17.4cm，高台径9.9cm，器高 4.1cmで，黄灰色を呈し，胎土は精製されて砂粒を含まない。器面には横ナデが，内底にはナデが施されている。杯の底部はおそらく糸切り底と思われ，高台床付面には板目が残っている。前述の杯に伴うものであろう。

f．高台付小皿（**Ｉ－２－f**）（10図368～376）口径10.8～12.5cm，高台径6.2～8.5cm，器高2.05～2.6cmで，小皿より大きめである。色調は灰黄色ないし灰褐色で，胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデが認められる。高台内底面にはヘラ切り痕が残っている。

g．椀（**Ｉ－２－g**）（11図387～398）　口径11.9～13.1cm，器高3.5～4.2cmで，口縁はやや外反し，丸底である。色調は灰黄色ないし褐灰色の白つぽい感じで，胎土に少量の砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがつけられているが渦文が残っているものもある。底面にはヘラ切り痕と板目がみとめられる。

高台付椀形土器（12～13図）この器形はほとんど同じで口縁がやや外反し，体部中頃で薄くなり，体部下部で厚みを増している。輪積の手法を感じさせるものがあるので，今後検討を要するだろう。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。また内底中央に小さく渦文がついているものもある。高台内底面にヘラ切り痕と板目が残り，高台床付面にも板目がついているものがある。色調は灰白色ないし黄灰色など白味がかったものが多く，胎土は砂粒を含んでいる。これら高台付椀形土器のうち，口径 12cm 前後のものを高台付小椀（**i**），口径 13～15cm のものを高台付椀（**j**），口径15cmを越えるものを高台付大椀（**k**）と便宜的に分けてみたが土器自体が厳密に分かれるものではない。



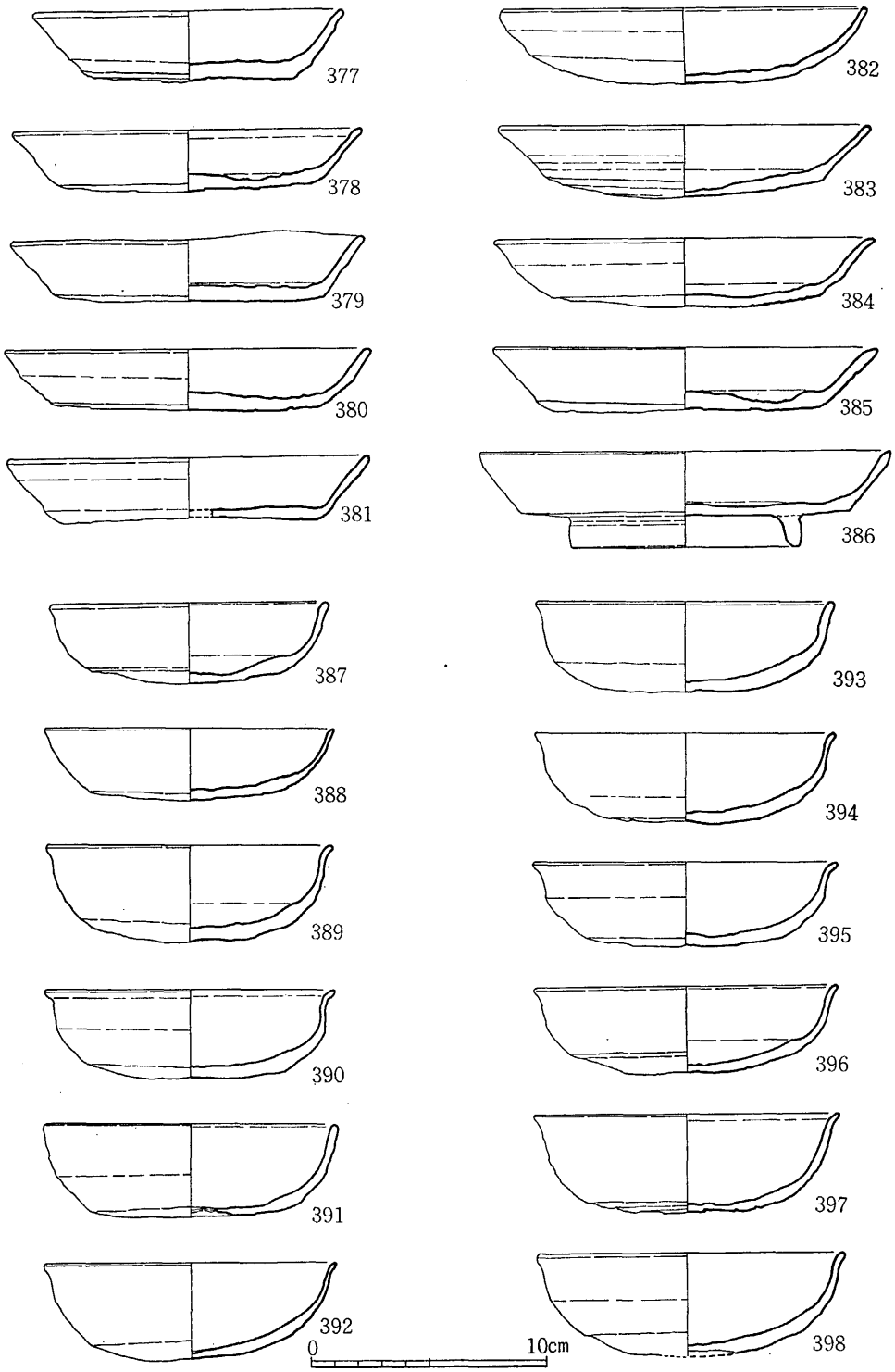
10図　土師器実測図（ＳＫ339土坑出土－１）

i．高台付小椀（**Ⅰ－2－i**）（399～401）　口径 12.2～12.4cm，高台径6.75～7.4cm，器高4.5～4.6cmで，高台部がややまっすぐ立つ傾向がある。

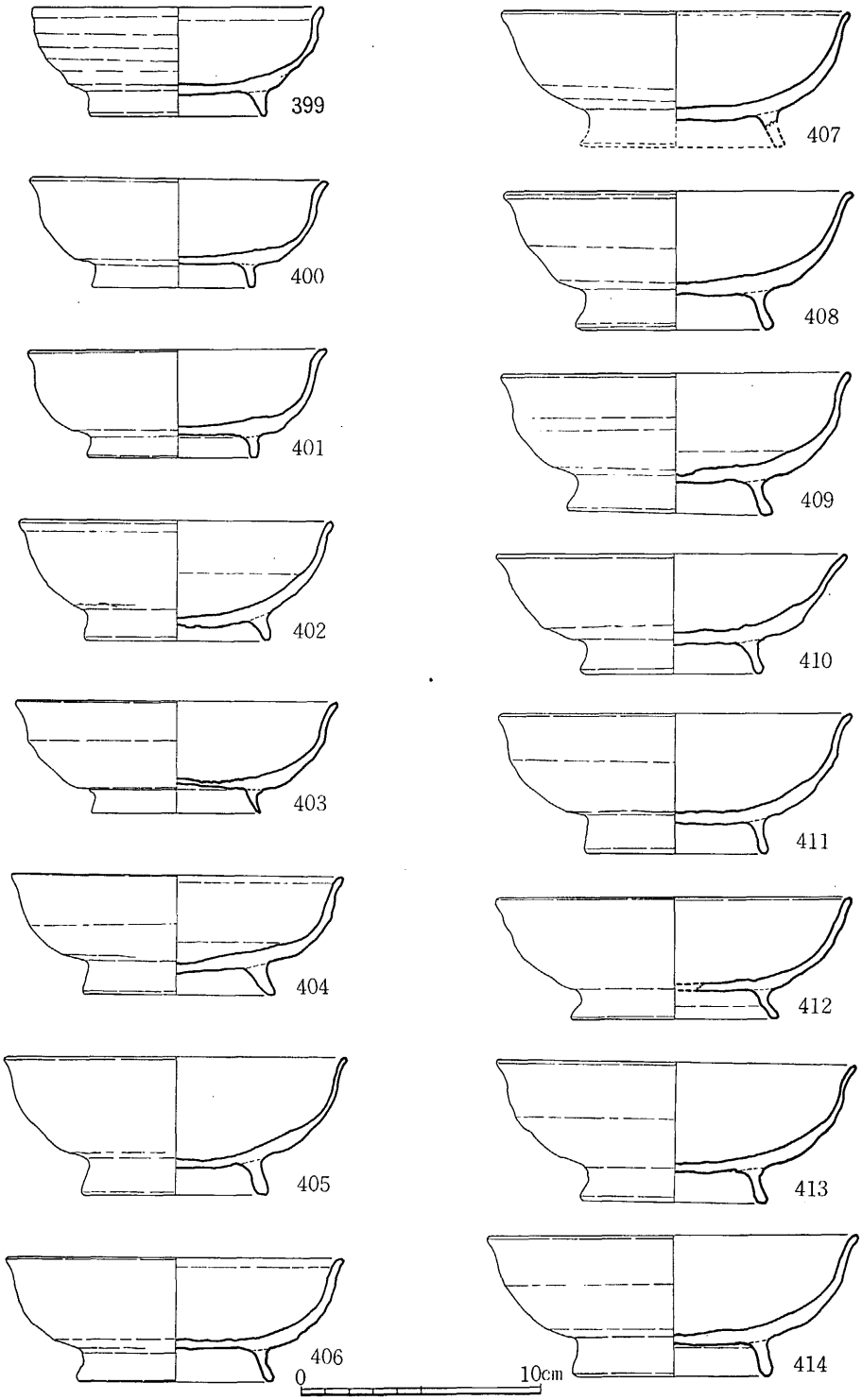
j．高台付椀（**Ⅰ－2－j**）（402～413）　口径13.05～14.9cm，高台径7.0～8.8cm，器高4.7～5.9cmで，一番普通のタイプであるが，椀よりは大きい。高台はやや開いている。

k．高台付大椀（**Ⅰ－2－k**）（414～418）　口径15.35～16.3cm，高台径8.25～8.8cm，器高5.9～7.0cmで体部がややふくらんでいる。

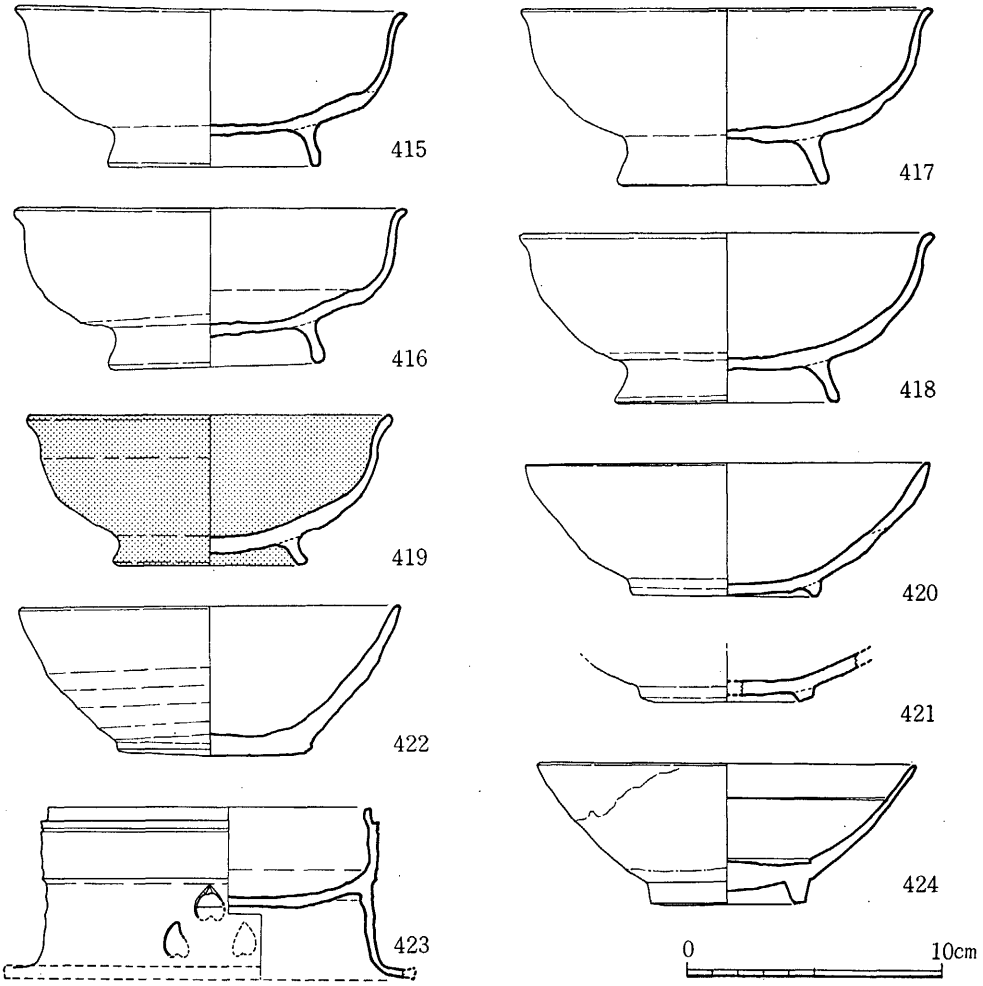
ＳＫ339からは土師器のほかに黒色土器椀，瓦器椀，須恵器椀，緑釉香炉，白磁椀が出土している。



11図　土師器実測図（ＳＫ339土坑出土―２）



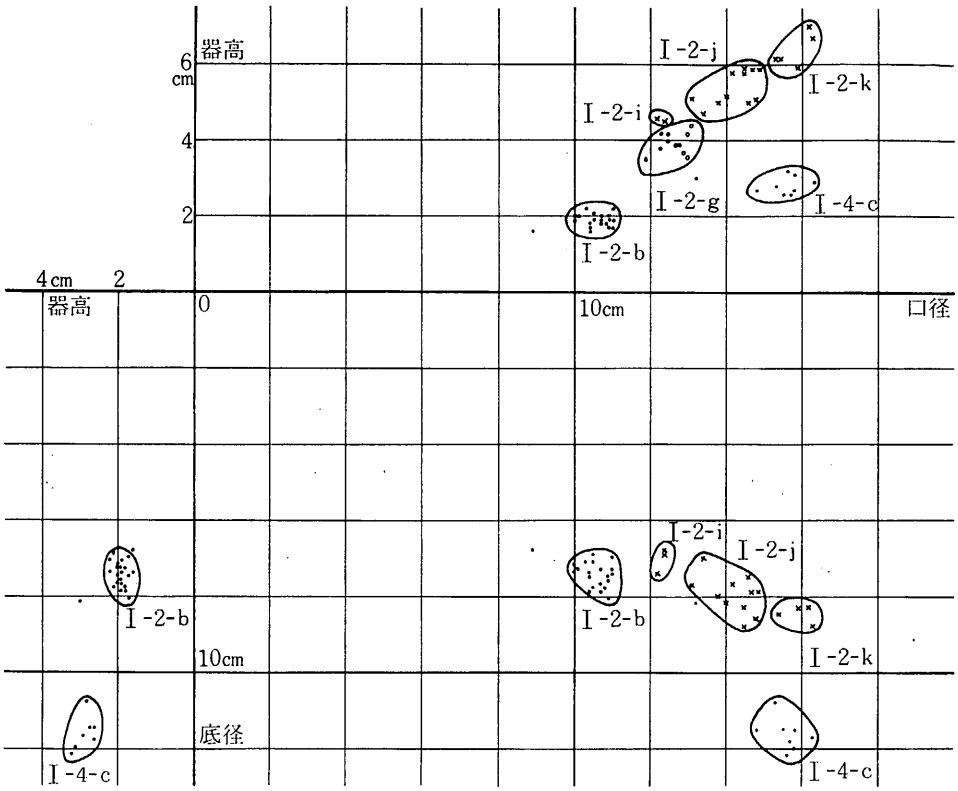
12図　土師器実測図（ＳＫ 339 土坑出土－３）



13図　土師器，黒色土器，瓦器，須恵器，緑釉香炉，白磁実測図（ＳＫ339土坑出土―４）

黒色土器椀（419）口径14.4cm，高台径7.6cm，器高5.85cmで，口縁はやや外反し，その下を強くおさえている。器面は黒色で，体部は横方向にていねいにヘラ磨きされ，内底部は二方向から磨かれている。胎土に少量砂粒を含んでいる。高台内底面に板目がついている。

瓦器椀（420・421）**420**は口径17.8cm，高台径7.5cm，器高5.3cmで，内面は灰白色で，外面は黒色である。外面の口縁から三分の二に研磨のあとが認められるが，内面はヘラ状のもので横ナデがしてあり，研磨しているかどうかは不明である。底面と高台床付面に一連の板目がついている。胎土に細砂を含んでいる。**421**は底部で内面は黒色で研磨はみられない。外面は灰白色である。胎土に砂粒を少量含んでいる。



7表　ＳＫ339土坑出土土師器の法量

須恵器椀（422）口径15cm，底径7.7cm，器高5.8cm の口の開いた椀で，須恵器質ではあるがそれより明るい灰白色で，瓦や片口の一部にみられる焼きをしている。器面には横ナデがみとめられる。底面にはヘラ切り痕と板目がついている。

緑釉香炉（423）口径12.7cm，器高およそ6.8cmで，口縁に蓋受部があり，その下に１本の沈線がいれられている。高い脚部は裾部で大きく開き，三個一組の透し文様が彫られている。釉は全面にたつぷりとかけられ，風化して灰黒色（鉛色）を呈しているが，一部に深緑色を示す部分があり，本来の色をうかがわせる。胎土は精製され，灰色を呈し，焼成は堅い。平安時代の緑釉香炉は栃木県日光男体山頂や愛知県八事堂跡など数箇所から出土しているが，当遺跡の香炉も破片であるが，なかなかの優品である。なお蓋はまだ出土していない。

白磁椀（424）口径14.9cmで，平縁でやや太めの高い高台がついている。内側には一本の沈線がいれられ，見込みに釉かけ後環状に削り取った部分がある。胎土は白色で黄白色の釉が底部を除いてかけられ，濁黄白色の釉の流れがみられる。なお底部側面に墨書があるが，文字はよく読みとれない。

以上のうち瓦器椀，白磁椀は土師器杯とともにＳＤ305溝のものが混同されたものであろう。

小皿			
	口径	底径	器高
1	8.9	6.8	1.6
2	(10.0)	7.2	2.0
3	(10.0)	7.35	1.9
4	10.1	7.3	2.0
5	10.3	7.1	2.2
6	10.4	7.4	1.6
7	10.4	7.5	1.7
8	10.4	7.9	1.8
9	10.5	6.9	2.1
10	10.5	7.1	1.9
11	10.5	7.8	2.1
12	10.7	7.3	1.8
13	(10.7)	7.3	1.95
14	10.7	7.7	1.9
15	(10.7)	(7.7)	2.0
16	10.7	7.9	1.9
17	10.8	7.8	1.8
18	(10.9)	7.5	1.95
19	10.9	7.6	1.85
20	10.9	8.1	1.7
21	11.0	7.0	1.7
22	11.0	7.3	1.85
23	11.0	7.4	2.2

高台付小皿			
	口径	高台径	器高
1	10.8	7.5	2.1
2	11.0	6.6	2.2
3	11.0	6.7	2.2
4	(11.0)	7.8	2.5
5	11.3	6.2	2.1
6	11.7	7.2	2.4
7	12.0	7.1	2.5
8	(12.0)	(7.6)	2.4
9	12.1	8.5	2.5

杯			
	口径	底径	器高
1	13.2	8.2	3.0
2	(14.8)	11.5	2.65
3	15.3	10.8	2.8
4	15.5	11.5	2.6
5	15.55	12.2	3.2
6	15.7	11.8	2.6
7	15.8	11.5	2.7
8	15.8	12.0	3.1
9	16.3	11.7	2.9

高台付杯			
	口径	高台径	器高
1	17.4	9.9	4.1

椀			
	口径		器高
1	11.9		3.5
2	12.3		3.1
3	12.3		3.75
4	12.3		4.2
5	12.5		4.0
6	12.5		4.2
7	12.7		3.9
8	12.8		3.9
9	12.8		3.9
10	12.9		3.7
11	13.0		4.2
12	13.05		4.45

高台付椀			
	口径	高台径	器高
1	12.2	7.4	4.6
2	12.4	6.77	4.5
3	12.4	6.9	4.5
4	13.05	7.7	5.5
5	(13.4)	(7.0)	4.7
6	13.75	8.0	5.0
7	13.8	8.3	5.6
8	14.0	8.2	5.2
9	14.2	7.7	5.8
10	14.5	8.25	5.8
11	14.5	8.8	5.85
12	14.5		
13	(14.6)	7.5	5.0
14	14.65	7.9	5.9
15	(14.8)	(8.6)	5.1
16	14.9	7.9	5.85
17	15.35	8.52	6.2
18	15.4	8.5	5.2
19	15.9	8.25	5.9
20	16.2	8.3	7.0
21	16.3	8.8	6.7

8表　ＳＫ339土坑出土土師器計測表

〔4〕

ＳＤ305溝（14図，9表）

425～427は東端のＭＩ36区出土のもので，小皿の口径は9.1cm，杯の口径は13.7～14.45cmで，いずれも糸切り底をもっていて，Ⅱ－**2**類の土師器であり，上層からの混入と考えられる。**428～435**はＭＩ28・29区でＳＫ339土坑付近から出土したものであり，Ⅰ－**2**類にはいるため，ＳＫ339土坑からの混入と考えられる。

c．杯（**Ⅰ－4－c**）（436～439）口径14.25～15.7cm，底径11.0～12.7cm，器高2.9～3.25cmである。**436・437**はヘラ切り底を有し，暗褐灰色ないし暗灰色で，胎土にほとんど砂粒を含まず，焼成も良好である。底部はやや外へ張り出し気味で，板目が残っている。**438・439**は糸切り底をもち，灰黄色ないし淡褐灰色で，胎土に少量の砂粒を含むが焼成は良好である。とくに**438**は，糸切り底にもかかわらず丸底に近い形をしている。底部には板目がついている。ヘラ切り底の杯，糸切り底の杯両者とも器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。ＳＫ339土坑出土の杯ともあわせて，ヘラ切り底，糸切り底共伴の時期のものとしてとらえたい。

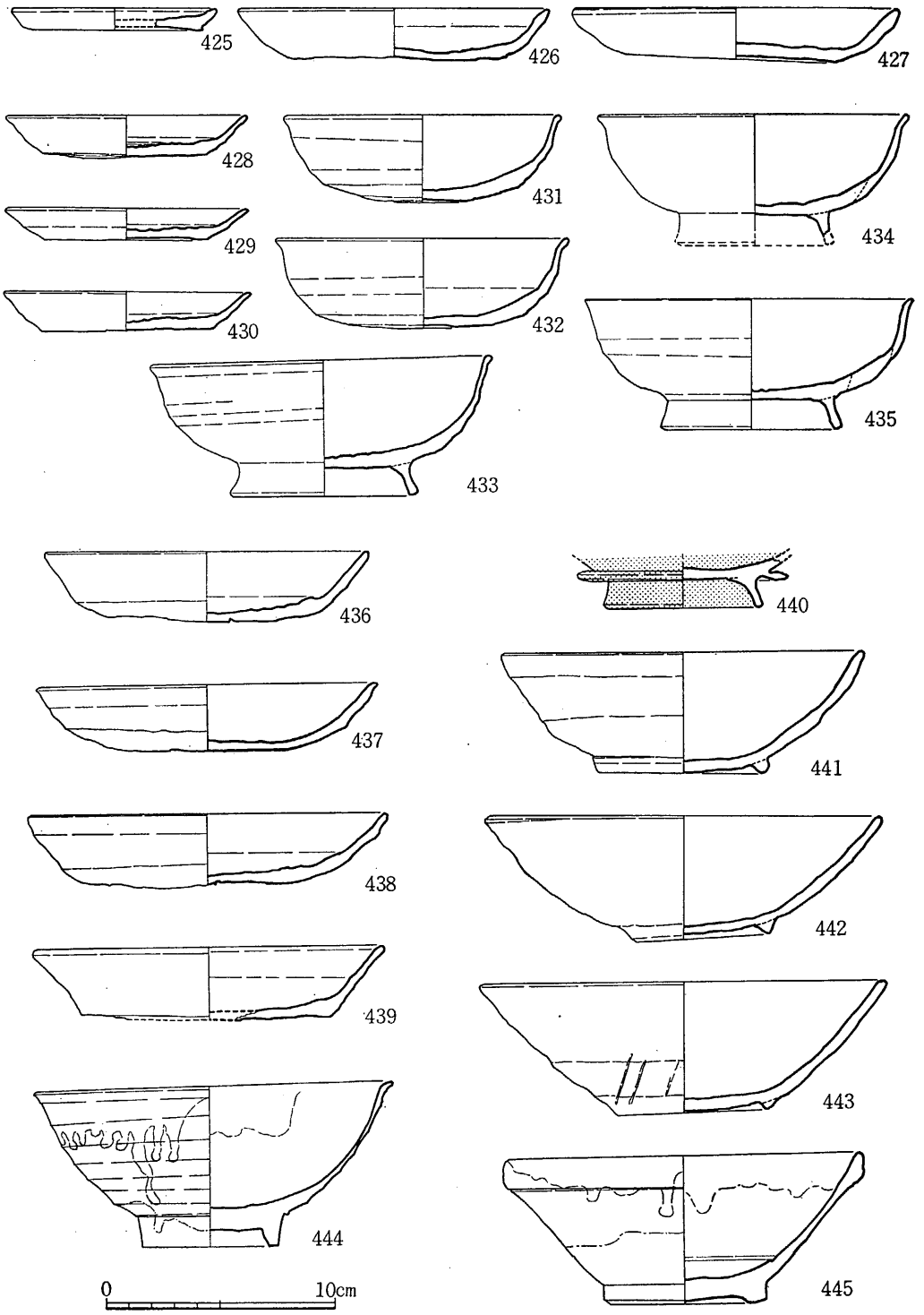
黒色土器（440）底部で高台と体部との間に鍔状のものがついている。内外両面とも黒色で，内底は研磨されている。高台内底面には板目がのこっている。Ⅰ－**2**類土師器に共伴するものと考えられる。

瓦器椀（441～443）完形に近いものが3個出土している。**441**は口径15.4cm，器高5.3cmで，暗灰色で，外面の口縁から三分の二は研磨が施され，黒色を呈している。高台と底面に一連の板目がついている。**442**は口径17.4cm，器高5.4cmで，灰色を呈し，口縁部内外面は黒色で光沢がある。内外の器面に研磨がみられる。**443**は口径17.8cm，器高5.7cmで，暗白灰色を呈し，外面の上半は黒色で，とくに口縁部には光沢がある。外面の上半および内面には研磨の痕がみられる。高台および底面に板目が残っている。また底部近くには板の端で突いたような線が数本ついている。

白磁（444・445・757）**444**はやや胴が丸く，胎土は黄白色で，黄灰色の釉がかかっている。**445**は玉縁をもち，見込みに沈線がつけられている。胎土は黄味白色で，気泡を多くふくんだ黄白色の釉がかかっている。**757**は内壁と見込みにそれぞれ沈線がつけられ，白色の化粧土の上に明灰色の釉がかかっている。胎土は灰白色である。

杯			
	口径	底径	器高
1	14.25	11.4	3.15
2	15.7	12.7	3.15
3	14.9	12.2	2.9
4	15.4	11.0	3.25

9表　ＳＤ305溝出土土師器計測表



14図　土師器，黒色土器，瓦器，白磁実測図（ＳＤ305溝出土）

2. 上層土師器・Ⅱ類（15～28図）

上層から出土した糸切り底の土師器をⅡ類と総称したが，遺構面では一部下層から出土したものもある。土師器は包含層や溝，土坑から多量に出土している。なお〔**2**〕以降の分類は前回の報告に従った。

〔**1**〕

SK312土坑（15～18図，10～13表）

土坑内遺物は下部と上部とに分けて取り上げてあり，土師器にも相違点が認められるので，下部の代表的なものをA類，上部をB類とした。

b．小皿（Ⅱ－**1**－**b**A）（470～480）（446～451） 口径8.9～9.8cm，底径6.4～7.4cm，器高0.7～1.1cmの薄手の小皿で，ほとんどが淡橙色で胎土・焼成ともに良好である。器面には横ナデが，内底には渦文とナデがみとめられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

（Ⅱ－**1**－**b**B）（452～469）（481） 上部の小皿は口径8.4～9.8cm，底径6.7～7.9cm，器高0.9～1.3cmで，口径は下部のものと変わりないが，器高がやや高く，器壁も少し厚くなっている。色調は黄灰色で胎土に砂粒を少しふくんでいる。内底に渦文が少数に残っているのみで，他の器面調整は下部のものと変わりない。なお下部からは耳皿が1個出土している。**482**はⅡ－**3**類の小皿で，混入と考えられる。

c．杯（Ⅱ－**1**－**c**A）（533～547）（531・532） 下部の杯は口径14.5～16.8cm，底径10.0～11.7cm，器高2.3～3.2cmで，器壁は薄く，外面の底部近くは整形時のロクロ痕が残っている。器面には横ナデが，内底にはナデがついていて渦文が残っているものも少数ある。底面には糸切り痕と板目がつき，底面中央が外にふくらむものもある。

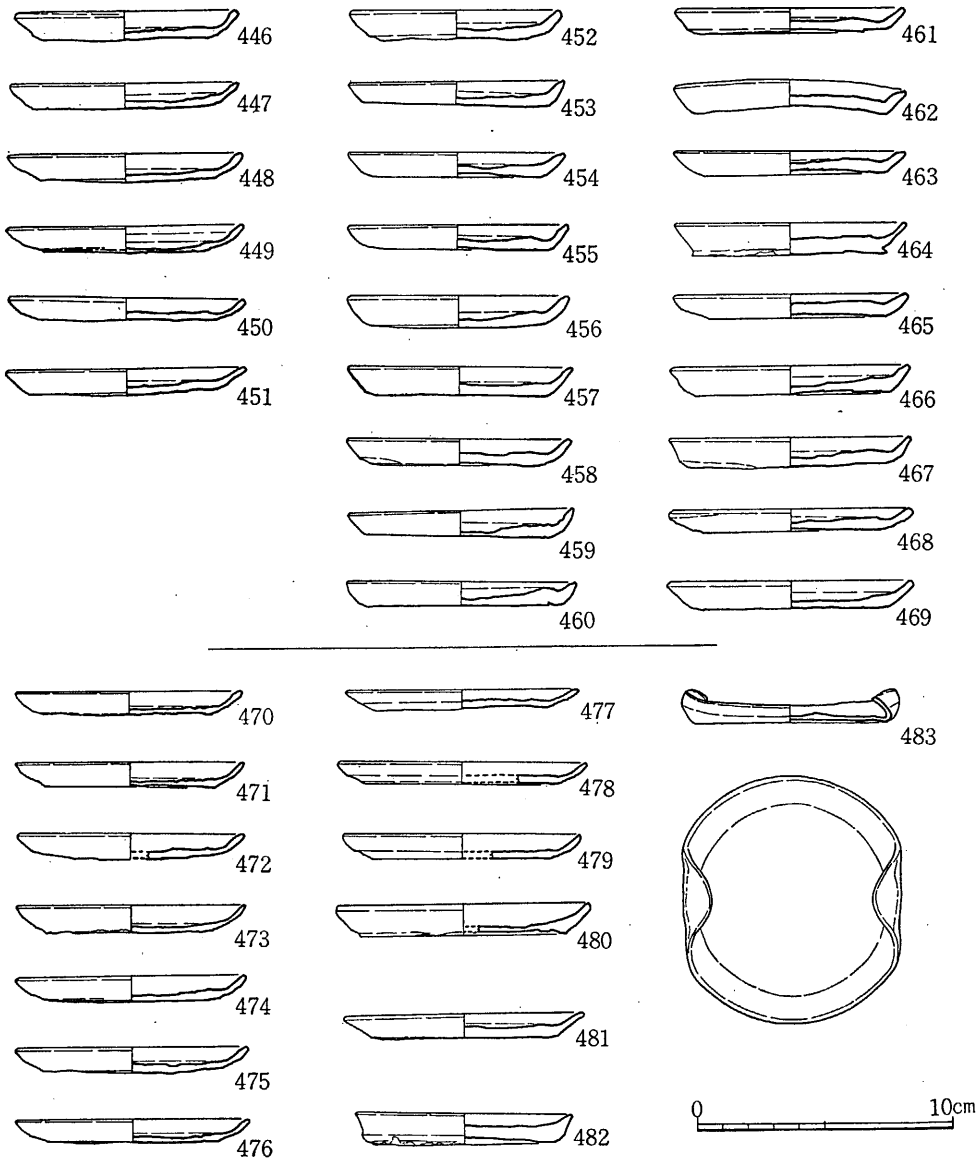
（Ⅱ－**1**－**c**B）（527～530） 上部の杯は口径15.4～16.6cm，底径10.5～11.65cm，器高2.5～3.0cmで，下部のものにくらべ器壁は厚く，口縁部も厚ぼったい。黄灰色で胎土に砂粒を少量含んでいる。器面の調整は下部の杯と同じである。

なお**523**・**524**はⅡ－**4**類，**525**はⅡ－**2**類に属するものである。**526**・**549**はあるいはⅡ－**1**－**c**Bに属するものかもしれないが，体部の中頃がくびれる特徴が525に似ているため，Ⅱ－**2**類に含めた。

高台付杯（548）下部の杯に高台をつけたものである。

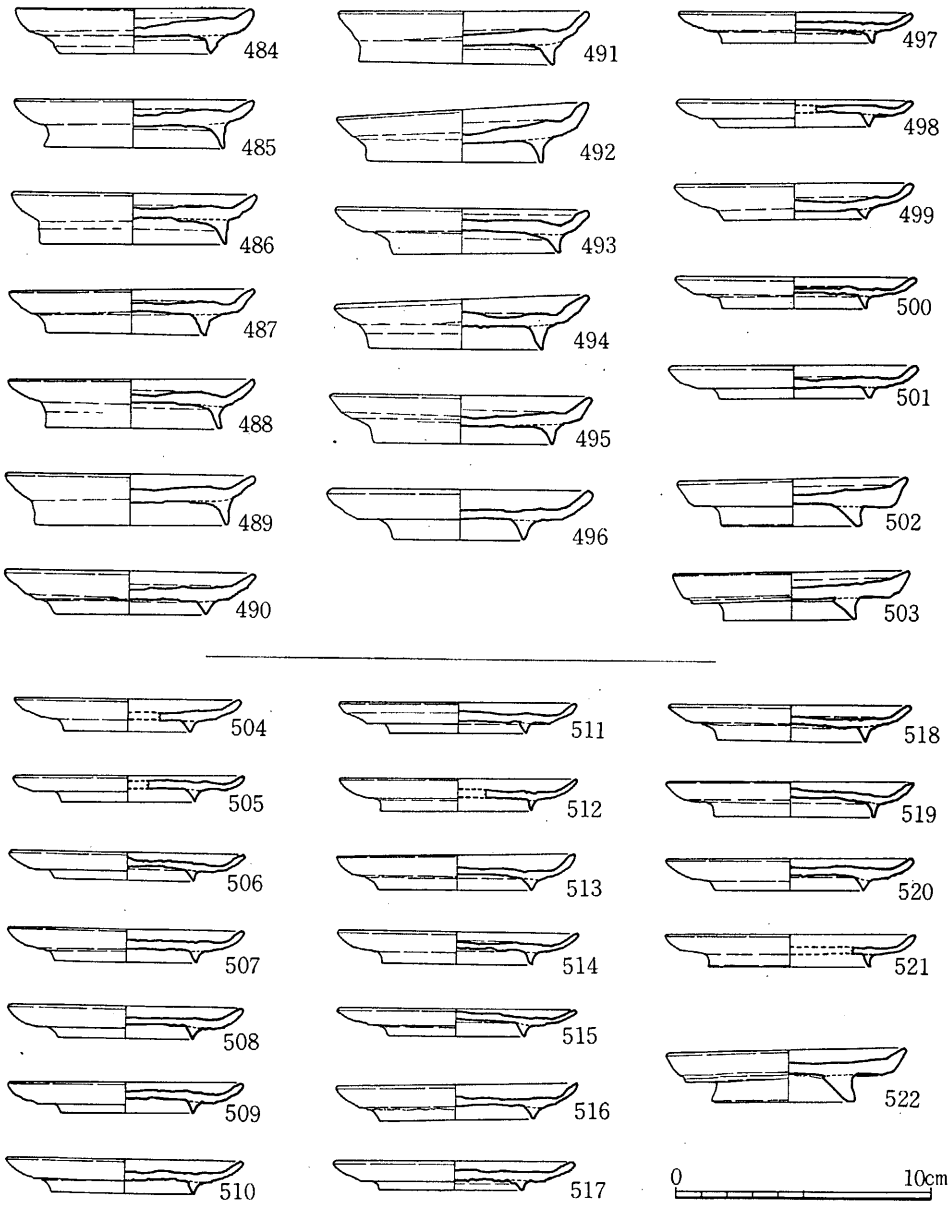
f．高台付小皿（Ⅱ－**1**－**f**A）（504～521）（497～501） 下部の高台付小皿は口径9.0～9.8cm，高台径5.0～6.4cm，器高1.1～1.45cmで，小皿と口径はほとんど変わらず，高さ4～5mm，断面三角形の小さな高台を小皿につけただけのものである。

（Ⅱ－**1**－**f**B）（484～496） 上部の杯は口径9.4～10.3cm，高台径5.9～7.7cm，器高1.7～2.1cmで，口径は同じ上部の小皿よりやや大きめである。高台は，径は下部のものより大き

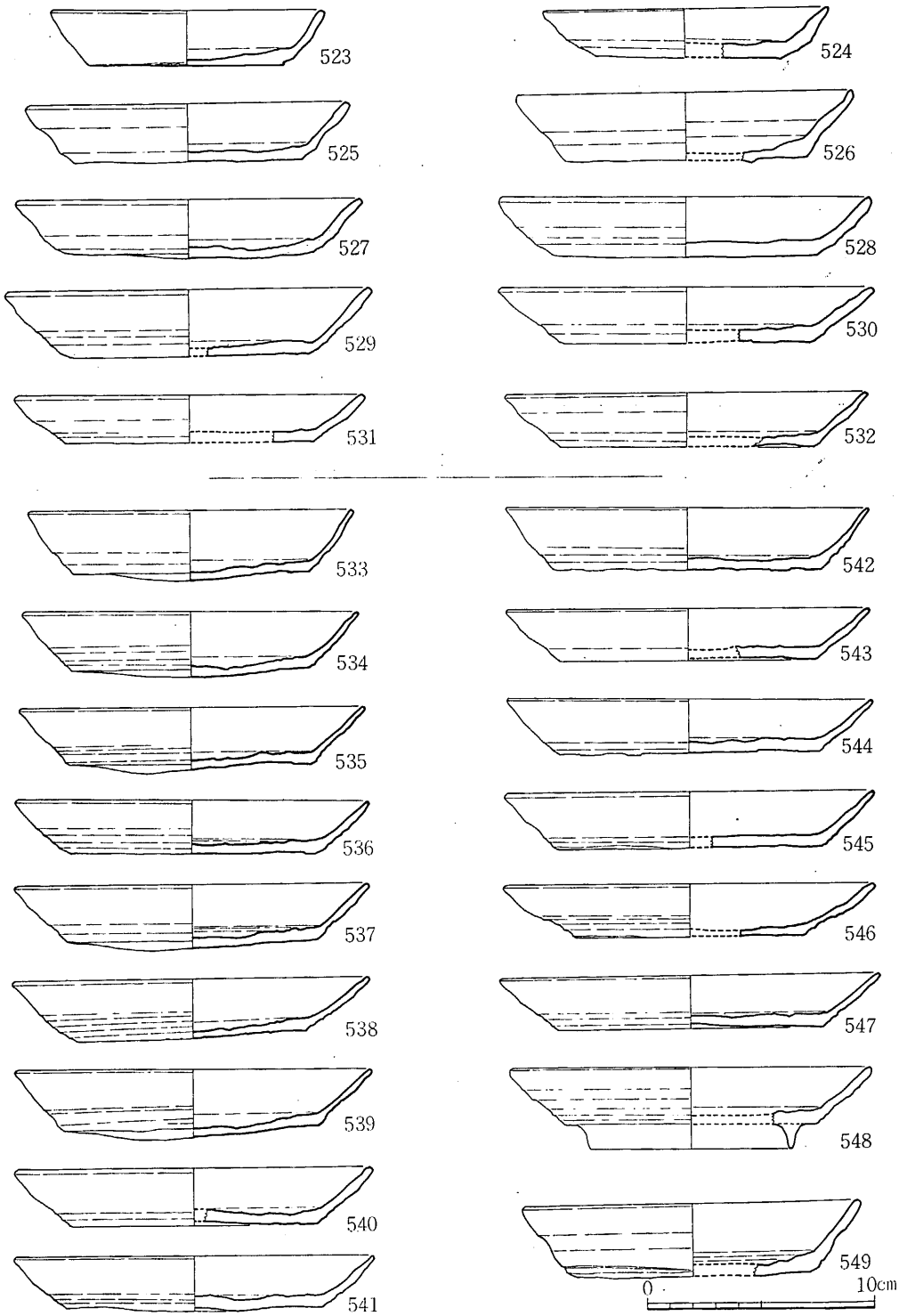


15図　土師器実測図（ＳＫ312土坑出土－１）上－上部，下－下部

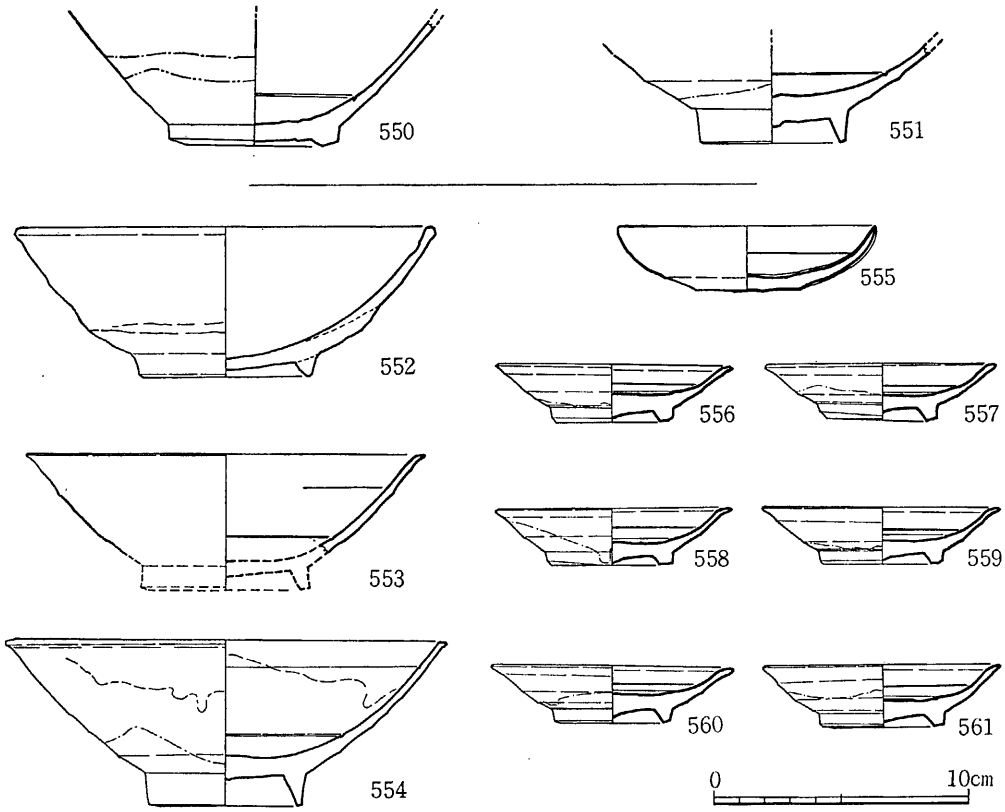
く，高さも8～9mmと，下部のものより高い。淡灰褐色ないし灰黄色を呈し，胎土に砂粒を少量含んでいる。**496**の高台径は小さい。なお**502・503・522**はⅡ－**3**類の高台付小皿であり，混入と考えられる。



16図　土師器実測図（ＳＫ312土坑出土一２）上一上部，下一下部



17図　土師器実測図（ＳＫ312土坑出土－３）上－上部，下－下部

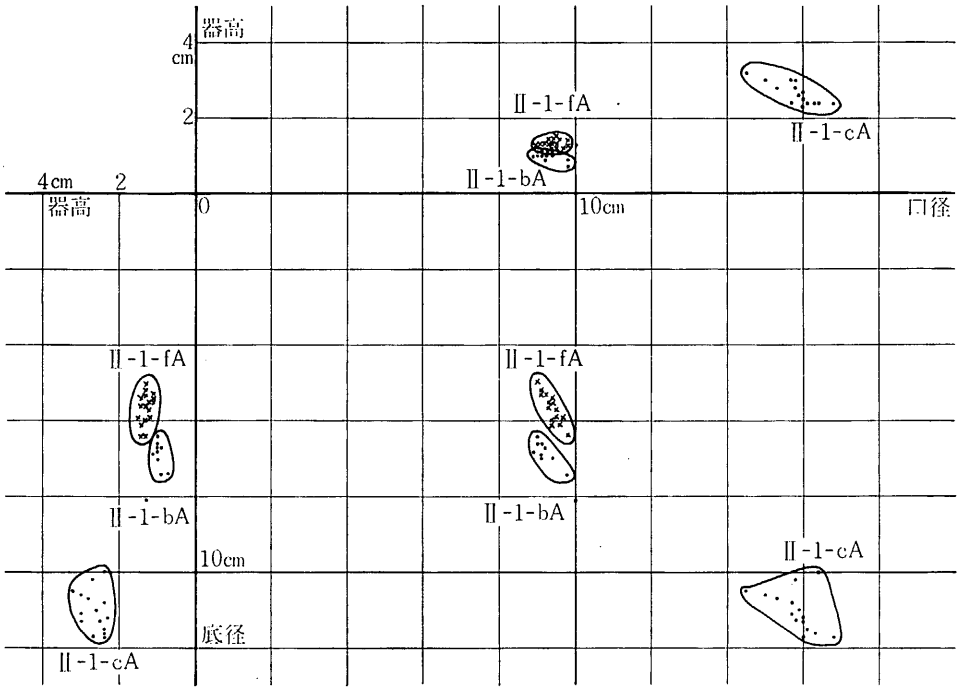


18図　白磁，瓦器実測図（ＳＫ312土坑出土）上―上部，下―下部

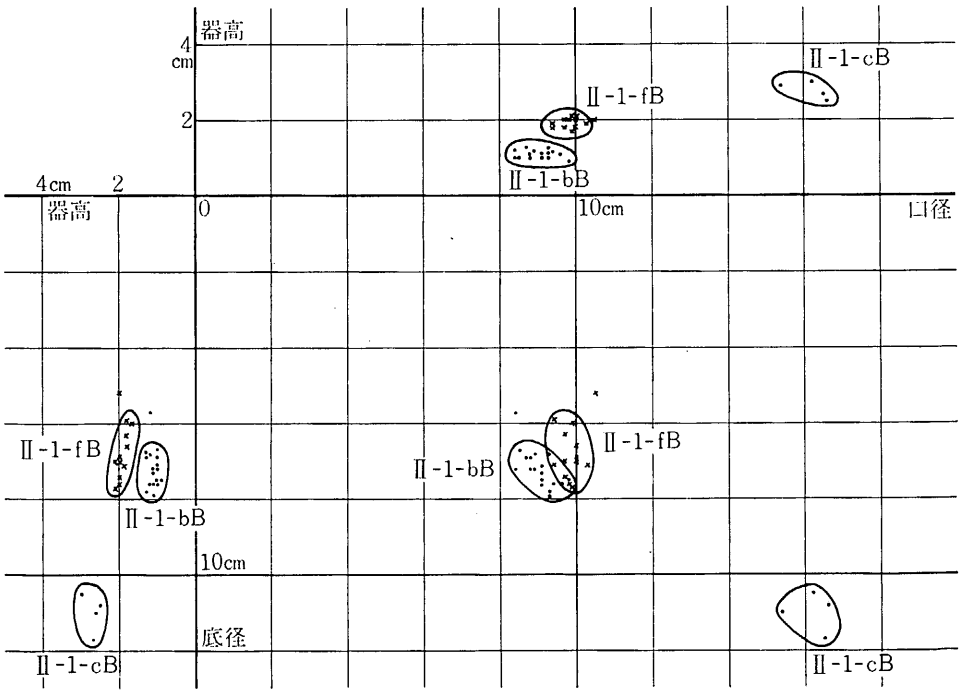
白磁（18図550～551，553～561）　ＳＫ312土坑からは白磁（磁器3・4・5類）のみが出土している。上部の**550**は玉縁の白磁椀底部で，白色の化粧土の上に明灰色の釉がかかっている。**551**には白灰色の釉がかかっている。下部からは**553**や**554**の白磁椀のほかに，小形の白磁が一括して完形のまま出土した。このことは，この土坑には土師器とともに祭祀関係などに使用されたものが一括して捨てられた可能性が強い。**555**は内側に１本の沈線がめぐり，全面に淡緑灰色の釉が全面にかけられ，底面だけ削りとられ，胎土は灰白色を呈している。**556～561**は高台が削り出された小皿で，内側に１本の沈線があり，見込み部分に，釉かけ後環状に削りとった痕がある。胎土は灰白色で，やや緑味を帯びた淡灰色の釉がかかっている。

瓦器椀（552）　下部から出土したもので，口径16.7cm，器高5.9cmで，灰白色を呈しているが口縁部のみ黒色である。内外面に研磨の跡が認められるが，詳細は不明である。

以上のように土師器や白磁を下部と上部に分けてみたところ，土師器については，明確に分離するが，今のところ一つの土坑内のことであり，大きな時代差はないものと考えられ，ここでは一応両者をⅡ―１類に含めて取り扱いたい。



10表　ＳＫ312土坑下部出土土師器（Ａ類）の法量



11表　ＳＫ312土坑上部出土土師器（Ｂ類）の法量

小　皿（A類）			
	口　径	底　径	器　高
1	9.0	6.6	1.0
2	9.05	6.6	1.0
3	8.9	6.8	1.0
4	9.0	6.4	1.1
5	9.1	6.9	1.05
6	9.1	6.95	1.0
7	9.15	6.7	0.9
8	9.2	6.7	1.0
9	9.4	7.0	1.0
10	9.8	7.4	0.9
11	10.0	8.1	1.3
12	9.8	7.4	0.7

小　皿（B類）			
	口　径	底　径	器　高
1	9.5	7.1	0.95

小　皿（その他）			
	口　径	底　径	器　高
1	8.5	7.1	1.25

高台付小皿（A類）			
	口　径	高台径	器　高
1	9.0	5.0	1.3
2	9.1	5.3	1.1
3	9.2	5.2	1.2
4	9.2	5.4	1.25
5	9.2	5.6	1.3
6	9.25	5.6	1.4
7	9.3	5.5	1.1
8	9.4	5.4	1.1
9	9.4	5.5	1.2
10	9.4	5.6	1.4
11	9.4	6.0	1.3
12	9.5	5.7	1.15
13	9.5	5.8	1.45
14	9.5	6.0	1.3
15	9.6	6.1	1.4
16	9.7	5.9	1.2
17	9.7	6.3	1.4
18	9.8	6.4	1.3

高台付小皿（その他）			
	口　径	高台径	器　高
1	9.4	5.7	2.1

杯　（A類）			
	口　径	底　径	器　高
1	(14.5)	10.5	3.2
2	15.0	10.6	2.95
3	15.3	10.7	2.8
4	(15.7)	10.8	2.4
5	(15.7)	11.1	3.0
6	(15.8)	10.2	2.65
7	15.8	11.3	3.0
8	(15.9)	(11.0)	2.6
9	(16.0)	11.2	2.3
10	(16.0)	(11.3)	2.5
11	(16.0)	(11.7)	2.7
12	(16.1)	11.5	2.4
13	(16.3)	(11.6)	2.4
14	(16.4)	10.0	2.35
15	(16.8)	11.7	2.35

杯　（その他）			
	口　径	底　径	器　高
1	(15.0)	(11.2)	3.2

高台付杯（A類）			
	口　径	高台径	器　高
1	(16.0)	9.0	3.6

12表　ＳＫ312土拡下部出土土師器計測表

小　皿（A類）			
	口　径	底　径	器　高
1	(8.95)	6.4	1.15
2	9.0	7.0	1.0
3	9.2	6.7	1.15
4	9.45	6.6	1.1
5	9.3	6.85	0.9
6	9.5	7.4	1.05

小　皿（B類）			
	口　径	底　径	器　高
1	8.4	5.7	1.15
2	8.4	7.2	0.95
3	8.5	6.7	1.0
4	8.7	6.9	1.3
5	8.75	6.9	1.0
6	8.8	7.2	1.05
7	8.9	6.8	1.15
8	8.9	7.2	1.1
9	9.05	7.6	1.0
10	9.1	7.1	0.95
11	9.1	7.3	1.1
12	9.1	7.5	1.0
13	9.3	6.8	0.95
14	9.3	7.6	1.1
15	9.3	7.8	1.3

小　皿（B類）			
	口　径	底　径	器　高
16	9.3	7.9	1.1
17	9.4	7.6	1.2
18	9.8	7.5	0.9

高台付小皿（A類）			
	口　径	高台径	器　高
1	9.2	6.0	1.25
2	9.3	6.0	1.3
3	9.4	5.6	1.4
4	9.5	5.7	1.3
5	9.8	6.0	1.3

高台付小皿（B類）			
	口　径	高台径	器　高
1	9.35	5.9	1.8
2	9.4	7.7	1.9
3	9.6	6.3	1.75
4	9.6	7.9	2.0
5	9.65	7.0	2.0
6	9.8	7.7	2.05
7	9.9	7.7	2.1
8	9.95	6.0	1.7
9	9.95	7.0	2.1
10	10.0	6.6	1.8
11	10.0	6.9	2.0

高台付小皿（B類）			
	口　径	高台径	器　高
12	10.3	7.05	1.95
13	10.5	5.2	2.0

高台付小皿（その他）			
	口　径	高台径	器　高
1	9.0	5.6	1.85
2	9.3	5.25	1.9

杯　（A類）			
	口　径	底　径	器　高
1	(15.5)	(11.0)	2.1
2	(16.0)	11.2	2.4

杯　（B類）			
	口　径	底　径	器　高
1	15.4	11.0	2.6
2	(16.2)	(10.5)	3.0
3	(16.5)	(11.65)	2.7
4	(16.6)	(10.8)	2.5

杯　（その他）			
	口　径	底　径	器　高
1	(12.2)	8.7	2.5
2	12.6	8.2	2.2
3	(14.3)	10.0	2.6
4	(14.8)	10.7	3.0

13表　ＳＫ312土坑上部出土土師器計測表

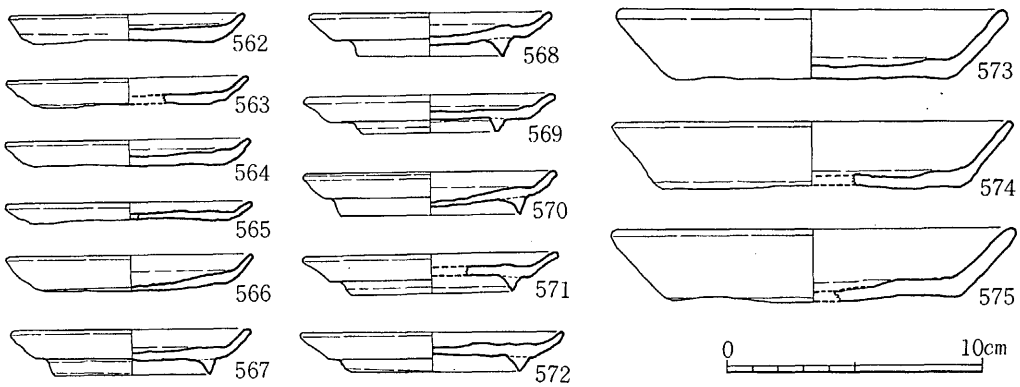
ＳＫ338土坑（19図，14・15表）

b．小皿（Ⅱ－**1**－**b**）（562～566）　口径9.2～9.8cm，底径6.7～7.6cm，器高0.8～1.4cmで，ＳＫ312土坑下部の小皿とくらべるとやや厚手である。黄灰色ないし暗灰色で，胎土・焼成とも良好である。器面には横ナデと内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

c．杯（Ⅱ－**1**－**c**）（573～575）　口径15.4～15.9cm，底面10.7～11.6cm，器高2.65～2.9cmである。灰黄色ないし暗灰白色を呈し，胎土・焼成とも良好である。器面には横ナデが，内底にはナデがみとめられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

f．高台付小皿（Ⅱ－**1**－**f**）（567～572）　口径9.5～10.3cm，高台径5.3～7.05cm，器高1.5～1.8cmで，高台はＳＫ312土坑下部のものにやや似ているが上部のものに近く，しかしながら高台は上部のものほど高くはない。

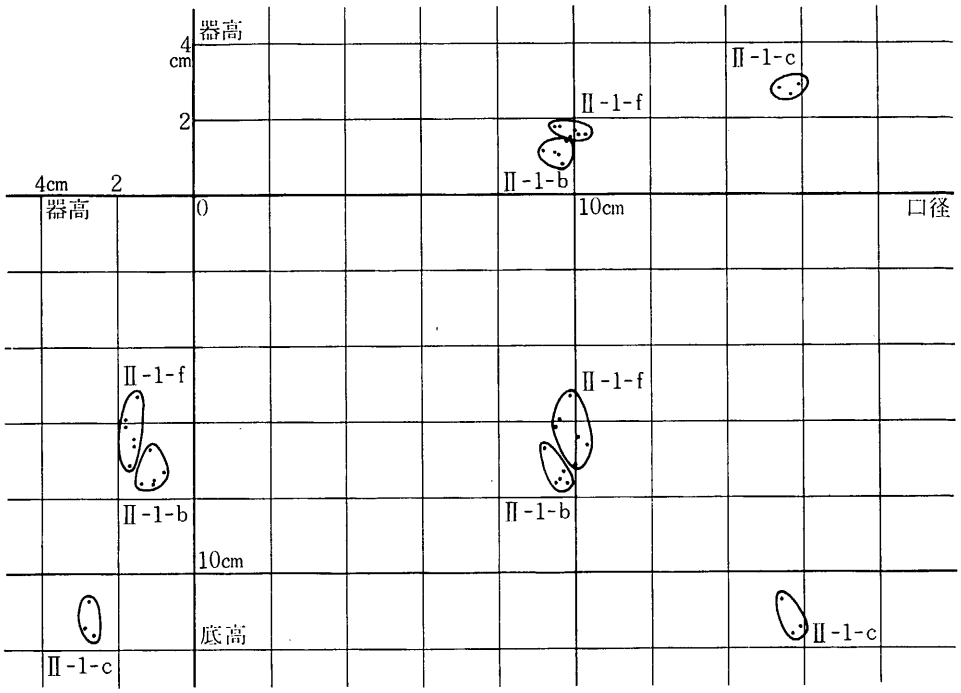
以上ＳＫ338土坑の土師器はＳＫ312土坑の下部のものと上部のものとの中間的な様相を示すが，どちらかといえば上部のものに近い。



19図　土師器実測図（ＳＫ338土坑出土）

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	9.2	6.7	1.15	1	(9.5)	6.1	1.8	1	15.4	10.7	2.8
2	(9.5)	(7.6)	1.1	2	(9.6)	5.9	1.75	2	15.7	11.6	2.65
3	9.6	7.6	1.05	3	9.9	5.3	1.5	3	15.9	11.4	2.9
4	(9.7)	(7.3)	0.8	4	(10.0)	(7.05)	1.7				
5	9.8	7.6	1.4	5	(10.05)	(6.4)	1.55				
				6	(10.3)	(6.6)	1.55				

14表　ＳＫ338土坑出土土師器計測表



15表　ＳＫ338土坑出土土師器の法量

ＭＩ31・32区ＳＤ305 溝かぶり黄褐色粘質土（20図576～585）

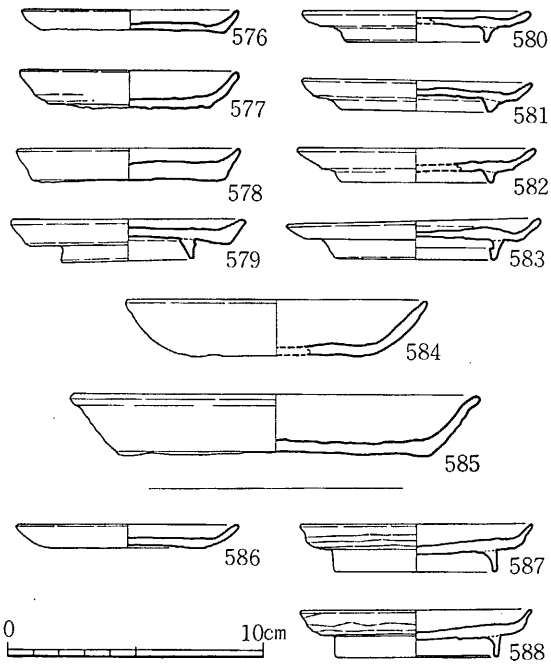
c．杯（Ⅱ－**1**－**c**）（585）　口径16.1cmである。

f．高台付小皿（Ⅱ－**1**－**f**）（580～583）口径9.0～9.9cmの薄手の土器で，小さな高台がついている。

このように，この土層の主体はⅡ－1類で，小皿である**576**・**577**もⅡ－1類に含まれるものかもしれない。**578**・**579**はⅡ－3類の土師器であり，**584**は口径11.9cmでⅡ－4類の土師器である。

ＳＫ340土坑（20図586～588）

高台付小皿（587～588）は口径9.1～9.2cm，高台径6.4cm，器高1.9cmで，



20図　土師器実測図　（576～585－ＭＩ31・32区ＳＤ305溝かぶり黄褐色粘質土，586～588－ＳＫ340土坑出土）

小皿部の外側はヘラなどで強くナデたような痕があり，やや深めで，高台は高さ9mmで高めであるが，器壁は薄い。やや特異な高台付小皿であるが，Ⅱ－1類に含められるだろう。

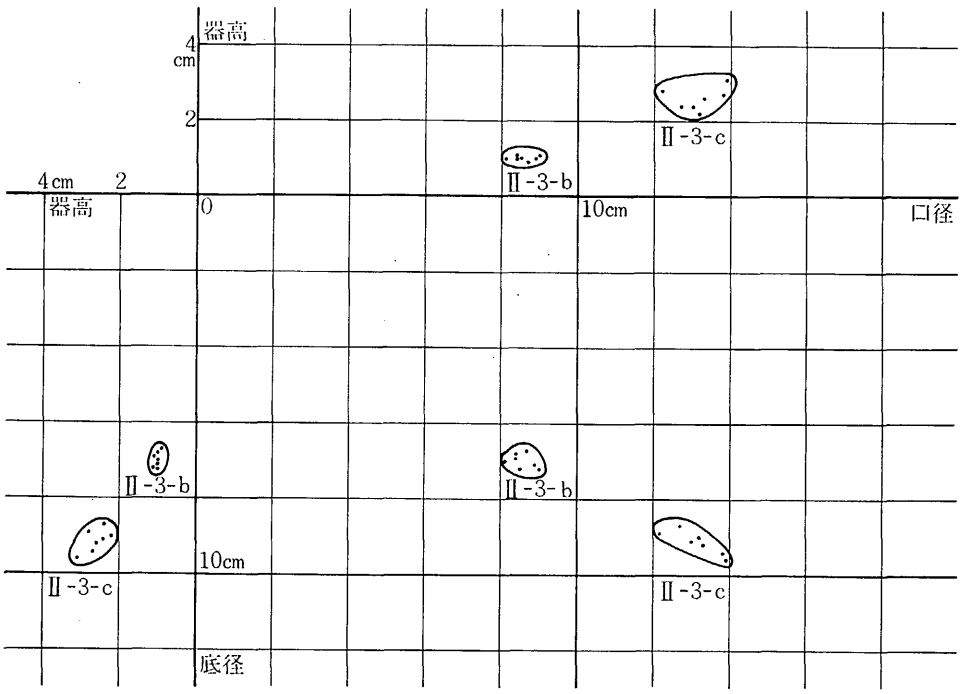
〔3〕

SK317土坑（21図，16・17表）

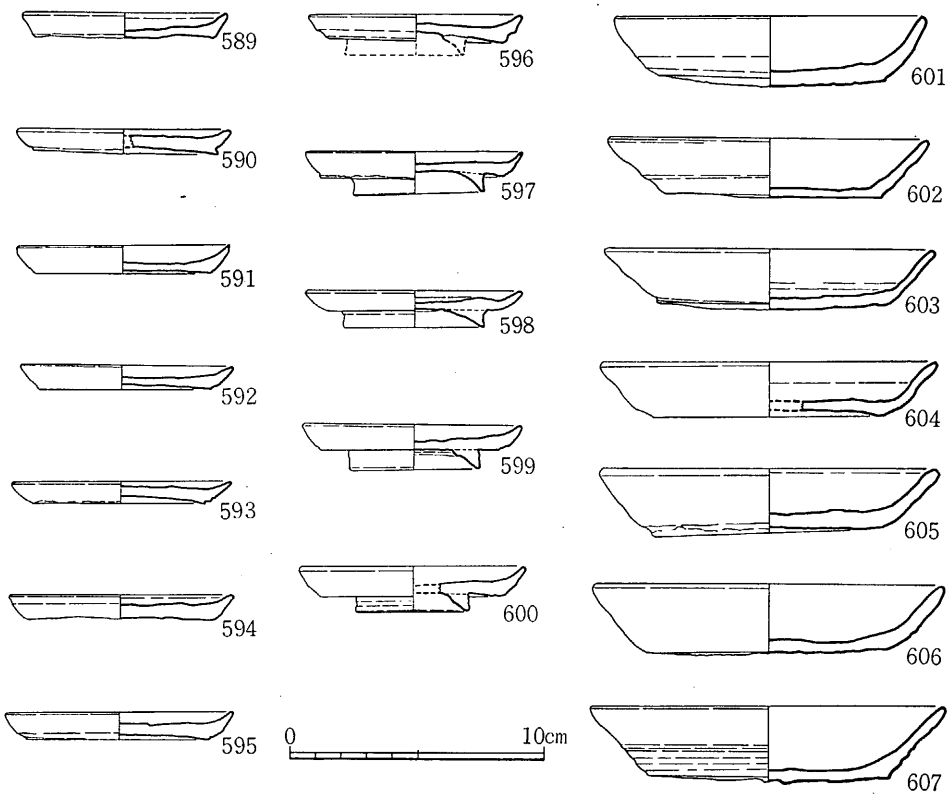
b．小皿（Ⅱ－**3**－**b**）（589～595）　口径8.1～9.0cm，底径6.7～7.2cm，器高0.85～1.1cmで，灰黄色ないし淡橙色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。口縁端はやや尖り，底部が厚く，深みはあまりない。

c．杯（Ⅱ－**3**－**c**）（601～607）　口径12.2～13.9cm，器高2.2～3.05cmで，赤褐色ないし灰黄色を呈し，胎土に少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目が残っている。

f．高台付小皿（Ⅱ－**3**－**f**）（596～600）　口径8.4～8.9cm，高台径4.5～5.4cm，器高1.45～1.8cmで，小皿に高台をつけたもので，高台は粘土紐を環状にして貼りつけたような簡単なもので，しかも底面中央からずれることが多い。



16表　SK317土坑出土土師器の法量



21図　土師器実測図（ＳＫ317土坑出土）

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	(8.1)	(7.0)	1.0	1	8.4			1	12.2	8.9	2.8
2	8.4	6.8	1.0	2	8.5	5.2	1.7	2	12.7	8.7	2.4
3	8.4	6.9	1.1	3	(8.5)	5.6	1.45	3	13.0	9.1	2.4
4	(8.5)	(7.2)	1.0	4	8.65	5.4	1.8	4	(13.2)	9.0	2.2
5	8.65	6.7	0.85	5	(8.9)	(4.5)	1.8	5	(13.25)	9.2	2.55
6	8.9	7.1	0.95					6	13.8	2.7	9.4
7	9.0	7.2	1.1					7	(13.9)	9.6	3.05

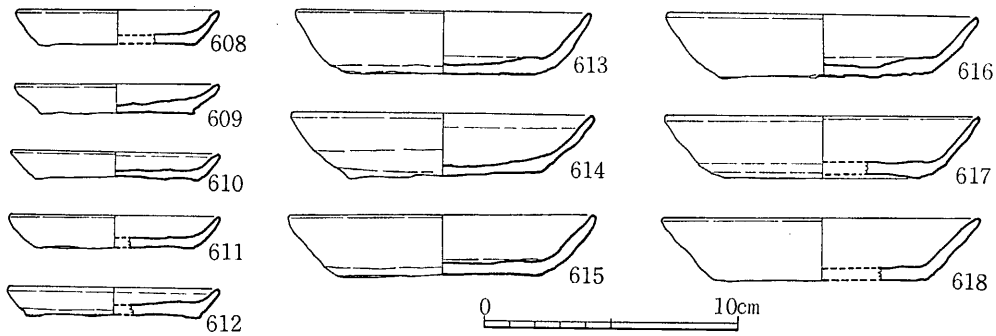
17表　ＳＫ317土坑出土土師器計測表

〔4〕

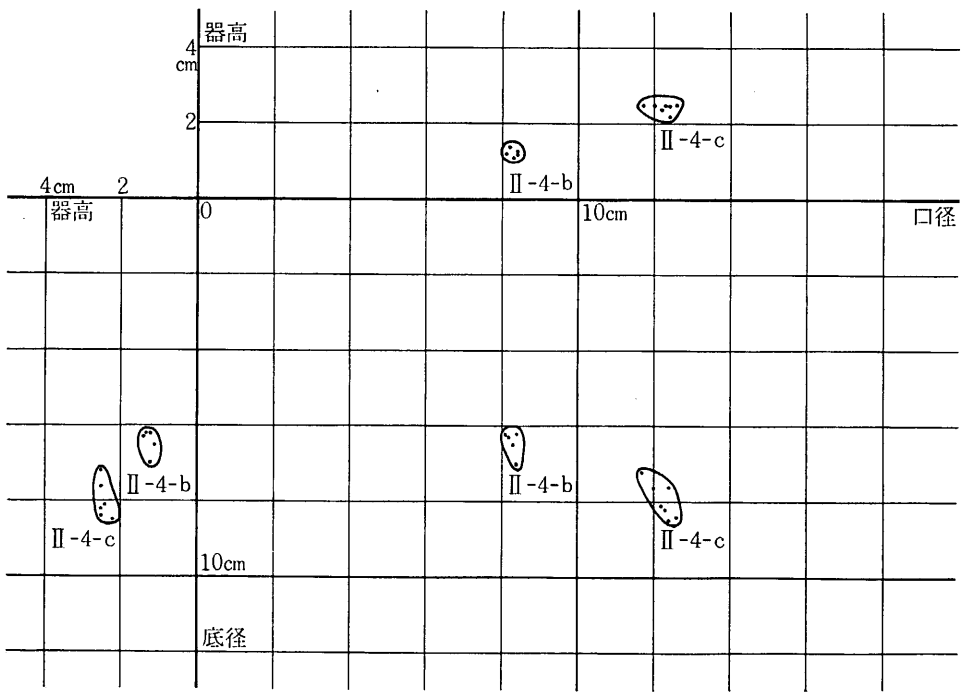
SK309土坑（22図，18・19表）

b．小皿（Ⅱ－**4**－**b**）（608～612）口径8.1～8.4cm，底径6.2～7.0cm，器高1.1～1.4cmで褐灰色ないし黄灰色を呈し，胎土に少し砂粒を含むものもある。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目が残っている。

c．杯（Ⅱ－**4**－**c**）（163～618）口径11.7～12.6cm，底径7.2～8.5cm，器高2.2～2.5cmで灰褐色ないし淡褐黄色を呈し，胎土に少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目がついている。



22図　土師器実測図（SK309土坑出土）



18表　SK309土坑出土土師器の法量

小皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	(8.15)	6.3	1.4	1	(11.7)	(7.2)	2.5	6	(12.6)	(8.4)	2.5
2	8.1	6.2	1.2	2	12.0	7.6	2.5	7	(12.4)	(8.5)	2.2
3	8.3	6.5	1.1	3	12.2	8.1	2.4				
4	(8.4)	(6.2)	1.3	4	12.3	8.2	2.5				
5	(8.4)	(7.0)	1.2	5	(12.4)	(7.6)	2.45				

19表　ＳＫ309土坑出土土師器計測表

〔**5**〕

ＳＫ304土坑（23図，20表）

この土坑からは時期が異なる二群の土師器が出土している。いかなる理由で混在するのか不明であるが，時期の新しいⅡ－５類を重点的に記述したい。

a．特小皿（Ⅱ－**5**－**a**）(626)　口径7.5cm，底径5.0cm，器高1.6cmで，小皿にくらべ深め

特小皿			
	口径	底径	器高
1	7.5	5.0	1.6

小皿			
	口径	底径	器高
1	7.05	5.5	0.9
2	7.1	4.5	1.05
3	7.35	5.7	1.15
4	7.4	5.1	0.95
5	7.45	5.1	1.2
6	7.6	5.7	1.35
7	7.75	6.6	1.05
8	(7.9)	(6.4)	1.05
9	(8.4)	(6.5)	1.1
10	(8.4)	(6.8)	0.95
11	(8.7)	6.8	0.9
12	(8.9)	(7.6)	0.95
13	(9.7)	(8.5)	1.2

高台付小皿			
	口径	高台径	器高
1	7.6		
2	(7.9)	5.7	2.1
3	(8.6)	(5.0)	1.9
4	(8.7)	(5.2)	1.8
5	8.95	6.8	2.55

杯			
	口径	底径	器高
1	12.2	7.2	2.85
2	12.2	7.6	2.9
3	12.4	8.4	2.85
4	12.4	8.5	2.8
5	(12.5)	7.2	2.95
6	(12.5)	7.5	2.8
7	(12.6)	(7.7)	2.85
8	12.6	8.2	2.9
9	(12.75)	7.8	3.0

杯			
	口径	底径	器高
10	(12.8)	7.5	2.75
11	12.8	7.5	2.8
12	12.8	8.3	3.15
13	13.0	7.8	3.05
14	13.0	9.4	2.4
15	(13.1)	(9.4)	3.0
16	(13.2)	7.5	2.8
17	(13.2)	8.1	3.2

大杯			
	口径	底径	器高
1	15.1	8.9	3.65

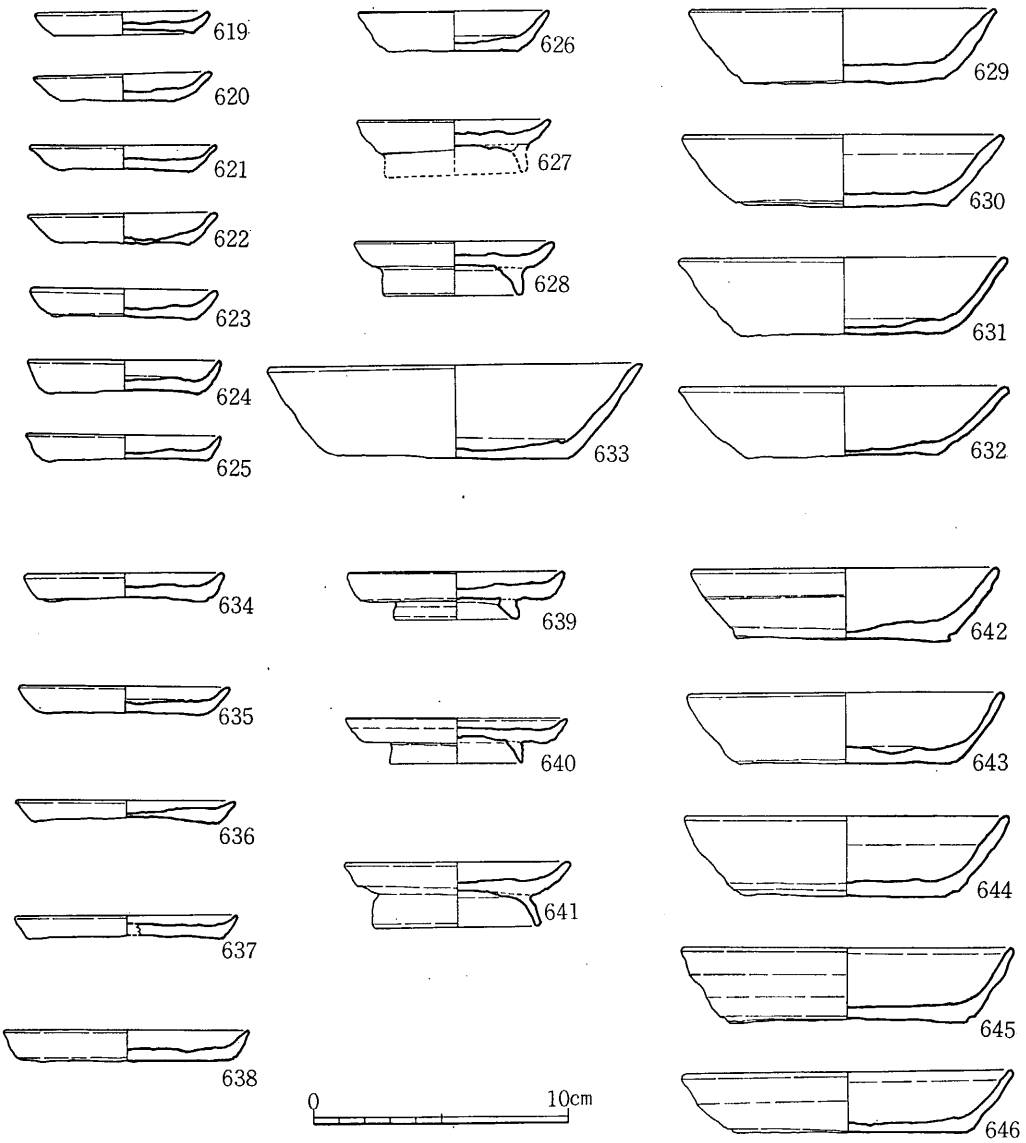
20表　ＳＫ304土坑出土土師器計測表

である。量はきわめて少ない。

b．小皿（Ⅱ－**5**－**b**）（619～625）　口径7.05～7.75cm，底径4.5～6.6cm，器高0.9～1.35cmで，今までの小皿のうちでは一番小さい。

c．杯（Ⅱ－**5**－**c**）（629～632）口径12.2～13.0cm，底径7.5～8.0cm，器高2.8～3.1cmであり，底径がおよそ8cm以下である。

d．大杯（Ⅱ－**5**－**d**）（633）口径15.1cm，底径8.9cm，器高3.65cmで，杯よりひとまわり



23図　土師器実測図（ＳＫ304土坑出土）

大きくなっている。

f．高台付小皿（Ⅱ－**5**－**f**）（627・628）　口径7.6～7.9cmで小皿と同じである。高台径は5.7cm，器高2.1cmで，高台の高さは1.1cmである。

以上のＳＫ304土坑出土の土師器は，特小皿がまだ少ないことから，Ⅱ－５類の中でもやや古い方に属するものであろう。

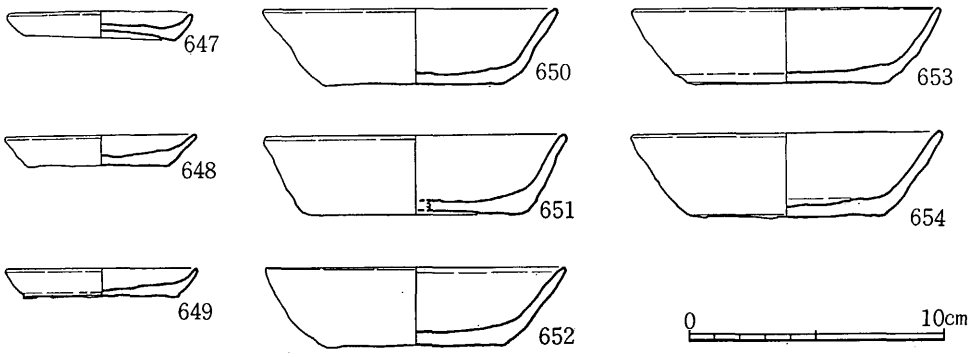
なお**634～638**の小皿は口径7.9～9.7cm，**642～646**の杯は口径12.4～13.2cmで，底径は8.1～9.4cmである。高台付小皿（639～641）を含めて，**634～646**はⅡ－**3**類に属するものと推測される。

ＭＦ33区暗茶褐色土（４層）**上部**（24図，21表）

次のＳＫ333土坑と位置が近く，層位も同一である。

b．小皿（Ⅱ－**5**－**b**）（647～649）　口径7.3～7.6cm，底径5.6～6.1cm，器高1.1～1.2cmである。

c．杯（Ⅱ－**5**－**c**）（650～654）　口径11.7～12.3cm，底径7.0～7.5cm，器高2.8～3.3cmである。



24図　土師器実測図（ＭＦ33区暗茶褐色土（４層）上部出土）

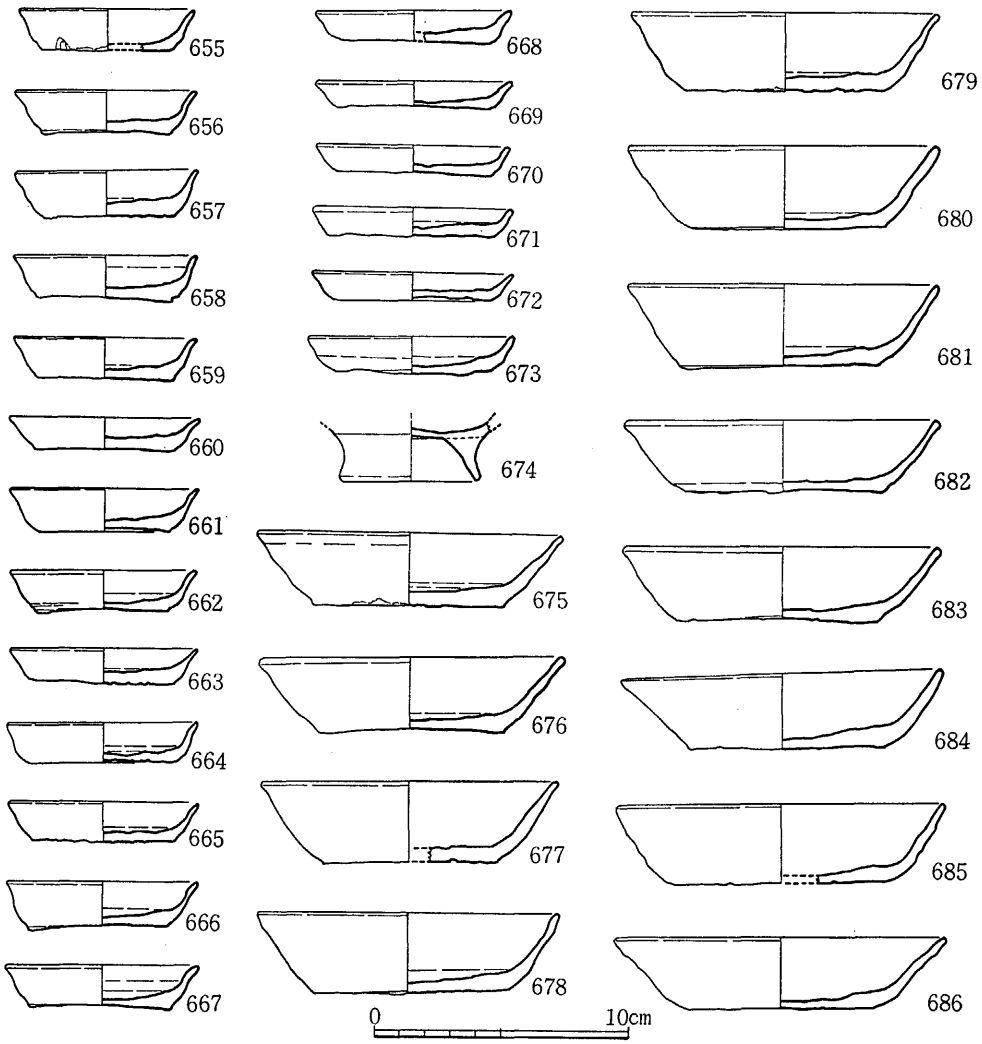
小皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	7.3	5.95	1.1	1	(11.6)	7.6	3.0	4	(12.2)	7.7	3.0
2	7.55	5.6	1.25	2	(11.8)	6.9	3.1	5	12.25	7.5	3.35
3	7.6	6.15	1.2	3	(11.9)	(8.3)	3.15				

21表　ＭＦ33区暗茶褐色土（４層）上部出土土師器計測表

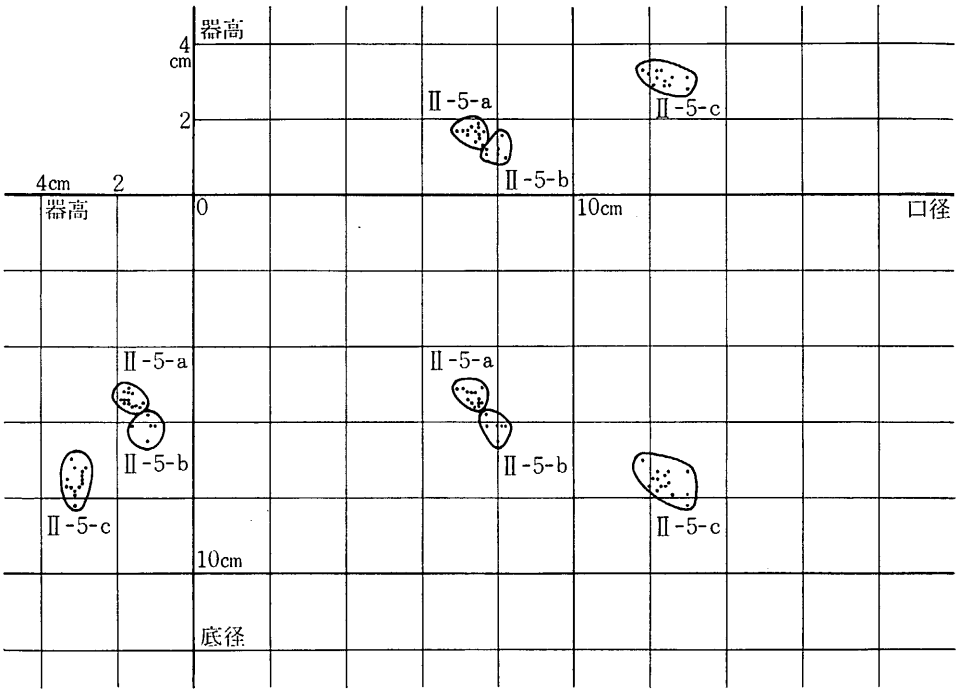
ＳＫ333土坑（25図，22・23表）

a．特小皿（Ⅱ－**5**－**a**）（655～667）　口径6.9～7.6cm，底径5.1～5.6cm，器高1.3～1.85cmで，小皿にくらべ口径，底径が小さいが，器高が高くなっている。黄灰色ないし暗灰色を呈し，焼成はあまり堅くない。胎土には砂粒を少量含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがあり，底面に糸切り痕と板目がついている。

b．小皿（Ⅱ－**5**－**b**）（668～673）　口径7.7～8.15cm，底径5.8～6.5cm，器高1.0～1.55cmで，黄灰色ないし暗灰色を呈し，胎土に砂粒を少量含む。器面には横ナデが，内底にはナデがつけられ，底面に糸切り痕と板目が残っている。



25図　土師器実測図（ＳＫ333土坑出土）



22表　ＳＫ333土坑出土土師器の法量

特小皿				小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	6.9	5.1	1.7	1	7.7	5.8	1.2	1	11.8	7.0	3.2
2	7.1	5.1	1.65	2	7.7	6.1	1.1	2	12.0	7.7	3.2
3	7.2	5.2	1.55	3	8.0	6.1	1.1	3	12.1	7.5	2.9
4	7.2	5.4	1.65	4	8.0	6.5	1.15	4	(12.2)	7.3	3.05
5	7.25	5.2	1.8	5	8.1	6.1	1.55	5	12.2	7.5	3.3
6	7.3	5.5	1.75	6	8.15	6.1	1.0	9	12.2	7.8	3.1
7	7.4	5.2	1.7	高台付小皿				7	12.3	7.7	3.25
8	7.4	5.6	1.4		口径	高台径	器高	8	12.4	7.7	3.0
9	7.5	5.4	1.85	1		5.55		9	(12.5)	7.6	2.85
10	7.5	5.5	1.65					10	12.6	7.9	3.05
11	7.5	5.6	1.5					11	13.0	7.3	2.8
12	7.5	5.6	1.6					12	13.0	8.2	3.1
13	7.6	5.5	1.3								

23表　ＳＫ333土坑出土土師器計測表

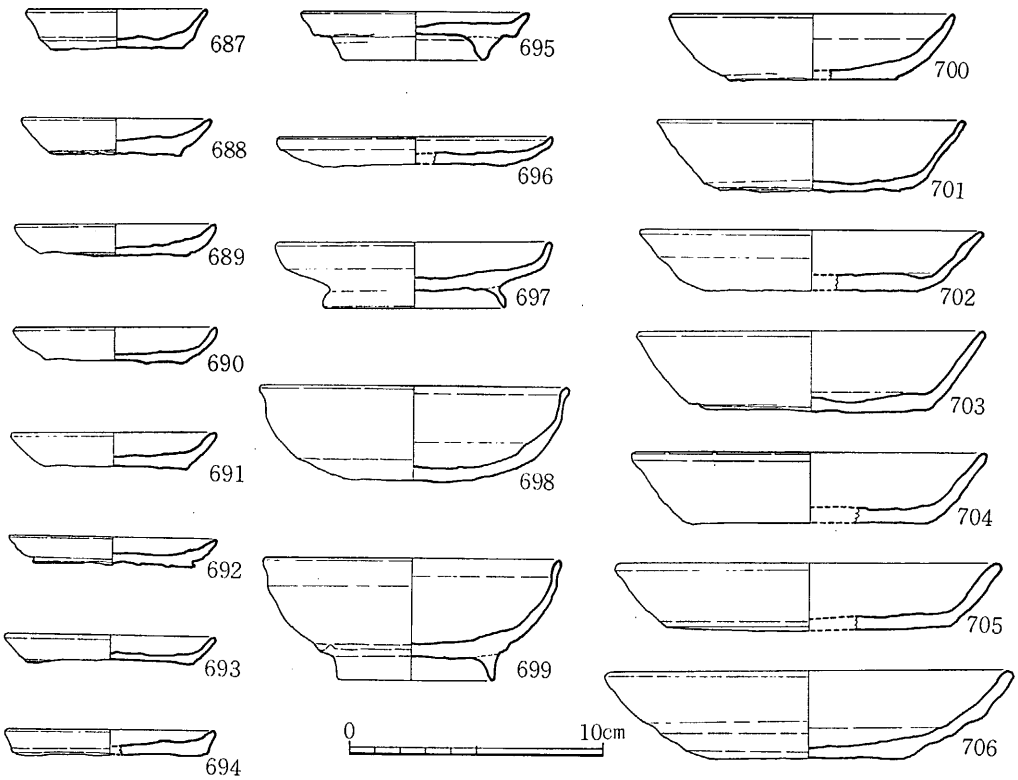
c．杯（Ⅱ－**5**－**c**）（675～686） 口径11.8～13.0cm，底径7.0～8.2cm，器高2.8～3.3cmでⅡ－4類の杯とくらべて口径，器高は大きいが底径が小さくなっている。褐灰色ないし暗灰色を呈し，胎土に少量の砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられ，底面に糸切り痕と板目がついている。

f．高台付小皿（Ⅱ－**5**－**f**）（674） 底部だけであるが，高台径5.55cmで，高台の高さは1.7cmである。

第5次調査ではわからなかった高台付小皿が，Ⅱ－5類にも存在することは確かで，しかもＳＫ304土坑やＳＤ302溝出土の高台付小皿をも考えにいれると，数種類ありそうであり，その出現のしかたに今後注目したい。

いずれにせよこのＳＫ333土坑出土の土師器は，Ⅱ－5類の典形的なものである。

なお重要な遺構である溝から出土した土師器は次のとおりである。ＳＤ305溝はすでに述べたので，ここでは省いている。



26図　土師器実測図（ＳＤ301溝出土）

ＳＤ301溝（26図）

上層の溝で，糸切り底を有する土師器が多く，各類のものが出土している。

687・688はⅡ－５類の特小皿である。**694**はⅡ－３類の小皿と思われる。**688～693**はⅡ－４類かⅡ－５類の小皿であろう。**695**はⅡ－３類の高台付小皿に近いものと考えられる。**696**はヘラ切り底をもつ浅い皿で，口縁端がやや内側に折れていて，杯蓋状をしている。**697**は特異な高台付小皿で，ヘラ切り底をもつ土師器に伴うものであろう。**698・699**はⅠ－２類の土師器で，下層からの混入と考えられる。**700～706**の杯はすべて糸切り底を有し，**700**はⅡ－４類，**701**はⅡ－５類にはいるものと思われる。また**702～704**はⅡ－３類に，**705**はⅡ－１類に属するものであろう。**706**は口径15.9cm，器高3.4cmと大きいのにくらべ，底径は7.7cmと小さく，特異な杯である。以上のように溝から出土する土師器の主体はⅡ－３類からⅡ－５類にかけてのものである。

ＳＤ302溝（27図707～724）

707～717は溝上部，**718～724**は溝下部からの出土である。**707**と**708**はⅡ－５類の特小皿と小皿で，**709**はⅡ－４類かⅡ－５類の小皿であろう。**710～714**はⅡ－５類にともなう高台付小皿で二つのグループに分かれる。その一つは**710・711**で，口径7.1～7.8cm，高台径5.2～6.3cm器高1.6cmで，低く小さな高台がつき，高台の高さは5～8mmである。小皿部の深みもあまりない。他のグループは**712～714**で，口径8.0～8.4cm，高台径6.0～6.4cm，器高6.0cmで，高台の高さ1.2～1.5cmあり，高台が高く，小皿もやや深い。**715**はⅡ－４類，**716**はⅡ－５類の杯で，**717**の口径は18.2cmである。下部の**719～724**の杯はおよそⅡ－４類に属し，小皿の**718**もほぼ同類にはいるものと思われる。このことからＳＤ302の下部はⅡ－４類が多く，上部はⅡ－５類が多いことがわかる。

ＳＤ304溝（28図，24表）

733～737の小皿は口径10.7～12.1cmで，同じⅠ－２類のＳＫ339土坑の小皿よりやや大きめである。**738～742**は同じくⅠ－２類の高台付小皿であり，**738**はやや小形である。そのほかに高台付椀，黒色土器が出土している。

ＳＤ306溝（27図725～727）

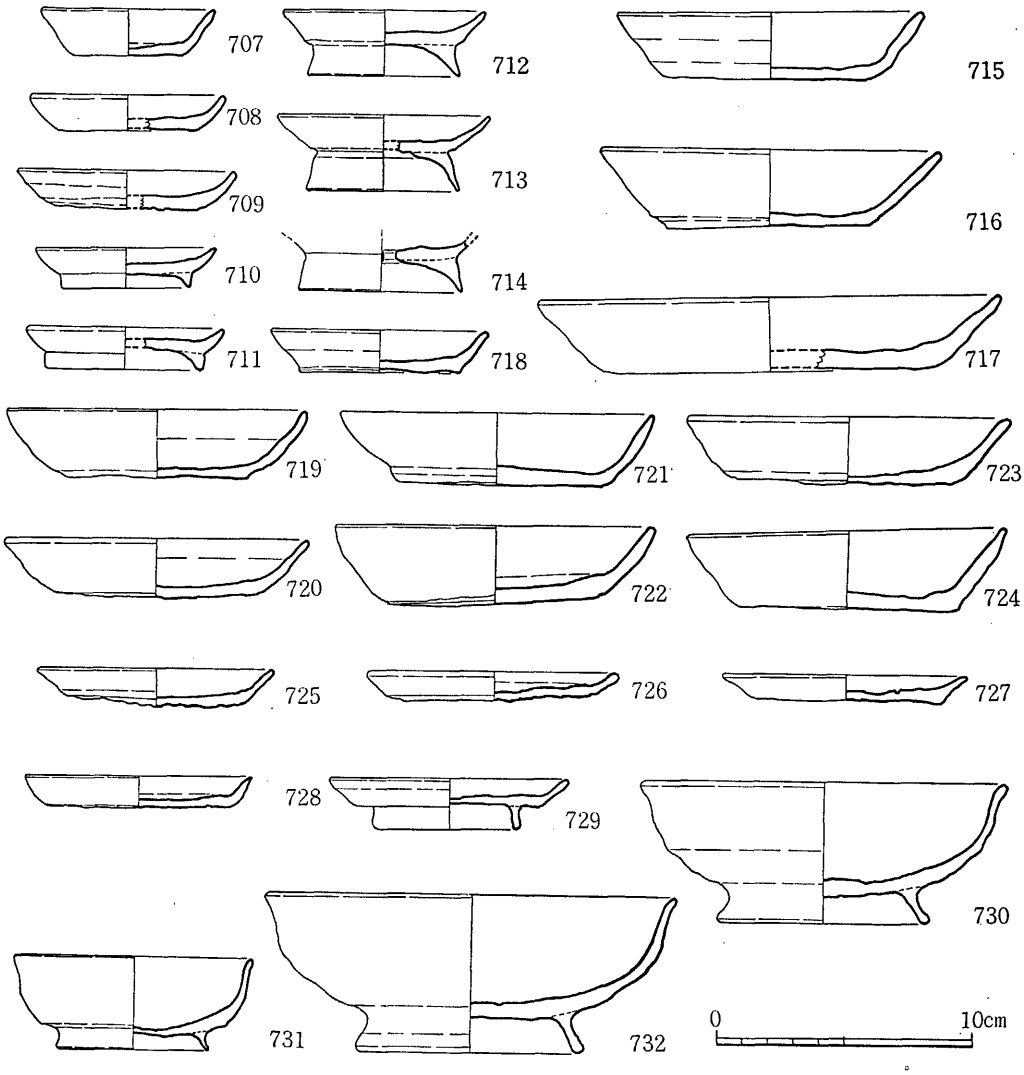
いずれもヘラ切り底をもつ小皿で，口径9.3～9.95cm，底径7.1～8.3cm，器高1.0～1.5cmで，Ⅰ－２類の小皿より小さい。おそらくⅠ－３類かⅠ－４類の小皿であろう。

ＳＤ307溝（27図728～730）

728はⅡ－１～３類の小皿であり，**729**はⅡ－１類の高台付小皿である。**730**はⅠ－２類の高台付椀であり，溝の時期もⅠ－２類土師器の時期にしてよいのではなかろうか。

ＳＤ308溝（27図731・732）

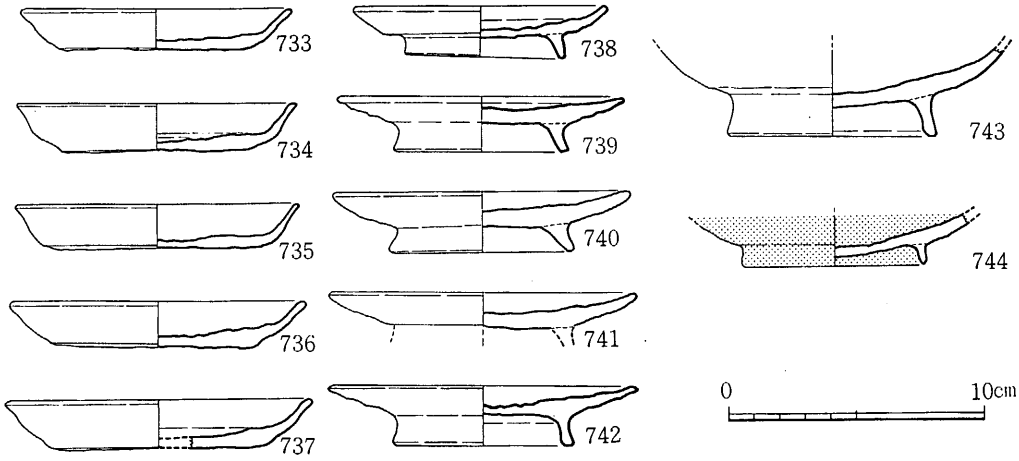
731は口径9.4cm，高台径6.1cm，器高3.65cmで，高台付特小椀（Ⅰ－**2**－**h**）である。**732**は同じくⅠ－２類の高台付大椀である。



27図　各溝出土土師器実測図

小皿				高台付小皿				高台付椀			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	高台径	器高
1	(10.7)	7.7	1.6	1	10.0	6.6	2.1	1		8.2	
2	11.05	7.3	1.9	2	(11.5)	6.9	2.1				
3	11.2	9.0	1.75	3	11.8	7.3	2.4				
4	(11.7)	(8.1)	1.8	4	12.15						
5	12.1	8.4	1.95	5	12.2	7.1	2.4				

24表　ＳＤ304溝出土土師器計測表



28図　土師器実測図（ＳＤ304溝出土）

土師器にはこのほか土鍋・長頸瓶などがある（29図）。

土鍋（734）口縁部が外へ屈折したもので，内面の屈折部より下は細かい刷毛目がつき，それより上は横ナデがみられる。外面には煤が厚く付着している。暗褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。上層からの出土である。

長頸瓶（735）口径8.3cm，底径12.3cm，器高18.5cmで，器面に横ナデが認められる。色調は黄白色で，胎土に砂粒を含む。ＳＫ346土坑からの出土である。

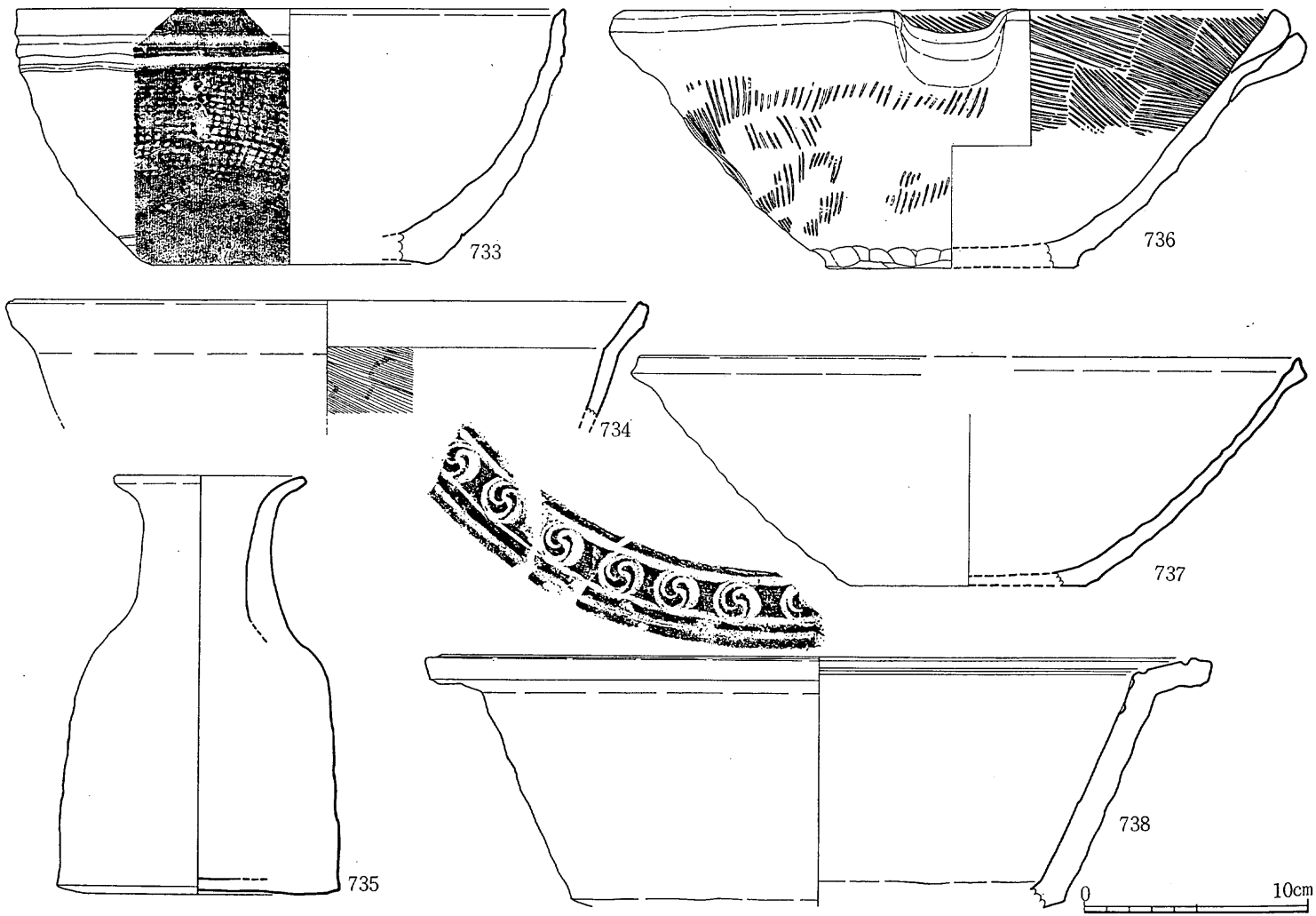
3．須　恵　器　（29図733）

今回の調査でも，古墳時代，奈良時代の須恵器片が多く出土しているが，報告は省略した。

鉢（733）口縁部に２本の沈線が施され，その下に格子目状のタタキがあり，底部近くはナデている。内面には横ナデが，内底にはナデがみられる。やや青味がかった灰色を呈している。下層からの出土である。

4．片　　口　（29図736・737）

片口も第５次調査時と同様に多くが出土している。**736** は外面は暗灰色で，内面は灰白色である。胎土はよく精製されている。内面のなかばより上に，横ないし斜方向に刷毛目があり，これより下は横方向に研磨されたあとが残る。外面は，口縁部が横ナデで，底部近くまでハケ目のあとをナデていて，底部には指圧痕がついている。上層からの出土である。**737** は同じく上層から出土したもので，器壁が薄く，全体的に灰色を呈すが，口縁部は灰黒色である。内面なかほどより底にかけて，研磨したあとがみられる。片口部は不明である。



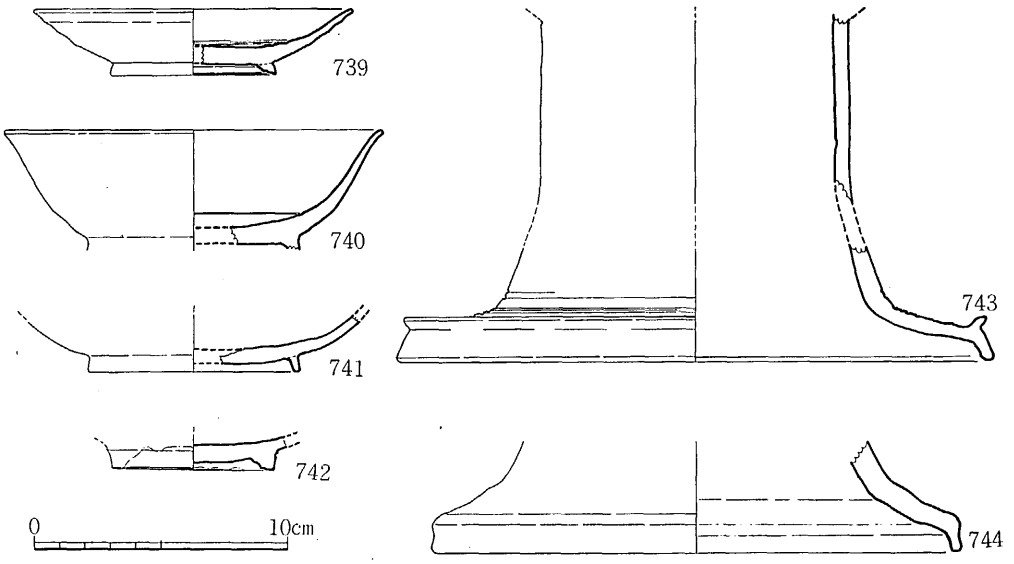
29図　須恵器，土師器，片口，火舎実測図

5. 火　　舎 (29図738)

火舎も多く出土しているが，**738** は口縁が外に開き，その上面に巴の印文を押捺してある。そのすぐ下の内面には四菱の印文が押捺されている。黄白色を呈し，胎土に砂粒を含む。底部は欠損していて，脚部は不明である。

6. 彩 釉 陶 器 (30図)

ＳＫ339土坑出土の緑釉香炉のほかにも，彩釉陶器がかなり出土している。釉は緑釉のみのものが大部分であるが，緑釉と黄味褐色釉がかかっている二彩釉陶器もある。胎土は白色軟質のものと，暗灰色硬質のものとがある。**739** は下層から出土した高台付皿で，見込みに二本の沈線がまわり，高台内底面に糸切り痕が残っている。胎土は明灰色で，緑色の釉がかかっているが，高台内は薄くかかる程度である。**340** は椀で，見込みに一本の沈線が入れられている。胎土は暗灰色で硬く，深緑色の釉が，やや厚くかけられている。高台は破損していて，その内面にも薄い釉がかかっている。下層からの出土である。**741**はＭＦ26区のＳＤ301溝から出土したもので，薄い高台がついている。胎土はやや橙味をおびた白色で，軟質である。灰黄色の釉が全面にかかっている。**742**はＳＤ306溝出土のもので，胎土は内面は暗灰色で，外面は褐色である。灰黒色の釉がかけられているが，高台の外側は部分的にしか釉がついていない。ヘラで高台が削り出されたものらしく高台内部にヘラ削り痕がつき，部分的に薄く釉がかかっている。**743**は下層から出土したもので，破片で復元したものである。高い脚部らしく，円筒形で



30図 彩 釉 陶 器 実 測 図

底部が大きく開いている。胎土は白色でやや軟質である。釉は内外両面にかかっているが，緑色を主体とし，部分的に黄味褐色の釉がかかった二彩である。**744** は下層からの出土で，花瓶かなにかの脚部であろう。胎土は灰味白色であるが焼成は硬い。全面に黄味緑色の釉がかかっている。その他口縁に爪形を二段に押しならべた，胎土灰白色の緑釉陶器も出土している。

7. 磁　　器 (31～34図)

第3次の調査でも青磁，白磁，青白磁，天目などの磁器類が多量に出土している。とくに今回は時代的に白磁のみを出土する溝，土坑，土層が多かったため，土師器や瓦器とともに白磁を総合的に理解することが出来た。すなわちヘラ切り底を有するⅠ－3類（浦城Ⅰ類）土師器の時期から，糸切り底を有するⅡ－1類の時期まで，3類，4類，5類の白磁のみが共伴することがわかった。6類の白磁はそれ以降に出現するものであろう。磁器の分類は第5次の報告に従った。

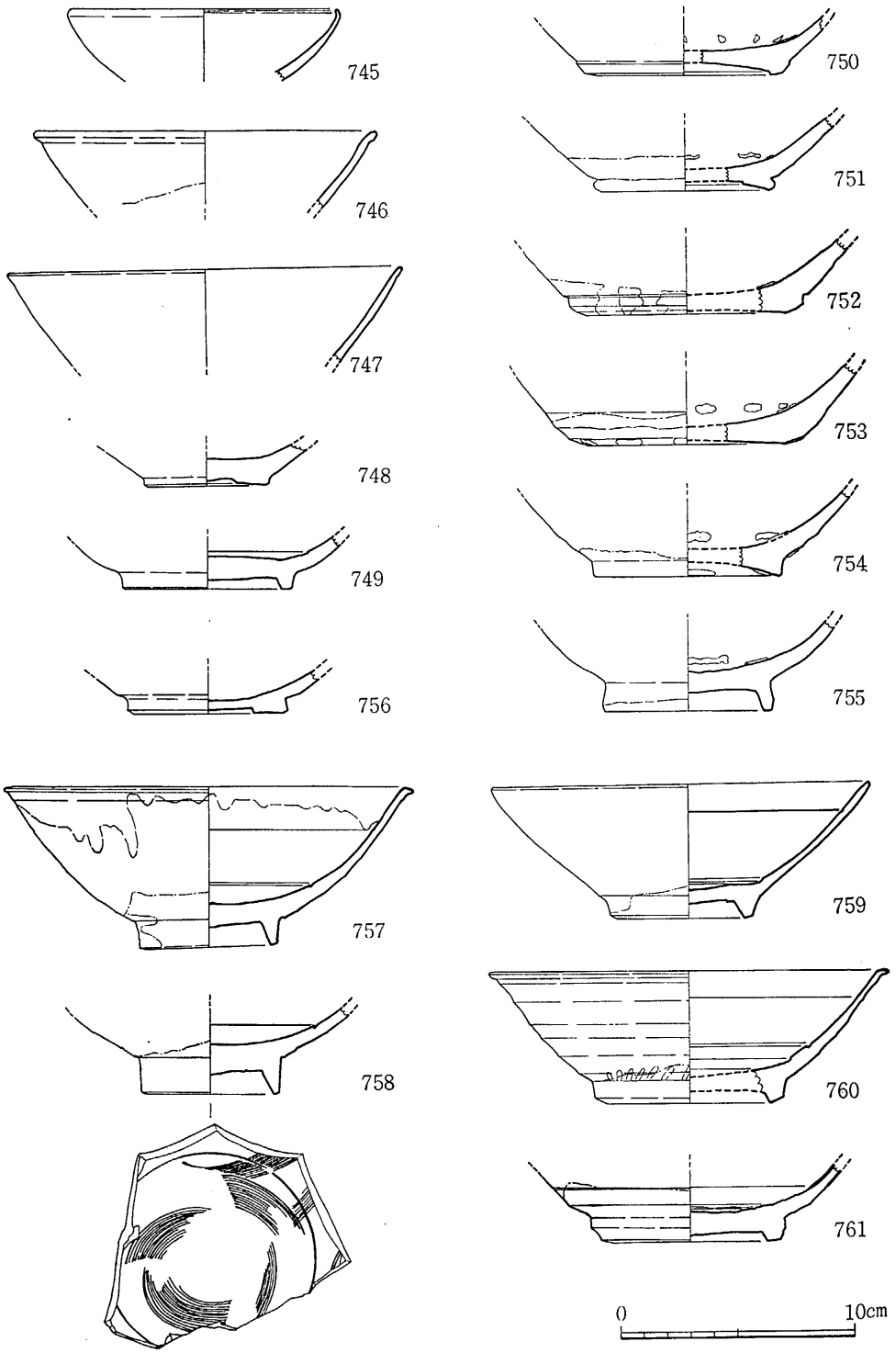
1類（31図745～755）　深緑色ないし褐味灰緑色の釉が薄くかかった青磁で，胎土は白灰色ないし灰色を呈するものが多い。**745～747**は口縁部で器壁が薄く，**745**は口縁端が内湾している。**748～755** は底部で，幅広い高台をもつもの（748），高台をもつもの（749・755），低い高台をもつもの（750），底部が丸味をおびて外にはりだすもの（751），ヘラ削りで底部をつくっているもの（752），底部のかどをヘラ削りしているもの（753），ややあげ底のもの（754）などがある。ほとんどの底部の床付部と見込みに目あとが数箇所ついている。量はやや多く，下層のものが大部分である。いわゆる越州窯製とよばれているものである。

2類（31図756）　白磁で，胎土は白色で，釉はやや黄味をおびた白色で，釉の厚くなった部分ではやや青味をおびる。幅広い高台をもち，高台の床付面は釉かけの後，釉を削りとっている。ＭＦ28・29区の下層の最下部付近からの出土である。

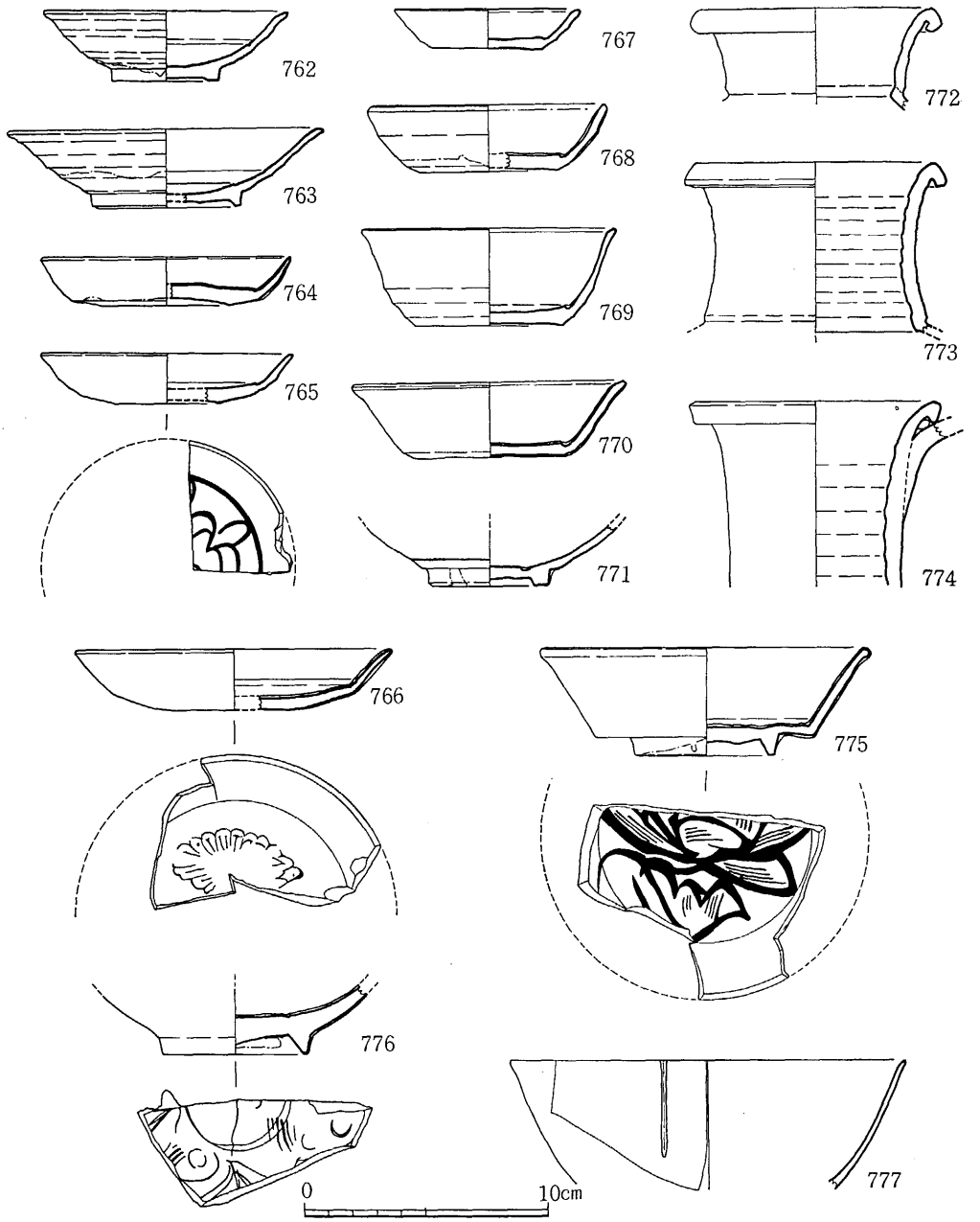
3類（31図757・758・762）　白磁で，口縁部がやや外へ張り出し，薄手の高い高台をもつ椀で口縁内側と見込みの部分に沈線が入れられている。白い化粧土の上に釉がかけられたものも多い。内面に櫛描文が描かれているものもある（758）。また**762**のような高台付小皿もある。このほかにＳＤ305溝，ＳＫ312土坑などからも出土している。

4類（31図759・761・763）　見込みの部分に，焼成前に環状に釉をかきとった跡をのこすもので，平縁と3類同様に口縁がやや外へ張り出すものとがある。底部は3類にくらべてやや太く低い。口縁内側に沈線が入れられたものや，さらに見込みにも沈線が入れられたものがある。この類に属する高台付小皿が，ＳＫ312土坑下部から6個まとまって出土している。**763**は器形は同じであるが口径は大きい。4類の椀はほかにＳＫ339土坑からも出土している。

5類　口縁が折り返したようになった，いわゆる玉縁をもつ白磁で，底部は低い高台になっている。ＳＤ305溝の**445**やＳＫ312土坑の**550**もこの5類の白磁である。

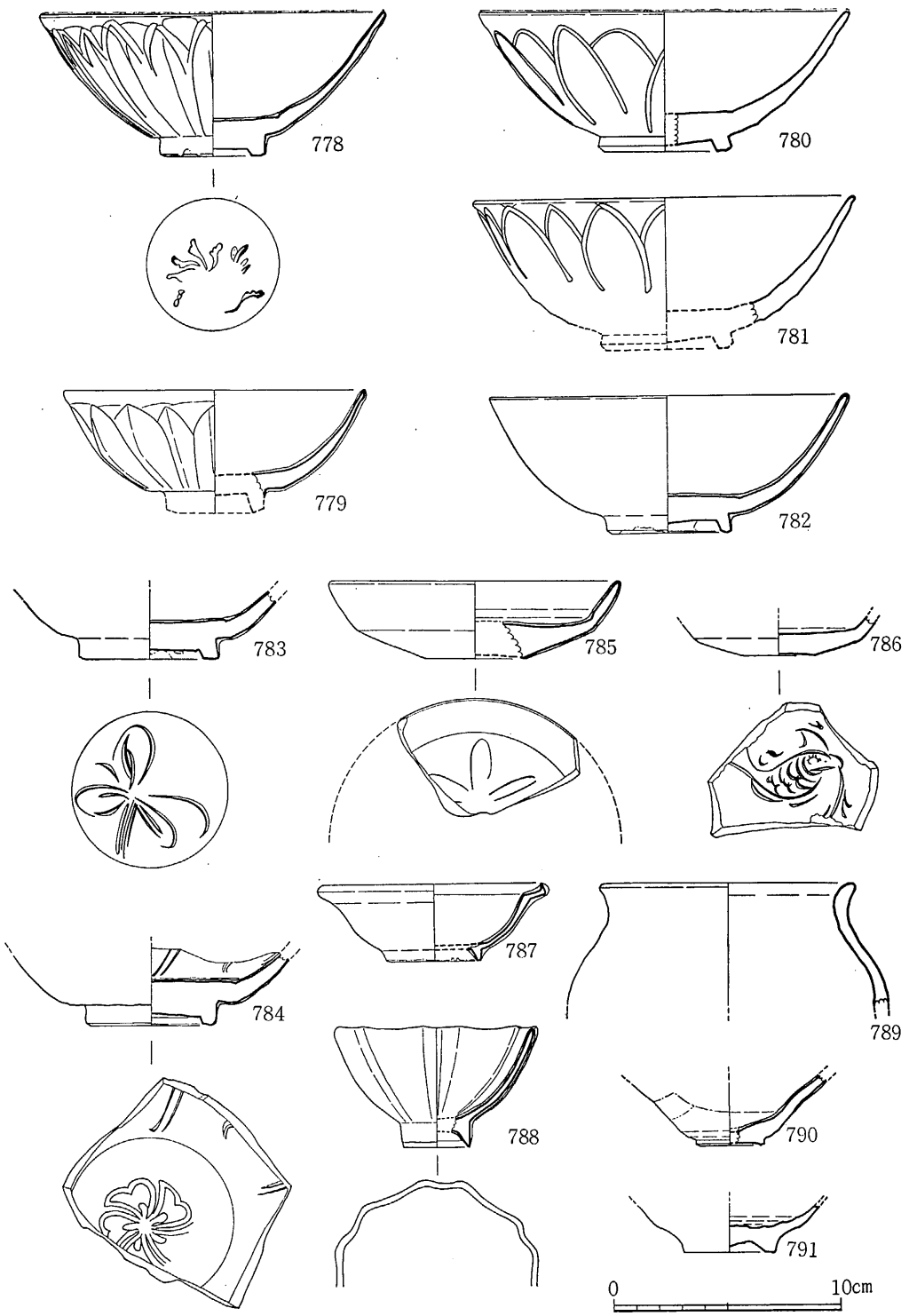

745
746
747
748
749
756
750
751
752
753
754
755
757
758
759
760
761
0
10cm

31図　青磁，白磁実測図

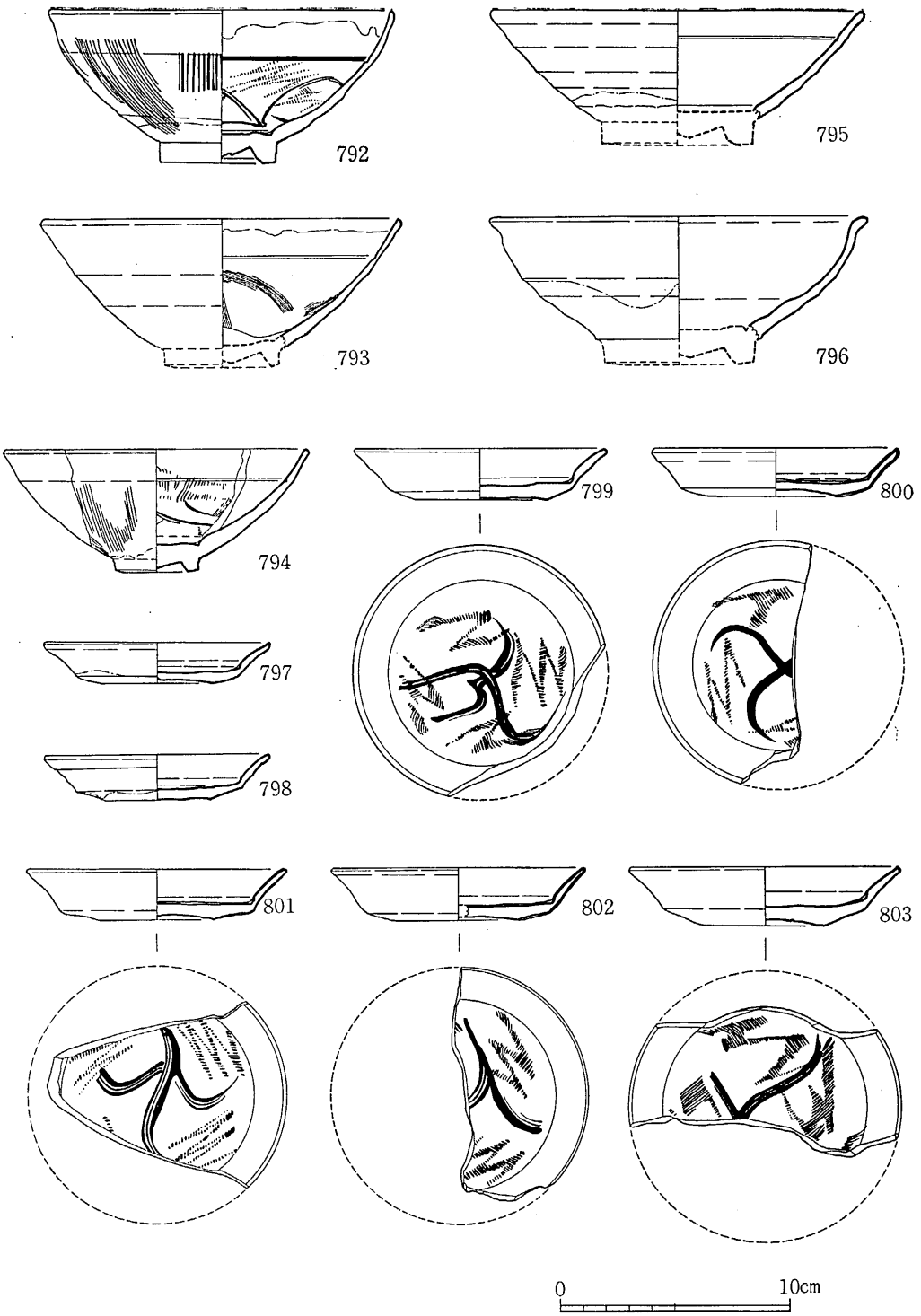


32図 白 磁 実 測 図

6類（32図762〜771） いわゆる口禿の白磁で，焼成前に口縁先端の釉が削りとられている。皿形と高台がついた椀（771）がある。底部には釉がかからないか，かかっていても極めて薄い。



33図　青磁，天目，高麗青磁実測図



34図 青 磁 実 測 図

そのほか白磁には次のようなものがある。

b（764〜766） 口縁と底部との境に弱い屈折部をもつ白磁小皿で，口縁は尖っている。底面は焼成前に釉をかきとっている。**764**はＳＫ311土坑出土で，胎土は白色で，薄い青色の釉は底部まではかかっていない。**765**の胎土は黄褐色で灰白色の釉がかかっている。底面は焼成前に釉をかきとっている。見込みに沈線による文様を描いている。**766**の胎土は白灰色で，黄色味をおびた薄緑灰色の釉がかかり，見込みに型押しの花文がついている。ＳＫ315土坑出土。

c（772〜774）白磁壷の口縁で，**774**は頸部が長く把手がついている。いずれも上層出土。

そのほかに次のような白磁がある。**775**はＳＫ326土坑およびＳＫ317土坑から出土したもので，見込みに沈線と櫛歯文で花文が描かれている。胎土は灰白色で，黄灰色の釉がかかっている。**776**は内面に細かい沈線と櫛歯文で文様を描いていて，胎土は灰白色で，透明な淡緑色の釉がかかり，貫入がみられる。あるいは青白磁にはいるかもしれない。**777**は薄手で，器壁を押して形をつくった輪花椀で，胎土は灰白色で，薄い灰緑色の釉がかかっている。下層からの出土である。

7類（33図778〜784） 低い高台を有し，胴部はやや丸味をおびた青磁で，数種に分けられるが，底部でみるかぎりあまり差はない。

A（784） 外側は無文で，内側に二本の線で区切られた空間に，飛雲文が描かれたもので，**784**は見込みに花文の型押しがあり，胎土は灰色で，釉は緑灰色である。

B（783） 外側は無文で，内面にヘラによる花文が描かれているもので，**783**は見込みにも花文が描かれている。胎土は白灰色で，釉は淡緑色である。

C（778〜781） 外面に蓮弁文が削り出されたり，沈線によって蓮弁が描かれたものである。**778**は見込みにボタンの花文が型押しされ，胎土は灰白色で，釉は深緑色である。**779**はＳＫ305土坑出土で，胎土は灰色で，釉は薄緑色である。**780**は胎土が灰色で，釉は風化して緑灰色である。**781**は胎土白黄色で，釉は黄灰色である。

D（782） 無文のもので，胎土は淡灰色で，釉は灰黄色を呈し，部分的に細かな貫入がある。

なお7類に伴う小皿としては次のようなものが考えられる。

d（785） 口縁と底部との境が屈折し，見込みにヘラによる花文が描かれている。底面は焼成前に釉がかきとられている。**786**は見込みにヘラで魚文が描かれ，底面は焼成前に釉がかきとられ，三箇所に目あとが残っている。胎土は灰白色で，釉は褐緑色である。

789は青磁の壷で7類によく似ている。

8類（287・288）厚く釉がかかり，高台は薄く，床付部分は尖り，釉は焼成前に削りとられ，褐色を呈している。いわゆる竜泉窯系といわれているものである。**787**は胎土が灰白色で釉は薄緑色である。**788**は輪花小椀で，胎土は白色で，釉は青緑色である。

9類（34図792～803） いわゆる珠光青磁とよばれるもので，櫛歯による文様が特徴的である。胎土は灰色ないし灰白色で，灰緑色ないし灰黄色の釉がかかっている。**792～794**は椀で，内面の口縁下に沈線があり，その下に櫛歯による文様が描かれ，**792・793**の外面にも櫛歯による条線がひかれている。**795・796**は無文の椀である。**797～803**は小皿で，釉は底部までかかっていないものもあるが，焼成前に底面の釉をかきとったものもある。**800**はＳＫ317土坑出土。

10類（33図790） いわゆる天目とよばれるもので，**790**の胎土は灰色で，暗赤褐色の下ぬりの上に，黒色の釉が底部を除いてかけられている。

11類（図版23の１）青白磁で，椀，皿などもあるが，やはり一番多いのは瓶の破片である。胎土は白色で，薄青色ないし薄緑色の釉がかかっている。

12類（33図791） 高麗青磁とよばれるもので，**791**の胎土は灰色で白色の粒が混じり，やや透明な薄灰青色の釉がかかっている。高台の床付面には目あとがついている。

8. 雑　　器（35図）

明瞭な青磁・白磁などの磁器のほかに，色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないので，ここでは一応雑器としてまとめ，分類は第５次調査の報告に従った。

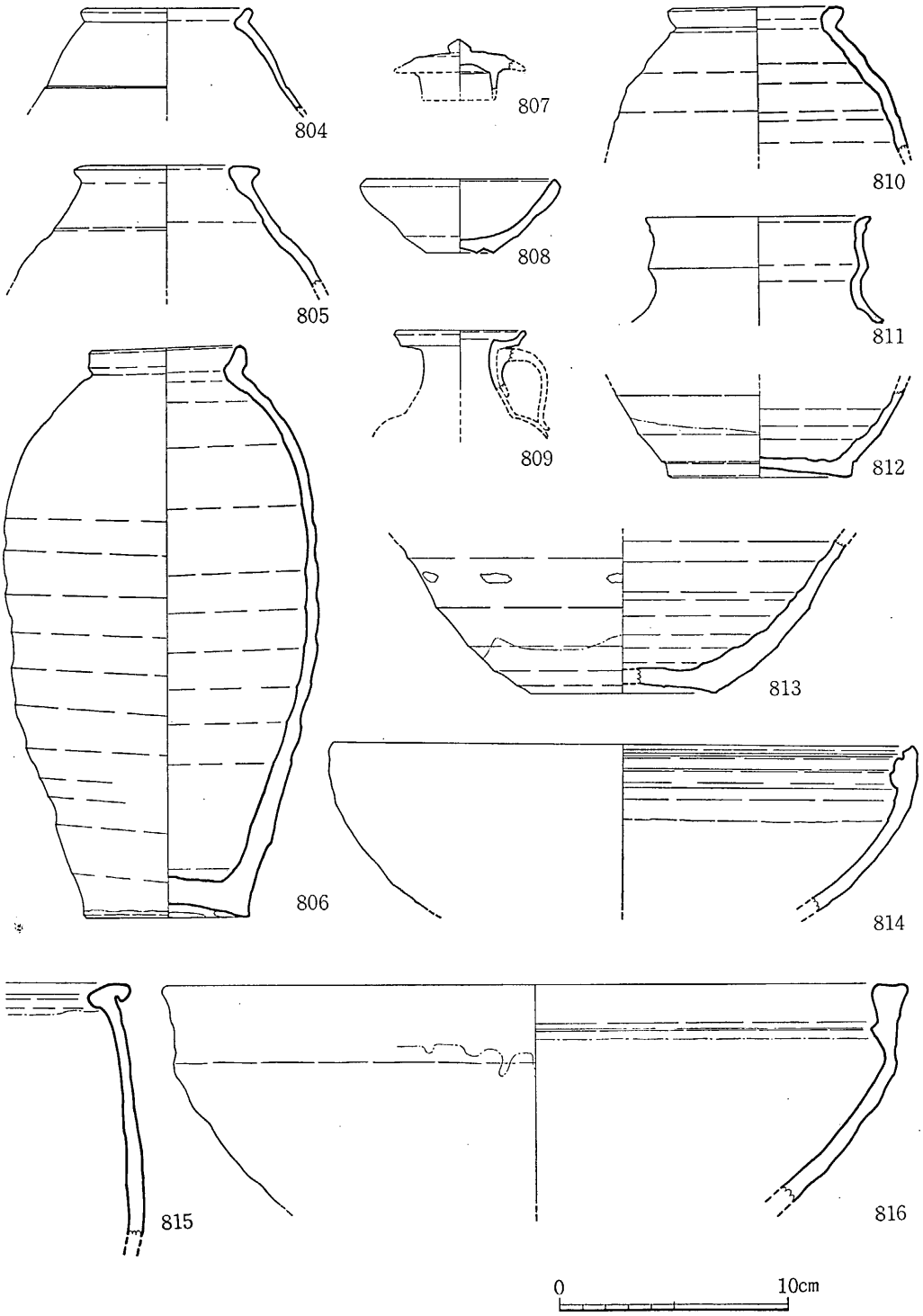
１類（804） 短い口縁がやや開き，器壁はやや薄く，肩部に沈線がめぐっている。底部には低い高台がつくものと思われる。**804**は胎土が褐灰色で釉は風化して濁緑色を呈している。

３類（805・806・810） 短い口縁をもち，黒褐色を呈する瓶ないし壷で，底部はやや上げ底である。**806**の口縁は横にまがり，上面は平坦である。胎土は紫灰色で，黒褐色の釉がかかり底面に三箇所の目あとが認められる。**810**は胎土が白灰色で磁器質であり，内面には紫褐色の薄い釉がかかり，外面には緑灰色の釉がかかっているが風化がはげしい。口唇部に目あとが部分的についている。

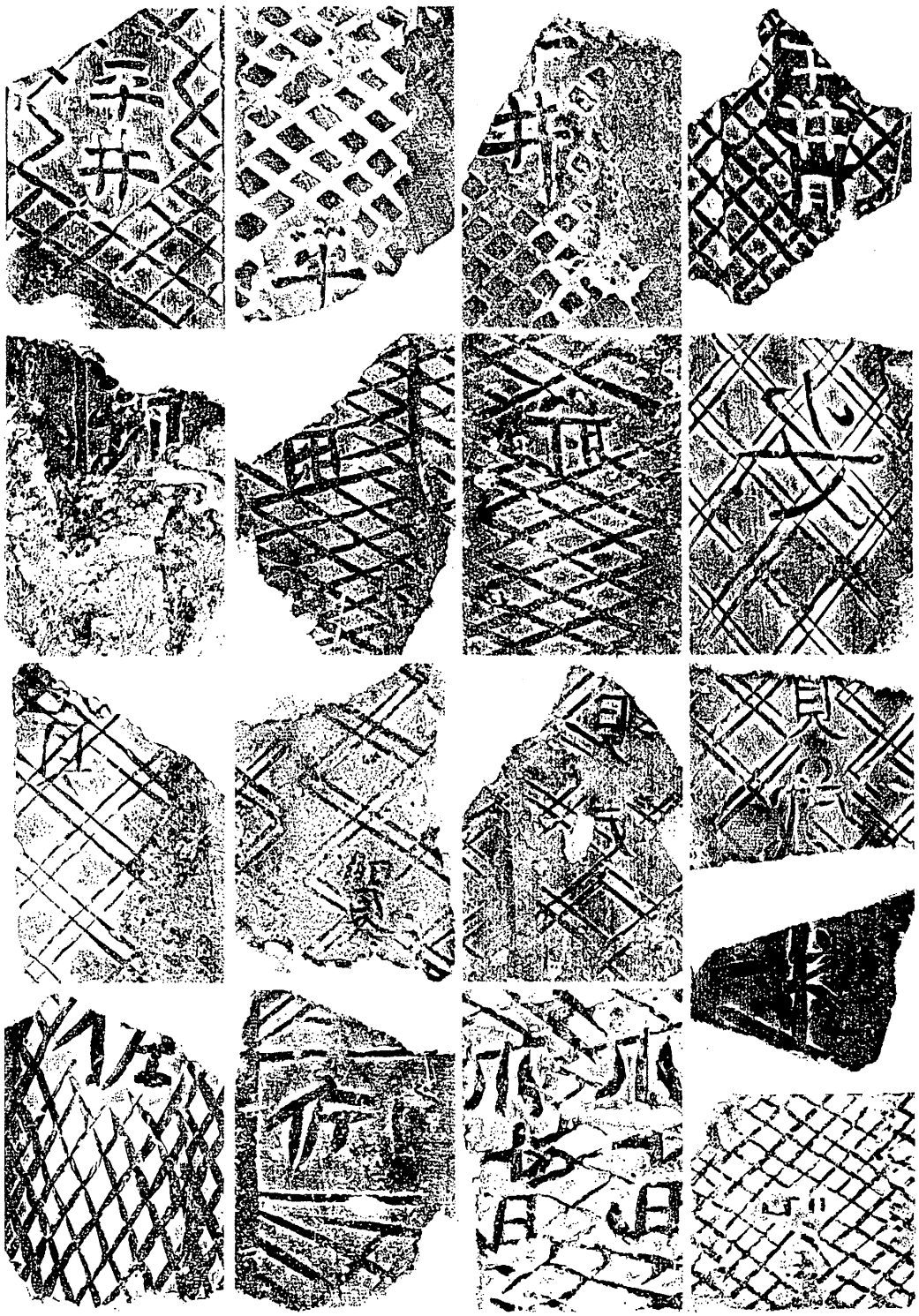
５類（808） 小皿で，暗褐色の薄い釉の上に，緑味褐色の釉をかけている。胎土は灰色を呈している。

７類（815） 口縁が外に張り出す鉢形のもので，大きな底部をもつ。見込みには褐色の文様が描かれたものもある。**815**はＳＫ301土坑出土で，内面の口縁下から灰緑色の釉がかかり，外面は紫褐色で釉はない。胎土は明灰色である。

８類（814，816） 口縁内側に二段の凸帯をもつ鉢で，内面下半部はよく研磨されている。胎土には白い砂粒を含み，焼成は硬い。**814**はＳＫ312土坑上部からの出土で，暗茶褐色を呈している。**816**はＳＫ341土坑出土で，この８類にはいらないかもしれない。内側に１段の凸起があり，口縁部は厚く，上端は平坦になっている。口縁部内外面に灰白色の釉がかかり，他の部分は黒褐色である。



35図 雑 器 実 測 図



36図 文 字 瓦 拓 影

11類（809・812・813） 暗褐色の釉がかかったいわゆる褐釉陶器で，胎土は紫灰色，暗灰色，赤褐色などである。**809**は把手が付き，口縁は皿形に開く。水注の口縁であろう。**812**はＳＫ322土坑出土で，小形壺ないし水注の底部である。**813**はやや大きな底部で，胴下部に目あとがついている。

そのほか**807**はＳＫ309土坑出土で，蓋の上面に緑色の釉がかかり，胎土は灰色の，緑釉陶器である。**811**は器壁が薄く胎土は灰色ないし紫灰色で，緑味褐色の釉がかかっている。

9. 灰釉陶器，古瀬戸，常滑陶器 （図版25の２）

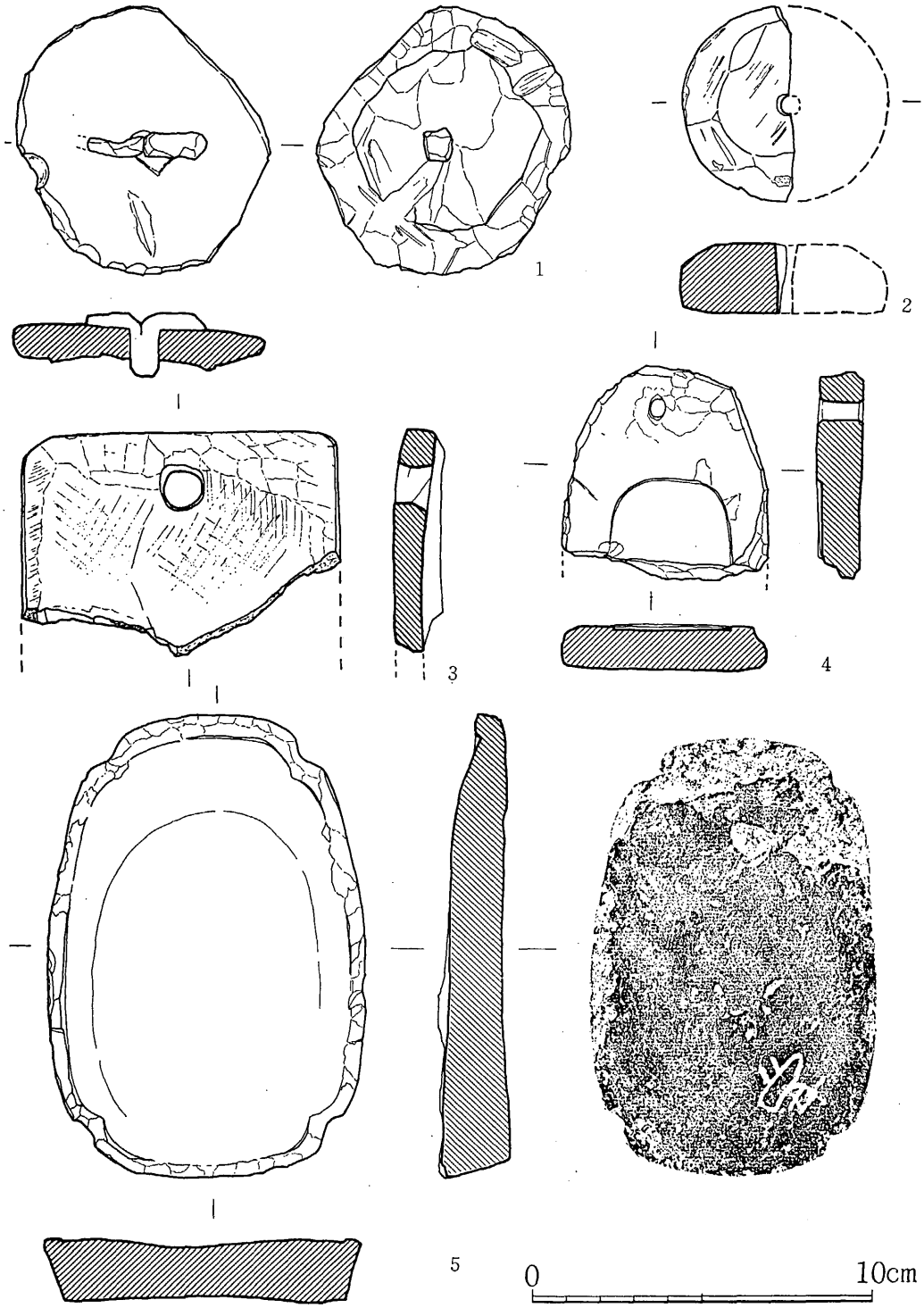
灰釉陶器は，皿や平瓶の取手など少量が出土している。古瀬戸は今回初めて，それとわかるものが出土している。胎土は灰白色で，薄緑色の釉がかかっている。文様は唐草文や点で構成した環状文，横沈線文などで，器形は瓶形がほとんどである。いずれも上層からの出土である。常滑陶器も第５次調査時と同様に多く出土している。押印の文様もほぼ同じである。

10. 瓦 （36図）

瓦は多量に出土しているが，いずれも細片で，遺構と結びつくものはない。ほとんどが平安時代のもので，文字瓦には「平井」「平井瓦」「筑」「□前」「安」「賀」「賀茂」「佐」「之」「小ト瓦」？「四王」？などがある。

11. 石 製 品 （37図，図版26の１）

1は長径8cm，短径7.5cm，厚さ1.2cmをはかる滑石製品で不整円形をなす。中央部に孔をあけ半折した鉄片を片面から挿入して鉦状に残し，他面に出た２片を両側へと折り返している。鉄片の断面は方形をなす。両側に折り返しのある面は火気を受けて黒灰色に変色し，つまみのある面は周縁からの削りにより楕円形状に一段高く造くり出されている。中央部はやや凹む。下層茶褐色土出土。**2**は径6.1cm，高さ2.1cmの円形をなす滑石製有孔円板で，孔より半折している。周縁は多面体に削り出して円形とし，断面はほぼ台形をなしてやや周縁よりに稜をつくる。孔は円形で上面で6mm，裏面で4mmの断面ロウト状をなす。表裏ともに条痕がみられる。３層出土。同様なものが４次調査でも出土しており紡錘車と思われる。**3**は滑石製石板で，下端部を欠損する。幅9.4cm。体部はやや湾曲し，孔径1.1cmの両面穿孔である。図示した面の右上から左下へ幅1mm間隙で櫛目条痕がほぼ全面にわたってみられる。裏面にも不定方向の条痕がみられる。ＳＫ309土坑出土。**4**も滑石製で下半部は半折している。現存長6.4cm，幅6.1cmの長円形状をなし厚さは1.4cmを測る。周縁部は縦方向の削りによる整形で，上端部に径4mmの円径孔を有する。表面には深さ1mmほどの浅い隅丸方形をなす凹みをつくるが，この底面は滑らかではない。硯であろうか。**5**は鼠色を呈した石材を使用する硯で肩部を欠損



37図 石 製 品 実 測 図

するがほぼ完形品である。長径 13.6cm，短径9.3cm，高さ 1.9cm をはかり方形に近い長円形をなし，四隅に抉りを配する。陸は海部との境に稜をつくり中央部は周辺より 3mmほど凹む。裏面はやや上げ底をなし下端右側に花押状の線刻が見られる。

3次の調査で出土した石製品は上部の他に滑石製石鍋片が10余点あり，鍔をめぐらさないものが1点みられる。滑石製加工品は石鍋の鍔部周辺を方形に面取りしたものがある外はあまり出土していない。貢岩質の硯小片1点と輝緑凝灰岩の長方形に整形した石板状のものが2点出土している。これは4次調査でも出土していて硯の石材となるものであろう。

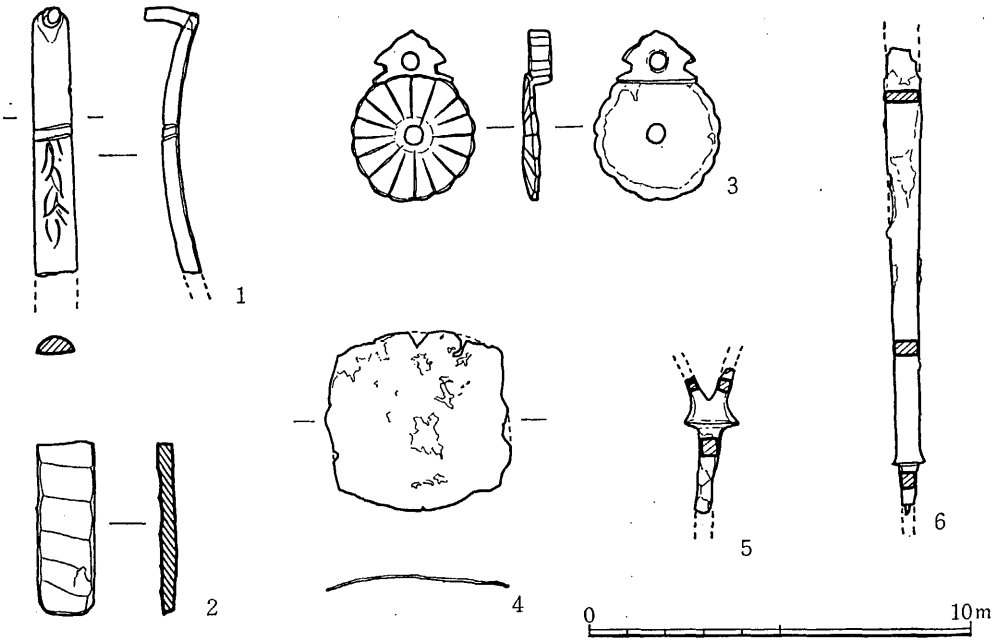
12. ガラス製小玉

ブルーのガラス製小玉が1個出土している。高さ 4.65mm，径3.55mm，孔径1.0mmの小さい玉である。巻き上げて作った状態がよくわかるもので，両端が糸状に延びて体面脇に突出している。SK333土坑出土。

13. 金 属 製 品（38図，図版26の2）

3次の調査では金属製品の出土は少ないが，特色ある遺物が出土している。

1は銅製の帯鉤で，一端を欠損するが現存長 7.05cm，最大幅1.1cm，厚さ0.42cmを測る。



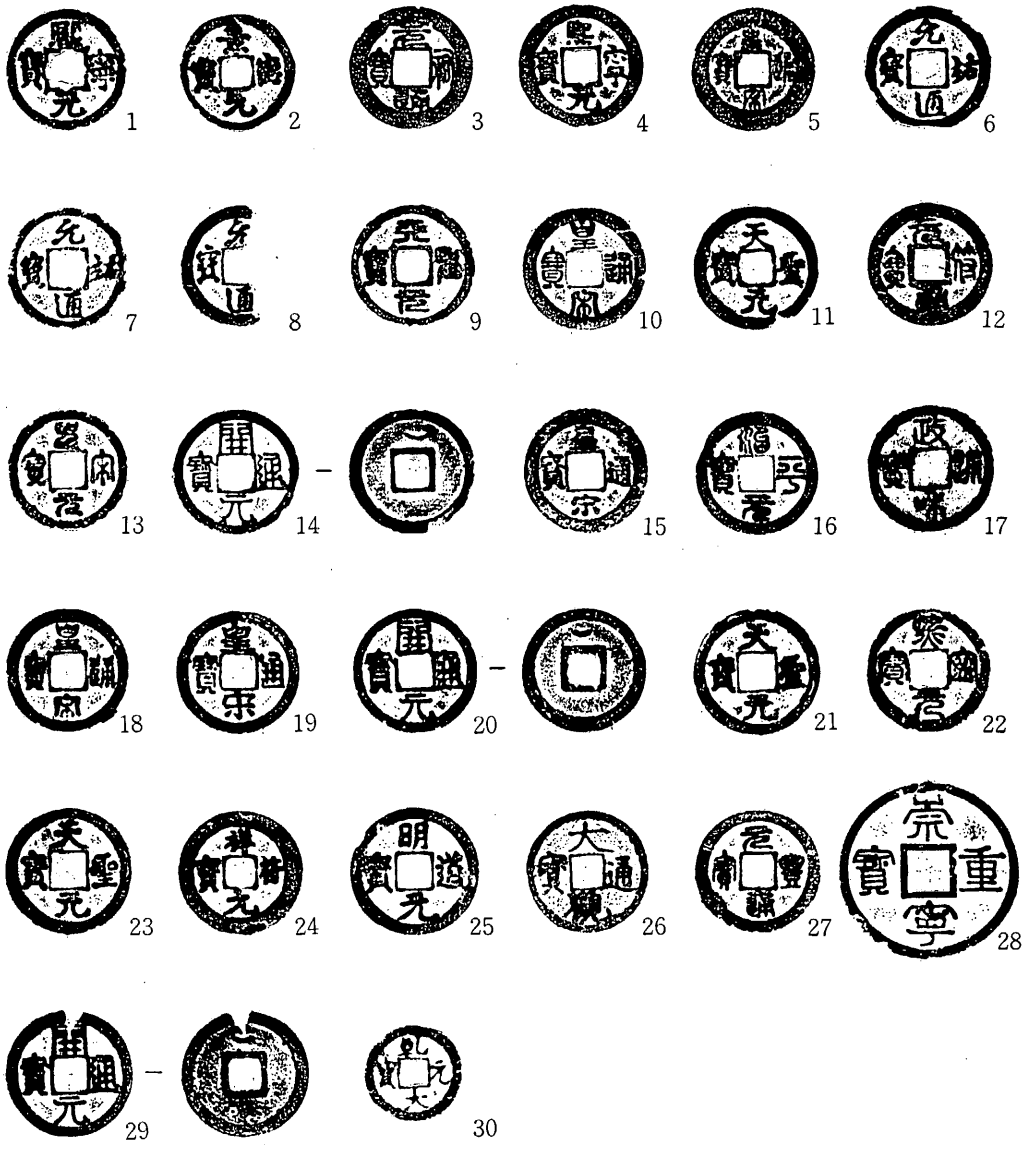
38図 金 属 製 品 実 測 図

断面かまぼこ形をなすが裏面は平坦ではない。先端部は薄く扁平になり長さ1.1cm，径0.4cmのやや内湾する柱状の鉤を挿入している。体部には中位に2条の沈線を配し草花を思わせる文様を彫り込んでいる。ＳＫ338出土。なおこの土坑からは他に長さ51cm，断面方形をなす柱状鉄片や鉄鍋片が出土している。**2**は赤銅色を呈する銅で，いわゆる「あかがね」である。長さ4.6cm，幅1.5cm，厚さ0.45cmを測り薄板状をなす。重さは22gである。図示した上面は削りとられたような波状の面をなすが，裏面は平坦面をつくる。ＳＤ301溝底面出土。**3**・**4**はともにＳＫ318土坑からの出土で，他に柱状の鉄片も出土している。3は鶏頭状の鈕を有する銅製品で，全長4.5cmを測る。鶏頭部は高さ1.2cm，幅1.8cm，厚さ6.5mmで径4mmの孔を有する。胴部は径3.6cm，厚さ2.45mmで，径5mmの円形孔を中心に放射状に16区画に分けて単弁の菊花紋をつくり出している。放射状に延びた線は等角度をなさず乱れており，直線状にならない。鋳出後の手書きによる陰刻だと思われる。鈕と胴部の間に横幅2.1cmの肩部をつくり，胴部裏面の上端に鈕の上面がつづき，鈕と胴部には一段の段がつく。裏面は特別な形状はなさない。飾金具様のものであろうか。**4**は厚さ0.4mmの薄い銅製薄板製品で，一辺4.7cmの方形をなし，周縁は四稜を形づくっている。中心部は周縁より4mmほど高くなって盛り上がっている。表裏ともに緑青をふいているが，孔などの加工などは見られない。用途不明。**5**・**6**は鉄製鏃で，5は現存長3.3cmの小片であるが上端が二股に分かれており，いわゆる「雁股式」に属する形式のものであろう。茎は断面5mmの方形，先端部は3mmの方形をなす。箆被きは円形をなす。ＳＫ317出土。6は現存長12.4cmで先端部を欠損するが，厚さは1.3mmを測る。棒状部は4mmの長方形・茎は5mmの方形断面をなす。上層ＭＬ～ＭＭ28区落ち込み出土。

その他に金属鋳造に関係ある遺物として鉱滓，とりべ片20余点，鞴羽口数点，土製鋳型片，焼土塊，それに柱状をなすものやＵ字状に曲がる鉄片などの用途不明鉄製品も多数出土している。特に今回は報告できなかったが「水瓶」の鋳型と思われるものも出土していて，当遺跡において金属製品の製造が行なわれていたことが明らかとなった。

14. 銅　　銭　（39図，図版27の1）

第3次の調査では判読不明のもの1枚を含めて16種30枚の銅銭が出土している。最も多く出土しているのは皇宋通宝で5枚，ついで天聖元宝の4枚，熙寧元宝・開元通宝・元祐通宝が各3枚ずつ出土している。北宋銭がほとんど，他に唐銭や皇朝十二銭最後の鋳造になる平安時代の乾元大宝も出土している。またＭＩ32区の4層からは8枚「さし」の状態で発見されておりこれには唐の開元通宝（621年）から北宋の政和通宝（1111年）までのものが含まれていて，年代幅をもつ銭貨が流通していたことがわかる。層位的には上下関係の出土はみられるが，年代的にはばらつきがあり下層から出土するものが必ずしも古いとは言い切れない。ただ11世紀



39図 銅 銭 拓 影 (⅔)

から12世紀初期のものに集中していることはある程度の目安すとすることができよう。

8は右の部分を欠損しているが,「祐」,「豊」「符」のいずれかがあてられよう。**14・20・29**の開元通宝は背面穿上に卯月形をした「◡」の鋳印がみられる。

図版番号	銭貨名	外径 水平	外径 垂直	外縁厚さ	出土地点 地区	出土地点 層位	初鋳年	備考
1	熙寧元宝	24.02	4.05	1.75		排土中	宋 神宗 1068	方孔に4カ所切り込みあり
2	景徳元宝	23.12	3.25	1.65	MJ28	3層	宋 真宗 1008	
3	元祐通宝	24.7	24.6	1.15	ML26	3層	宋 哲宗 1086	
4	熙寧元宝	24.8	24.5	1.55	MJ28	3層	宋 神宗 1068	
5	皇宋通宝	24.55	24.65	1.2	ML35	3層	宋 仁宗 1039	銹着
6	元祐通宝	24.7	24.6	1.3	ML35	3層	宋 哲宗 1086	
7	元祐通宝	24.2	24.25	1.25	ML36	3層	宋 哲宗 1086	
8	元□通宝	24.25		1.3	ML35	3層		
9	天聖元宝	24.6	24.25	1.35	ML35	3層	宋 仁宗 1023	
10	皇宋通宝	24.75	24.5	1.35	ML35	3層	宋 仁宗 1039	
11	天聖元宝	24.8	24.6	1.45	MF31	3層	宋 仁宗 1023	
12	元符通宝	24.7	24.95	1.3	ML35	3層	宋 哲宗 1098	
13	聖宋元宝	24.0	24.0	1.3	MM33	3層	宋 徽宗 1101	
14	開元通宝	25.51	25.1	1.35	MM32	3層	唐 高祖 621	背面上方に仰月「⌣」の鋳印あり
15	皇宋通宝	24.7	24.8	1.3	MJ34	3層	宋 仁宗 1039	
16	治平元宝	24.45	24.7	1.55	MM32	3層	宋 仁宗 1064	
17	政昭通宝	24.7	24.8	1.5	MI32	4層	宋 徽宗 1111	
18	皇宋通宝	24.15	24.3	1.1	MI32	4層	宋 仁宗 1039	
19	皇宋通宝	24.4	24.3	1.45	MI32	4層	宋 仁宗 1039	
20	開元通宝	24.85	24.75	1.5	MI32	4層	唐 高祖 621	背面「⌣」鋳印
21	天聖元宝	25.05	25.1	1.25	MI32	4層	宋 仁宗 1023	8枚銹着
22	熙寧元宝	24.3	24.35	1.1	MI32	4層	宋 神宗 1068	
23	天聖元宝	25.1	25.15	1.4	MI32	4層	宋 仁宗 1023	
24	祥符元宝	24.9	24.95	1.2	MI32	4層	宋 真宗 1008	
25	明道元宝	25.65	25.6	1.35	MM26	落ち込内	宋 仁宗 1032	SD308溝
26	大観通宝	24.3	24.25	1.45	MM26	落ち込内	宋 徽宗 1107	SD308溝
27	元豊通宝	24.75	24.9	1.45	ML29	柱穴	宋 神宗 1078	
28	崇寧重宝	35.8	35.9	2.4	MJ29	長方形坑	宋 徽宗 1106	SK311土坑
29	開元通宝	25.35	25.25	1.45	MJ30	柱穴	唐 高祖 621	背面「⌣」鋳印
30	乾元大宝	19.4	19.5	1.3	MI列	溝内上層	日本朱雀 938	SD305溝

(単位 mm)

25表 銅 銭 計 測 一 覧 表

1の熙寧元宝には方孔の四辺に切り込みが加えられている。

今回の出土銅銭で注目すべきことは，下層ＳＤ306溝内上層から出土した乾元大宝である。平安時代前期以来皇朝十二銭の流通は停滞して貨銭の鋳造も減少し，その質量も鉛が多くなって劣悪軽小となり，鋳造技術も疎漏粗雑となって不完全なものが多くなるが，今回出土の乾元大宝も径1.94cmと小形で穴があいていて粗雑なつくりであり，色調も宋銭などに比して青味がかかっている。貨銭流通停滞の中で造られた乾元大宝が，地方である大宰府へも将来されたことは経済史の立場からも大変興味深いものである。

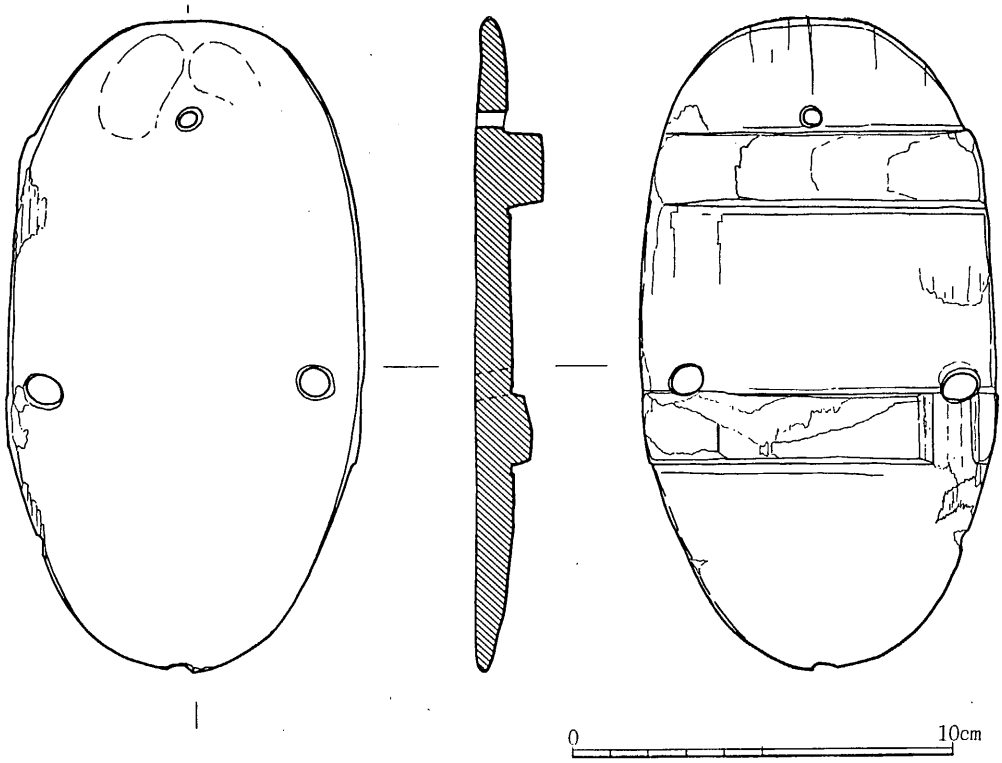
また平安時代の銅銭は初めての出土であり，ＳＤ306溝とともに当遺跡の確実な年代を知る上での一つの上限が決められよう。なお，これら銅銭の中には私鋳銭（鐚銭）も混在しているかもしれないが，現段階では判別できず，今後詳細な検討が必要とされる。

15. 木製品 （40図，図版27の2，28）

3次の調査では木製品を多く包含する井戸・溝などの検出が少なかったため，数点が発見されたに過ぎないが興味ある資料が出土している。ＳＤ302溝から墨書木札と箸などが出土している。**墨書木札**は溝底面に貼りついて発見され，12点出土している。長さには長・短の二種類があり，上端に切り込みを有するものもある。うち1点には「急々如律令」と墨書されておりその上部には「咒咀」も記されている。「物忌札」の一種であるが，第3次調査でも「急々如律令」と土師器壷に墨書したものが出土しており，改めて報告する予定である。なお，静岡県の伊場遺跡[註1]や宮城県の多賀城跡[註2]からも「急々如律令」墨書の木簡が出土している。

下駄がＳＥ302井戸掘り方埋土より出土している。台長17.2cm，台幅9.4cm，台厚1.0cm，高さ1.8cmで小児用の連歯下駄である。長楕円形をなし鼻緒孔は前のものが径0.5cmでほぼ垂直に，後のものが0.8cmで斜めに穿孔されている。前歯・後歯とも歯上端より幅2mm，深1mmの切り込みを2本ずつ有する。歯を台部から造り出す際の鋸引きの鋸目痕であろうか。台部上面先端足指の痕と後歯の磨耗の状態により右足に履かれたものである。

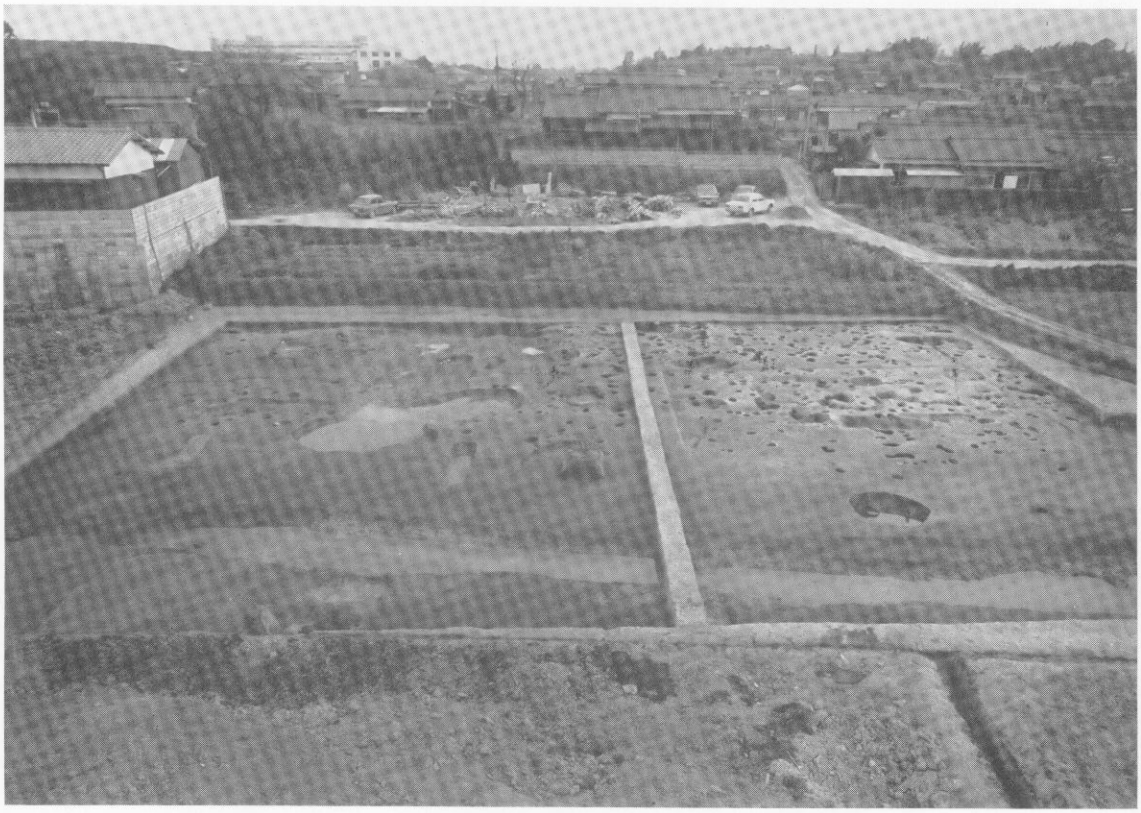
註1．『伊場遺跡出土文字集成（概報）』伊場遺跡調査団　昭和46年
註2．『多賀城跡―昭和49年度発掘調査概報―』宮城県多賀城調査研究所年報1974　昭和50年



40図 下 駄 実 測 図

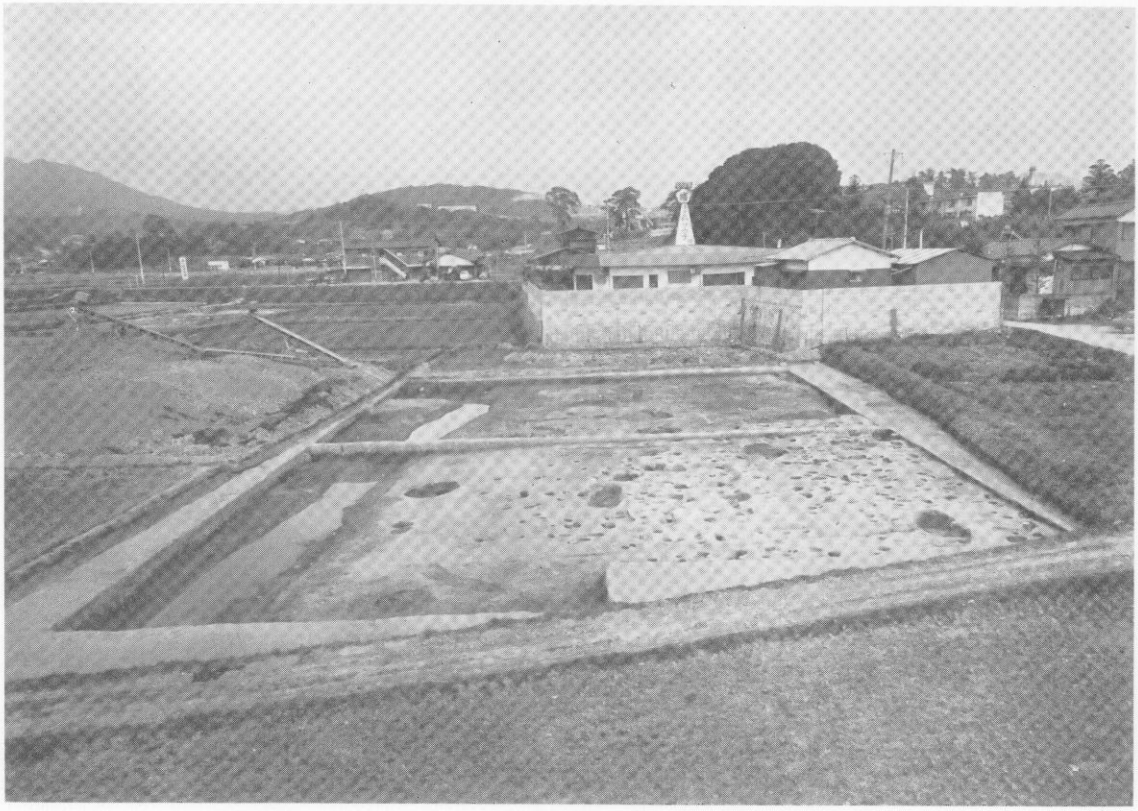
図　版

1．遺 跡 全 景 航 空 写 真

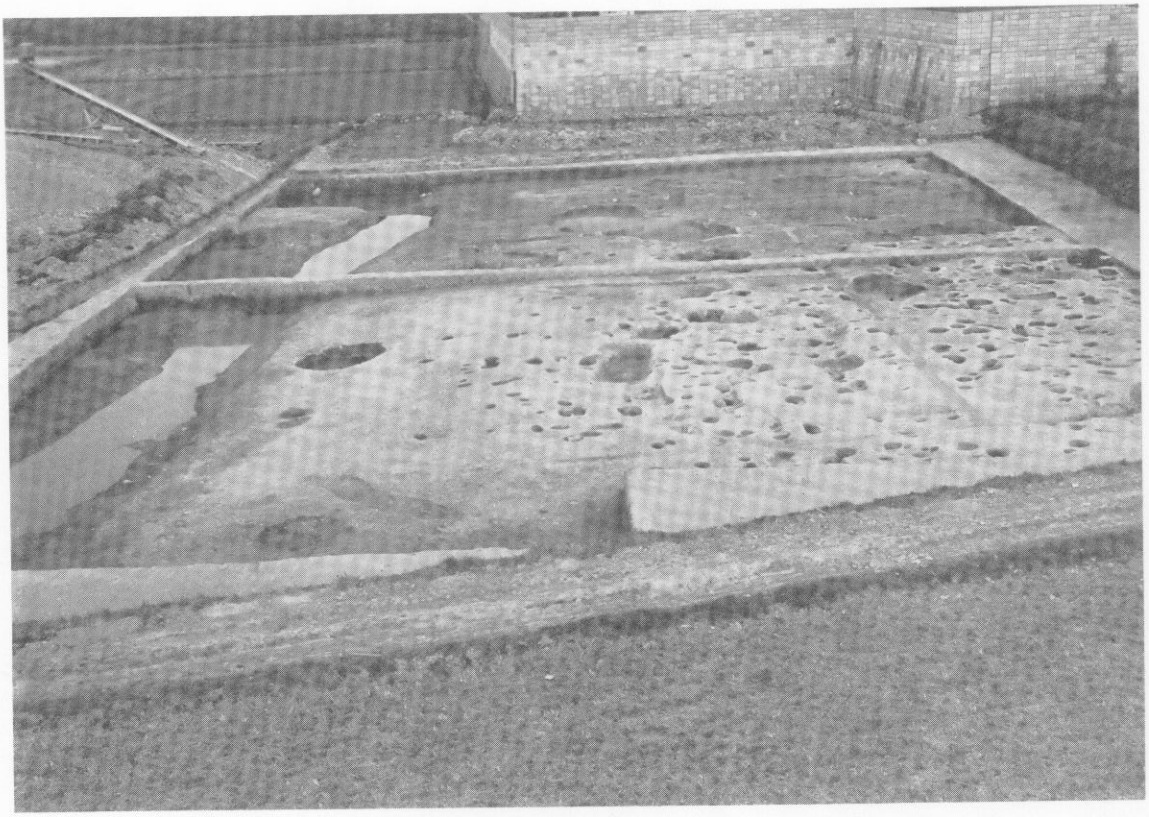


2．遺　跡　全　景（北から）

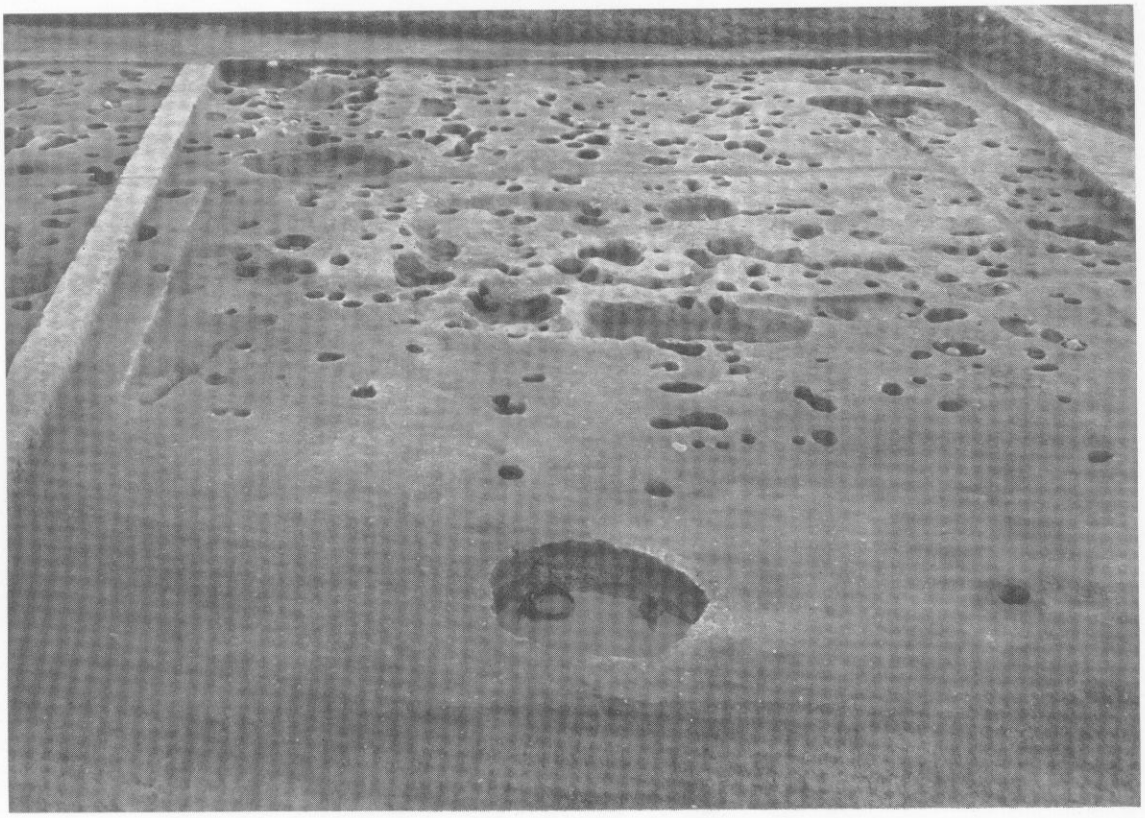
1．上層遺構全景（東から）



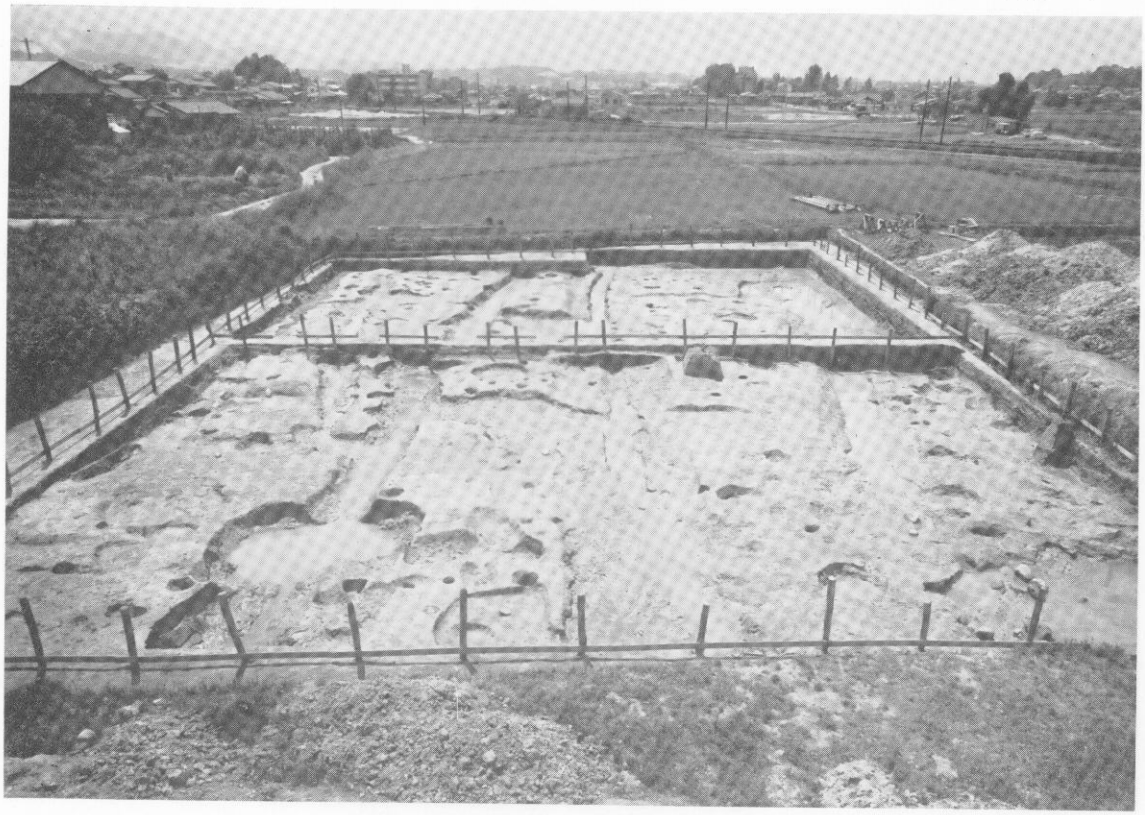
2．上層遺構全景（西から）



1．上層遺構全景（西から）

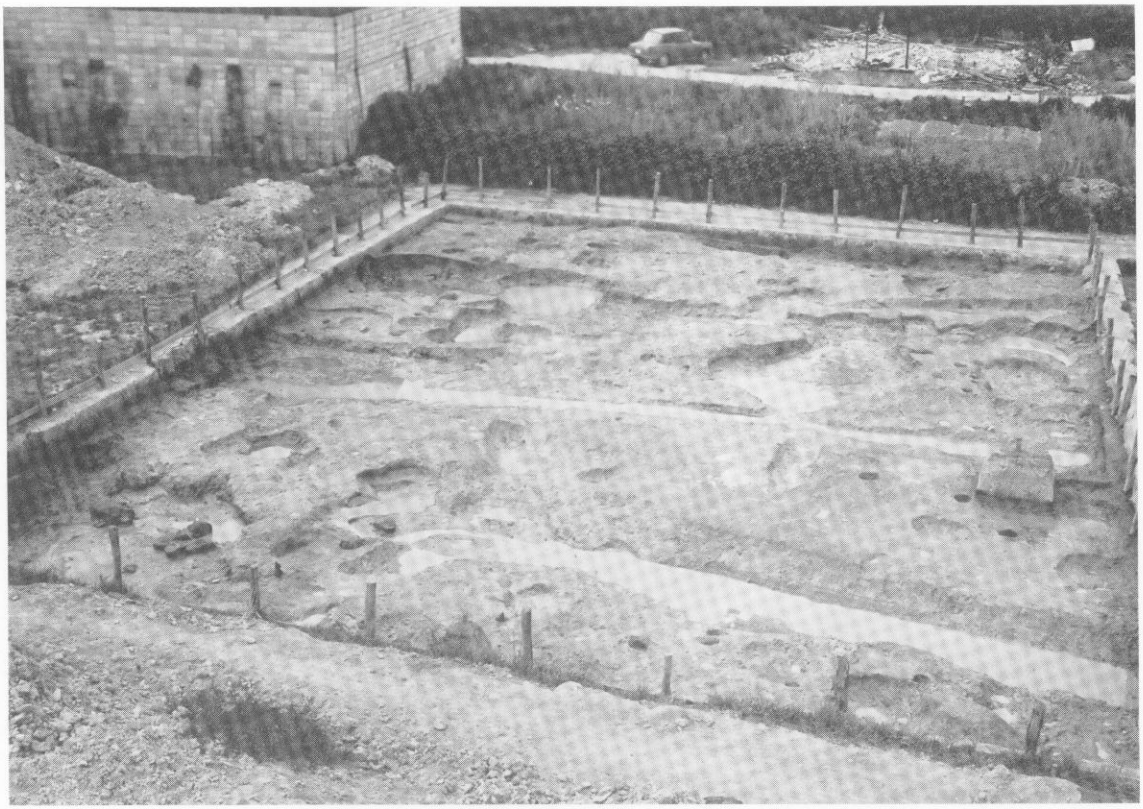


2．西区上層遺構（北から）

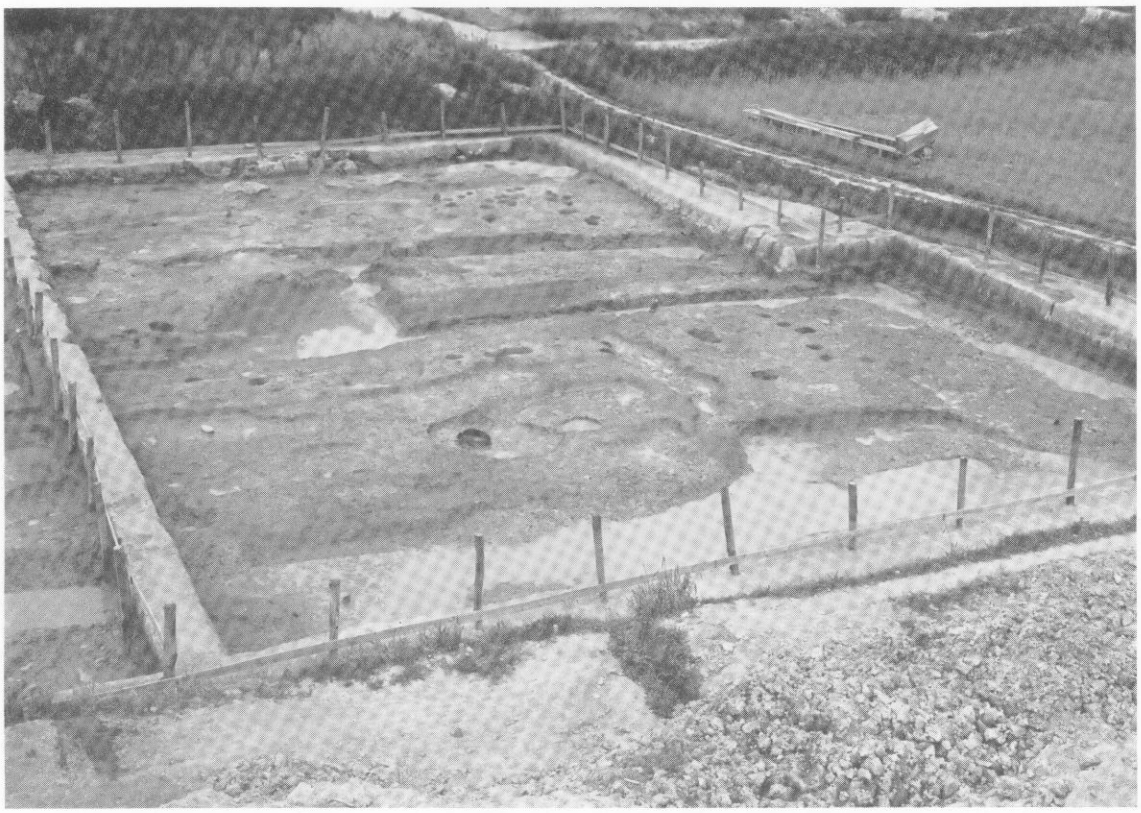


1．下層遺構全景（東から）

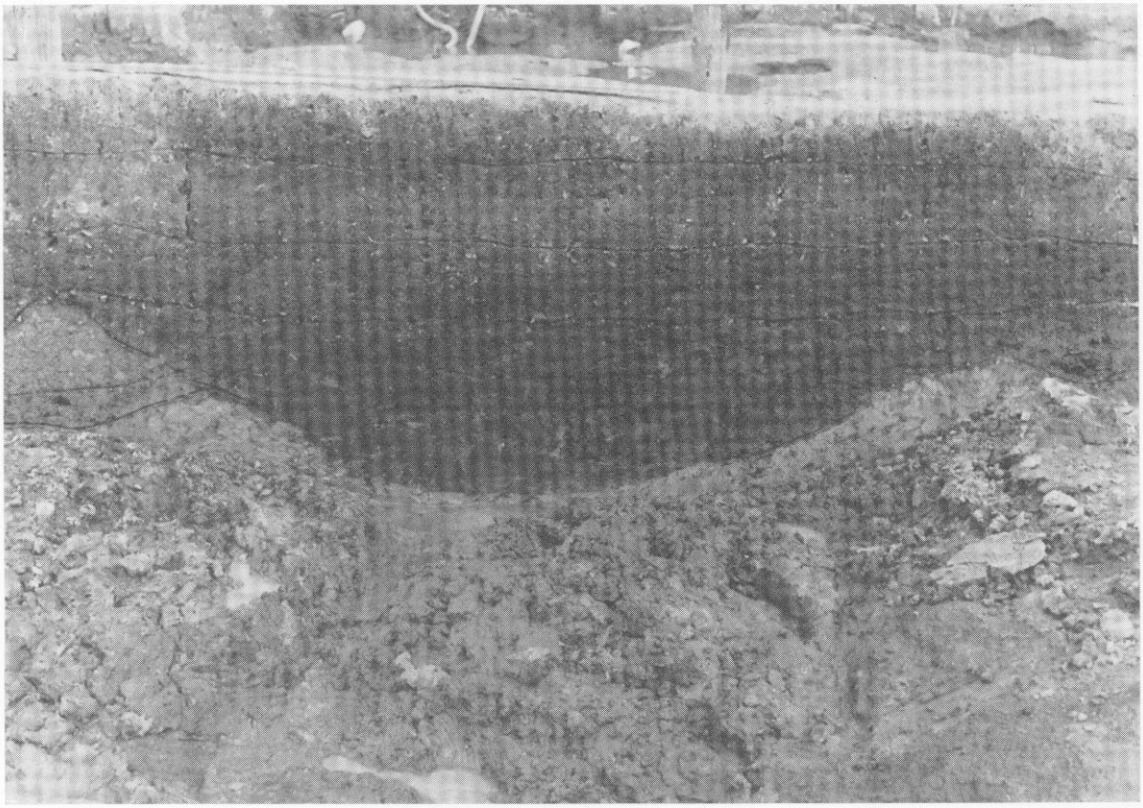
2．下層遺構全景（西から）



1．東区下層遺構全景（北から）

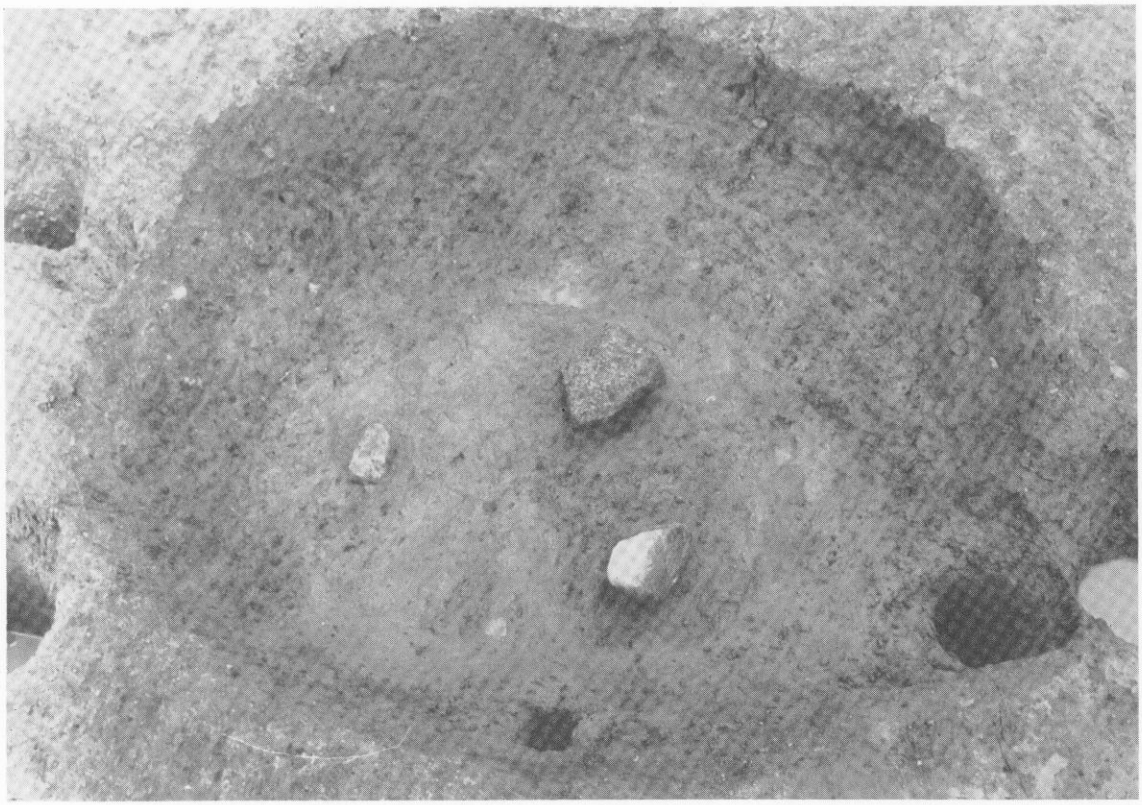


2．西区下層遺構全景（北から）

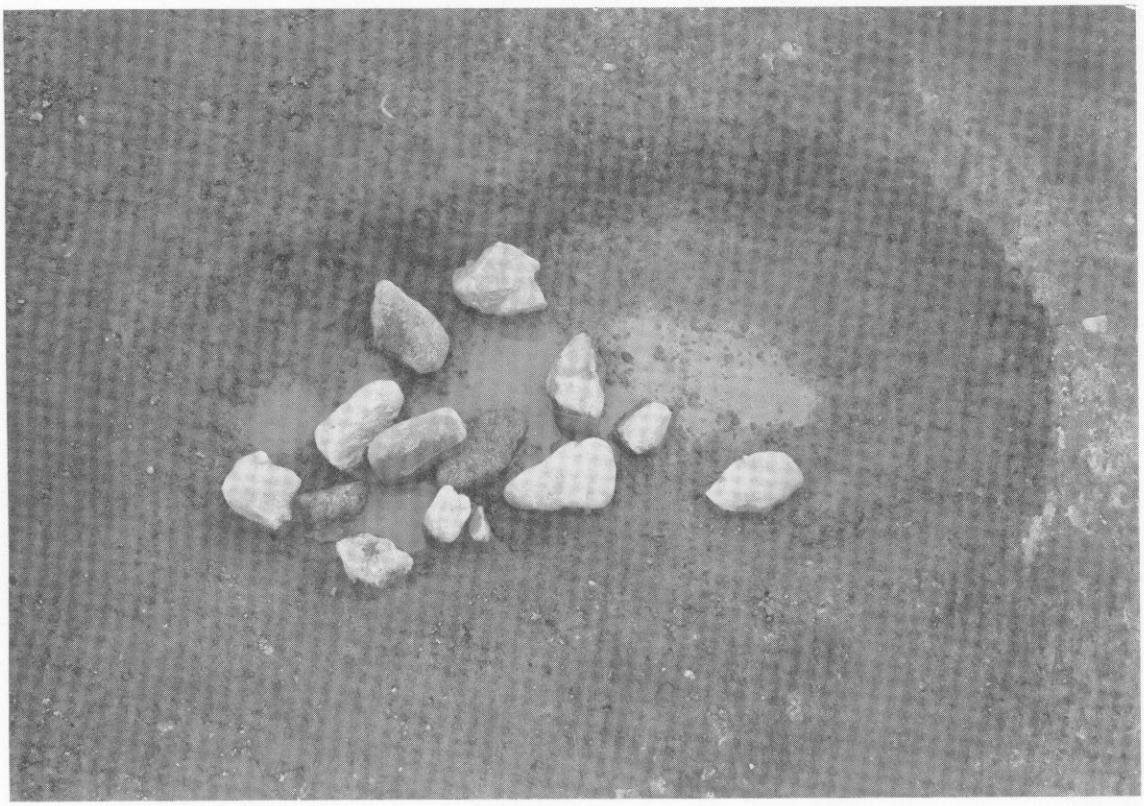


1．ＳＤ301溝土層

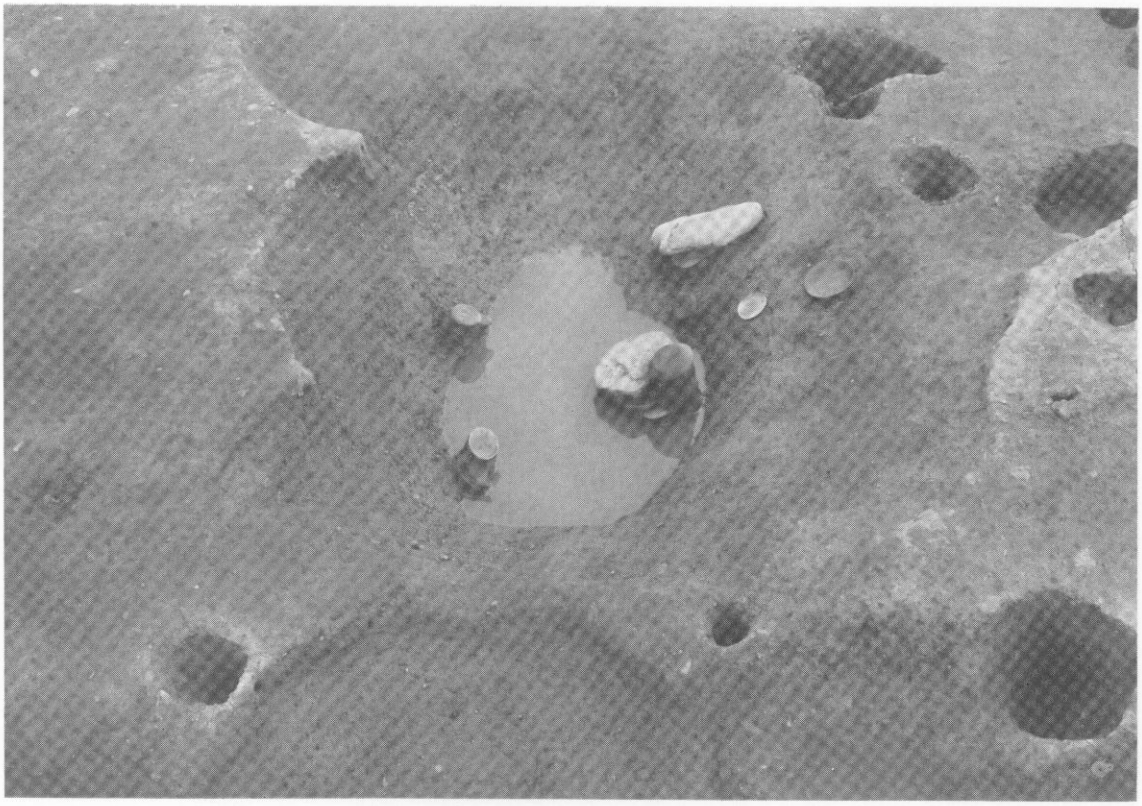
2．ＳＤ302溝（南から）



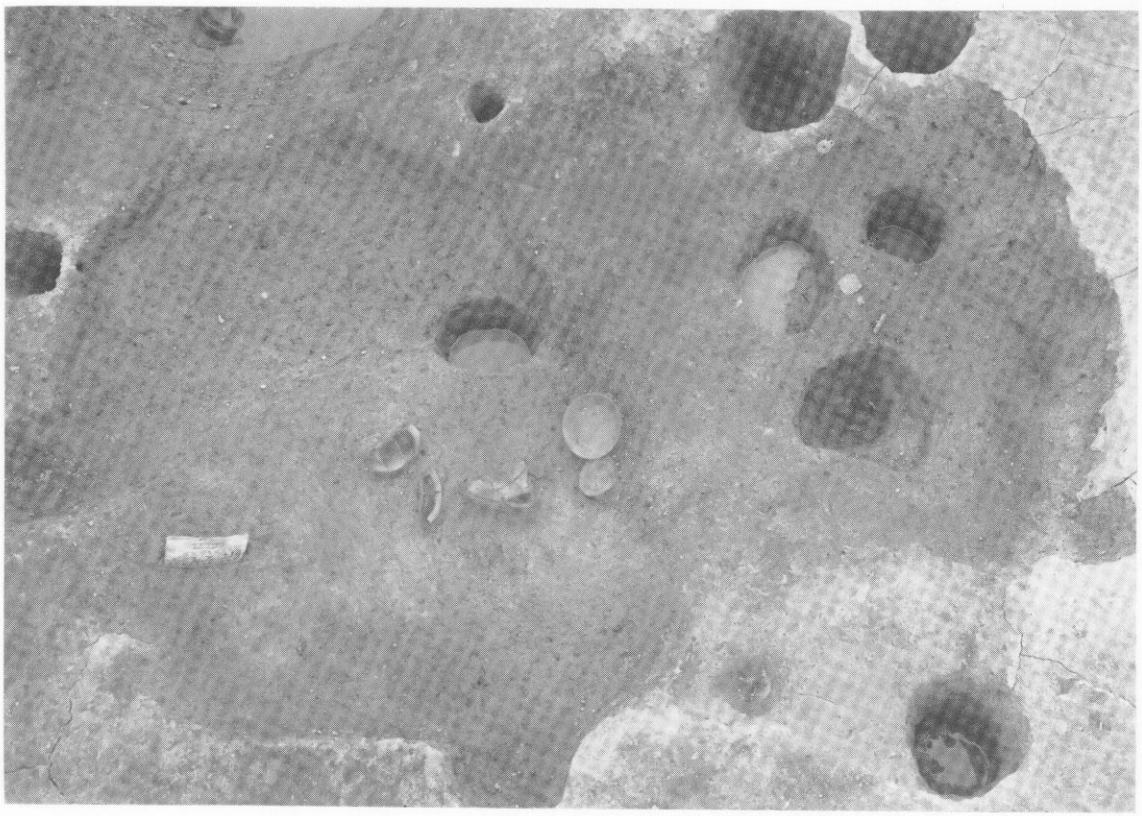
1．ＳＫ310土坑



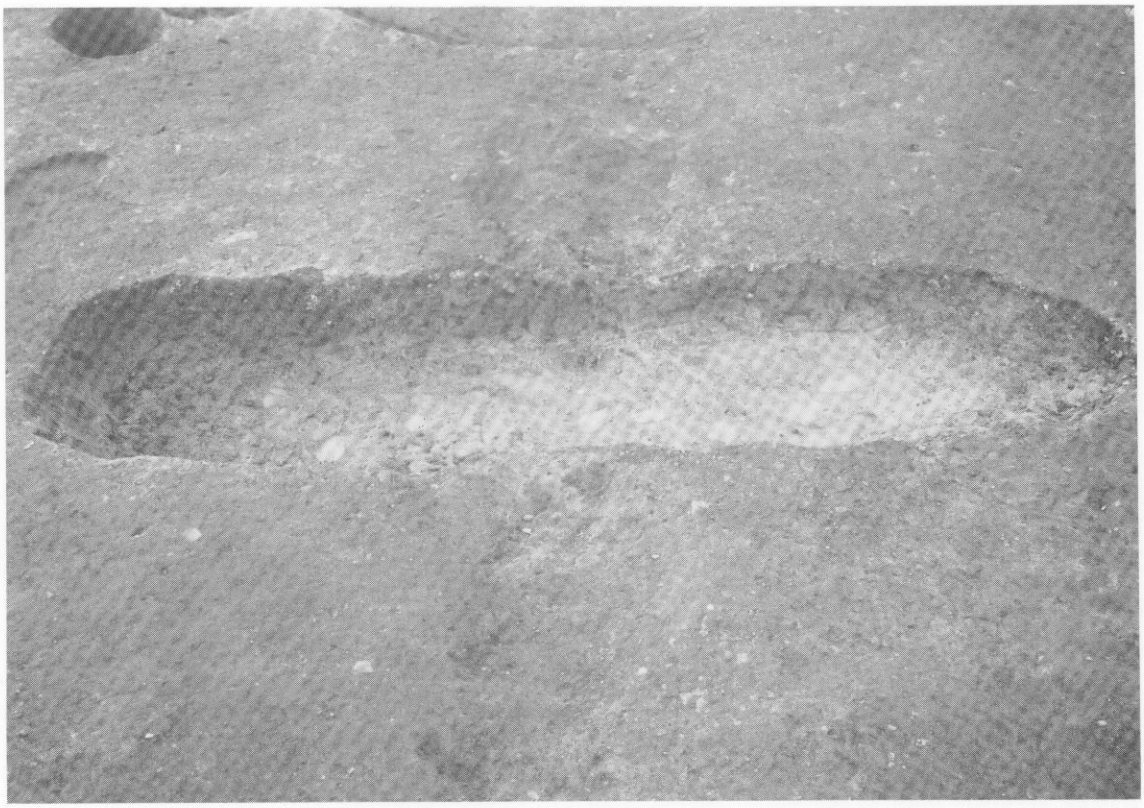
2．ＳＫ325土坑



1．ＳＫ317土坑

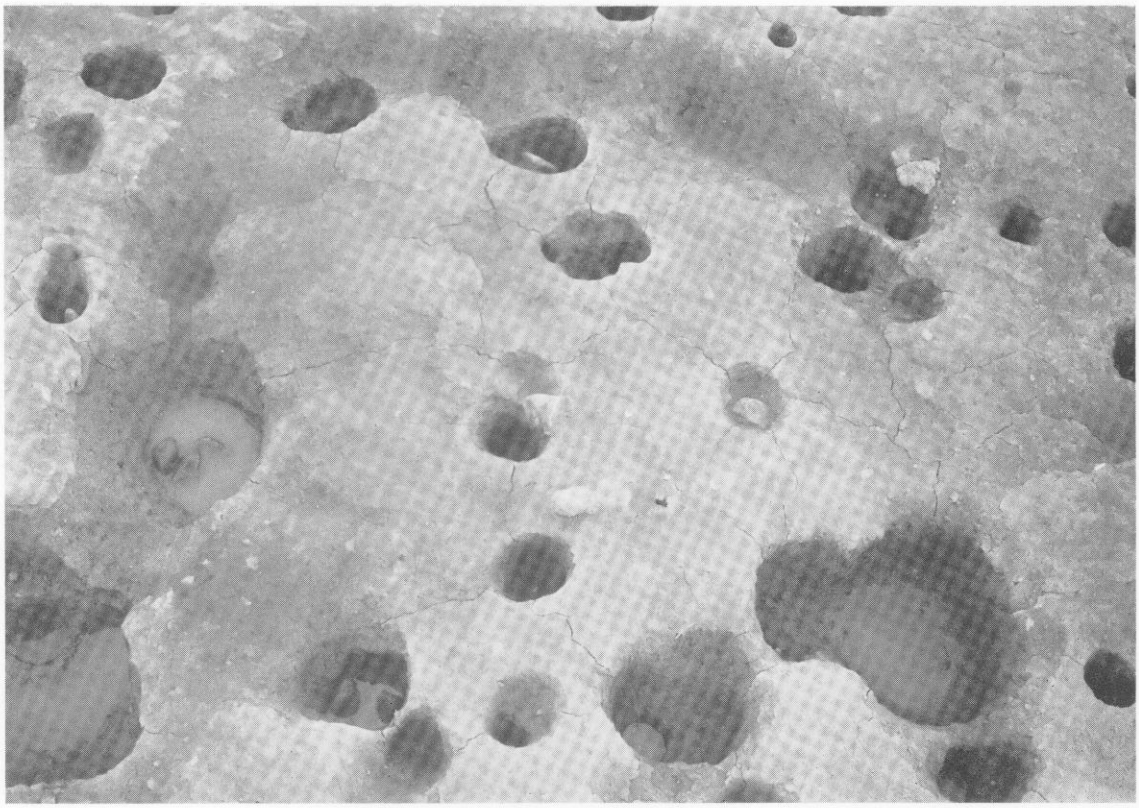


2．ＳＫ318土坑（右）　　ＳＫ319土坑（左）

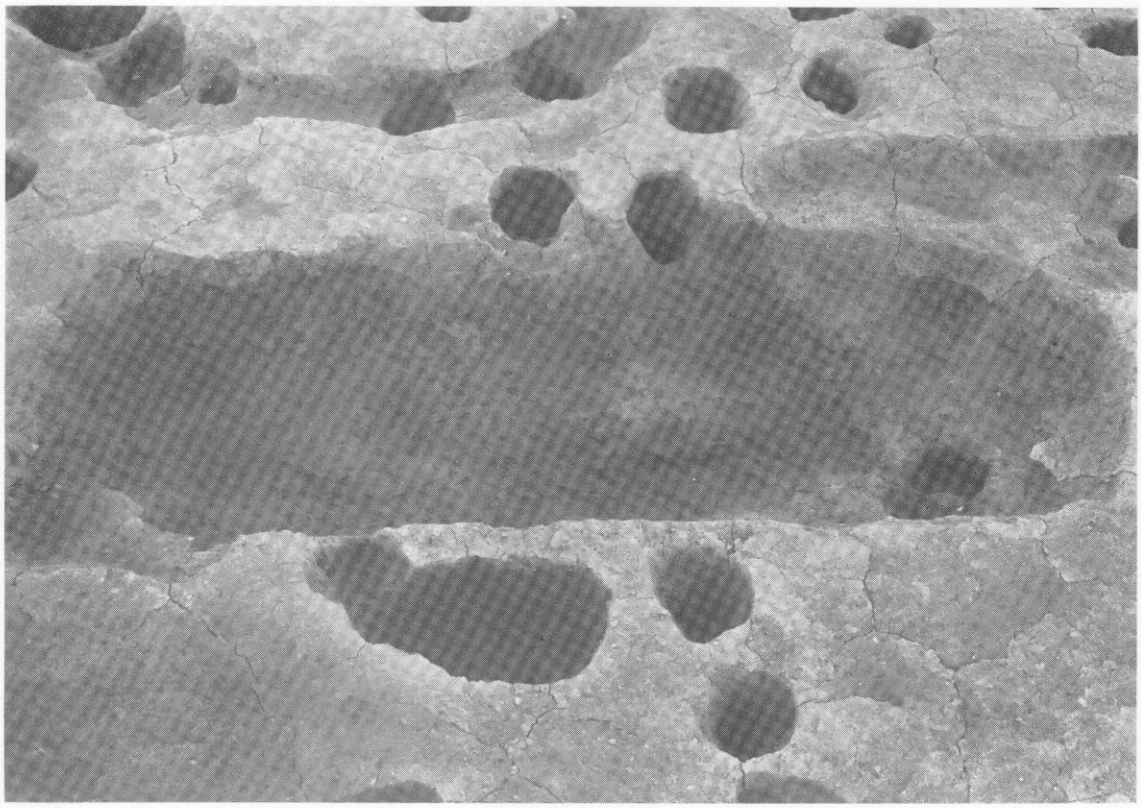


1．ＳＫ323土坑

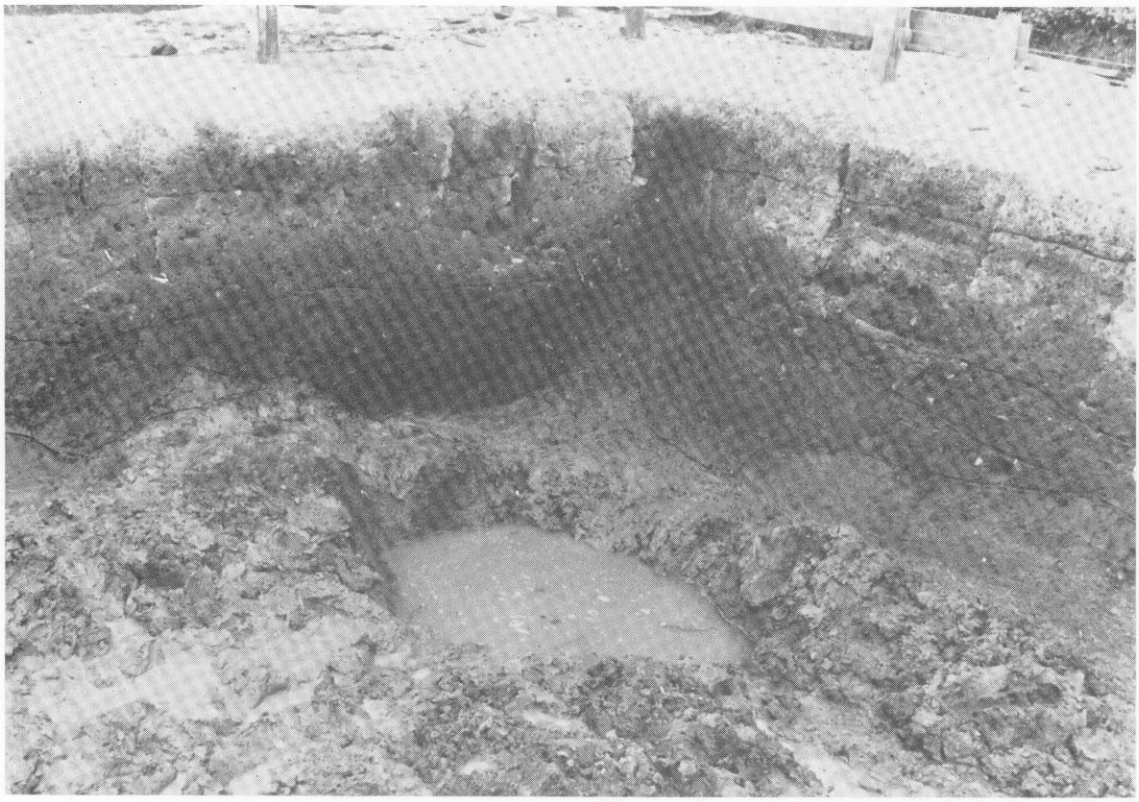
2．ＳＫ333土坑



1．ＭＫ29区土坑

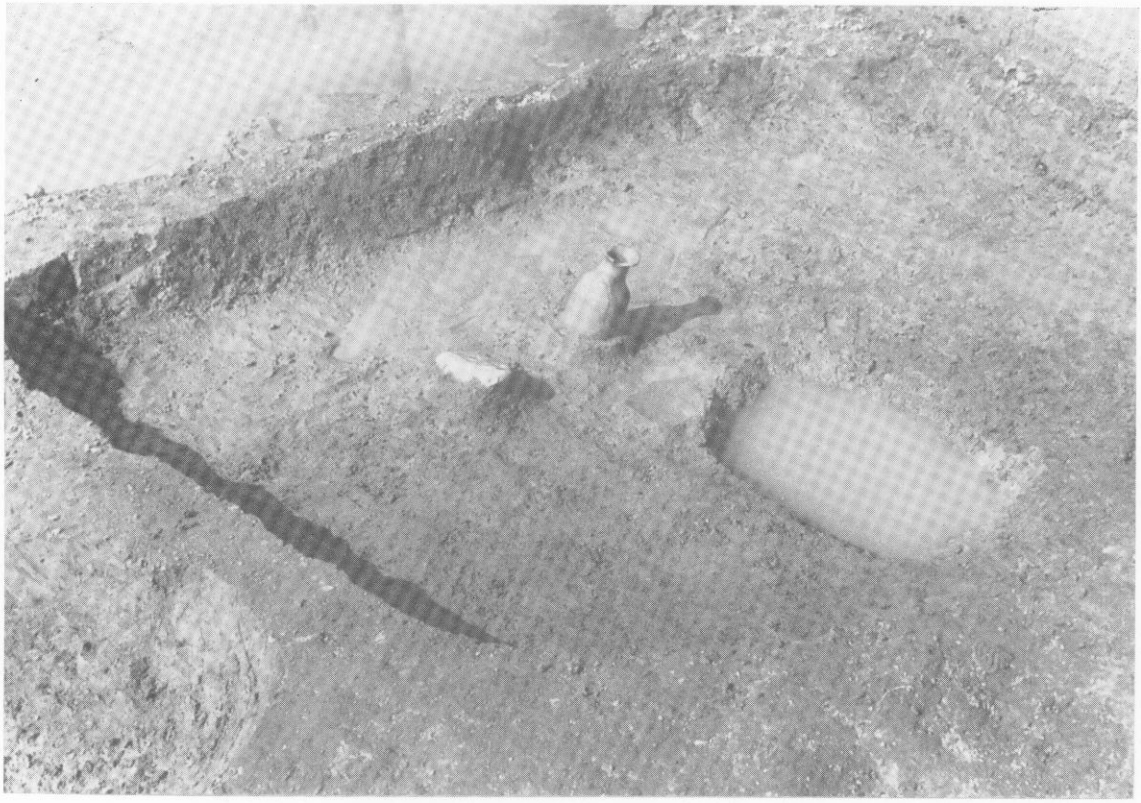


2．ＳＫ309土坑

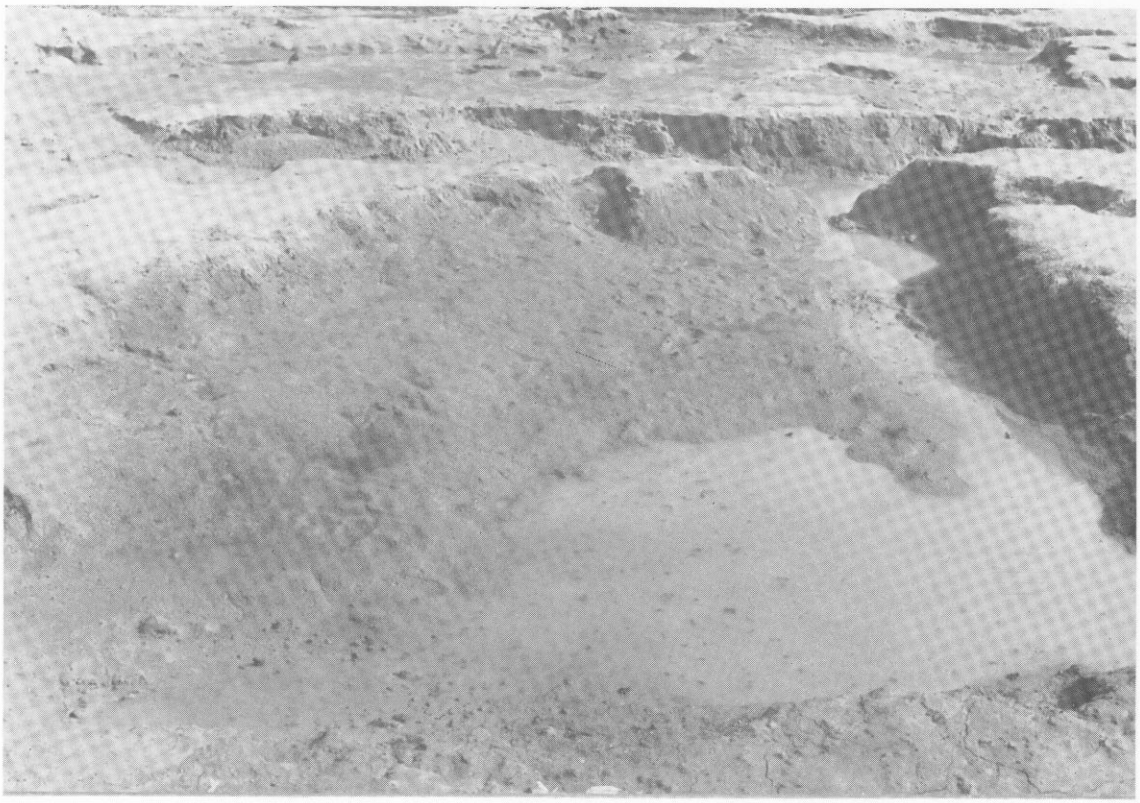


1．ＳＤ301溝（左）・ＳＤ304溝（右）土層

2．ＳＤ305溝（左）　　ＳＤ306溝（右）



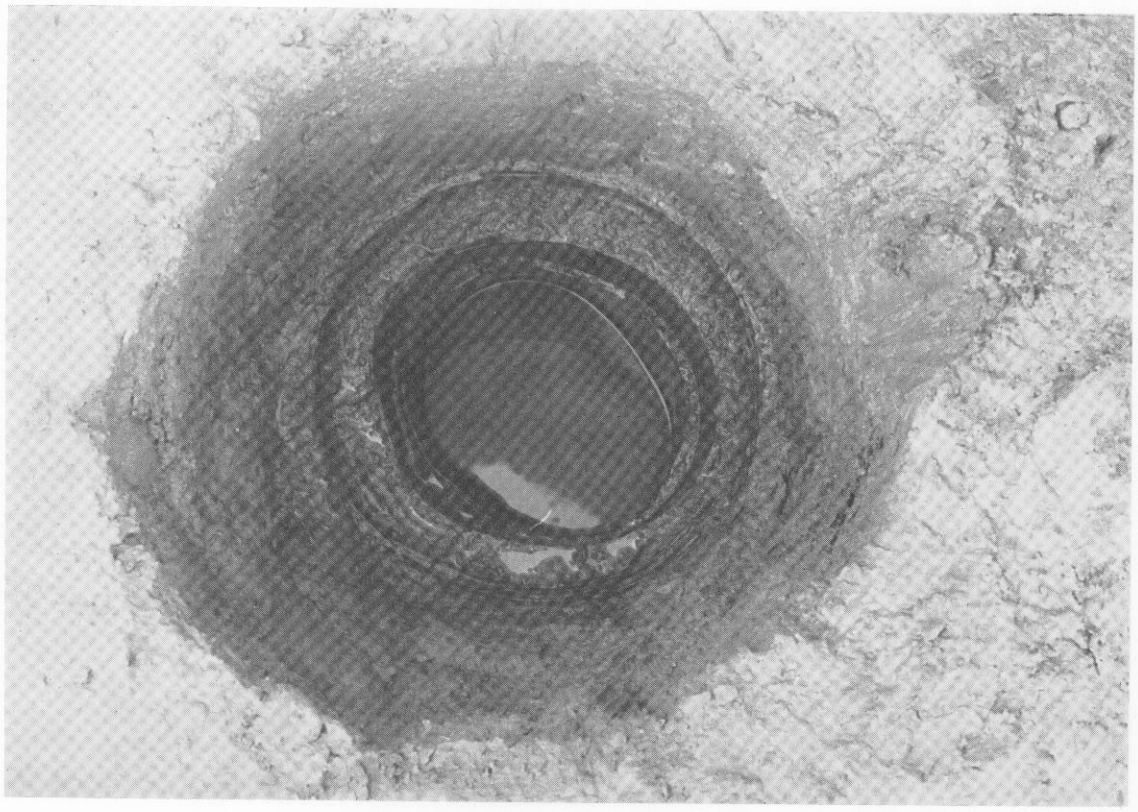
1．ＳＫ345土坑



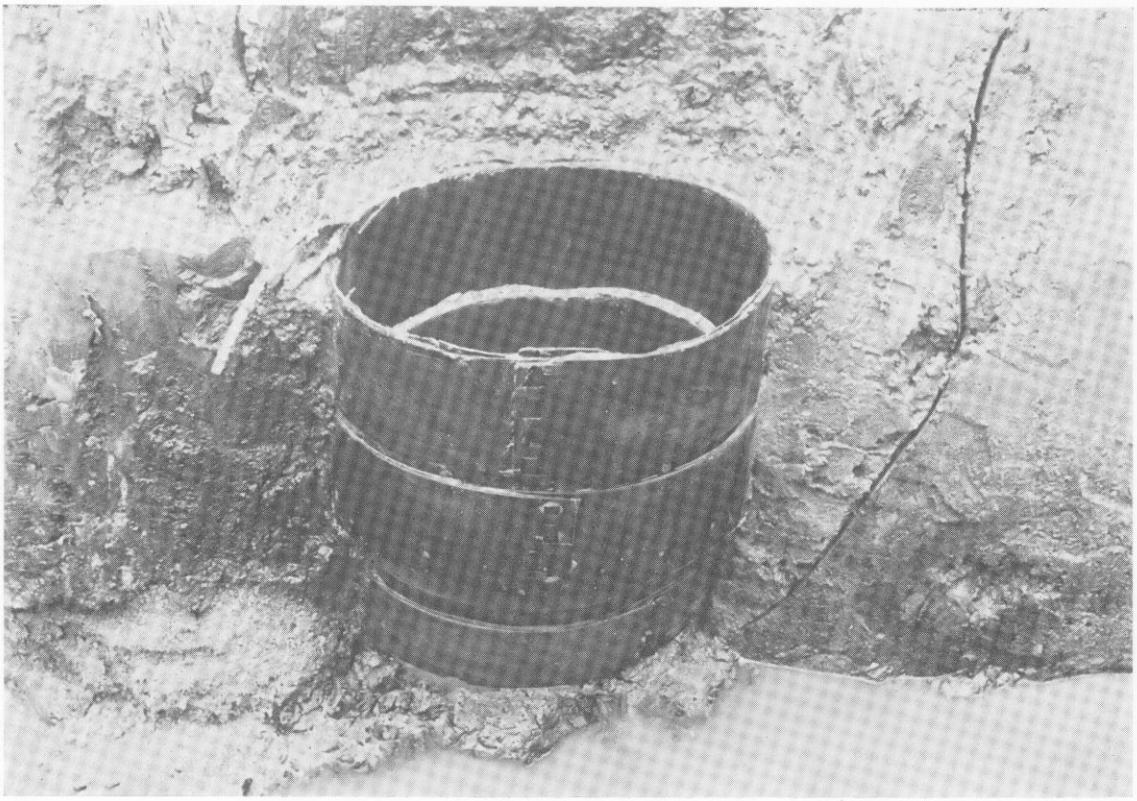
2．ＳＫ339土坑

1．ＳＥ301井戸

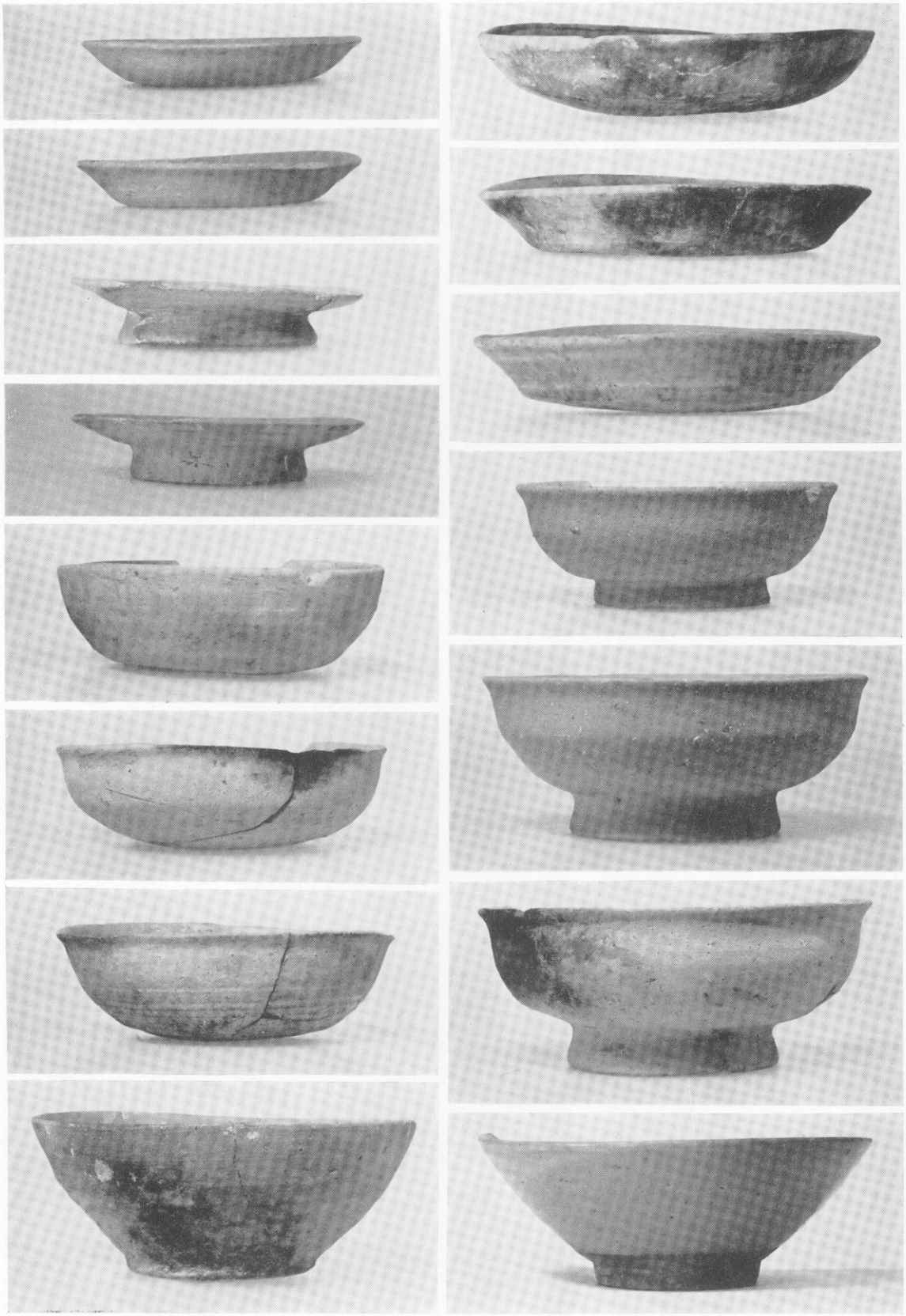
2．ＳＥ301井戸



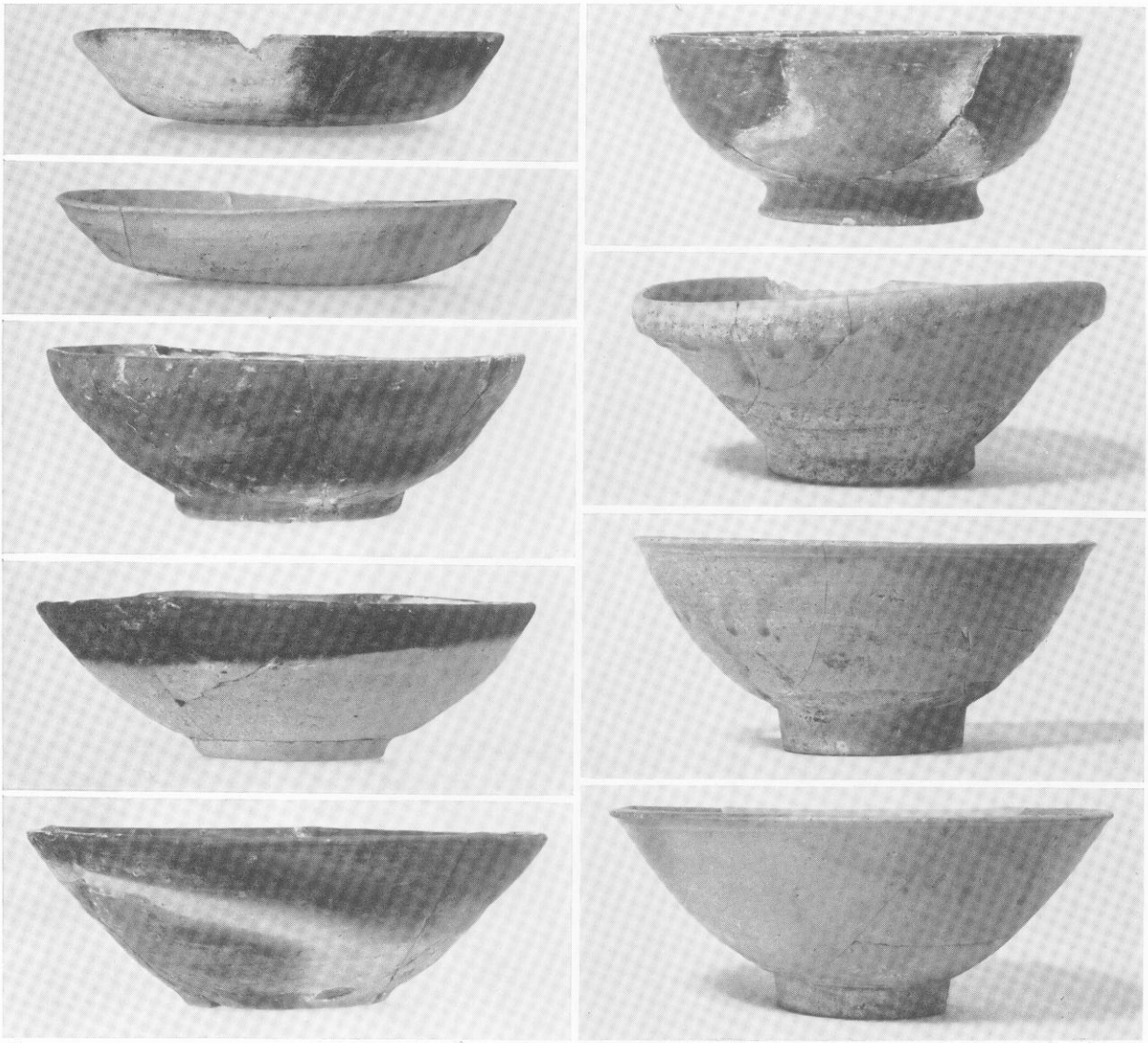
1．ＳＥ303井戸



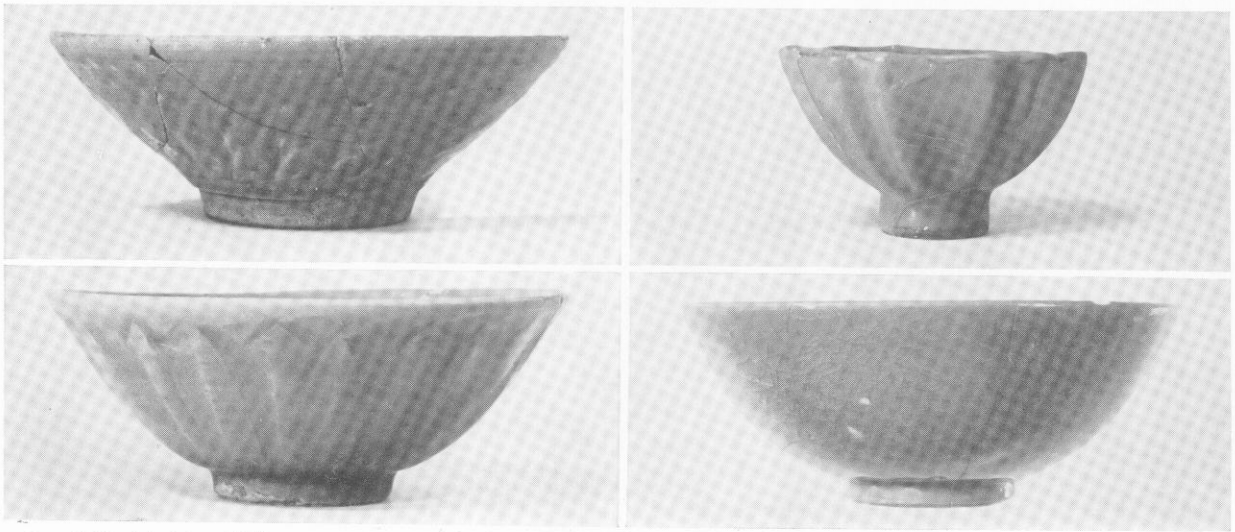
2．ＳＥ303井戸



ＳＫ339土坑出土遺物

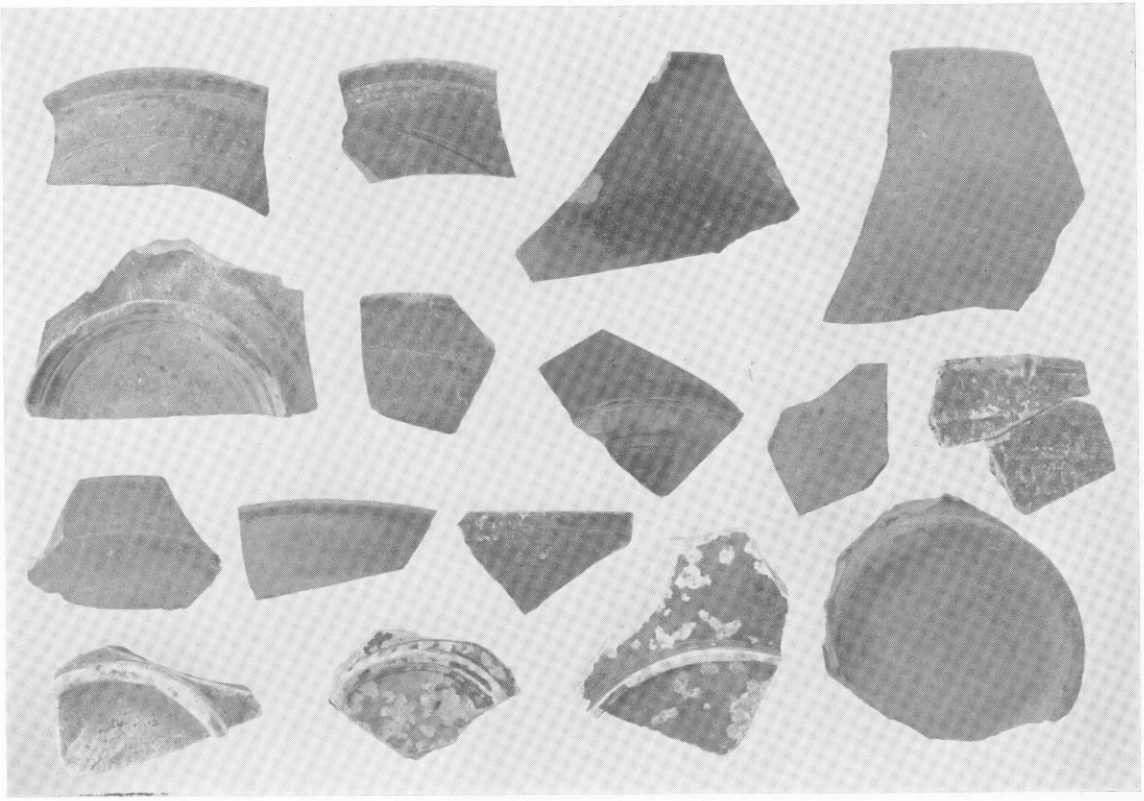


1．ＳＤ305溝出土遺物　　（右最上はＳＫ339土坑出土）

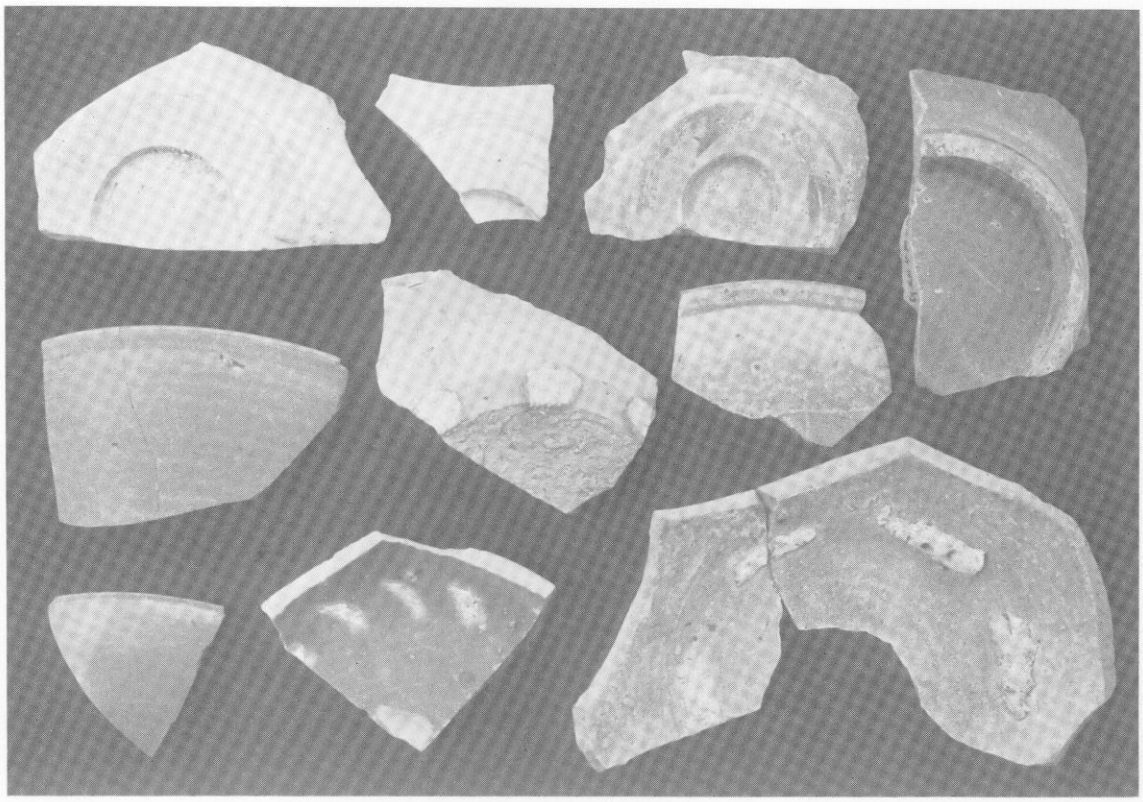


2．白磁（左上），青磁

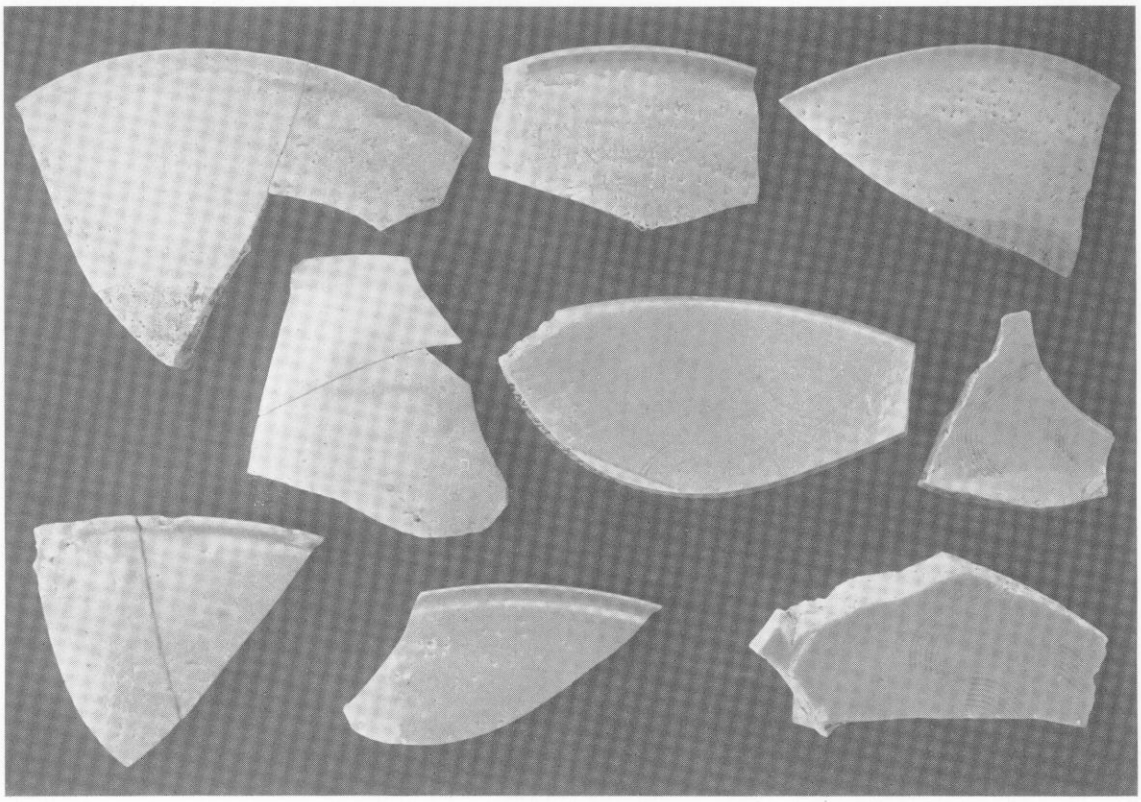
1．彩釉陶器



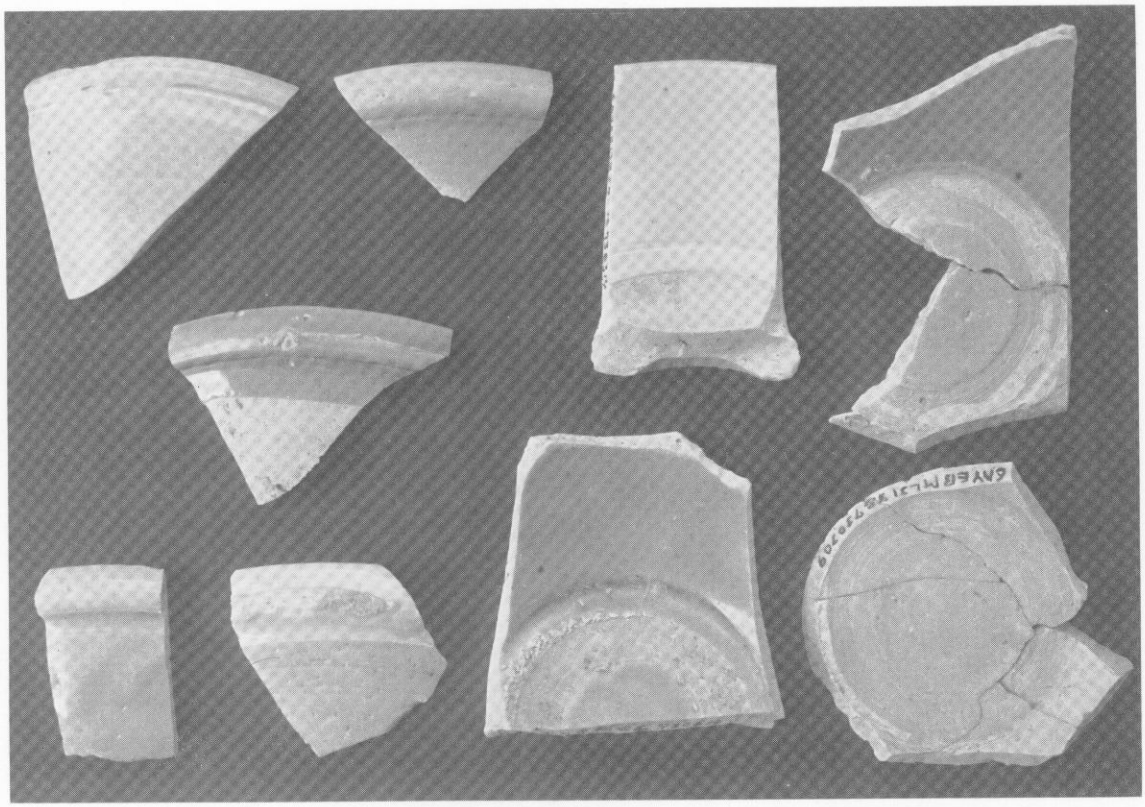
2．彩釉陶器



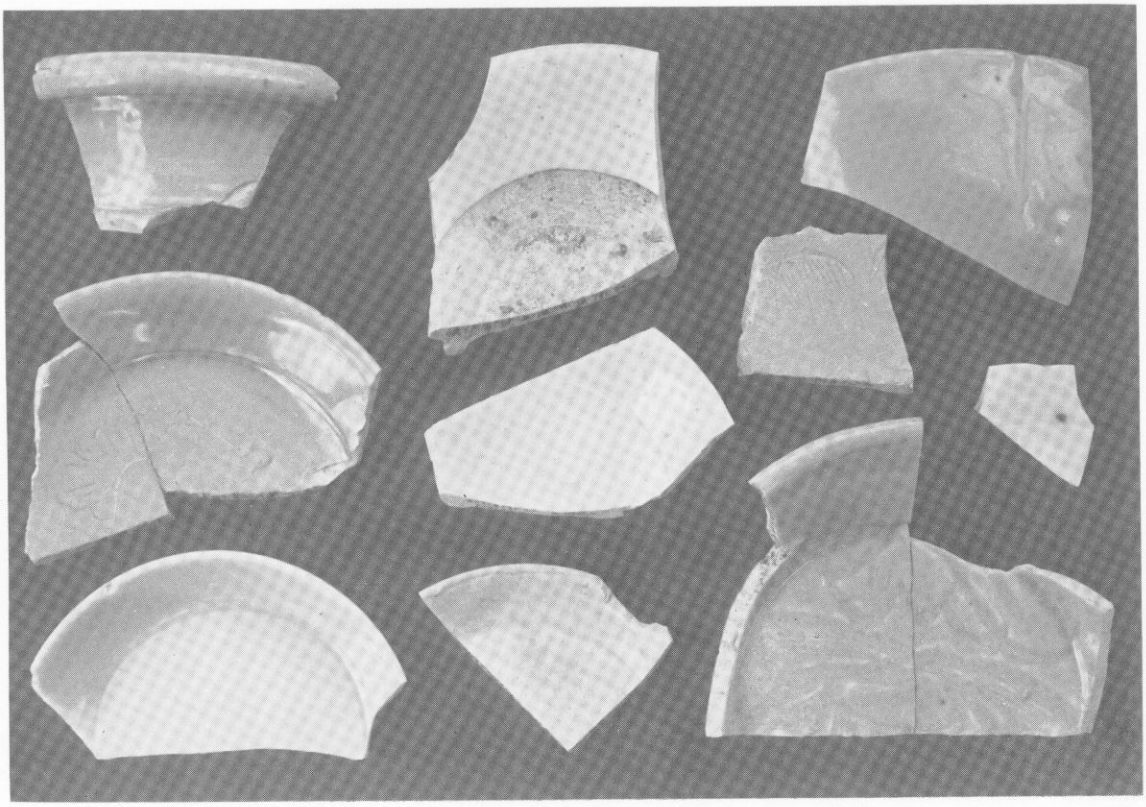
1．白磁　2類，青磁　1類



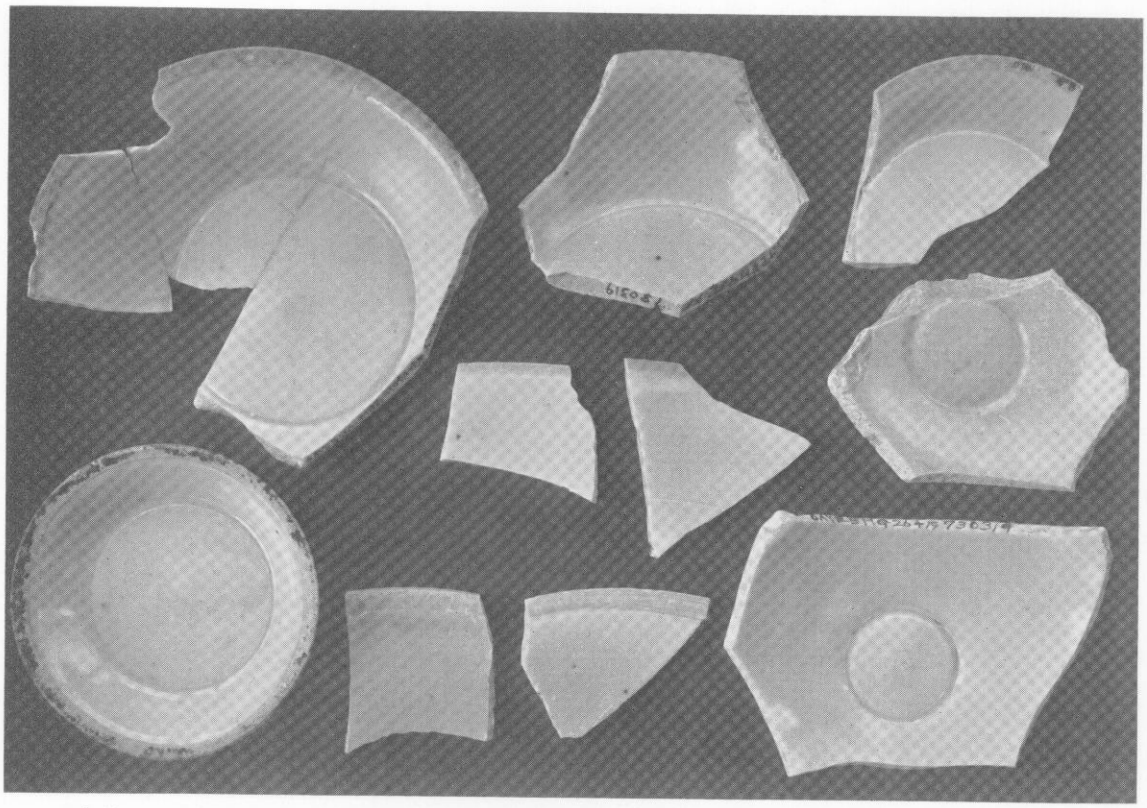
2．白磁　3類



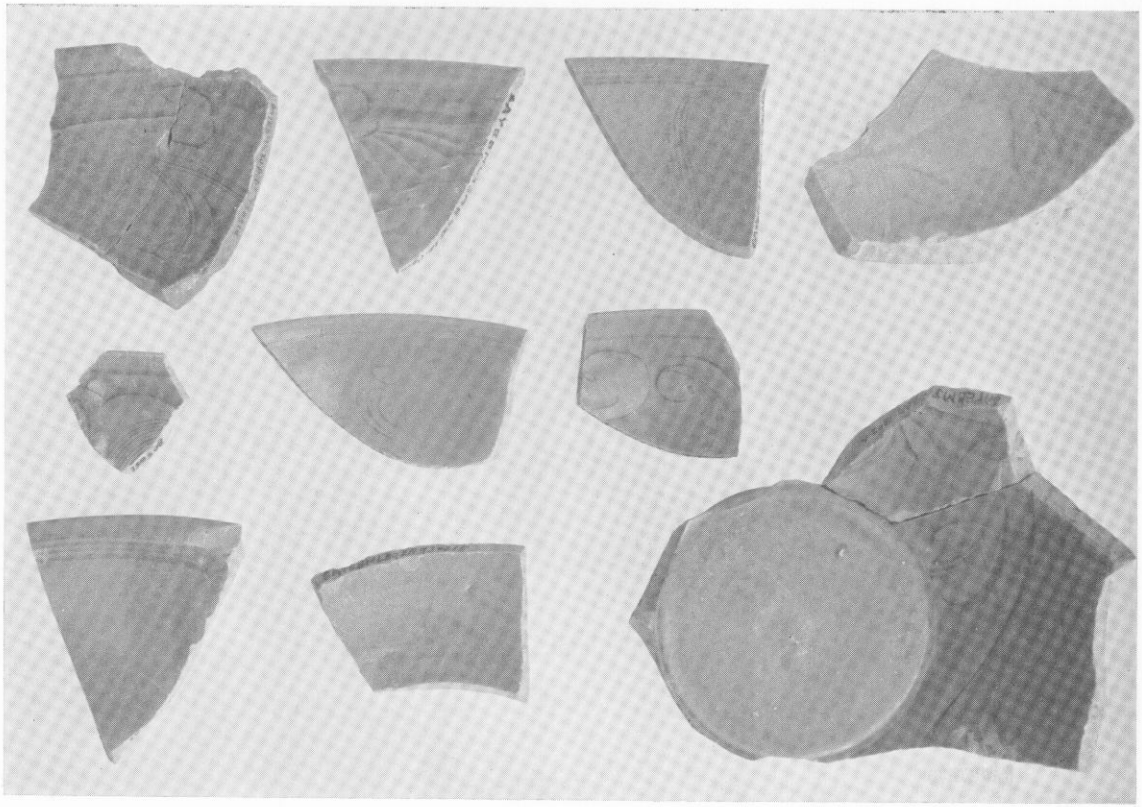
1．白磁　4・5類



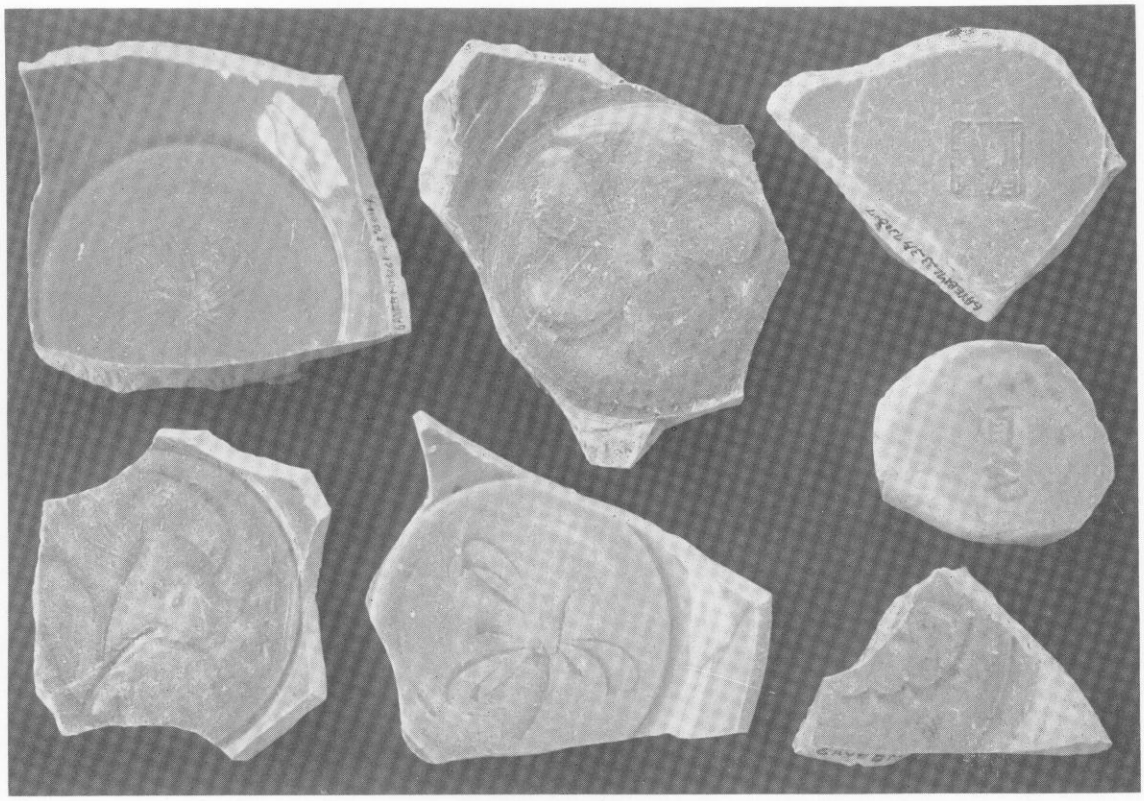
2．白磁



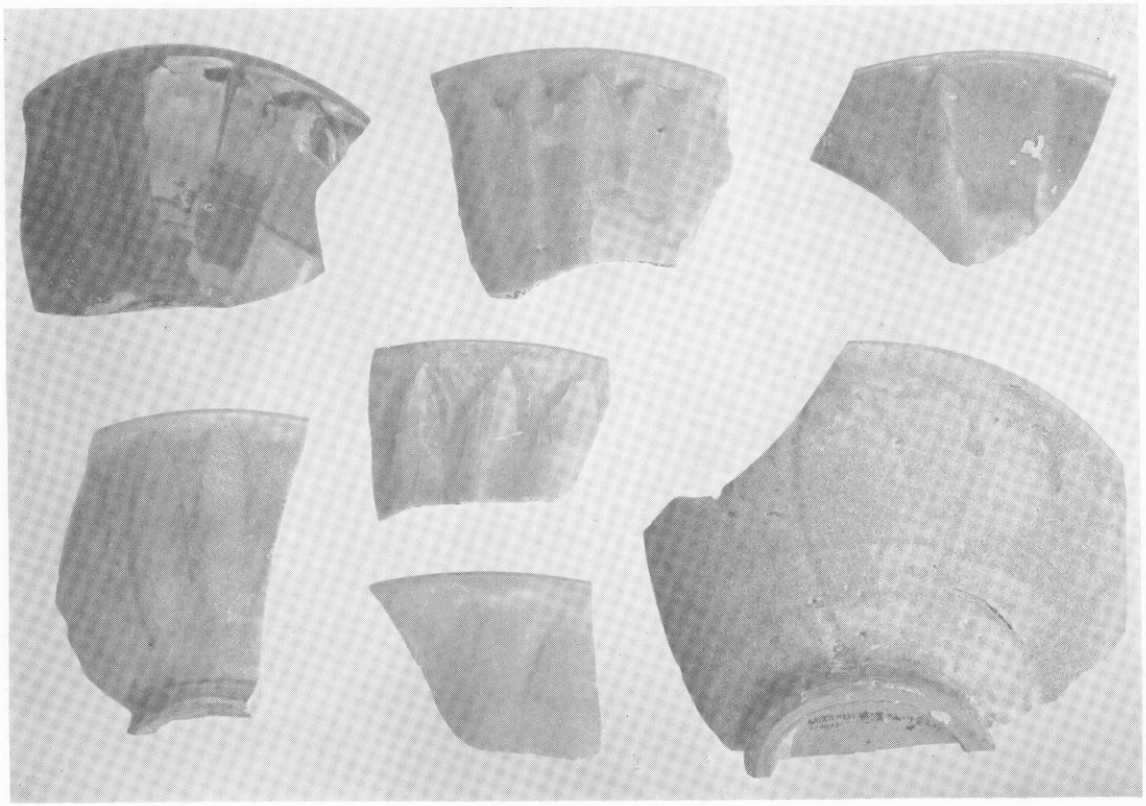
1．白磁　　6類



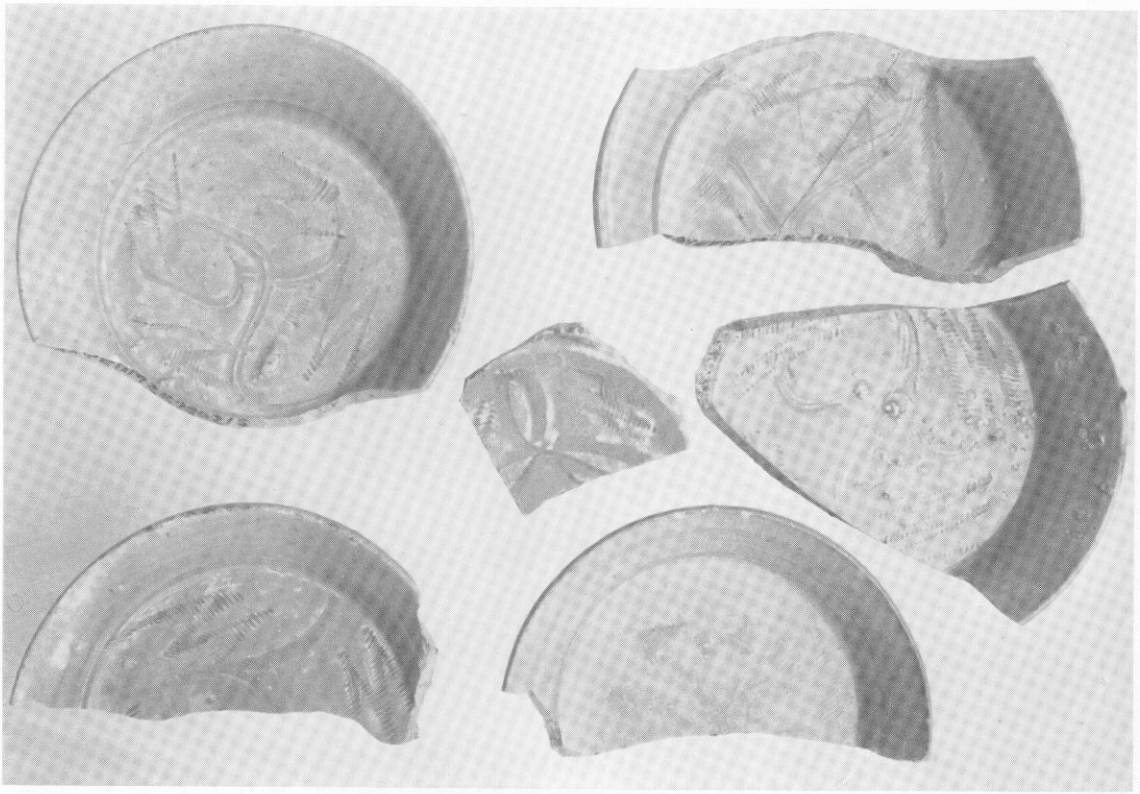
2．青磁　　7類 (1)



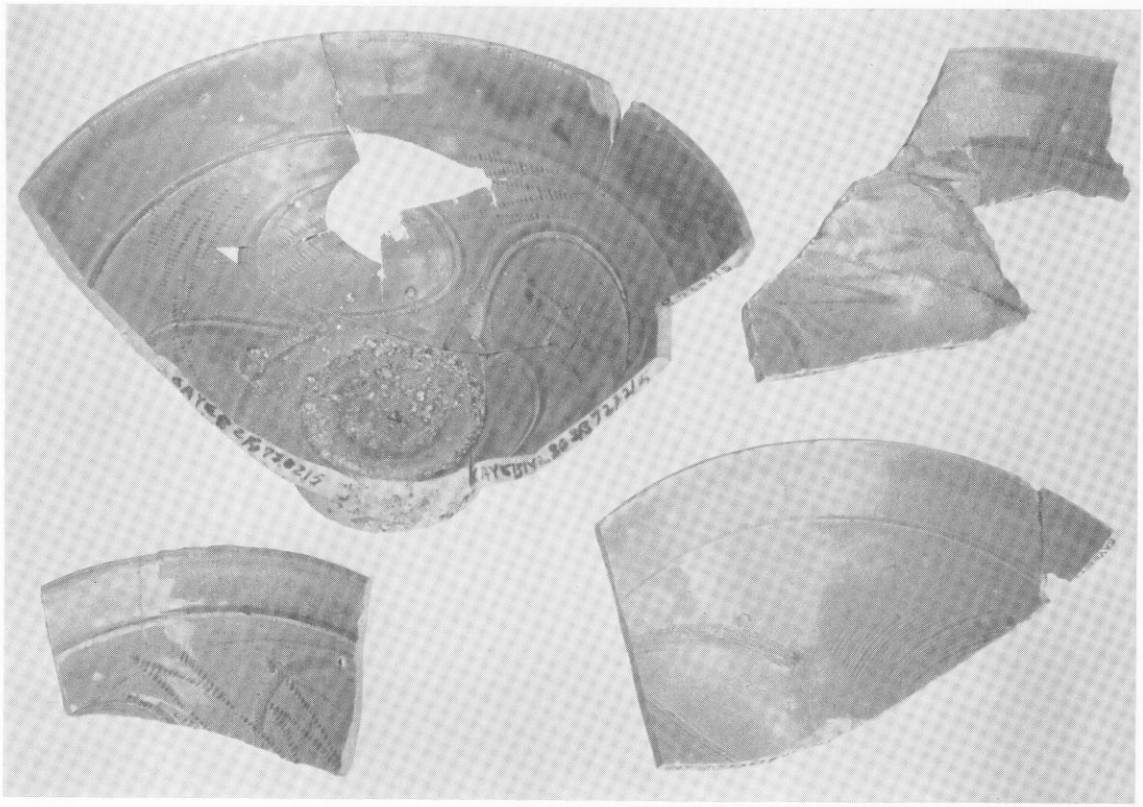
1．青磁　　7類 (2)



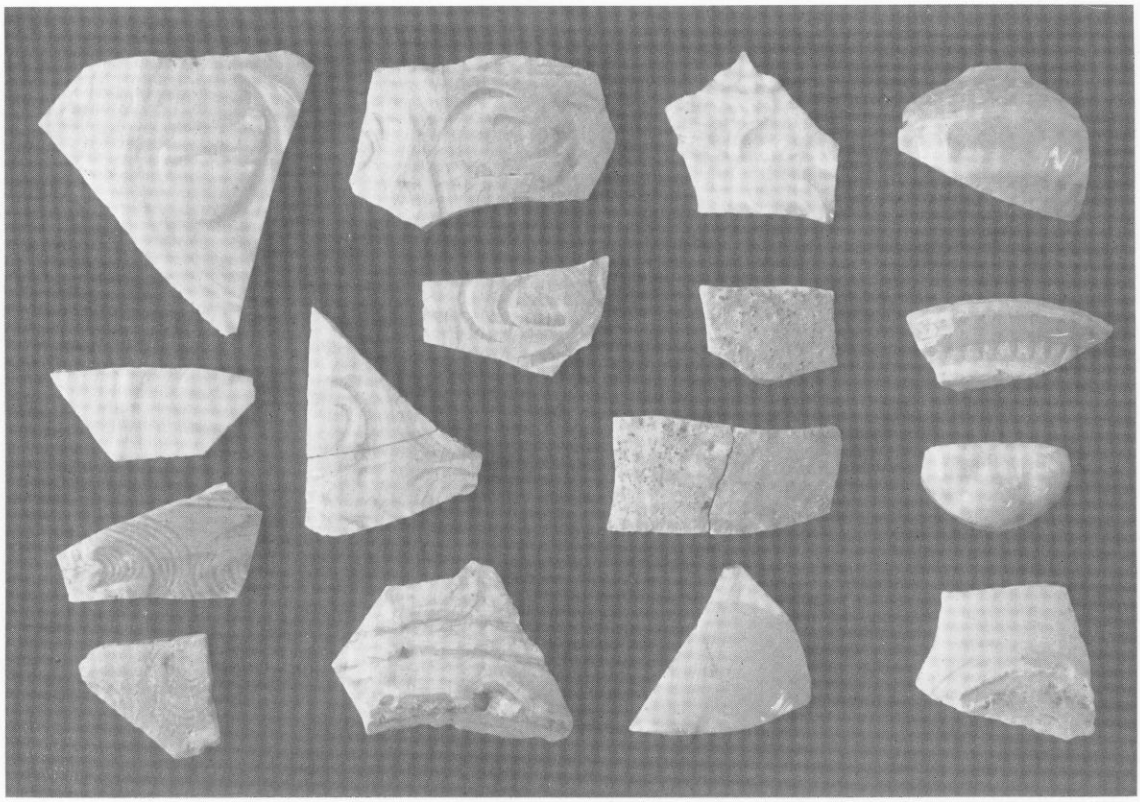
2．青磁　　7類 (3)



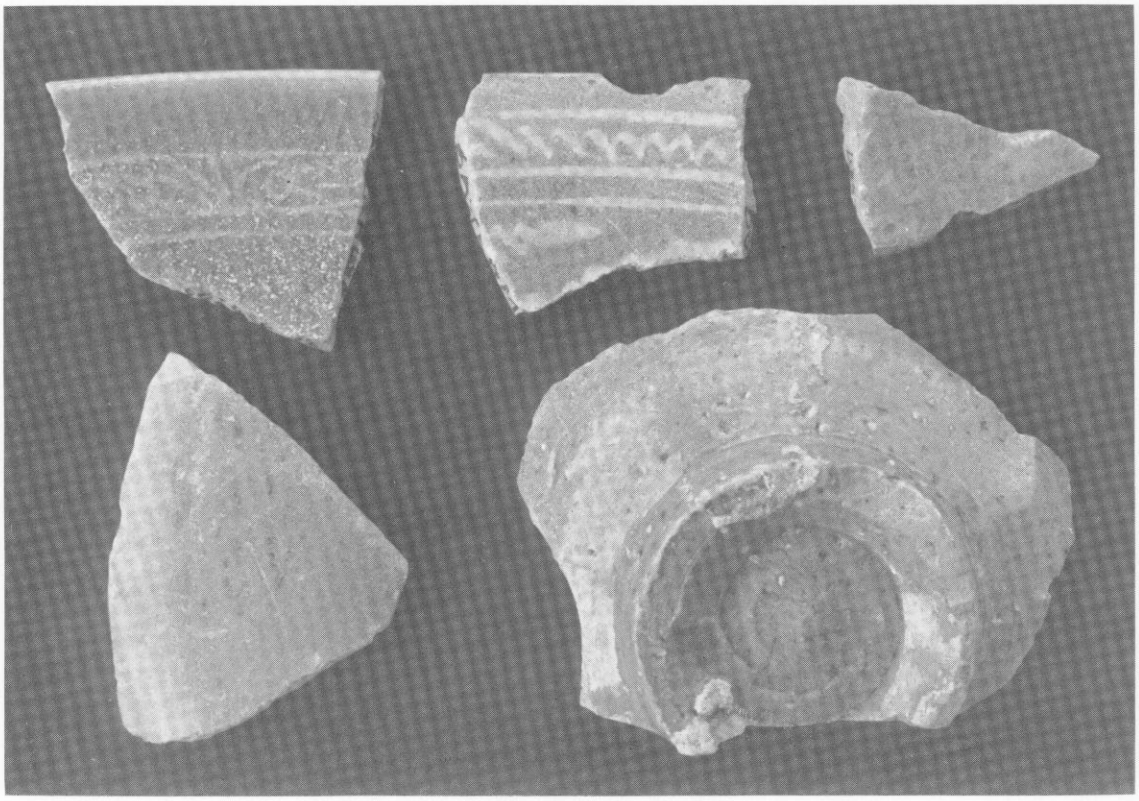
1．青磁　　9類　(1)



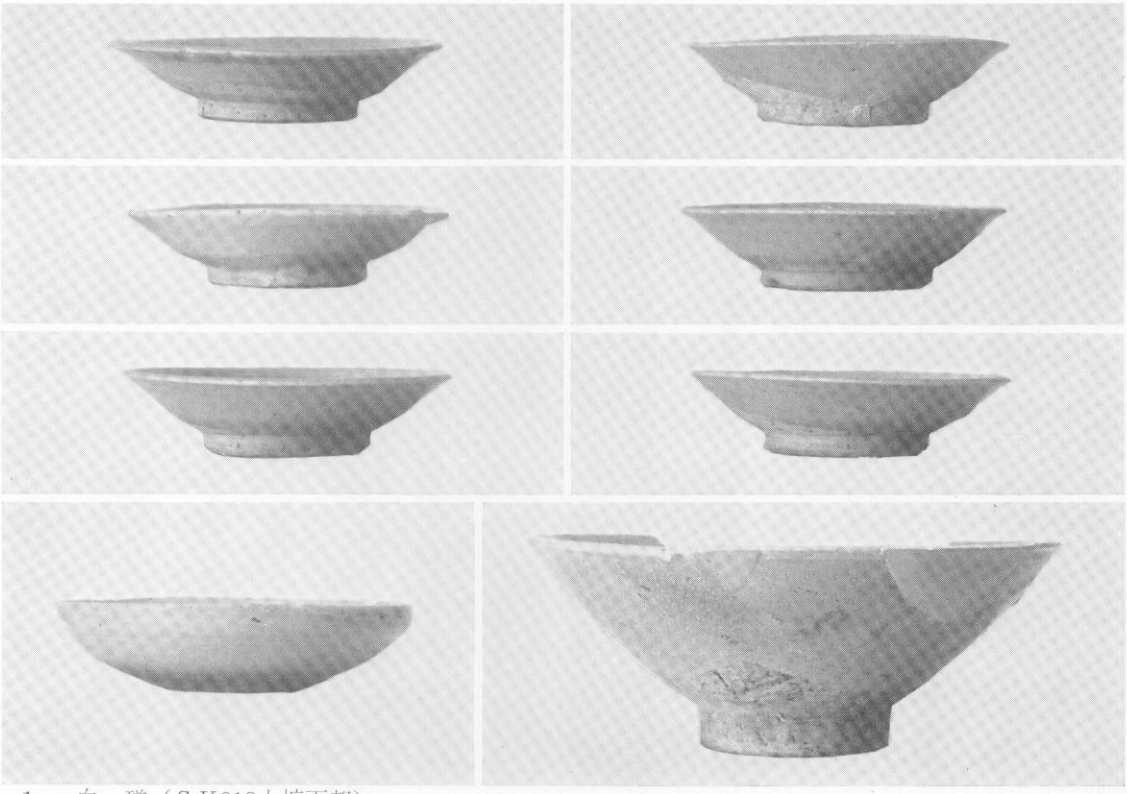
2．青磁　　9類　(2)



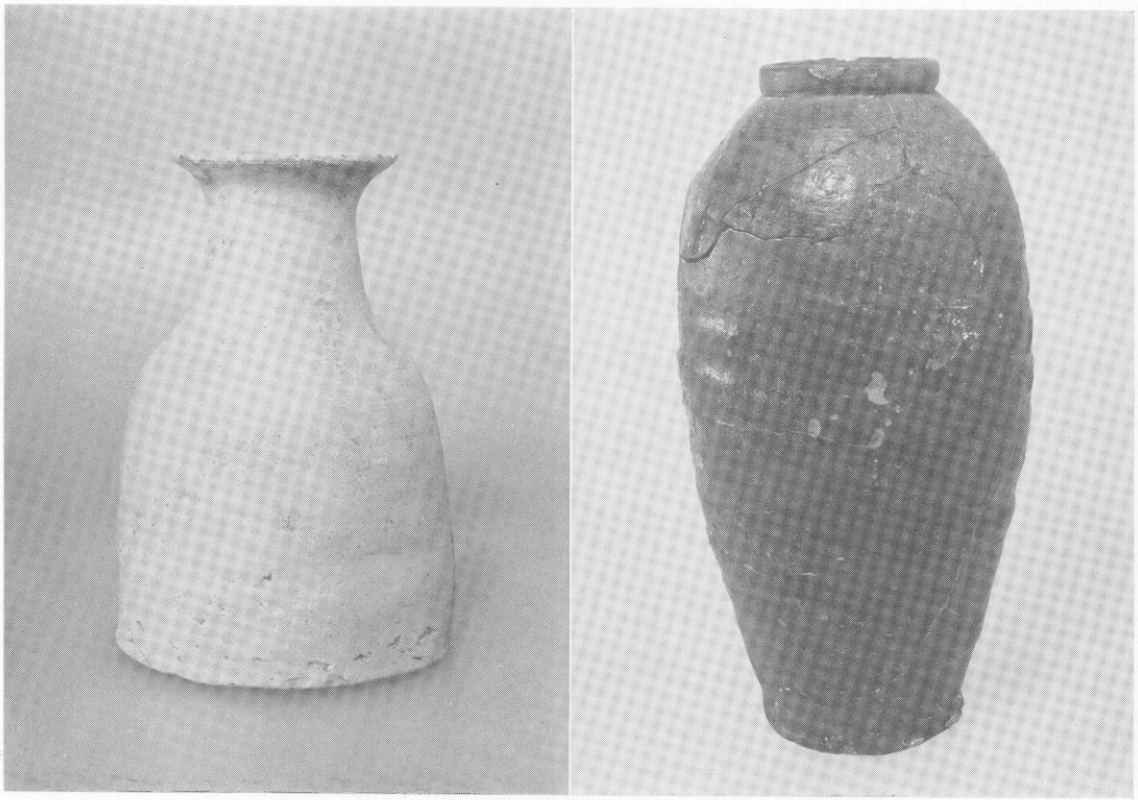
1．青白磁



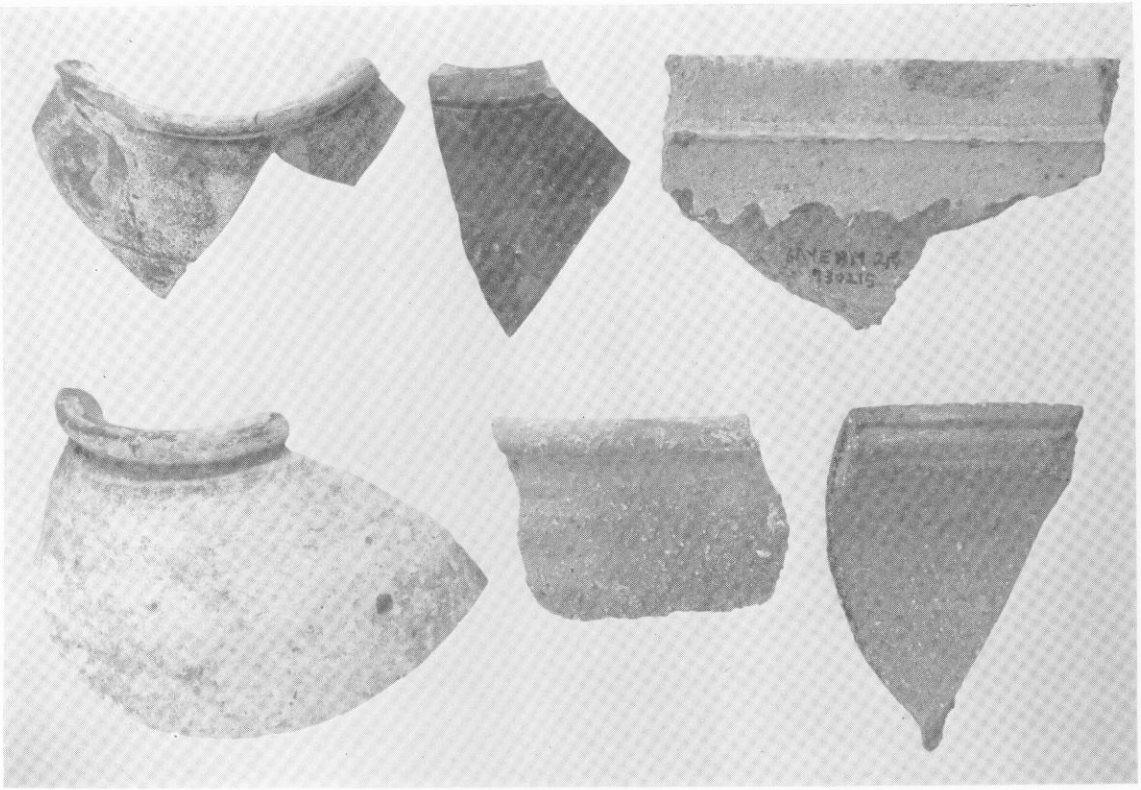
2．高麗青磁



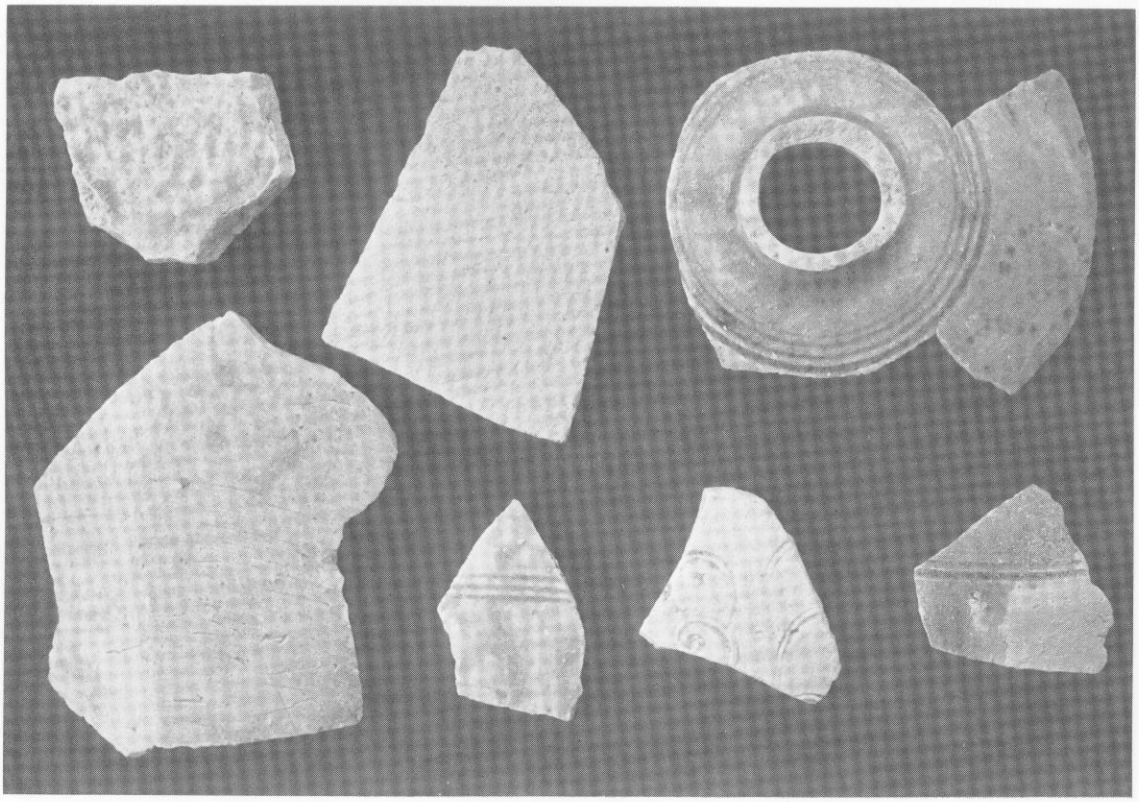
1．白　磁（ＳＫ312土坑下部）



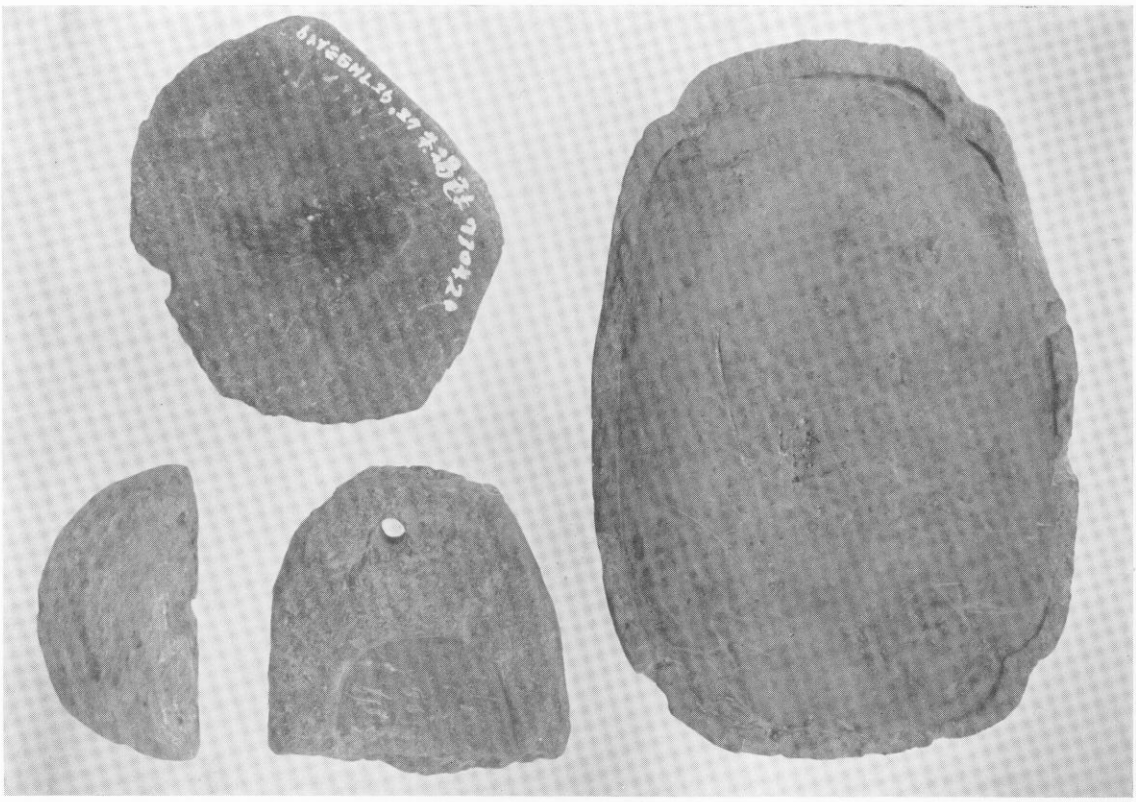
2．土師器長頸瓶（ＳＫ345土坑），褐釉瓶



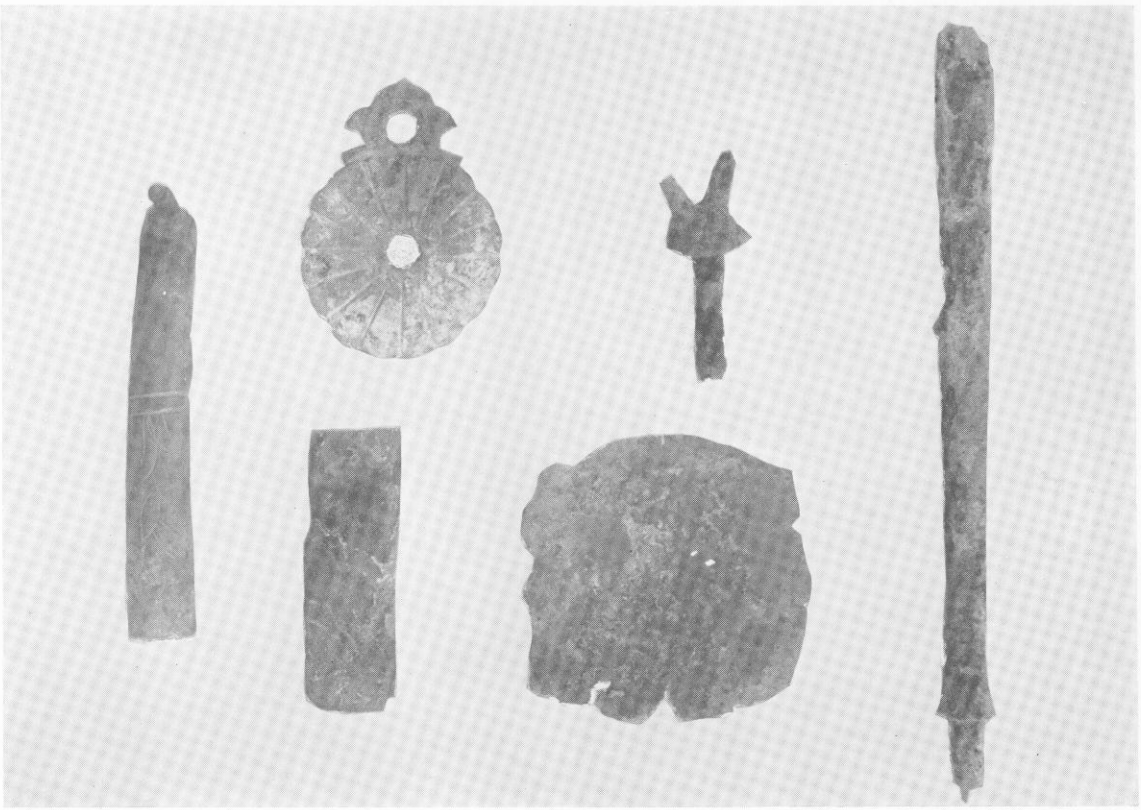
1．雑　器



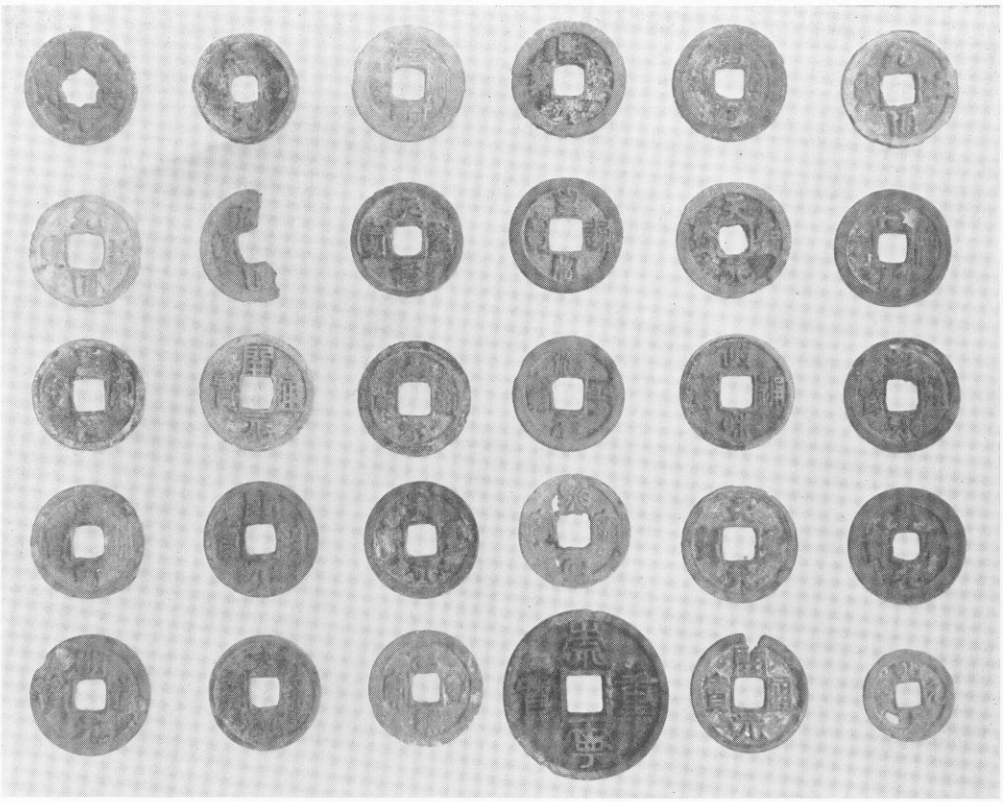
2．灰釉陶器，古瀬戸



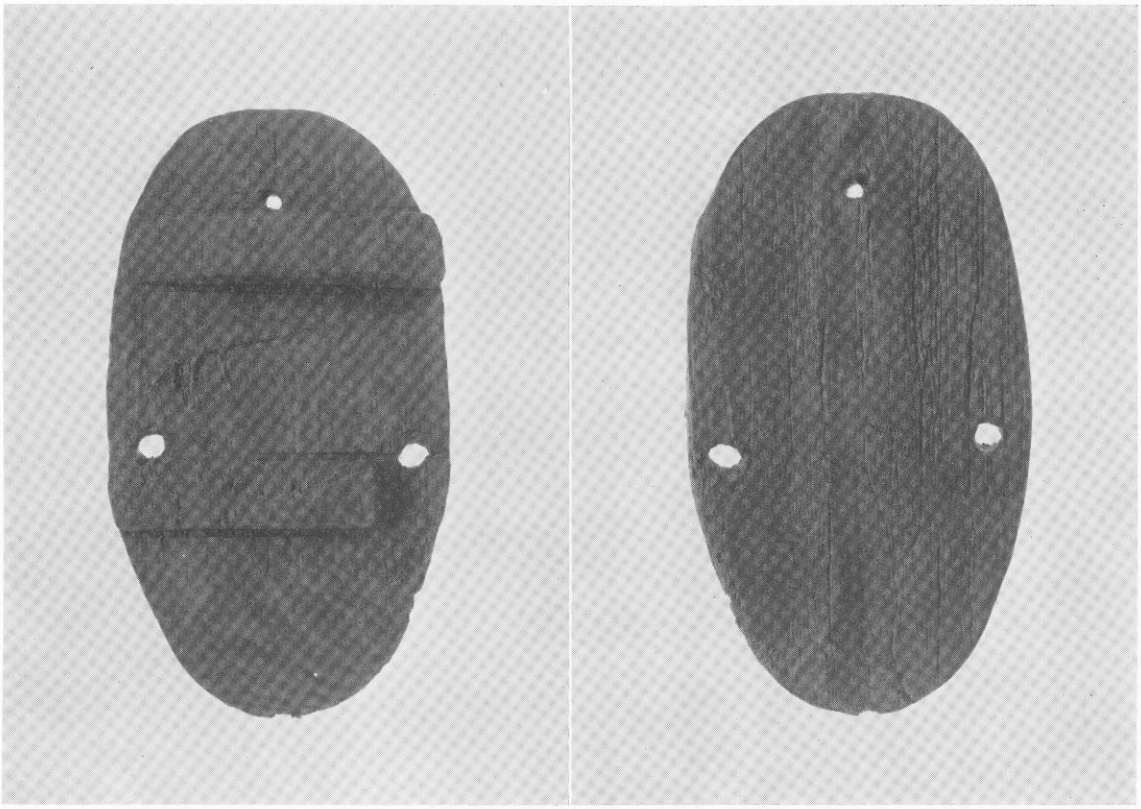
1．石　製　品



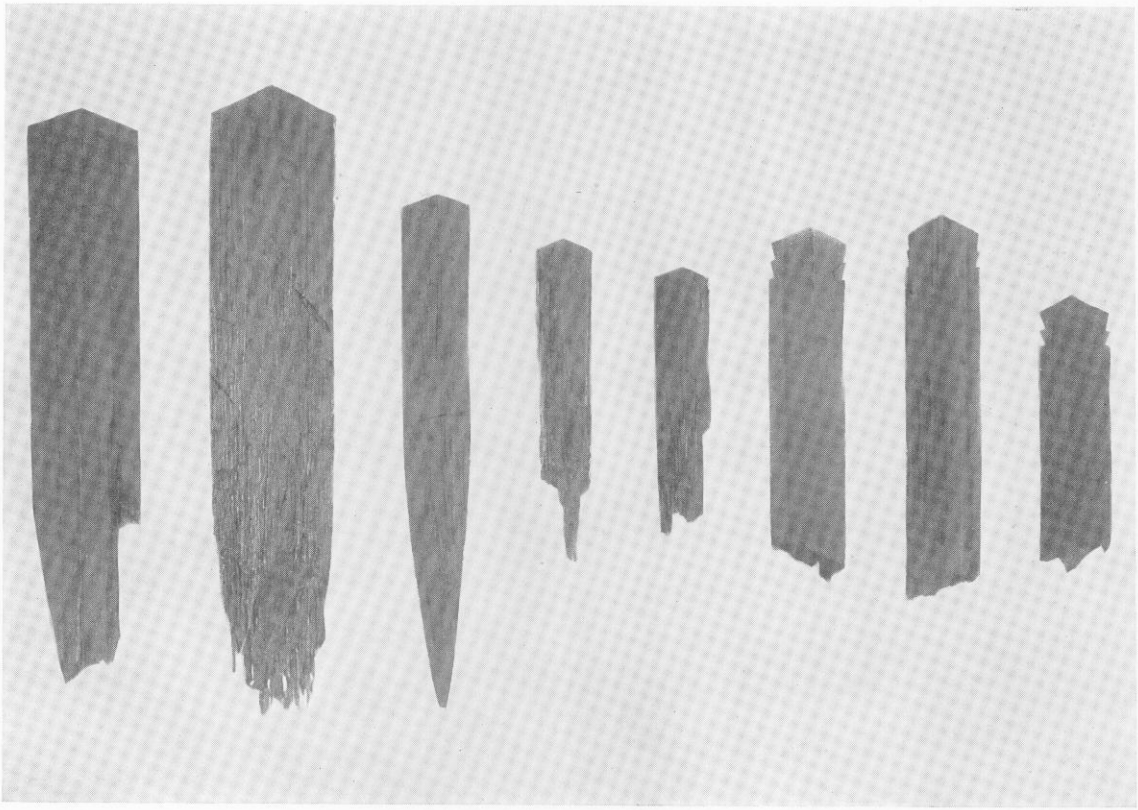
2．金属製品



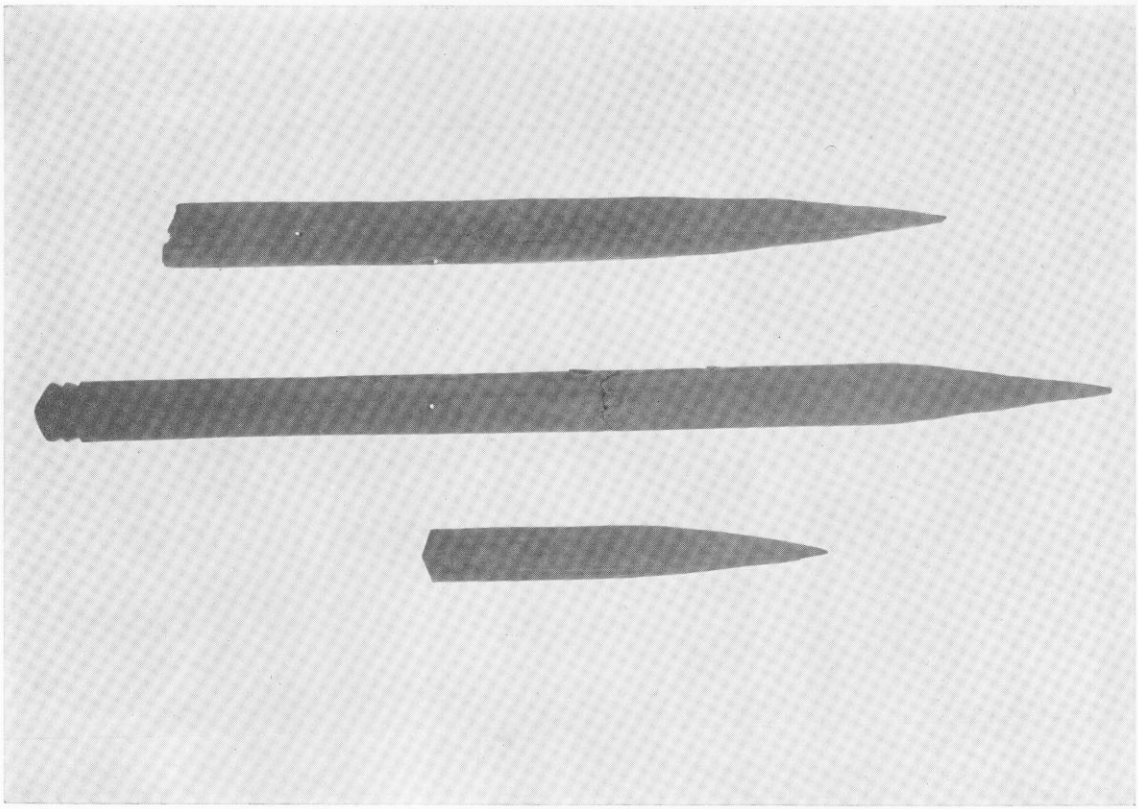
1．銅　銭



2．下駄（実大）



1．墨書木札　(1)



2．墨書木札　(2)

第 4 次 調 査

本　文　目　次

頁

一．調査経過……68
二．層位……69
三．遺構……70
　1．建物・柱穴……70
　2．溝……71
　3．土坑……71
　4．井戸……73
四．遺物……75
　1．中層土師器・Ⅱ類……75
　2．上層土師器・Ⅱ類……81
　3．磁器……85
　4．雑器……88
　5．瓦……90
　6．石製品……90
　7．土製品，砥石……97
　8．ガラス製小玉……99
　9．金属製品……99
　10．銅印……102
　11．銅銭……105
五．おわりに……107

図　版　目　次

本文対照頁

図版１　１．遺跡全景（北から）……68
　　２．最上層建物遺構（北から）……69
図版２　１．上層全景（西から）……69
　　２．上層全景（東から）……69
図版３　１．中層東区全景（西から）……69
　　２．中層西区全景（東から）……69
図版４　１．下層全景（西から）……69
　　２．下層東区全景（北から）……69
図版５　１．ＳＫ401 土坑土器出土状態……71
　　２．ＳＫ404 土坑土器出土状態……71
図版６　１．ＳＫ407 土坑……71
　　２．ＳＫ414 土坑……71
図版７　１．ＳＫ425 土坑……71
　　２．ＳＫ427 土坑……71
図版８　１．ＳＥ401 井戸……73
　　２．ＳＥ401 井戸……73
図版９　１．銅印出土状態……102
　　２．ガラス製小玉出土状態（ＳＫ427）……99
図版10　１．鞴羽口出土状態（上層）……101
　　２．巴瓦出土状態（ＳＫ407）……71
図版11　１．土師器（ＳＥ401井戸出土）……75
　　２．青磁８類（上），白磁３類（下）……85
図版12　１．青磁１類……85
　　２．白磁３類……85
図版13　１．白磁４類……85
　　２．白磁５類……85

本文対照頁

図版14　1．白磁６類……85
　　2．青磁７類（１）……85
図版15　1．青磁７類（２）……85
　　2．青磁８類……85
図版16　1．青磁９類……85
　　2．高麗青磁，青白磁……85
図版17　1．軒丸瓦……90
　　2．銅印（実大）……102
図版18　1．石製品……90
　　2．滑石製品（１），砥石……90
図版19　1．滑石製品（２）……90
　　2．滑石製品（３）……90
図版20　1．石鍋……90
　　2．金属製品……99
図版21　1．とりべ，鞴羽口……101
　　2．鉄滓塊……101
図版22　1．ガラス製小玉（実大）……99
　　2．銅銭（実大）……105

挿　図　目　次

頁
1図　R列東西壁土層図……69
2図　最上層遺構配置図……70
3図　上層遺構配置図……折込み71～72
4図　中層遺構配置図……折込み71～72
5図　下層遺構配置図……折込み71～72
6図　SE401 井戸実測図……74
7図　土師器，白磁実測図（SE401井戸出土）……75
8図　土師器，瓦器，白磁実測図（暗褐色粘質土出土）……78
9図　土師器実測図（SD401 溝坑出土）……79
10図　土師器実測図（SK407 土坑出土）……81
11図　土師器実測図（MR27区黒褐色土出土）……82
12図　土師器実測図（SK424 土坑出土）……84
13図　青磁，白磁実測図……86
14図　青磁，天目実測図……88
15図　雑器実測図……89
16図　石製品実測図……91
17図　滑石製品実測図（1）……92
18図　滑石製品実測図（2）……94
19図　滑石製品実測図（3）……95
20図　滑石製品，石鍋実測図……96
21図　土製品，砥石実測図……98
22図　ガラス製小玉実測図（SK427 土坑出土）……99
23図　金属製品，鞴羽口，とりべ実測図……100
24図　銅印実測図（実大）……103
25図　銅銭拓影（2/3）……105

表　目　次

頁
1表　土坑一覧表……72
2表　ＳＥ 401井戸出土土師器の法量……75
3表　ＳＥ 401井戸出土土師器計測表……77
4表　暗茶褐色粘質土出土土師器計測表……78
5表　ＳＤ 401溝出土土師器計測表……79
6表　ＳＤ 401溝出土土師器の法量……80
7表　ＳＫ 407土坑出土土師器計測表……80
8表　ＳＫ 407土坑出土土師器の法量……82
9表　ＭＰ27区黒褐色土出土土師器の法量……83
10表　ＭＰ27区黒褐色土出土土師器計測表……83
11表　ＳＫ 424土坑出土土師器計測表……84
12表　ＳＫ 424土坑出土師器の法量……85
13表　ガラス製小玉計測表……99
14表　銅銭計測一覧表……106
15表　土師器分類と遺構対照表……108

第 4 次 調 査

一、調 査 経 過

第4次調査は前回第3次調査区の南側の一段高くなった畑地（標高35.9m），地番は太宰府町大字太宰府字泉水2791―7で，昭和48年9月10日より昭和49年1月10日の期間をかけて行なった。

9月11日から発掘作業に入るが，前回の調査時に既に表土を除去していたので2層の発掘作業から行なう。17日，遺構の検出が終った段階で第3次調査の方眼基準に従って調査区のグリッドを設定する。遺構は中央土層観察用畦より以東（東区）においては石列などが検出されるが西側（西区）については同一レベルでは確認されない。18日，MQ36区の東壁面暗茶褐色粘質土中より銅印を発見し，その日のうちに写真撮影を行なって取り上げる。MQ28列の石列より西には焼土混褐色土が拡がるが，東では認められない。25日に焼土面石列の写真撮影及び遺構の実測を行なう。28日から石列と焼土面の掘り下げ，及び西区の暗黒褐色土の掘り下げを続行する。

10月3日，東区の全景写真撮影。西区は遺構検出作業に入る。15日，MR26，27区にて根石を有する柱穴を多数確認，掘立柱建物の一部であろう。16，17の両日上層遺構の全景及び部分写真撮影を行なう。18日より遣り方杭打ちを行ない22日より11月6日まで上層遺構の実測作業にかかる。その間，次回調査6AYEBM区の表土除去作業も併せて行なう。

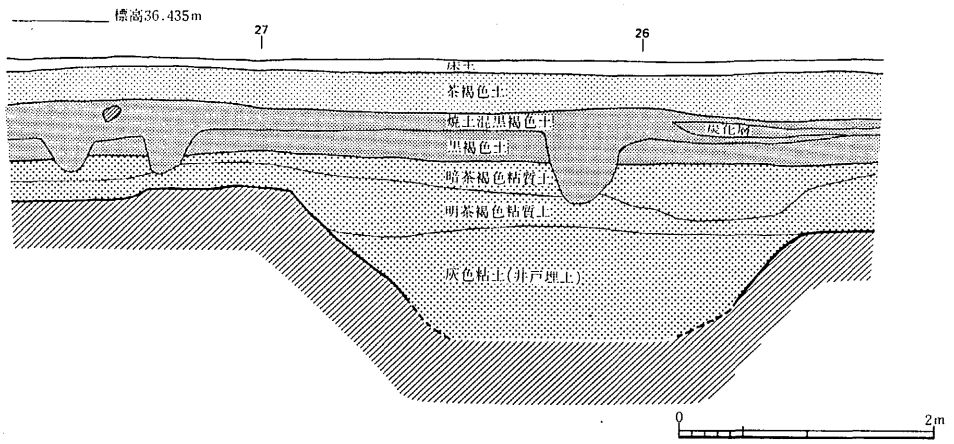
11月7日より上層遺構面の掘り下げを開始する。MR30～31区にかけて浅い溝を，またMP26，27区では井戸跡を検出する。15日，西区の遺構写真撮影を行ない，実測に入る。東区は検出作業を続行する。17日には東区の写真撮影を行ない，実測を開始するが12月1日までの中層遺構実測作業中次回調査区の床土排土を行なう。

12月3日より7日まで中層遺構面の掘り下げを行ない，北側にて東西方向に延びる3条の構を検出し発掘する。11日～14日まで井戸の実測及び写真撮影を行って井戸側を取り上げる。17日に下層遺構の全景写真撮影を行ない，その後27日まで実測作業に入る。

1月7日，実測再開。土層図の作成と細部の点検を併せて行ない，1月10日にてすべての作業を終了する。

二、層　　位

今回の調査では，包含層はかなり複雑であり遺構面も４面にわたった。また南側東半分はカットされたものらしく包含層は薄く，東側部分では包含層は厚いが，二次堆積のものが大部分であると考えられた。**１層**は耕土で約 10cm の厚さがある。**２層**は床土で，**３層**は茶褐色土および明黒褐色土である。次の４層上部である焼土混黒褐色との境に石列と柱穴が検出された。**４層**は上部に焼土を多く混入した黒褐色土で，遺構を多く含んでいる。**５層**は暗茶褐色粘質土・茶褐色粘質土・暗茶褐色土でこれも遺構を含んでいる。**６層**は明茶褐色土・黄灰色砂質土などである。１～２層は近世の陶磁器を含んでいる。３層からは糸切り底の土師器が出土している。４層も同じく糸切り底土師器や青磁が出土していて，最も多く，破片も大きい。５層にはＳＥ401や土坑が存在し，大きめの土師杯や白磁が出土している。６層は溝が主体で遺物は多くない。このうち３層は**最上層**，４層を**上層**，５層を**中層**，６層を**下層**として取扱った。しかしこの地区の層位は前にものべたように複雑であり，再検討を要する。



１図　Ｒ列東西壁土層図

三、遺　　構

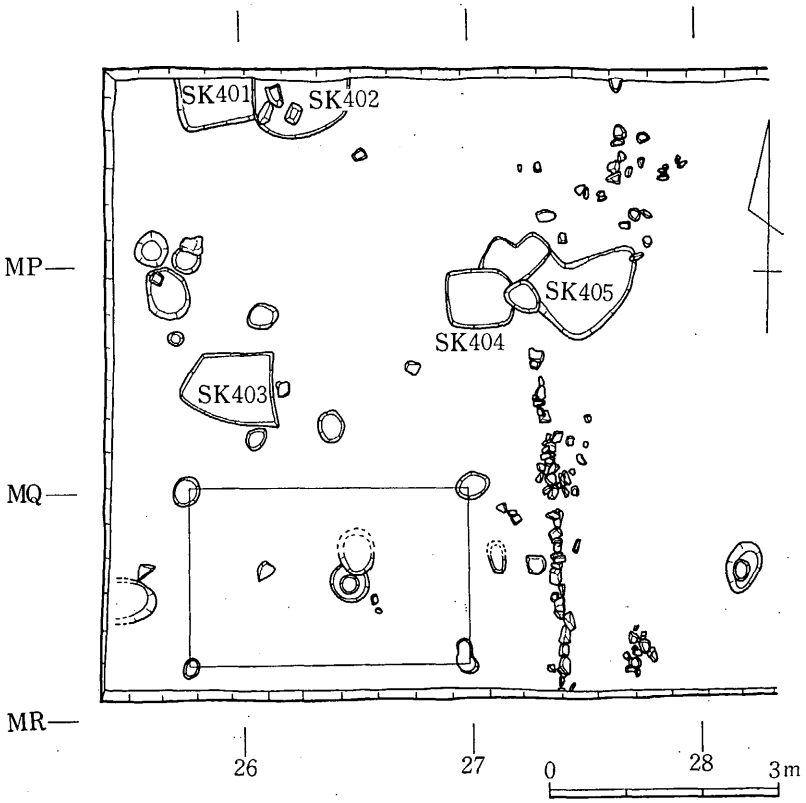
第４次の調査では４層にわたって遺構面が確認され，それぞれ上から最上層・上層・中層・下層と呼んで区別している。

最上層では石列と建物一棟を，上層では多数の柱穴と土坑，それに建物一棟を，中層では井戸１基，溝１条，下層では溝３条を検出している。

1. 建物・柱穴

最上層から下層まで径 20cm 内外の柱穴が多数検出されているが，特に上層において顕著である。そのうち建物としてまとまるものは最上層と上層にて確認されている。

最上層のものはＭＲ27区付近にて表土下 60cm の浅い所にて検出されている。建物は掘立柱で柱穴は焼土混り黒褐色土に掘り近まれている。柱穴間南北 2.4m，東西3.7mの１間四方でほぼ南地方向に一辺をとる。この建物跡から 1.2m 離れた東側に石列がみられ，石列は一段の一列に並べただけの簡単なものであるが東側に石面をあわせていてほぼ南北方向に 4.5m ほど延びている。焼土混黒褐色土はこの石列付近までにみられ，整地層と考えられる。石列は方向などからして掘立柱建物に伴なうものであろう。また石列は南側壁面にもみられ更に南へ延びるものと思われる。それに伴ない建物の規模も大きくなる可能性がある。なお，最上層の建物跡と同一レベルの中央畦西側においては遺構は確認されなかった。



2図　最上層遺構配置図

上層の建物は最上層遺構面の焼土混黒褐色土下において検出され，柱間は南北2.1m・東西2.0mの2間×2間の掘立柱建物で，柱穴には根石が据えられている。南北棟と思われるが西へ10°ほど偏している。なお，この建物跡はSK407土坑と切り合っているが，土坑の方が先行するものである。その他上層にて29列付近に南北方向に1.2mの間隔で柱痕を残す柱穴を4間分検出するが対となる柱穴は確認できない。柵列であろうか。

2. 溝

溝は中・下層にて4条検出され，いずれも東西方向に延びる素掘り溝である。

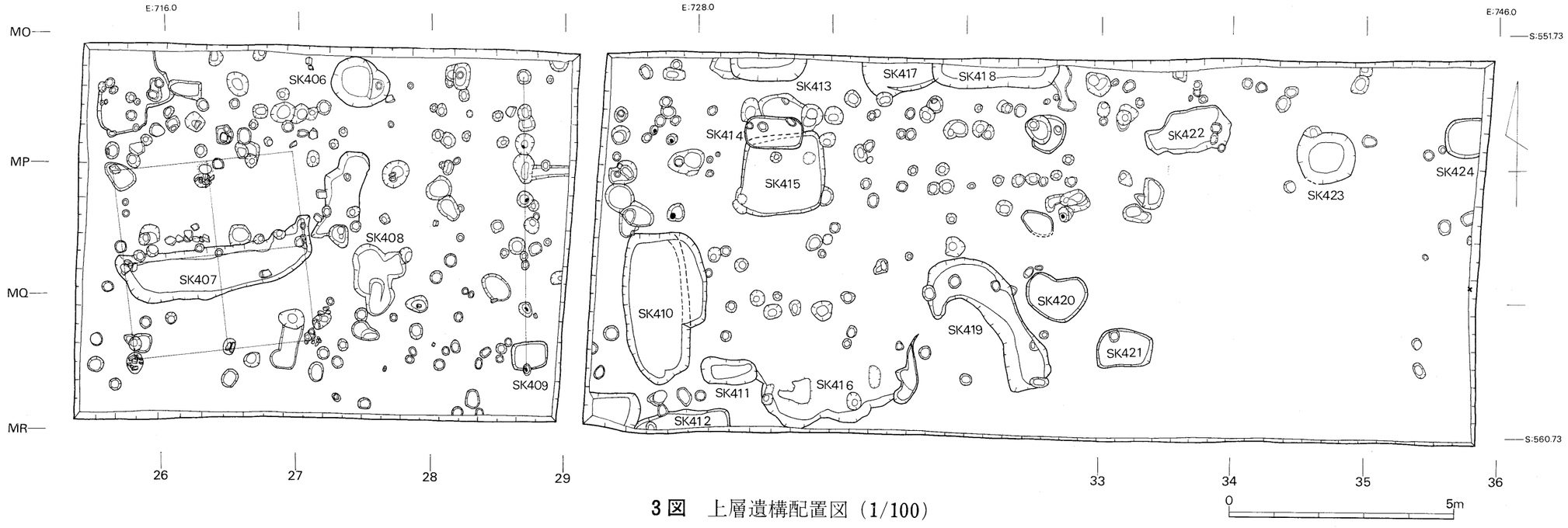
SD401は中層にみられるもで，調査区東側を北東から南西へと対角線上にまつすぐ延びる溝である。断面は浅いU字状をなし，幅は広いところで1.03m，狭いところで0.48mと東側の方で狭くなる。深さも東側の方で浅くなり，MP35区付近にて北側肩部はなくなる。溝底面は西へわずかに傾斜している。溝内からは糸切り底土師器，須恵器，青磁などが出土している。

SD402, 403, 404 は下層にて検出された溝で，ともに北側に片寄っており，青海色砂質粘土の地山に切り込んでいる。いずれも幅・深さも一定しておらず流路も複雑で入り組んでいる。3条の溝ともやや南へ偏しながら東西方向へ延びるが，両端にて落ち込み状のものに流れ込んでいる。SD402溝からはヘラ切り底土師器，須恵器，瓦などが出土しているが須恵器が特に多い。SD403溝は少量であるが糸切り底土師器を出土しているが須恵器が多い。

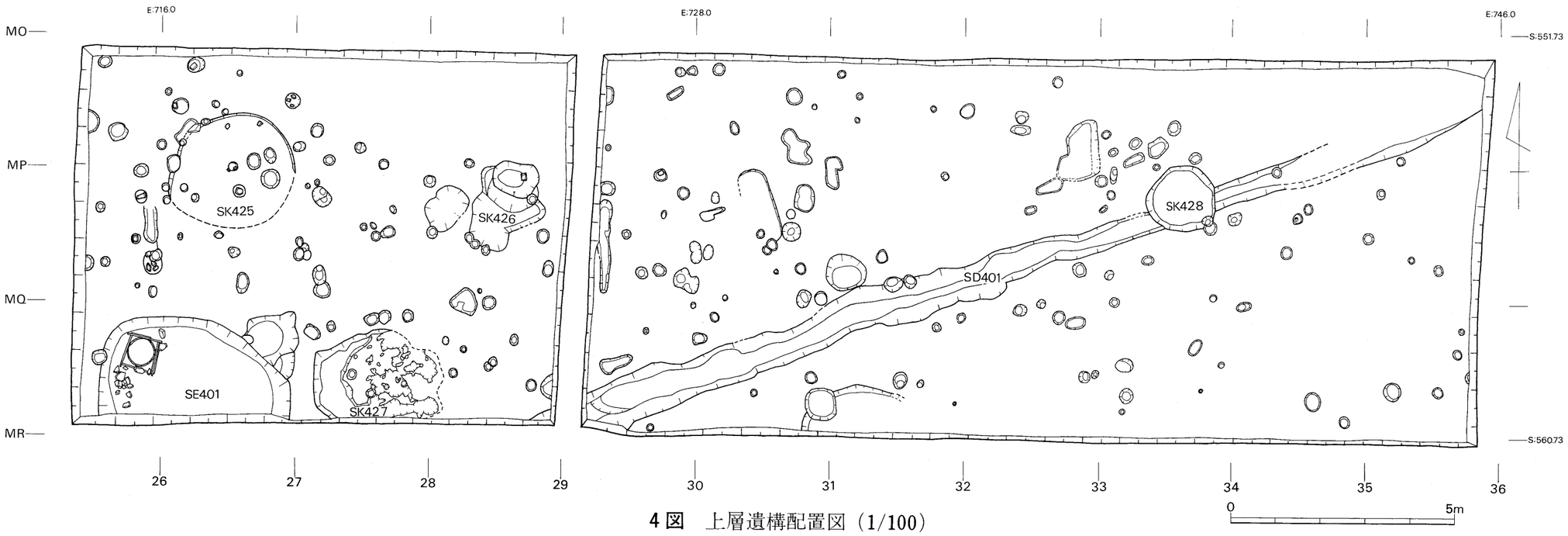
3. 土　　坑

各層から検出されているがとくに上層と中層に多くみられる。代表的なものについて述べると，最上層にみられる土坑は他の土坑と切り合っていて不整形なものが多い。**SK 401** は多数の土師器と完形青磁器椀，釘と思われる鉄片2個を，**SK403**は北宋銭の聖宋元宝を，**SK404**は鉄片（釘か）2個，**SK405** は鉄刀子1個を出土している。

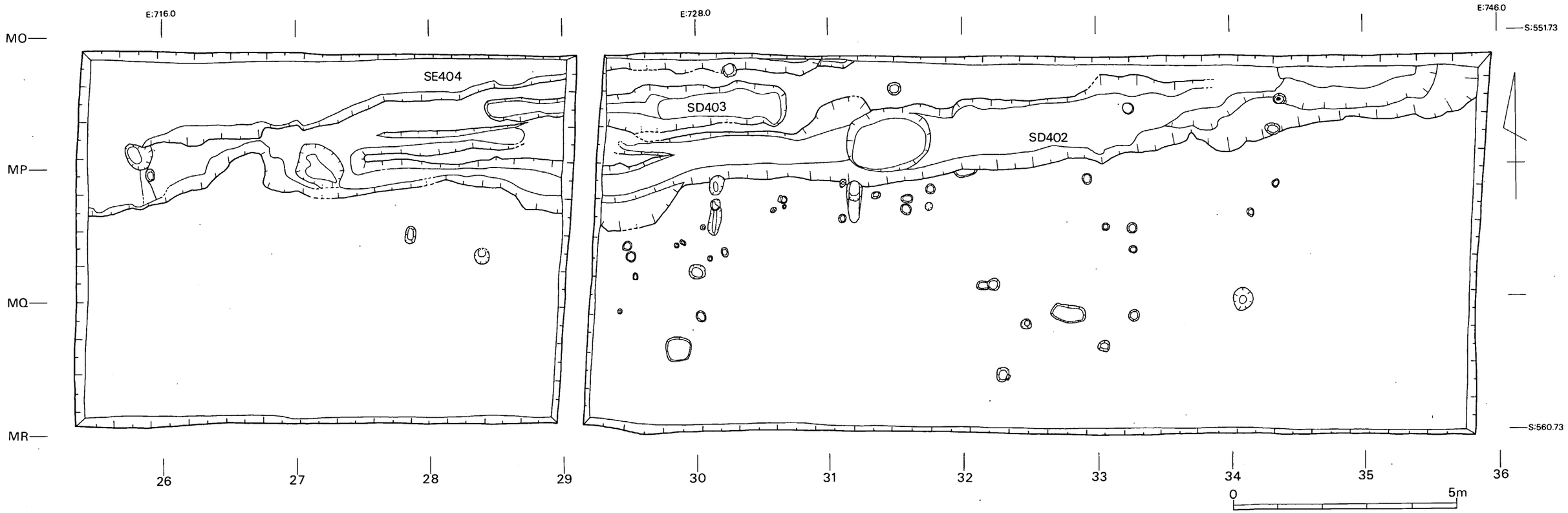
上層は最も多くの土坑が検出され20基余りを数え，平面プランも各種のものがみられる。**SK407**は細長い長方形坑で，長径4.2m，短径1.03m，深さ0.24mを測る。土坑内には炭化層の堆積がみられ，糸切り底土師器，巴文の軒丸瓦などが出土している。これに類似した土坑に**SK419**があるが他の土坑と切り合っていて正確な規模はつかめない。**SK410**は東側を切られているが隅丸の長方形をなし，長径3.2m，短径1.6m，深さ0.31mの大きなもので，中には焼土が堆積しているが周壁は焼けていない。糸切り底土師器・青磁，石鍋などを出土している。**SK409, 411, 414, 421**などは長方形をなす土坑で，長軸を東西方向にとるものが多い。いずれも各種の遺物を出土しているが，**SK414** からは完形土師器が出土している。前回報告した区分によればCグループに属するものと思われる。**SK415** はSK414に切られているが1辺約



3図　上層遺構配置図（1/100）



4図　上層遺構配置図（1/100）


E:716.0
E:728.0
E:746.0
S:551.73
S:560.73
MO
MP
MQ
MR
SE404
SD403
SD402
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
5m

5図　下層遺構配置図

遺構番号	地区	旧番号	平面形態	規模			出土遺物
				長径	短径	深さ	
SK 401	MP26	P-11	方形？	0.95＋α×0.75＋α×0.06			土師器Ⅱ類，磁器5・6・7C類，片口，鉄片
〃 402	MP27	P-1		1.31×0.8＋α×0.06			
〃 403	MQ26・27	P-2	不整方形	1.23×0.94×0.06			土師器Ⅱ-3類，須恵器，雑器7類，須恵器
〃 404	MQ28	P-3	方形	0.9 ×0.75×0.06			土師器Ⅱ-4類，鉄片
〃 405	MQ28	P-5	不整形	0.73×0.56×0.15			土師器Ⅱ-4類，磁器4・6・7C類，鉄刀子，須恵器
〃 406	MP28	P-5	円形	1.11×0.92×0.38			土師器Ⅱ類，磁器7C・9類，雑器1類須恵器，鉄片，銅滓，土鍋
〃 407	MQ27	P-6	長方形	4.18×1.09×0.23			土師器Ⅱ-3類，磁器3・5・7A・7C・9類，雑器6・7類，片口，須恵器，瓦，鉄片
〃 408	MQ28	P-7	長円形	1.18×0.86×0.15			土師器Ⅱ類，須恵器，瓦
〃 409	MR29	P-2	長方形	0.82×0.62×0.36			
〃 410	MQ・R30	P-7	長方形	3.2 ×1.44×0.23			土師器Ⅱ-3類，磁器3・5・6・7A・7C・9・10類，雑器6・7・8類，常滑，石鍋，石製品
〃 411	MR31	P-9	長方形	1.25×0.56×0.44			土師器Ⅱ類，磁器，雑器1・6類，須恵器，支脚
〃 412	MR30・31	P-11	長方形？	2.14 ×0.08			土師器Ⅱ-3類，磁器9類，須恵器，とりべ，滑石製品
〃 413	MP31	P-13	長方形？	1.68 ×0.3			土師器Ⅱ-2類，雑器1類，滑石製品，片口，とりべ
〃 414	MP31	P-10	長方形	1.72×0.71×0.12			土師器Ⅱ-3類，磁器3・5・7A・9類，須恵器，雑器
〃 415	MP・Q31	P-17	隅丸方形	1.9 ×1.8 ×0.12			土師器Ⅱ-3類，雑器1類
〃 416	MR30・31	P-8	不整形	1.75 ×0.17			土師器Ⅱ-2類，磁器9類，常滑，瓦，支脚，輝緑凝灰岩
〃 417	MP32	P-16		1.5 ×0.06			土師器Ⅱ類，磁器7B類，雑器6類，瓦，須恵器
〃 418	MP32・33	P-15	長方形	2.6×0.5＋α×0.27			土師器Ⅱ-2類，磁器3・9類，雑器1・8類，常滑，とりべ，須恵器
〃 419	MQ・R 31・32	P-6	不整形	1.6 ×0.88×0.2			土師器Ⅱ-1・2類
〃 420	MQ33	P-2	不整形	1.32×0.84×0.1			土師器Ⅱ-2類，とりべ
〃 421	MR33	P-12	長方形	1.25×0.84×0.13			土師器Ⅱ-2または3類，雑器2類，須恵器，瓦，とりべ
〃 422	MP34	P-18	不整形	1.95×0.96×0.14			土師器Ⅰ・Ⅱ類，磁器7C類，須恵器，とりべ
〃 423	MP35	P-20	円形	1.3 ×1.15×0.43			
〃 424	MP36	P-19	長方形	0.82＋α×0.91×0.17			土師器Ⅱ-4類，須恵器，白磁
〃 425	MQ27・28	P-1	円形	2.77 ×0.09			土師器Ⅱ-1・Ⅰ類，磁器1・3類，鉄クズ，雑器1類，石鍋，鉄滓，銅滓，とりべ，ふいご羽口
〃 426	MQ29	P-3		0.96 ×0.1			土師器Ⅱ類，須恵器，瓦
〃 427	MR28	P-8	不整形	2.9×(2.2)×0.3			土師器Ⅰ-3・Ⅱ類，磁器3・5類，片口，瓦器椀，石鍋，ガラス製小玉，鉄片
〃 428	MQ34	円形坑	円形	1.5 ×1.5 ×0.23			土師器Ⅱ-2・3類，磁器6類，土鍋，鉄片，常滑

（ ）は復元値，単位 *m*

1表 土 坑 一 覧 表

1.8mの方形である。**SK406**, **423**はともに径1.1〜1.3mほどの円形坑で深さも0.5m前後とやや深い。SK406からは銅滓，鉄片，焼土塊などが出土している。**SK424**は完掘していないが楕円形状のもので土師器を多く出土している。

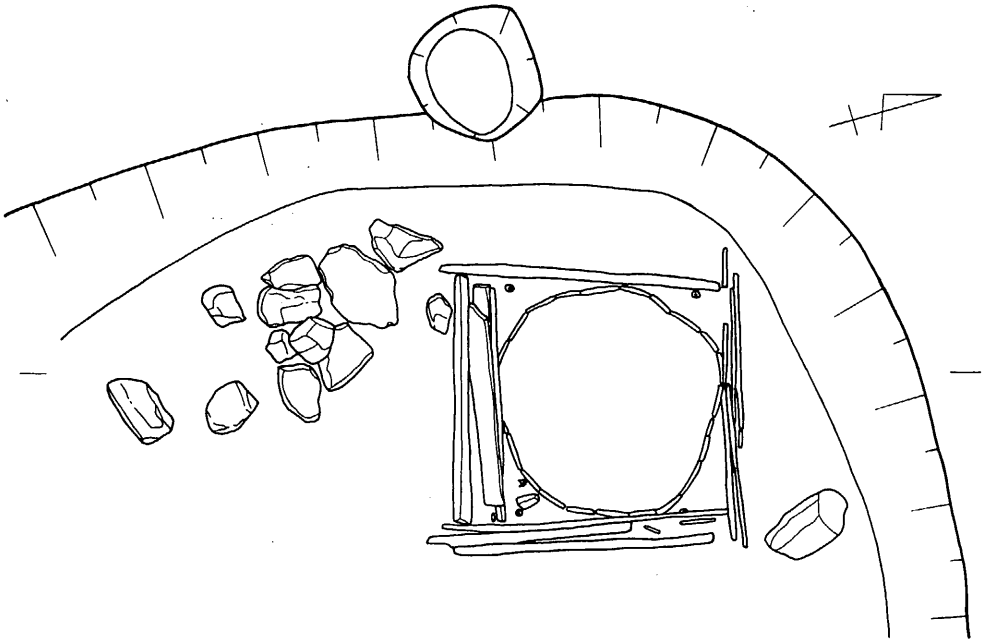
中層では数は少ないが特色ある土坑が検出されている。**SK425**は周壁が半分しか残っていないが埋土の状況からほぼ円形の土坑になるものである。径約2.8mと広いものであるが深さは0.07mと非常に浅く上部を大半削平されている。表面は炭化層に覆われ，内からは鞴羽口，とりべ，鉱滓，焼土塊など鍛冶に関係ある遺物が多く出土している。なおこの土坑には特に焼けた面や附属施設となるような掘り込みなどは何ら認められないが，鍛冶に関連する遺構であろうか。**SK427**は不整円形のもので，底面は一定せず多数の小さな窪みを有し，炭化層が薄く堆積するが炭化物の多い部分から表面が風化したガラス製小玉が26個まとまって出土している。下層からは特に顕著な土坑は検出されていない。

前回の報告では土坑は，**A**．円形ないし楕円形のプランをなし土師器などの遺物を多量に包蔵するもの，**B**．3mを越える大形円形のもの，**C**．長方形プランをもつもの，**D**．径1mほどの円形で深さの深いもの，の4つに大別したが今回の調査ではそれと著しい差異を示す土坑の検出はなかった。ただ出土遺物から鍛冶に関連するような土坑もあり，単に形態だけからの類別ではなく，出土遺物との組み合せによる詳細な検討が必要とされる。

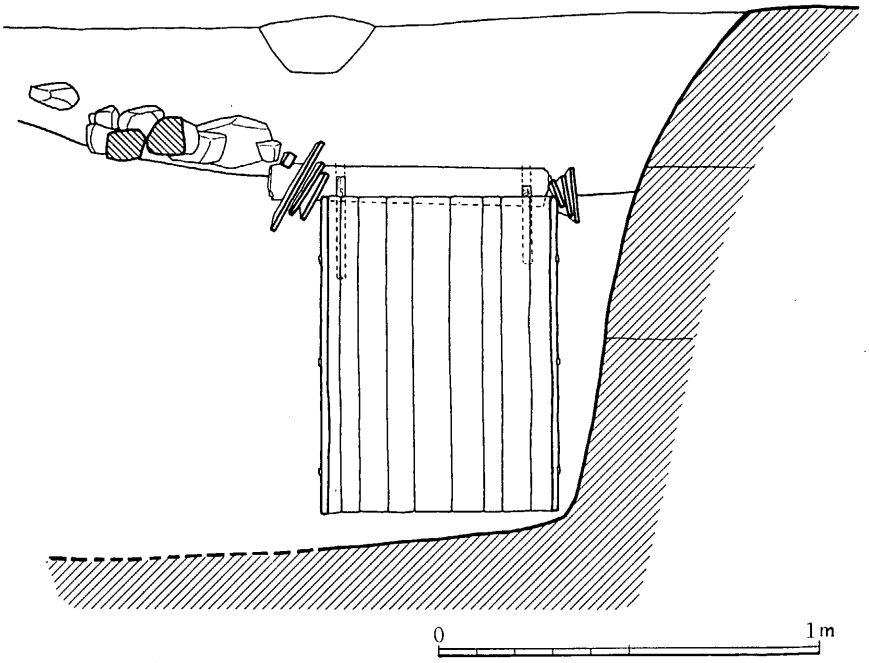
4．井　　戸

4次調査では中層より1基が南西隅にて検出されている。**SE401**は長径4.3mほどの大きな楕円形状掘り方の北西隅に寄せて設置された井戸で，下端部は茶色荒砂の湧水層に達している。掘り方上面の黄白色粘土層より約1.3mの深さを測る。井戸枠は上・下2段にわたるもので，上段は長さ0.7m，幅0.1m内外の板材を四隅に立てた丸杭を内側にして横に渡たし，方形に囲んだもので，下段は長さ0.84m，幅0.1mの板を22枚組み合わせ，3ケ所を竹のタガで緊束して作った径0.6mの桶側を据えたものである。上段の方形枠組みは横板がずり落ちていて上半部の構造は分からない。

掘り方埋土上部には20cm前後の礫を使った石敷き状のものがみられるが，足場のためのものであろうか。掘り方埋土より土師器・須恵器・青磁・常滑焼・瓦などを，井戸内より完形の糸切り底土師器，須恵器などを出土している。それに今一つ奇怪な事に，人間のものと思われる大腿骨を1本検出している。井戸内埋土より出土していて井戸が廃棄させてから投げ入れられたものであろうが，人々の生活と切り離せない神聖視されるべき井戸にこのような行為がなされているのには，現代の我々の感覚からしても理解しがたいものがある。なお，今回検出の井戸は前回報告の際に行った4つの区分には該当しない形式のものである。



標高35.335m



6図　ＳＥ 401井戸実測図

四、遺　　物

1. 中層土師器・Ⅱ類

中層からは糸切り底（Ⅱ類）をもつ比較的大きな杯が出土している。なおＳＫ427土坑からは，ヘラ切り底と糸切り底の土師小皿が共伴している。土師器の分類は従来どおりである。

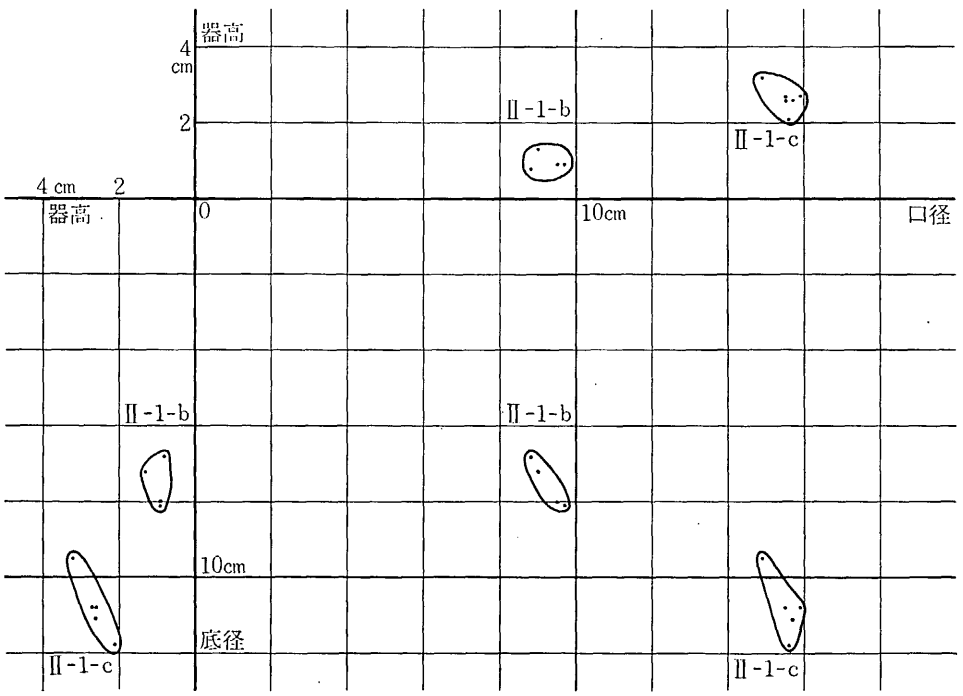
〔1〕

ＳＥ401井戸およびその上部をおおう暗茶褐色粘質土から多く出土している。

ＳＥ401井戸（７図，２.・３表）

b．小皿（Ⅱ－**1**－**b**）（817～820）口径8.8～9.7cm，底径6.8～8.1cm，器高0.8～1.3cmで淡橙灰色ないし褐色で，胎土に少量の砂粒を含んでいる。やや薄手の小皿で，器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

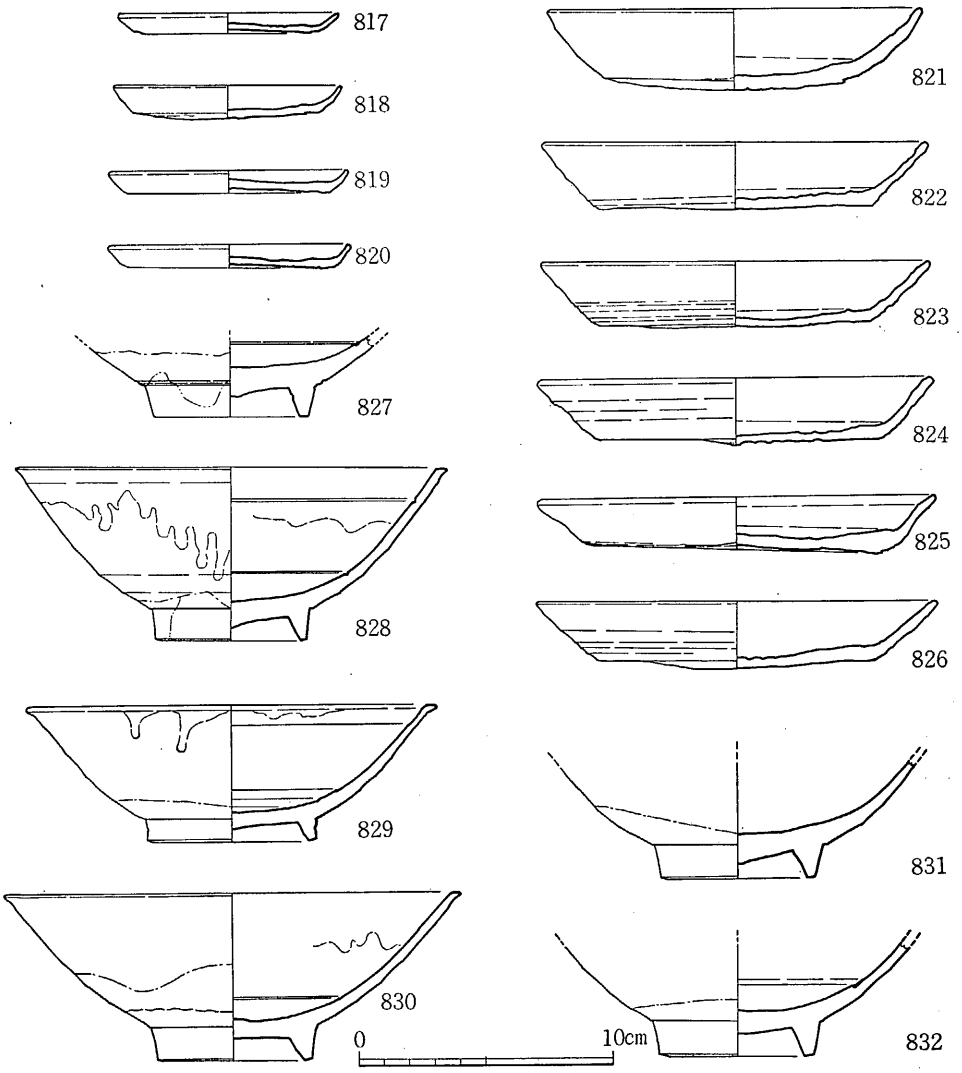
c．杯（Ⅱ－**1**－**c**）(821～826) 口径14.9～15.9cm，底径9.5～11.75cm，器高2.1～3.2cmである。このうち**821**は糸切り底であるにもかかわらず，丸底に近い形をしていて，底径も少さい。この**821**を除けば，他は口径15.5～16cm，底径10.8～11.8cmの範囲にはいる。色調は橙味灰白色ないし灰黄色で，胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底には渦文とナデ



2表　ＳＥ401井戸出土土師器の法量

がみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

このＳＥ401井戸内出土の土師器には，高台付小皿はみあたらないし，土師器自体は第３次調査区のＳＤ305溝のＩ－４類土師器によく似ている。しかし，いまのところヘラ切り底を有す土師器はみつかっていない。またこのＳＥ401井戸をおおう暗茶褐色粘質土からは，次に述べるようにⅡ－１類土師器が出土しているので，層位的にもＳＥ401井戸出土の土師器はⅡ－１類より古いことになる。それで本来はＳＥ401出土の土師器はＩ－４類とⅡ－１類との間におくべきかもしれないが，類例がすくないため，今回はⅡ－１類に含めておきたい。



7図　土師器，白磁実測図（ＳＥ401井戸出土）

小皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	8.8	6.8	0.8	1	14.9	9.5	3.2	5	15.65	11.1	2.55
2	9.0	7.2	1.3	2	15.5	10.75	2.6	6	15.9	10.8	2.7
3	9.5	8.0	0.9	3	15.5	10.8	2.65				
4	9.7	8.1	0.9	4	15.55	11.75	2.1				

3表　ＳＥ401井戸出土土師器計測表

白磁（827～828）　ＳＥ401井戸からは白磁のみが出土している。**827・828**は3類の白磁で，**828**は見込みと口縁内側に沈線がはいり，胎土は灰白色で薄灰黄色の釉がかかっている。**829～832**は井戸の掘り方から出土した白磁で，井戸内と時期的には変らない。**829**は4類の白磁で，高台がやや低く，見込みに焼成前に釉を環状に削り取った跡がみられ，見込みと口縁内側に沈線がいれられている。胎土は白灰色で，暗灰色の釉がかかっている。**830**は3類の白磁で胎土は灰色で薄灰緑色の釉がかかっている。

暗茶褐色粘質土（8図，4表）

ＳＥ401井戸をおおう土層から出土した土師器で白磁椀・瓦器椀が伴っている。

b．小皿（Ⅱ－**1**－**b**）（833～837）　口径8.3～9.6cm，座径6.5～7.5cm，器高0.9～1.2cmで，**833**はやや小形で深く，他は口径9cm台，底径7cm台である。薄手の小皿である。

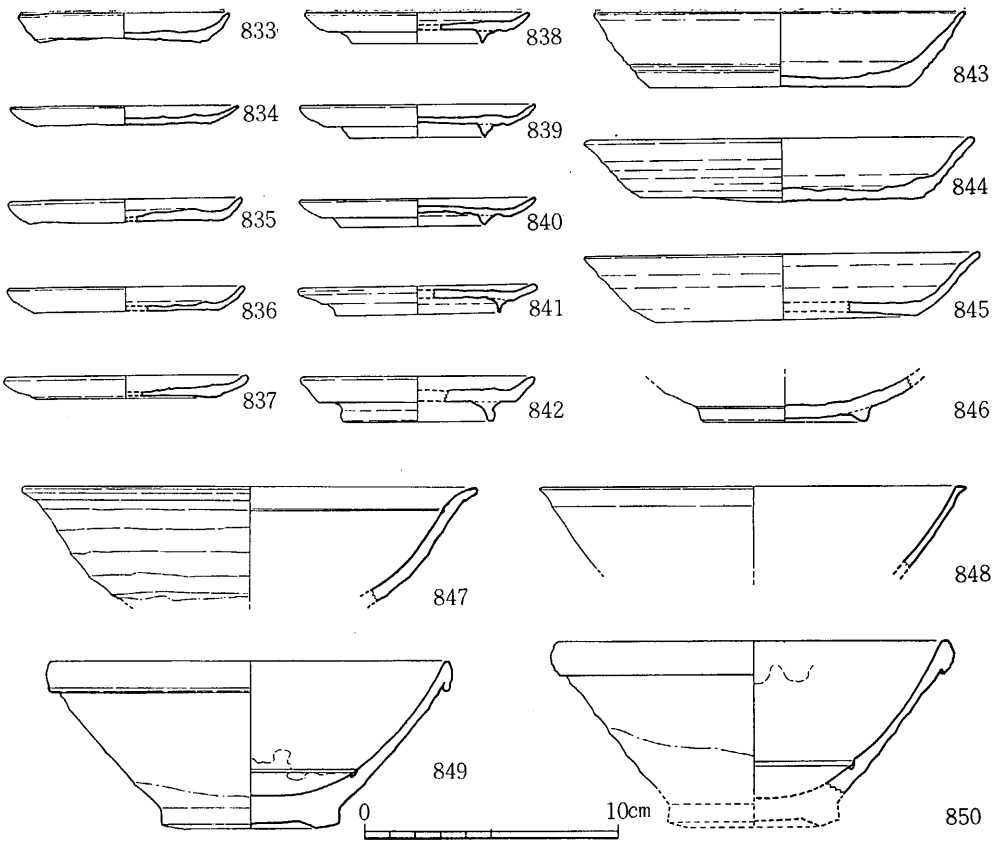
c．杯（Ⅱ－**1**－**c**）（843～845）　口径14.7～15.6cm，底径10.2～11.2cm，器高2.5cm～3.0cmで，灰黄色ないし橙黄色を呈し，胎土に少量の砂粒を含む。

f．高台付小皿（Ⅱ－**1**－**f**）（838～842）　口径8.9～9.5cm，高台径5.2～6.6cm，器高1.1～1.8cmで，高台部は小さい。第3次調査区のＳＫ312土坑下部の高台付小皿（Ⅱ－**1**－**f A**）に近い。

瓦器椀（846）　底部で，内面は灰白色，外面は灰色味のある黒色である。

白磁椀（847～850）　**847・848**は3類の白磁で，**848**は口縁が少し開き，その内側に沈線が一本はいつている。胎土は灰白色で，半透明の濁黄色の釉がかかっている。**849～850**は5類の白磁で，玉縁をもち，見込みに沈線が一本はいっている。**849**の胎土は黄白色で，釉は青灰色である。**850**の胎土は灰味白色で，半透明の黄味灰白色の釉がかかっている。

なお同じ暗茶褐色粘質土からは**931・942・943**が出土していて，**931**は4類の白磁で，口縁は平縁で，口縁内側に沈線がつけられ，見込みに焼成前に釉をかきとった跡が環状に残っている。胎土は淡灰色で，半透明の黄味明灰色の釉がかかっている。**942**は口縁端が外へ開き，内部の屈折部に沈線らしきものが走っている。胎土は明灰色で，半透明の青味灰色の釉が，内面は



8図　土師器，瓦器，白磁実測図（暗茶褐色粘質土出土）

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	8.3	6.5	1.2	1	8.9	5.2	1.2	1	(14.7)	(10.2)	3.0
2	9.05	7.0	0.8	2	(9.3)	6.2	1.8	2	(15.2)	11.2	2.5
3	9.25	7.7	0.9	3	(9.4)	5.35	1.3	3	15.6	10.25	2.6
4	9.3	7.3	1.0	4	9.4	5.75	1.1				
5	9.6	7.5	0.9	5	9.5	6.6	1.2				

4表　暗茶褐色粘質土出土土師器計測表

白色化粧土の上に，外面は直接体部上半にかかっている。**943**は口縁端がやや開き，ヘラで削り出された太めの高台をもっている。胎土は灰白色で，半透明の黄灰色の釉が，内面は白色化粧土の上に，外面は直接に高台近くまでかかっている。**942・943**は第5次，第3次調査の

報告まで，底部の形から９類に含めて考えてきたが，白磁と考えて時代もさかのぼらせることができそうである。底部も９類の青磁よりは，やや太めである。今後この種の磁器の出方に注目したい。

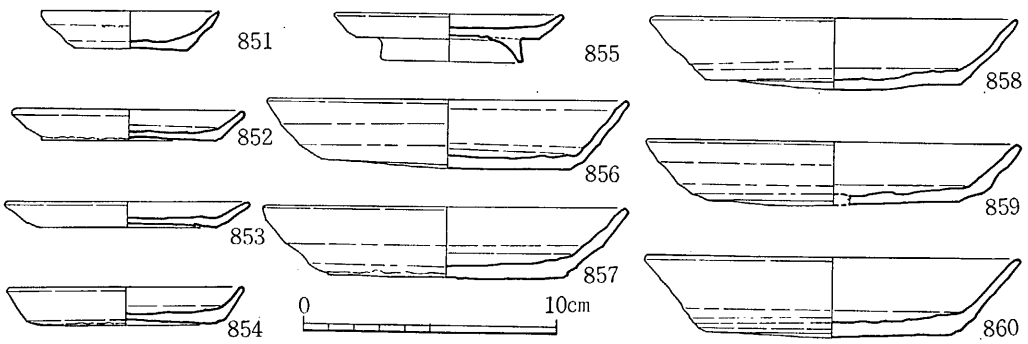
〔**2**〕

ＳＤ401溝（ＭＲ32区）（９図，５・６表）

b．小皿（Ⅱ－**2**－**b**）（852～854）　口径9.2～9.4cm，底径7.0～7.3cm，器高1.05～1.5cmで，白黄色ないし灰黒色で，器面に横ナデが，内底にナデがみられる。底面に糸切り痕と板目がついている。なお**851**は特小皿とでもよぶべきであるが，Ⅱ－５類の特小皿とはやや異なる。

c．杯（Ⅱ－**2**－**c**）（856～860）　口径14.3～14.9cm，底径9.5～10.0cm，器高2.7～3.0cmで，白黄色ないし黄褐色で，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にナデがみられる。底面に糸切り痕と板目がついている。

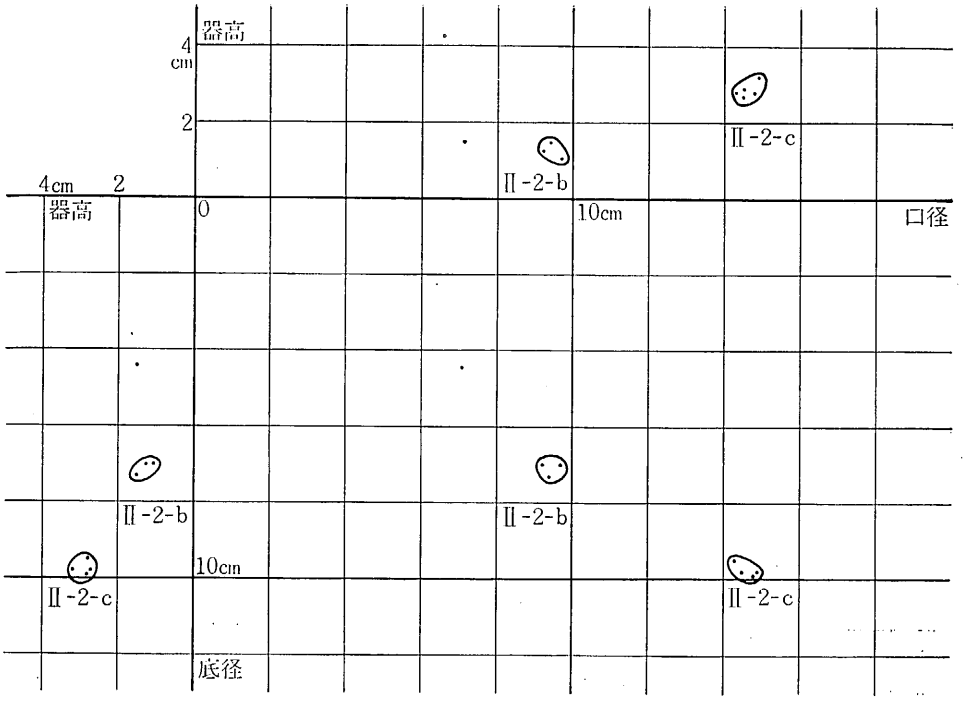
855はⅡ－３類の高台付小皿で，混入したものであろう。



9図　土師器実測図（ＳＤ401溝出土）

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	7.1	4.4	1.5	1	9.1	5.6	1.9	1	14.3	9.5	2.8
2	9.2	7.0	1.25					2	14.5	9.8	2.7
3	9.4	7.3	1.5					3	14.5	10.0	2.9
4	(9.7)	(7.0)	1.05					4	(14.8)	9.9	2.8
								5	(14.9)	9.8	3.2

5表　ＳＤ401溝出土土師器計測表



6表　ＳＤ401溝出土土師器の法量

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	底径		口径	底径	器高
1	8.0	6.5	1.0	1	8.25	5.1	1.6	3	(12.6)	(8.9)	2.3
2	8.2	6.75	1.0	2	8.7	5.8	1.6	4	(12.7)	(8.2)	2.4
3	8.2	6.95	0.95	3	8.8			5	13.0	8.0	2.4
4	8.3	6.8	1.1	4	9.0	5.1	1.6	6	(13.0)	(8.9)	2.1
5	8.4	6.9	0.95	5	9.1	4.9	1.7	7	13.8	9.2	2.0
6	8.5	6.95	1.0	6	9.6	5.7	2.05				
7	8.6	7.1	0.9								
8	8.6	7.25	0.8								
9	8.8	7.1	1.0								
10	9.2	7.25	1.25								

杯				盤			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	(12.5)	8.0	2.25	1	(19.0)	14.5	2.5
2	12.5	8.1	2.3	2	(22.6)	(16.4)	2.85

7表　ＳＫ407土坑出土土師器計測表

2. 上層土師器・Ⅱ類

〔3〕

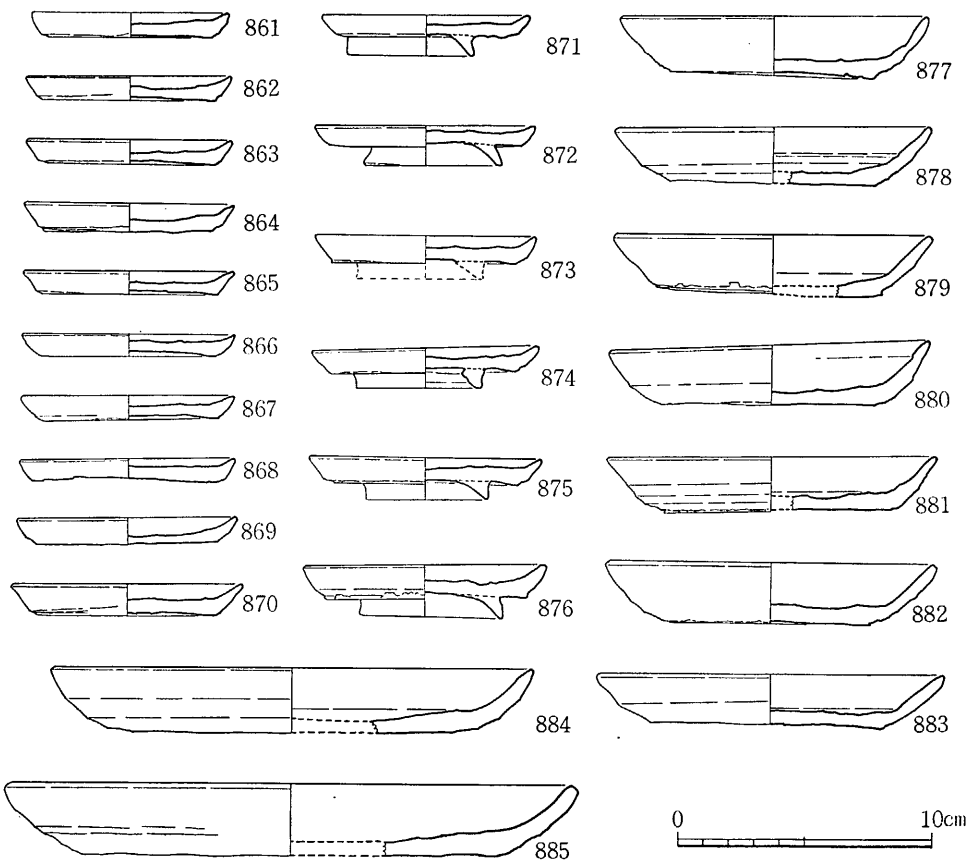
ＳＫ407土坑（10図，７・８表）

b．小皿（Ⅱ－**3**－**b**）（861～870）口径8.0～9.2cm，底径6.5～7.25cm，器高0.8～1.25cmである。

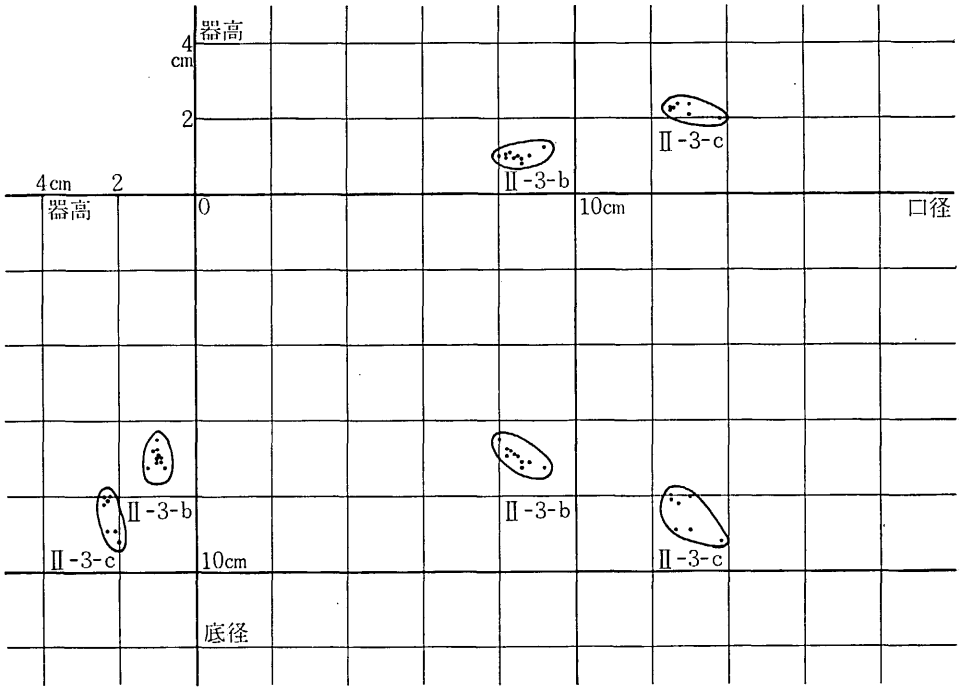
c．杯（Ⅱ－**3**－**c**）（877～883）口径12.5～13.8cm，底径8.0～9.2cm，器高2.0～2.4cmで，**883**だけが口径が特に大きい。底径は８cmと９cmとの二つに分かれる傾向がある。

f．高台付小皿（Ⅱ－**3**－**f**）（871～876）口径8.25～9.6cm，高台径4.9～5.8cm，器高1.6～2.05cmで，粘土紐を環状にして貼りつけたような簡単な高台がつき，しかも底面中央からずれることが多い。

土師器盤（884・885）口径19.0cmと22.6cmとの二つがある。



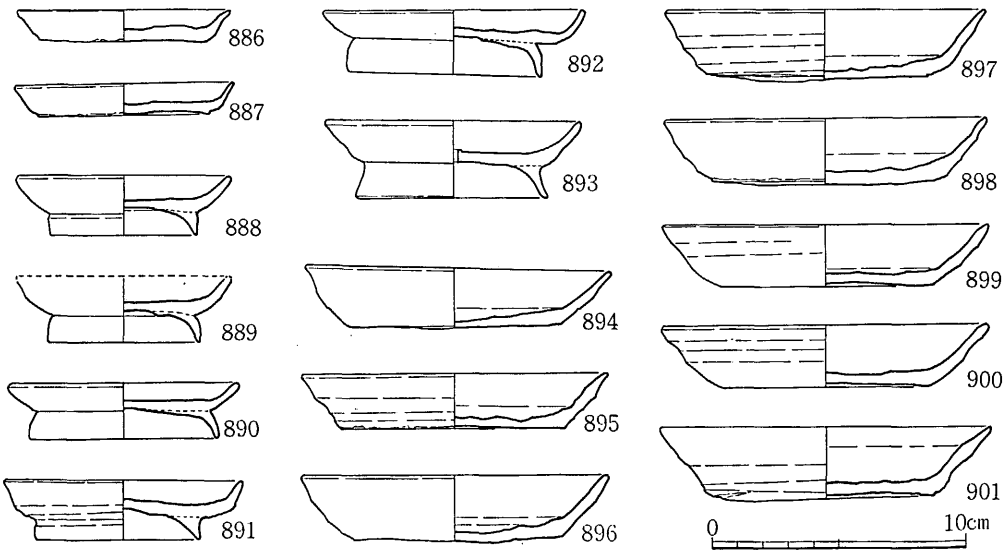
10図　土師器実測図（ＳＫ407土坑出土）



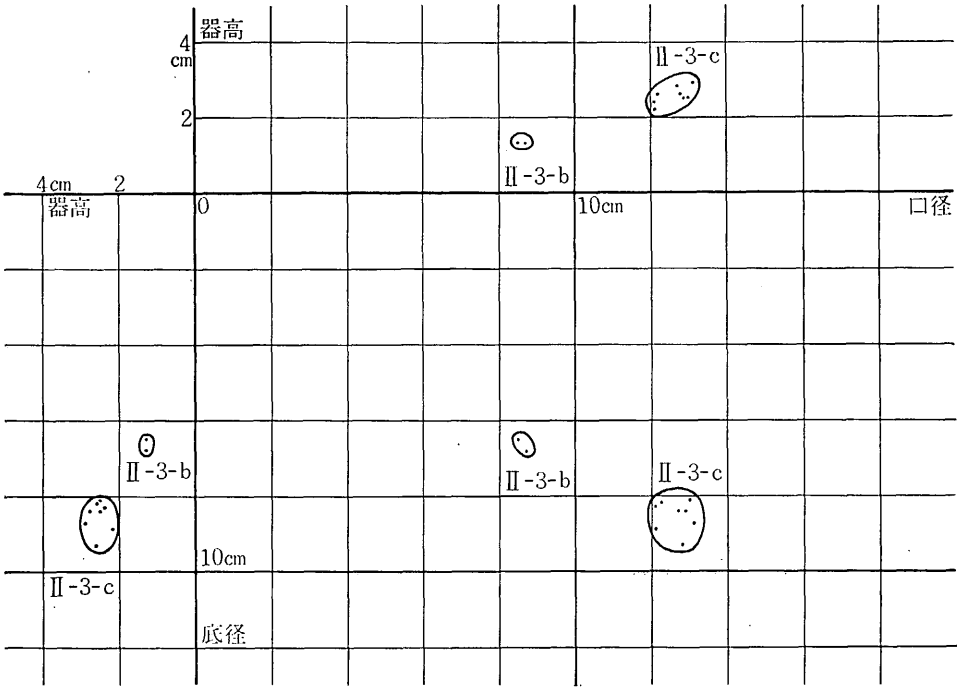
8表　ＳＫ407土坑出土土師器の法量

ＭＰ27区黒褐色土（４層）（11図，９・10表）

b．小皿（Ⅱ－**3**－**b**）（886～887）　口径8.5～8.7cm，底径6.5～6.8cm，器高1.3cmで，ＳＫ407土坑の小皿にくらべて薄い。



11図　土師器実測図（ＭＲ27区黒褐色土出土）



9表　ＭＰ27区黒褐色土出土土師器の法量

c．杯（Ⅱ－**3**－**c**）（894～901）　口径 12.1～13.1cm，底径 8.1～9.3cm，高さ 2.2～2.9 cmである。

f．高台付小皿（Ⅱ－**3**－**f**）（888～893）　口径8.5～10.3cm，高台径5.8～7.7cm，器高2.2～3.1cmで，高台は薄手で，ていねいにつくられ，外湾する傾向がある。**893** は底部中央に，焼成前にあけた孔がある。同じⅡ－３類でもＳＫ407 土坑の高台付小皿とは異なる一群の高台

小皿			
	口径	底径	器高
1	8.5	6.5	1.3
2	8.7	6.8	1.3

高台付小皿			
	口径	高台径	器高
1	8.5	5.8	2.4
2		6.0	
3	9.1	7.5	2.2

高台付小皿			
	口径	高台径	器高
4	9.4	7.05	2.4
5	10.1	7.7	3.1
6	10.3	7.7	2.5

杯			
	口径	底径	器高
1	12.1	8.3	2.4
2	12.1	8.9	2.2

杯			
	口径	底径	器高
3	12.15	8.2	2.6
4	12.7	8.4	2.8
5	12.8	9.3	2.6
6	12.9	8.4	2.5
7	13.0	8.1	2.5
8	13.1	8.7	2.85

10表　ＭＰ27区黒褐色土出土土師器計測表

付小皿である。杯の口径もやや小さくなる傾向があり，Ⅱ－3類の中でもやや新しい時期のものかもしれない。

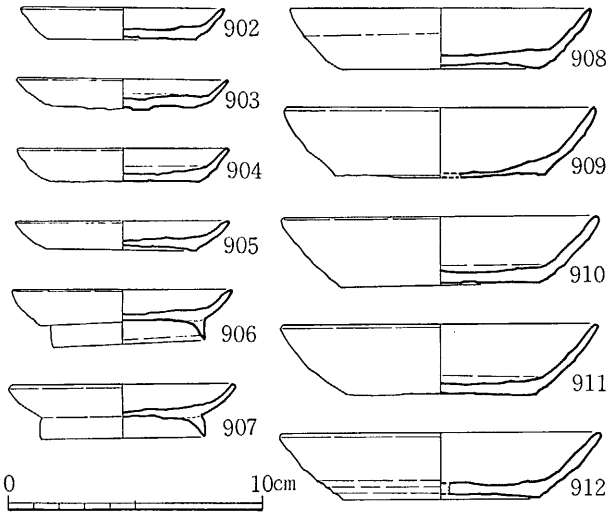
〔4〕

SK424土坑（12図，11・12表）

b．小皿（Ⅱ－**4**－**b**）（902～905）口径8.1～8.4cm，底径5.8～6.05cm，器高1.15～1.3cmである。

c．杯（Ⅱ－**4**－**c**）（908～912）口径11.8～12.7cm，底径7.1～8.3cm，器高2.4～2.8cmである。

f．高台付小皿（Ⅱ－**4**－**f**）（906～907）口径8.65～9.0cm，高台径5.6～6.55cm，器高2.1～2.15cmである。

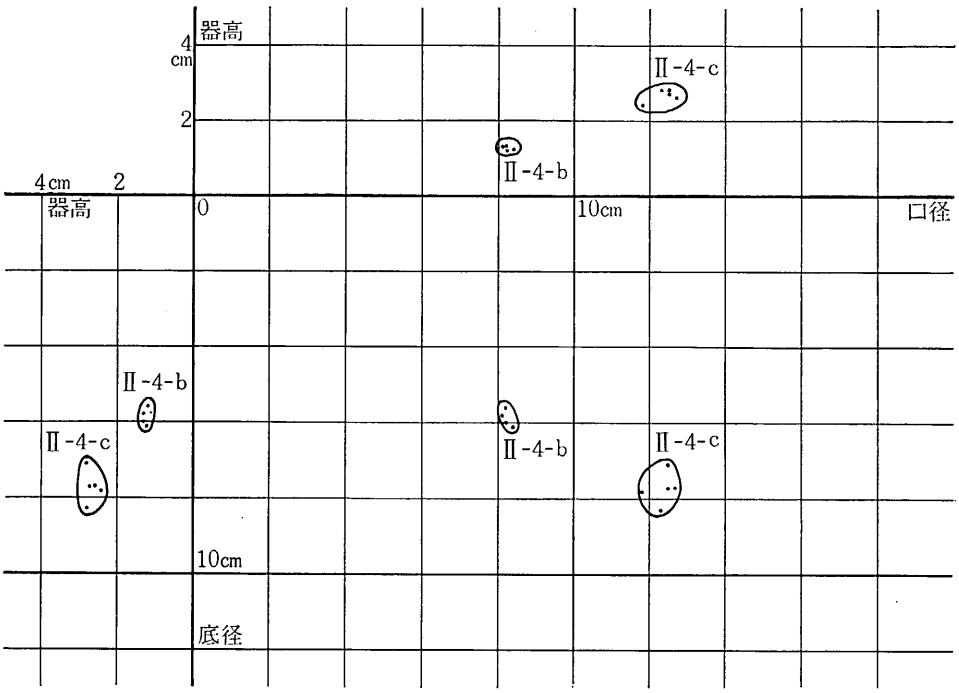


12図　土師器実測図（SK424土坑出土）

MP27区黒褐色土のⅡ－3類の土師器とくらべるとあまり大差がなく，将来はSK244土坑のものとあわせて別に1類を設定すべきかもしれないが，今回は従来の分け方に従った。SK424土坑の土師器は，MP27区黒褐色土出土の土器にくらべ杯の口径はかわりないが，底径は小さくなっている。また小皿も小さくなっている。高台付小皿は高台部が低くなる傾向がある。

小皿				高台付小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	高台径	器高		口径	底径	器高
1	8.1	5.8	1.25	1	8.6	6.0	2.15	1	11.9	7.8	2.4
2	8.2	5.6	1.2	2	9.0	6.4	2.1	2	(12.3)	(8.3)	2.8
3	8.3	6.0	1.3					3	12.5	7.1	2.8
4	8.4	6.05	1.15					4	12.5	7.7	2.1
								5	12.7	7.7	2.6

11表　SK424土坑出土土師器計測表



12表　ＳＫ424土坑出土土師器の法量

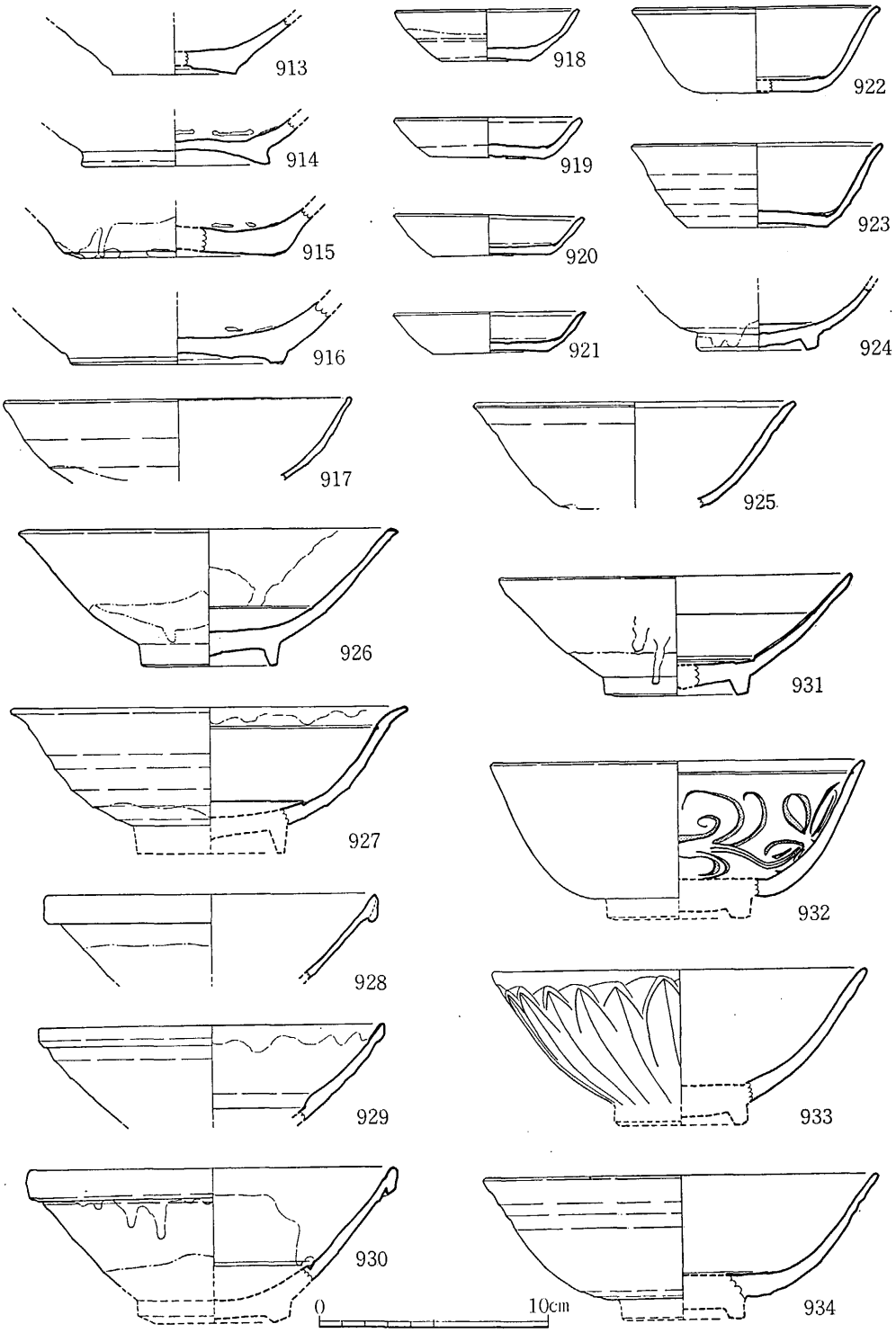
以上のように土師器をみてみると，中層からはⅡ－１類とⅡ－２類土師器，上層からはⅡ－３類とⅡ－４類の土師器が出土している。最上層はⅡ－４類が主体であるが，Ⅱ－３類土師器もある。

3．磁　　器　（13・14図）

第４次の調査でも，青磁，白磁などの磁器類が多く出土した。とくにＳＥ401井戸や中層である暗茶褐色粘質土からは白磁が多くみつかった。なお分類は従来通りである。

１類（13図913〜917）　深緑色ないし褐味灰緑色の釉が薄くかかった青磁で，見込みと底面に目あとが残っているものが多い。**913** は巾広い高台をもつもので胎土は灰黄色を呈し，緑味灰黄色の釉が全面にかかっている。**914** は胎土は灰色で，釉は灰黄色である。ＳＫ425土坑出土 **915**は胎土は黄味灰色で，釉は風化して淡茶灰色を呈している。**916**は低い高台がつくもので，胎土は黄味淡灰色で，釉は灰黄色である。**917** は薄手で，胎土は明灰色で，釉は風化して灰白色を呈している。ＳＫ427土坑出土。

３類（926・927）白磁で，薄く高い高台をもつ椀で，見込みと口縁内側に沈線を入れたものが多い。**926** は口縁の先端が外に張り出し，口縁頂部は平坦である。胎土は青味灰白色で，白い化粧土をかけた上に，緑灰色の釉がかかっている。ＳＫ425土坑出土。**927** は口縁が外反し，


913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
0
10cm

13図　青磁，白磁実測図

胎土は灰白色で，釉は半透明の黄灰色である。

4類（829・931）見込みの部分に，焼成前に，環状に釉を削り取った跡がある白磁で，高台はやや低く，厚味がある。

5類（849・850・928・930）口縁が折り重ねたような玉縁を持つ白磁で，見込みの部分に沈線がいれてある。**928**の胎土は白色で，体部上半と内面に灰白色の釉がかかっている。**930**はＳＫ427土坑から出土したもので，胎土は黄白色で，緑灰色の釉がかかる。**929**は第３次出土。

6類（918～925）口の部分の釉が，焼成前に削り取られている白磁で，皿と椀がある。**922**は11図の土師器に伴うもので，**923**もほぼ同一の層から出土したものである。**925**はＳＫ401土坑出土で，胎土は明灰白色で，灰白色の釉がかけられた椀形のものである。

7類（932～934）低い高台を有し，胴部はやや丸味をおびた青磁で，数種に分けられるが，底部でみるかぎり大差はない。

A．外側は無文で，内側に二本の沈線で区切られた空間に飛雲文が描かれたものである。

B（392）外側は無文で，内面にヘラによる花文が描かれたもので，**392**の胎土は黄味灰白色で，釉はやや風化して明緑灰色を呈している。

C（933）外面に蓮弁文が削り出されたり，沈線で描かれた青磁で，**933**の胎土は青灰色で釉は濁緑色である。

D（934）器形は同じで，無文のものである。**934**の胎土は暗灰色で，暗灰緑色の釉がかかっている。

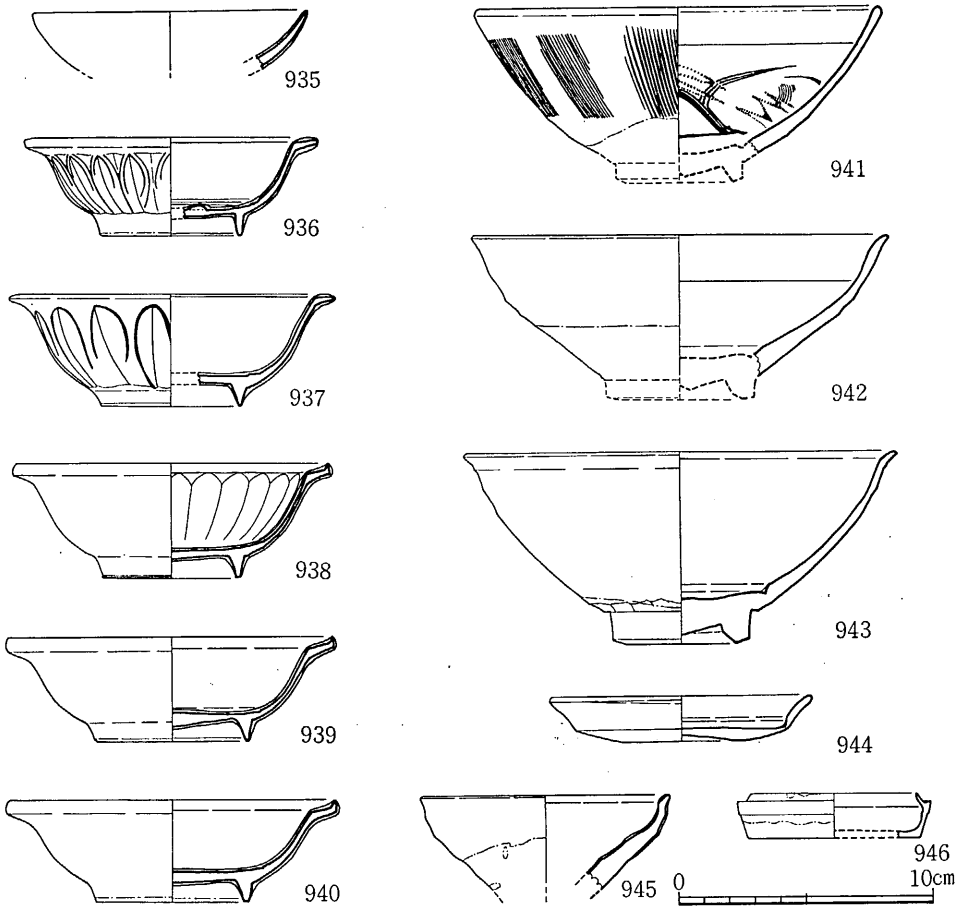
8類（14図935～940）厚く釉がかかり，高台は薄く，床付面は焼成前に釉が削り取られ，褐色を呈している。今回は口縁が横に張り出した椀形の良好な資料が多い。**936**は外面に蓮弁文が彫られ，見込みに双魚文がある。胎土は白色で，釉は薄緑色である。**937**は同じく外面に蓮弁文があり，胎土は灰白色で，釉は緑色である。**938**は11図の土師器に共伴したもので，内面に蓮弁文が削り出され，胎土は灰白色で，釉は緑色である。**940**はＳＫ401土坑から出土した完形品で，胎土は白色で，釉は緑色を呈す。

9類（941・944）いわゆる珠光青磁とよばれるもので，櫛歯による文様が描かれ，外面にも条線がひかれたものが多い。**941**は胎土が明灰色で，釉は灰黄色である。**944**は無文の小皿で，胎土は白灰色，釉は灰緑色で，底面は焼成前に釉をかきとっている。

10類（945）いわゆる天目とよばれるもので，**945**の胎土は灰色で，暗褐色の釉が厚くかかっている。

11類（図版16の２）薄い青色の釉がかかった青白磁で，花文をもつ極めて小さな小皿や，魚の浮文がつけられた皿などがある。

12類（図版16の２）高麗青磁の陶枕の破片が出土している。胎土は灰色で，灰青色の釉がかかっている。文様は白色の文様が象眼され，円内に黒と白で花文が象眼された優品である。



14図　青磁，天目実測図

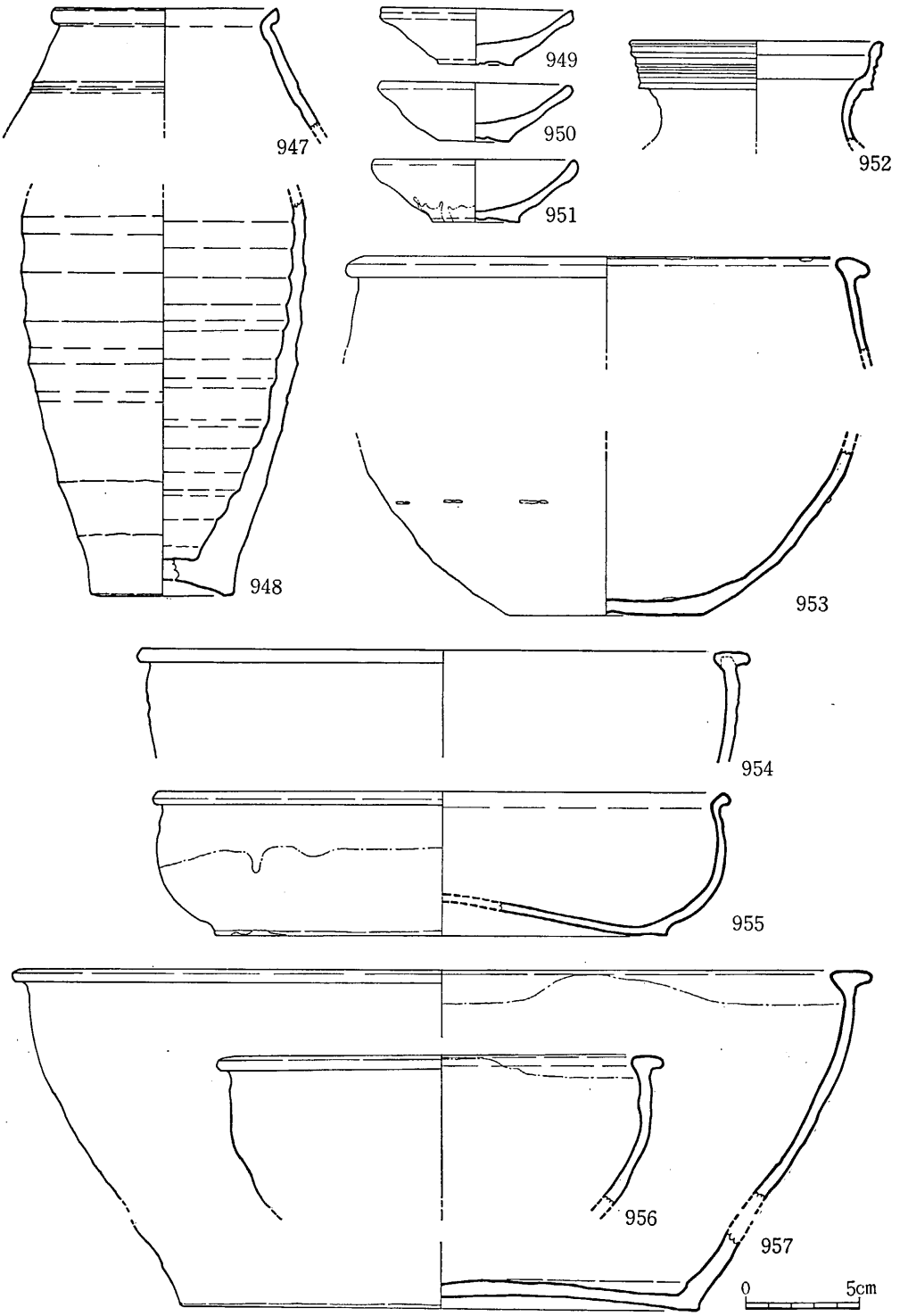
このほかに**946**のような合子の身がある。これも11図の土師器に共伴したもので，胎土は黄灰色で，蓋受部と底部とを除いて，灰緑色の釉がかかっている。

4．雑　　器　(15図)

明瞭な青磁・白磁などの磁器のほかに，色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないので，ここでは一応雑器としてまとめた。

1類（947・948）　短い口縁がやや開いたもので，**947**はＳＫ418土坑出土のもので，肩部に沈線らしきものが二本走り，胎土は灰色で，釉は風化して灰白色を呈している。**948**は瓶形の下半で，胎土は明灰色で灰緑色の釉がかかり，内面にも薄く釉がかかっている。ＳＫ425土坑からの出土である。

5類（949～951）　小皿で，暗褐色の薄い釉の上に，黒褐色の釉をかけたものである。



15図 雑 器 実 測 図

6類（952） 薄手で，灰黒色を呈し，胎土は茶褐色である。口縁に数本の沈線がいれられている。

7類（954～957） 口縁が外に張りだす鉢形のもので，大きな底部をもつ。黄味をおよびた釉がおもに内面にかけられ，褐色の絵が見込みに描かれたものもある。**954**は11図の土師器に共伴したもので，胎土は粒子が荒く，黄灰色を呈し，釉は暗黄色で内面と口縁端にかかっている。外面に釉はなく灰褐色を呈している。**955**は丸味をおびた口縁が外に折れ胴部はふくらみ，底部は大きな上げ底である。見込みに褐色の絵が描かれている。胎土は黄灰色で粒子が荒い。緑味をおびた黄褐色の釉が内面にかかっていて，口縁上端を除いた体部上半にもかけられている。**956**は胎土は暗灰色で，黄味灰緑色の釉が内面と口縁端にかけられている。外面は紫褐色である。**957**はやや大形品で，ＳＫ410土坑からの出土である。胎土は紫灰色で，緑味灰黄色の釉が内面にかけられ，外面は青紫色である。

11類（953） 暗褐色の釉がかかった，いわゆる褐釉の陶器で，**953**は鉢形で，横に張り出した口縁の上端には釉はなく，内側に目あとが残っている。また胴下部と見込みにも目あとがついている。胎土は赤褐色で，黒褐色の釉がかけてある。

5. 瓦 （図版17の１）

瓦は細片が多く出土したが，まとまったものはすくない。いずれも平安時代のものである。軒丸瓦としてはＳＫ407土坑出土の素文縁三ツ巴文の瓦（左）と素文縁単弁十二弁連華文の瓦（右）がある。

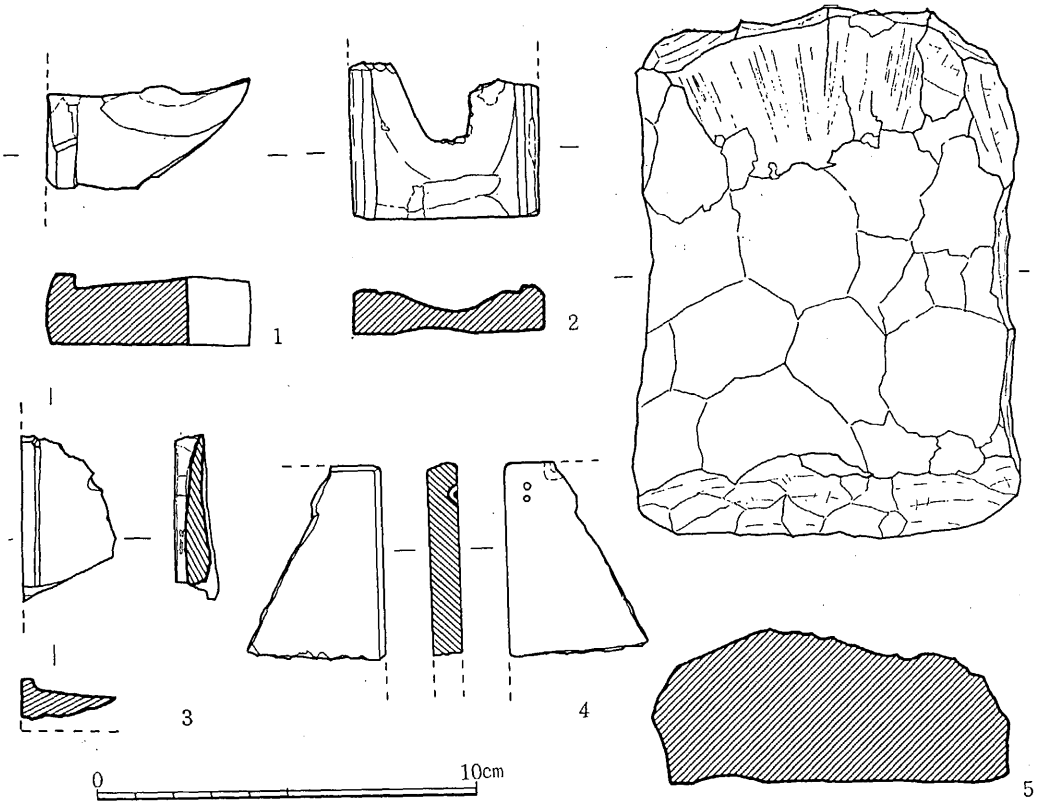
6. 石 製 品 （16～19図，図版18，19，20の１）

石製品は滑石製品がほとんどで，他には硯・砥石などがわずかに見られる程度である。

1～3は硯で，**1**は明灰色をなす石材を使用しており，凝灰岩質のものであろうか。現存するのは小片で全容は不明であるが，側面肩部高1.9cmを測り比較的大型のものであろう。最上層焼土内出土。**2**は小型のもので，下端部の肩が作り出されていない。長期間使用されたらしく陸部の磨耗が著しい。なお，硯が折損した後，陸部側面に抉状の切り込みをした痕跡がみられ，左右肩部には１条の線刻がなされている。灰黒色をした貢岩である。上層暗茶褐色土出土。

3は輝緑凝灰岩製で裏面は剥落している。海部をわずかに残し深さは７mmまで測ることができる。暗茶褐色土（２層）出土。

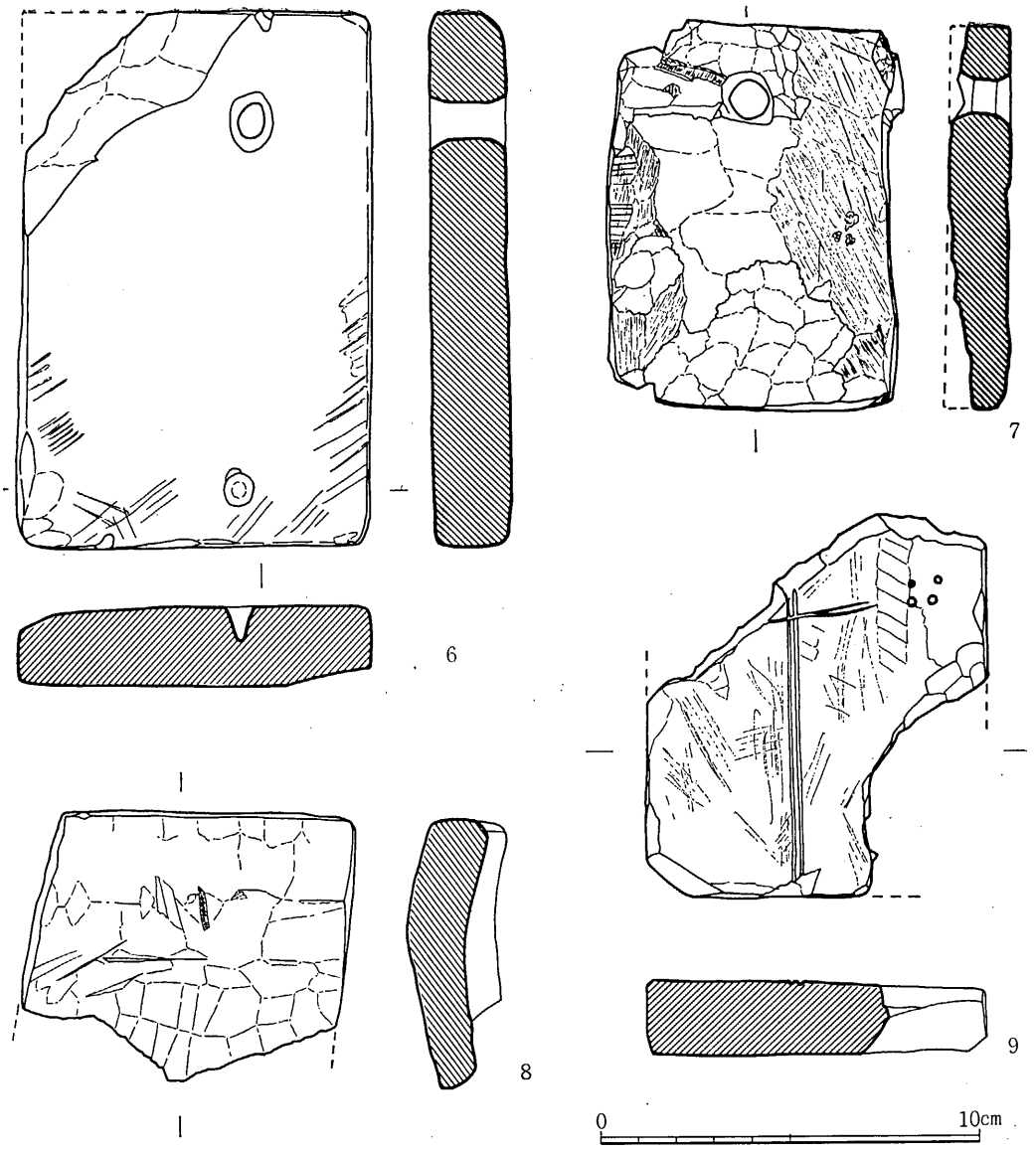
4は石帯で蛇紋岩製である。現存長4.1cmを測り８mmの厚さをなす。裏面に径２mm弱の２孔を１対とした潜り孔をあけている。本来はこれを四隅あるいに三方にあけたものである。上層暗茶褐色粘質土出土。**5**は輝緑凝灰岩の石板で，粗割により周縁を整えて長方形とし，一面は横からの打裂を加えて面としている。打裂面には一部分研磨された個所がみられる。裏面



16図 石 製 品 実 測 図

は全面研磨されて平坦面をなす。輝緑凝灰岩は別名「赤間石」とも呼ばれ，山口県厚狭郡地方に産し硯の石材として利用されているが，今次の調査でも輝緑凝灰岩製の硯が発見されており，5の輝緑凝灰岩は硯の素材となるもので，その製作過程を示すものであろう。なお輝緑凝灰岩は飯塚市笠置山でも産出し，ここのものは弥生時代の石庖丁の石材として利用されているが，今回出土の輝緑凝灰岩はどちらのものが搬入されたかは不明である。SK416出土。

6～9は滑石製石板で，**6**は灰色がかった白濁色の滑石を使用し，長方形の中央よりやや縁よりの上端と下端に孔を有し，上端のものは両面より穿孔されていて貫通孔であるが，下端のものは貫通しておらず9mmほどの円錐形をなす孔である。長辺14.3cm，短辺9.3cm，厚さ2.1cmを測り，一端を欠くがほぼ完形のものである。器面は表裏ともに研磨されているが，両面周縁部近くに細い線条痕が一定方向に走っている。上層暗褐色土出土。**7**は石鍋の底部を利用したものであろうか片面は黒灰色にくすんでいる。上部に両面穿孔を有し，長辺は横方向の研磨がみられる。長辺10.2cm，短辺7.6cm，厚さ1.7cmを測る。裏面端には刃物による線条痕が深さ2～3mm，長さ6cmにわたってみられる。SK410出土。**8**は石鍋の鍔付近を利用したもので，口縁部に交わって鋸により2辺を切り出し，鍔の部分を削り落している。下半部は



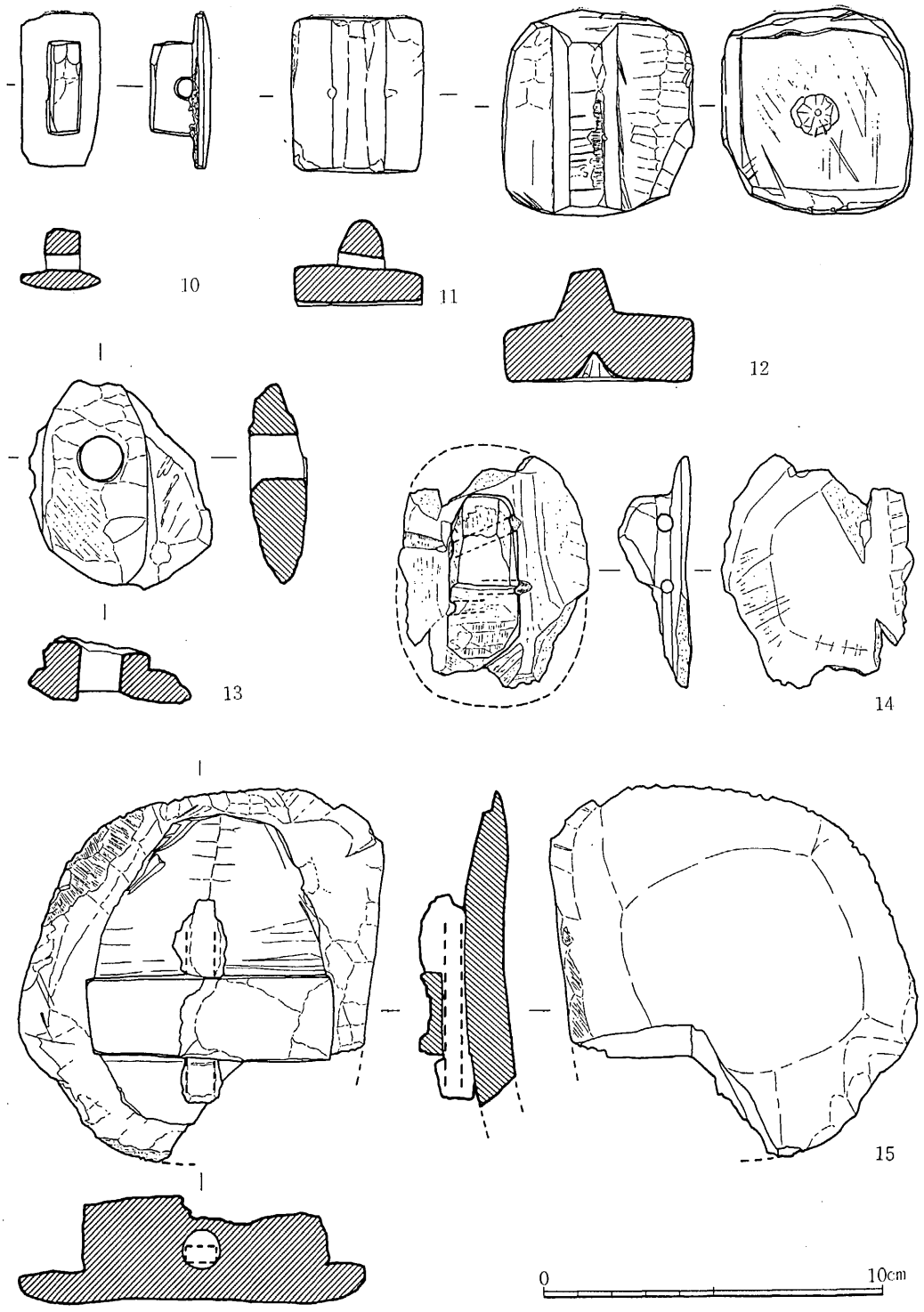
17図　滑石製品実測図（1）

半折しており，表面は一部黒く変色し，側面は湾曲を残したままである。ＳＫ413出土。**9**は雲母を含むような銀灰色滑石を利用しており，全体的に黒く変色して一部分にはススの付着がみられる。片面の中央よりやや左よりに２条の線条痕が長辺方向に刻まれ，上部ではそれと直交する線条痕が走っている。孔の有無は半折しているため不明であるが，線条痕のある面には４ケ所深さ４mmほどの小孔が穿たれている。長辺10.2cm，短辺９cm，厚さ1.8cmで上層暗黒褐色土出土。

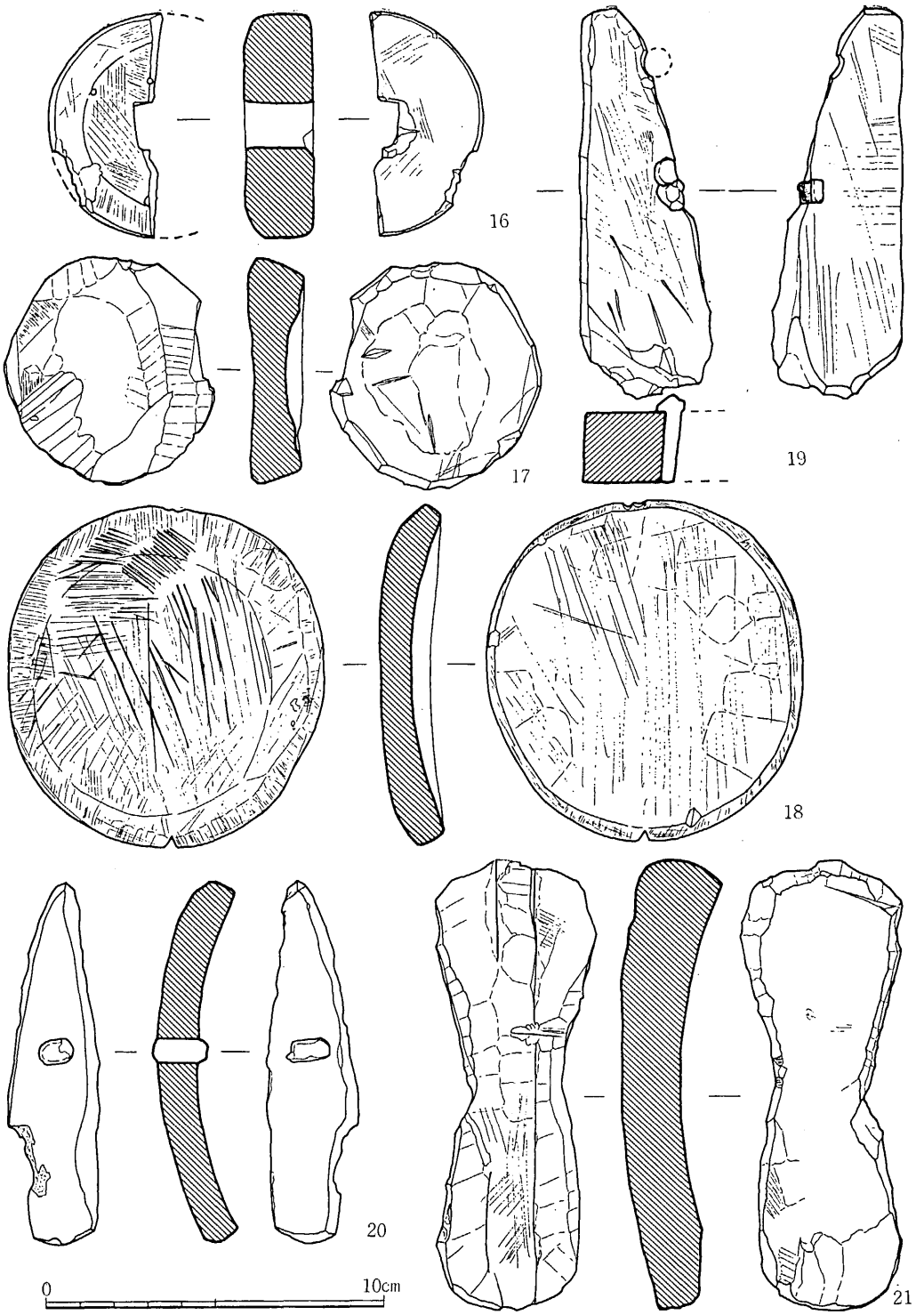
10～15は「つまみ」あるいは把手状のものを有する滑石製品で，長方形，方形，楕円，不整形と各種の形態がある。**10**は長辺4.6cm，短辺2.3cmの体部に長さ2.8cm，巾1.1cm，高さ1.3cmのつまみ部をつくり径6mmの貫通孔があけられている。底面は滑らかでやや外湾する。全面に煤が附着している。SK427出土。**11**は石鍋の鍔を利用したもので，鍔と直交して径4mmの孔をあけている。長辺4.6cm，短辺3.9cm，高さ2.5cm。上層暗茶褐色粘質土出土。**12**も鍔部を利用した方形をなすもので，長辺6cm，短辺5.5cm，高さ3.4cmを測る。加工に際しては石鍋の内面に方形の輪郭を刃物で形どりし，それに沿って面取りしたもので，裏面中央には深さ8mm程の削り出しによる穿孔がみられる。上層焼土出土。なお，これと全く同一なものが福岡市の蒲田遺跡でも出土しており，特殊な形態を示すものではないことがうかがわれる。註　**13**は周縁部を欠損するが長さ6cm，幅3.1cm，高さ0.9cmの削り出しを有し，径1.3cmの貫通孔をもつ。裏面は一部研磨される。上層出土。**14**も鍔部分を利用したものでつまみ左側面にはススの附着がみられる。鍔を長方形のつまみ状に2段に削り残し，それに上・下の2ケ所両側面より穿孔をほどこしている。図示した上方の孔は斜めに貫通しているが下方のものは中央部付近にてくい違い貫通していない。裏面は多少の凹凸はあるが滑らかに研磨されている。一部周縁を欠くが復元すれば8cmほどの長円形を呈するものであろう。上層焼土下出土。**15**は長径10.7cm，短径10.4cmの不整形をなし，高さ3.2cmを測る。周縁は一部欠損する。長さ7.1cm，幅2.4cm，高さ2.3cmの長方形把手のまわりを楕円形状に残して外縁を削り出し，楕円形部分は黒く変色して一部煤が附着している。把手のほぼ中央部に側面より径1cmほどの貫通孔をあけ，それに約5cmの断面長方形をした鉄片を挿入している。裏面には顕著な痕跡はみられないが周縁部近くは薄く削り出されている。中層褐色土出土。

16～18は円形をなす滑石製品で，**16**は半折するが径3.3cm，厚さ2.0cmのもので中央に1辺1.3cmの方形孔を有する。表面は外縁よりに一段稜をつくり，3ケ所に径2mmの小孔が深さ5～9mmで穿たれている。裏面は平坦で周縁部には周縁方向に使用痕状のものがみられる。上層暗茶褐色粘質土出土。**17**は長径6.8cm，短径6.2cm，厚さ1.6cmで上下方向の削りによる縁取りがなされている。表面には工具痕が残り，裏面は不定方向から削り出して凹みを作る。特に使用痕状のものはみられない。下層柱穴内出土。**18**は長径10.1cm，短径9.3cm厚さ中央部で0.9cm，高さ1.8cmを測り，皿状をなすものである。器面は滑らかであるが一面には不定方向に細かい線条痕が走っている。これは整形のためのものとは考えられず使用痕であろう。周縁は縁方向の研磨で滑らかにしてあるが，その上を縦・横に線条痕が残る。上層暗黒褐色土出土。

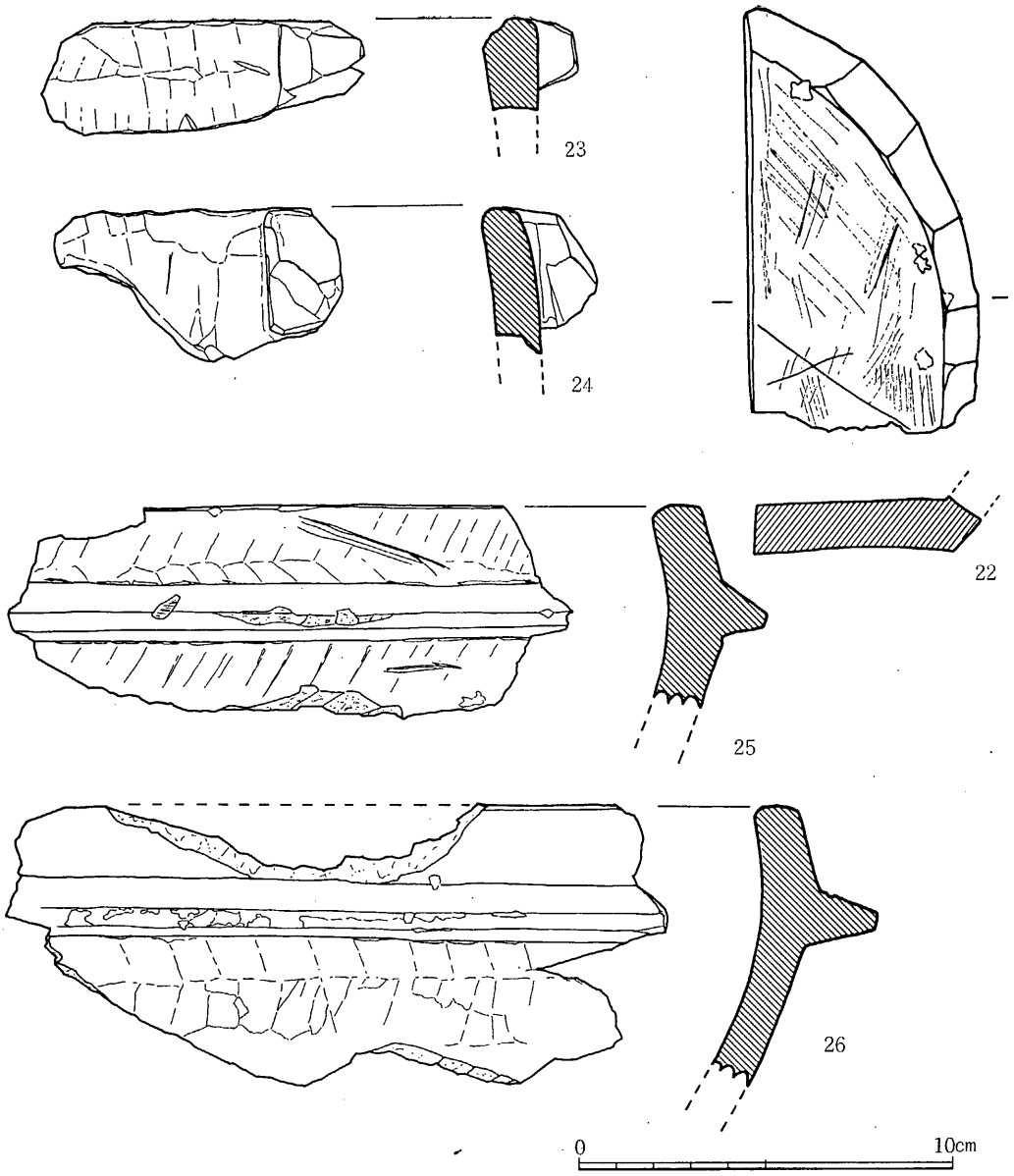
19は現存長11.6cm，幅3.9cm，厚さ2.1cm，のもので中央部より半折している。上半部に径8mmほどの円形孔を2ケ所あけ，下の孔には角釘を挿入している。釘は裏面にて折損している。本来は方形をなすもので角釘は石板を固定するためのものと思われる。上層暗茶褐色土出土。**20**も19と同様に鉄を挿入するものであるが，両端ともに完結している。石鍋の胴部で一面はス



18図　滑石製品実測図（2）



19図　滑石製品実測図（3）



20図　滑石製品，石鍋実測図

スけている。上層暗黒褐色土出土。**21**は鍔部分を利用したもので鍔部の痕跡は両端にて認められる。長さ13.4cm，幅4.7cm で中央部にて抉り込まれ 2.7cm と狭くなる。裏面は石鍋本来の器面を残している。上層出土。**22**は石鍋底部で胴下部を打ち欠いて扁平とし，他側面は鋸による切断面を有する。裏面は黒く変色し，一部ススの付着がみられる。上層暗黒褐色粘質土出土。他にも鋸による切断面をもつ石鍋再加工品が１点出土している。

23～26は石鍋で**23**，**24**は方形こぶ状把手を有するもの，**25・26**は全周する鍔を有するもので復元口径約24cmを測る。他にも10数点出土している。

註．『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集．福岡市教育委員会．1975

7．土製品，砥石　（21図，図版18の２）

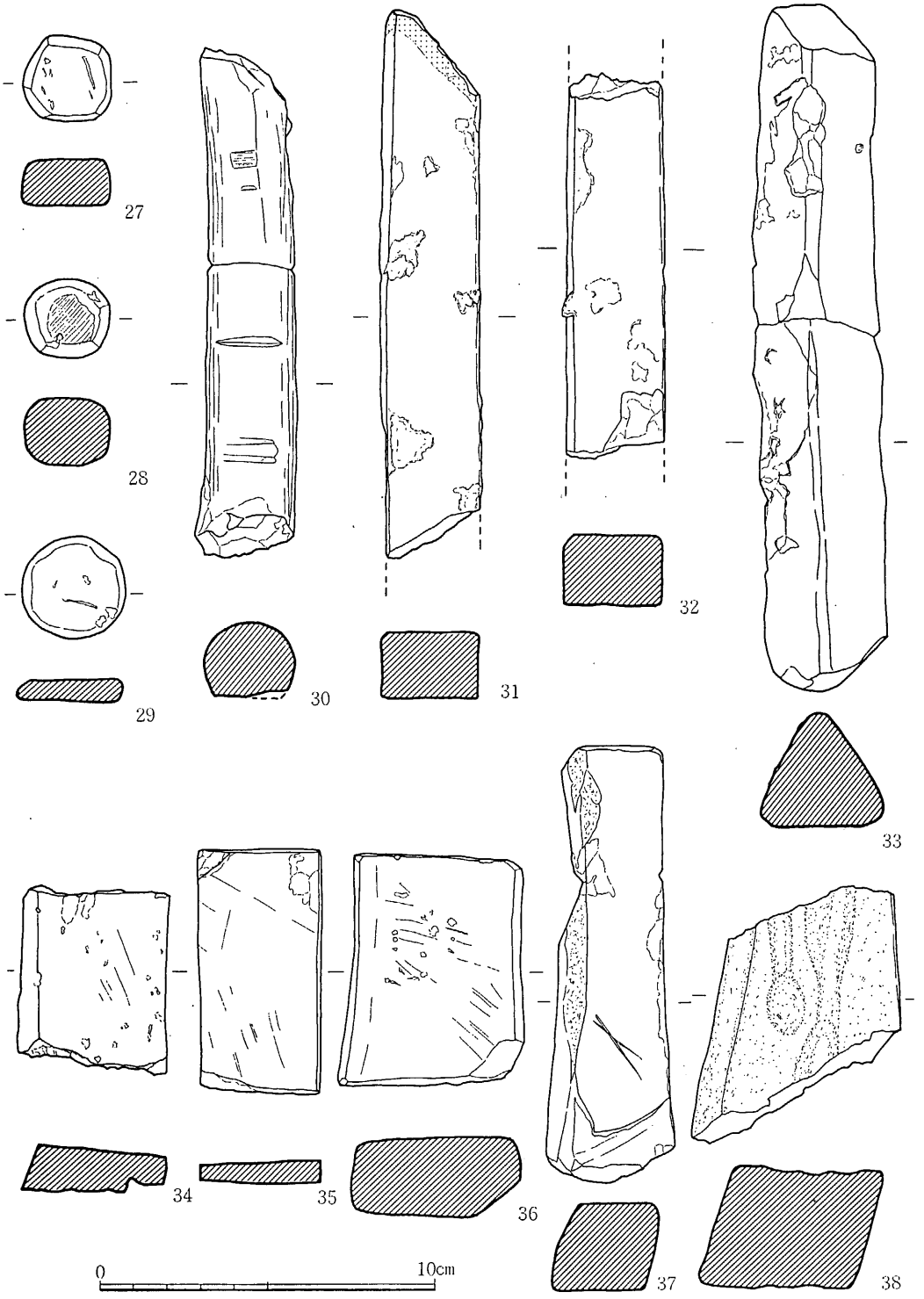
今回出土した土製品は円板状のものと柱状土製品のみである。

27～29は土製円板で**27・28**は瓦，**29**は土器片を円形に加工したものである。瓦を加工したものは他に５個出土しているが，いずれも径2.5cm内外のものばかりである。**29**は長径3.14cm，短径3.12cm，厚さ0.64cmをはかる扁平なもので，瓦を利用したものは多く発見されているが土器片を利用したものは少ない。各層より出土している。

その他に鍛冶に関連するものと思われる焼土塊が多数出土している。胎土にスサや土器片，あるいは鉄片などを混入したものや，径0.7～1.4cmほどの棒状のものに巻きつけた痕跡を有するものなどがある。色調は褐色を呈するが片面が灰黒色の火気を受けたような面をもつものもある。これら焼土塊は今後さらに詳しい分析を必要とする。

30～33は柱状土製品で，**30**は白灰色を呈し大粒の砂を含む。現存長15.3cm，径2.7cmを測り，一面は平坦となって断面器高の高いかまぼこ形となる。この平坦面は他面に比して灰色がかっていて，両端は剥離状の面を有する。上面には幅５～６mmの板状圧痕が２ケ所，断面Ｖ字状をなす抉りが１ケ所みられ，中央折損部にも割れとは異なる稜が２本みられることからここにもＵ字状の抉りが入れられたものであろう。上層柱穴出土。**31**は下端を欠損するが上端は長辺に対し約50°の角度をもって尖っており，小口面は剥離したような面をなし，二次的火熱によるものか灰黒色に変色している。褐色で大粒の砂粒を含み籾殻も混入している。所々に二次的粘土の附着がみられ，断面3.0×2.0cmの方形をなす。上層出土。**32**も断面方形をなすもので両端を欠損する。上層出土。**33**は断面３角形をなすもので方形のものに比して例は少ない。黄褐色を呈し，両端の小口部は完結で体部とは異なった肌合いをし，剥離したような面をつくる。両端は１cmほどの巾でわずかに黒変し，左側面には粘土の付着がみられる。上層焼土内出土。これら柱状土製品は他にも数点出土しており，ほとんどが断面方形をなすもので，形状も同じものが多い。いずれも上層ＭＱ・ＭＲ32区付近に集中して出土しており，やはり付近からは鉱滓やとりべなど鍛冶に関連する遺物が多く出土しており，柱状土製品もこれに関係ある遺物と思われる。

34～38は砥石で，**34・35**は第３次調査出土のものである。**34**は黄灰色の硬質石材でやや荒いが仕上げ砥用のもの。**35**は黄灰色の粘板岩質のもので一面のみ使用されている。仕上げ砥用。ＳＤ301溝内出土。**36**は白黄色砂岩のものでいわゆる「天草砥石」といわれるものであろう。４面とも使用している。上層暗黒褐色土出土。**37**も36と同材質のもので断面方形をなし各面とも使用している。上層出土。**38**は硬質の砥石で両端欠損する。図示した面に２条の，裏面には３条の凹みを有している。玉類を磨くための玉砥石として使われたような痕跡を残す。上層焼土下出土。なお，これと同種のものが第５次調査（砥石No.36）でも出土している。

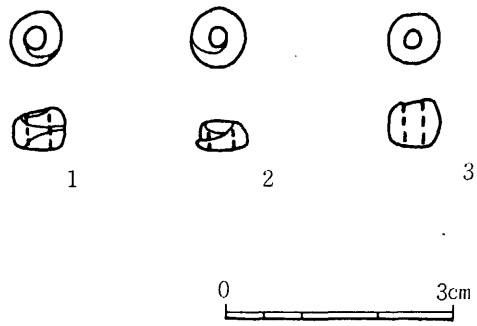


21図　土製品，砥石実測図

8. ガラス製小玉

（22図，図版22の１）

中層ＳＫ427不整円形土坑より一括出土したガラス製小玉で26個を数える。いずれも風化が著しく灰白色をなしている。本来の色調は分からない。長径7.5mmから5.55mmの小さいものまであり，６mm内外のものが最も多い。**1**・**2**に見られるように，巻き上げ痕が明瞭に残されているものと，**3**のように消されているものとがある。計測値はつぎのとおりである。



22図　ガラス小玉実測図

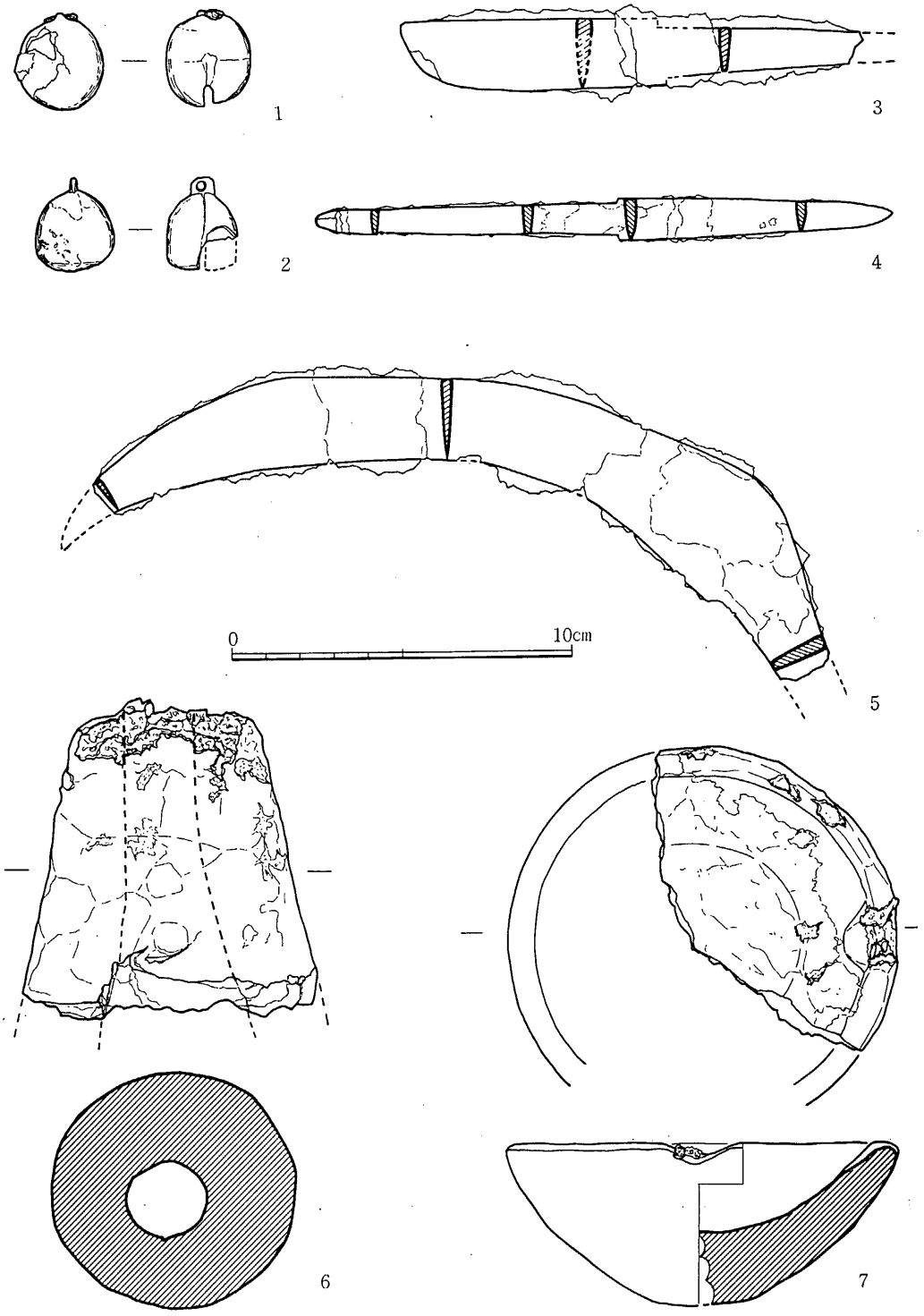
	高	径	孔径		高	径	孔径		高	径	孔径
1	5.25	6.85	3.0	10	4.8	6.7	3.15	19	3.75	6.2	2.85
2	3.9	7.1	2.95	11	4.05	7.1	3.1	20	4.05	6.0	2.8
3	6.2	7.0	2.45	12	4.4	6.35	3.0	21	4.35	6.05	2.65
4	4.6	6.8	2.9	13	4.35	6.6	3.05	22	3.95	6.0	2.4
5	4.35	6.1	2.7	14	4.2	7.0	3.15	23	4.4	6.0	2.3
6	4.55	6.9	3.05	15	4.4	6.6	3.0	24	5.2	6.0	2.35
7	3.9	7.5	3.35	16	4.45	5.55	2.55	25	4.0	5.8	2.25
8	4.4	6.4	2.8	17	4.25	6.15	2.8	26	4.05	6.05	2.35
9	4.9	6.5	2.65	18	4.6	6.35	3.1				

13表　ガラス製小玉計測表（ＳＫ427土坑出土）　（単位mm）

9. 金属製品　（23図，図版20の２，21）

今次の調査では比較的多くの金属製品が検出されているが，主なものだけについてみると，

1・**2**は青銅製鋳物鈴で，**1**は全長2.85cm，胴部最大径2.48cmを測り長円形をなす。切口のところを一部欠損する。釣手部は高さ2mmほどの「耳形」をなし，釣手部には貫通孔がみられず，釣手の下の胴頂部に孔があけられてそこに鉄片が挿入されたものである。体内には土が固着して「丸」が入っているかどうかは分からない。上層暗茶褐色粘質土出土。**2**は全長2.74cm，胴部最大径2.3cm，釣手部幅6.7mm，厚さ1.25mmを測る。胴上半部は長円形で底面は平坦面をつくる。片側の切口から体部にかけ一部欠損し，「丸」はみられなかった。胴部厚さは一定しておらず，薄い所で1.2mm，厚い所で1.95mmをはかる。切口を中心に釣手部まで接合の際の稜がみられる。中層褐色土出土。**3**は鉄製刀子である。錆銹がひどく刃部と茎部の区別



23図　金属製品，鞴羽口，とりべ実測図

や釘穴等は不明で，茎部先端を欠き現存長13.6cmをはかる。刃部は厚手で背で5mmの厚さをもち幅も2.1cmと比較的大型のものである。ＳＫ405土坑出土。**4**も鉄製刀子で，出土時は全面にわたって錆が固着していたが錆を除去するとほぼ完形をなしていた。全長17cm，刃部8.2cmで幅は中央部で1.31cm，背の厚さ3.75mmをはかる。茎部には目釘穴などはみられず，断面は長方形で，片側は平坦面をなすが他面はやや湾曲する。上層暗茶褐色土出土。

5は鉄製鎌で切先部と茎部を欠損し，錆化が著しい。現存刃部は17.4cmで復元では19cm内外のものと推定される。刃部最大幅は2.4cm，背は3mmのやや薄手の鎌である。茎部断面は背で5mm，刃部側で3mmの長方形をなし，目釘穴などは分からない。上層暗黒褐色土出土。

6・**7**は金属製品ではなく，土製品に含まれるものであろうが，鍛冶に関連する遺物なのでここで取り扱うことにした。**6**は円筒形をなす鞴羽口で現存長9cm，先端部孔径2.1cmを測り下端部はやや開く。胎土は粗砂粒を多量に含み，下半部は二次的火熱を受けないので素焼き本来の褐色を呈するが，上半部は灰黒色に硬く焼けしまっていて内面も暗赤灰色をなす。灰黒色と褐色器面の境目付近には黄色の粘土附着がみられる。中層暗茶褐色土出土。他にも1点破片が出土している。**7**は各種の溶かした鉱物をるつぼから流し出して受け，鋳型へ注入する「とりべ」で，復元口径11.5cm，高さ4.8cm，厚さ口縁部で0.9cm，底部で2.1cmを測る。胎土には粗砂粒を含み手づくねによる成形で，内面は暗灰色を呈しほぼ全面に黄白色の固着物が薄くこびりつき，多数の気泡をもつ。外面は二次的火気を受けておらず暗灰色の地肌をなす。口縁部一端に幅2.4cm，深さ0.2cmの片口状そそぎ口を有し，この部分には暗赤灰色の固着物がみられる。ＳＫ425出土。なおこの土坑からは銅と思われる緑青をふいた固着物がついたとりべ片や鉄滓・銅滓なども出土している。その他にＭＰ26区の最上層焼土面上にて分銅型をなす鉄製品が出土しているが，腐蝕して脆く，取り上げ後，こわれて原形をうかがうことはできないが，出土時では空洞状をなしていた。鋳物製であろうと思われる。とりべは他にも小片が30点ほど出土していて特にＭＰ29区，ＭＰ31区付近に多く見られ，鉱滓・焼土塊・釘状鉄製品などもここに集中している。

3・4次の調査において金属鋳造に関係する遺物が多く出土しており，特に3次調査区南側から4次調査区北部にかけて集中している。鋳造と直接結びつくような遺構は何ら検出できなかったが，土製鋳型・鞴羽口・とりべ・焼土塊・鉱滓・鉄半製品・銅板切りくず・砥石など各種のものがみられる。

30点ほど出土している用途不明の鉄片は半製品と思われ，長さ5cm内外の柱状をなすものがほとんどで，断面も方形・円形・三角形とあり，その他にＵ字状に曲がるものや扁平なものもあるがとくに釘状をなすものが多い。鉱滓には鉄滓と緑青のふいた銅滓とがあり，鉄滓の方が多く，表面が粗雑で多孔質なもの，飴状の平滑な面をなし気泡がみられるもの，径5〜8cmの円形をなす扁平な鉄滓塊ともいえるべきものも数点出土している。

これらのことから，鉄に関しては「鍛冶」が行なわれていたことは確実で，鍛冶には鉄素材を鍛練する「大鍛冶」と農工具や武器などを加工する「小鍛冶」とに分けられるが，当遺跡においては鉄滓や半製品状のものからして小鍛冶による鉄製品の製作が行なわれていたものと考えられる。また，3・4次調査あわせて20点ちかくの釘状鉄片が出土しているところから釘の製作が集中的に行なわれていた可能性もある。

さらに，第3次調査では「水瓶」の鋳型片も出土していて，銅製品の鋳造も行なわれていたことが確実となった。

文治5年（1185）に大宰府鋳物師平井宗明が源頼朝より九州鋳物師政所職に補された旨の記事が『真継文書』註に見えるが，それとほぼ年代を同じくする当遺跡の銅製品鋳造の問題とを考えあわせると大変興味深いものがある。

いずれにせよ，鉱滓・半鉄製品・焼土塊・とりべの固着物など金属器の鋳造に関する遺物の観察は門外漢によるものであり，今後専門的分野からの詳しい資料の分析と研究が必要とされるものである。

註『大宰府・太宰府天満宮史料』巻7所収・太宰府天満宮　昭和46年

10. 銅　　印（24図，図版17の2）

印文　「佐　伯　万　善」

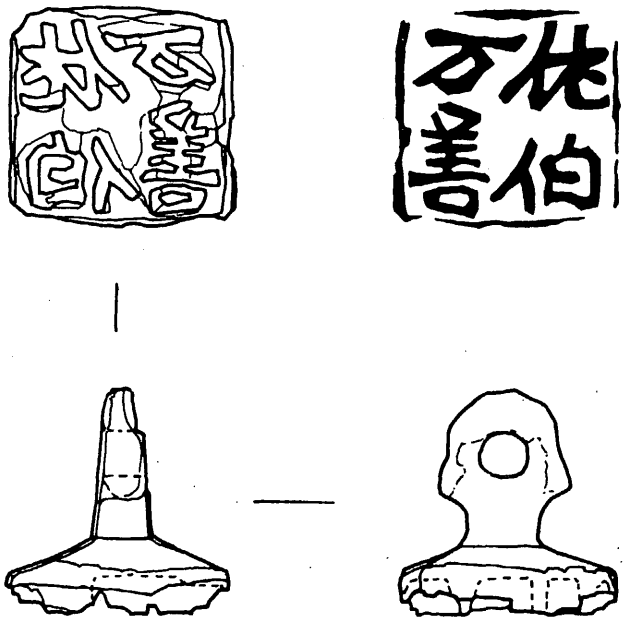
総高	2.98	印面	縦2.94　横3.00
印台高	1.00	印台周縁高	0.65～0.68
鈕最大幅	1.80	鈕厚（鈕孔部）	0.63
鈕孔径	0.58		

（単位 cm）

今回の調査にて銅印一顆を検出した。銅印は印面を上にし，MQ26区壁に半分ほど食い込んだ状態で発見され，表土より約50cm下の暗茶褐色粘質土中から出土しているが，銅印に伴なう遺構などは何ら確認できなかった。

この暗茶褐色粘質土は東区東南部よりにみられるもので，この付近は遺構はほとんどみられず遺構面は削平されてしまっている。暗茶褐色粘質土はその上に堆積した層で，銅印と伴出した遺物には土師器・黒色土器・陶器・瓦などがある。土師器は第3次調査で出土したSK339土坑の土師器に類似したヘラ切り底土師器と，糸切り底土師器をも含んでいるがヘラ切りのものが多い。しかし今回検出した銅印がこれらの土器のいずれに確実に共伴するものかどうかは不明確である。（新原正典）

銅の材質はかなり脆弱であり，そのためか現状は鈕頭部および印面の周縁部において損傷が顕著である。それは使用に起因する磨耗ではなく，銅質そのものが欠落したものである。印面



24図　銅印実測図（実大）

の四周には輪郭が施されており，また印文の彫りもかなり深いが，周縁部に近づくほど欠落している。鈕には直径 0.58cm の鈕孔があり，鈕頭部の左右には突起状の痕跡がわずかながらも認められるので，この印の本来の鈕形はいわゆる鶏頭鈕（菩鈕）であったと推定できる。また現状では実測値に若干の差異は認められるが，本来の印面はほぼ方形であり，総高をも含めてそれぞれ3.00cmすなわち１寸であったと推定される。

現存するものあるいは古文書所載の押印などによって知られている古印の数は少なくはないが，その性格は大きく官・公印と私印とに分けられている。前者では，「某々印」あるいは「某々之印」というように，印文には必ずと言ってもいいほど「印」字が付けられ，寸法等についても一定の規格があるなどの特徴を示している。これに対して，私印の場合は，貞観10年６月28日の太政官符によって封家に使用の認められた印は１寸５分をもってその限となすとされた以外には印文・規格などについては際立った制限は加えられていない。特に個人印である一字印の名印のように，印文・形状などはきわめて自由であったと推察され，さらに印の使用が盛行するにつれて種々のものが出現したのである。

さて，この印文の「善」字は「善」字の異体字であるが，「佐伯万善」という印文全体の解釈は必ずしも容易ではない。「佐伯」は言うまでもなく氏名であり，古代における佐伯氏は大伴氏から分かれた軍事関係の大族であった。これに対して，「万善」については，それを個人名とみなすかあるいは何らかの意味を有する成句と解するかはにわかに判定できない。もし後者と解するならば，万・善ともに好字であり，天平勝宝8年に東大寺に献納された光明皇后の自筆と伝えられる「杜家立成」に押印された「積善藤家」の方印と同質の意義が想定される。ともあれ印文についての解釈は容易でなく，印自体も佐伯万善という個人にかかるものかあるいは佐伯氏の数世代にわたって使用されたものかは判定できないが，少なくとも印の性格としては佐伯氏にかかわる私印と判断でき，またその時代についても，出土層から見て鎌倉時代以降に下るものではなく，平安時代中期頃までさかのぼる可能性も十分に想定できる。

次にこの印の使用者である佐伯氏について若干述べておこなう。この佐伯氏がいわゆる一般庶民階層に属する者ではなく，一定の身分，地位あるいは勢威を有する者であったことは推察に難くないことであろう。たとえば，大宰府政庁あるいは鎌倉時代の大宰府守護所と言うような権力機構に所属する者と考えることもでき，また大宰府郭内に何らかの関係を有する者であったと考えることもできる。特に，大宰府は西海道の政治・文化の中心地であり，当代の郭内においては観世音寺や安楽寺というようないわば在地の有力寺院のほかに，宇佐八幡宮も進出しており，かなり殷繁な状況を呈していたと推定され，佐伯氏もかかる状況の中で生活していたのである。

平安・鎌倉時代の関係史料によると，九州に関係する佐伯氏は10数名が所見され，その分布もほぼ九州全域に及んでいるが，特に豊後国の佐伯氏は有名である。このうち，大宰府関係では，永承6（1051）年に大監に任命された「佐伯国辰」（除目大成抄），永長2（1097）年には監代として大宰府政所牒案に書判した「佐伯」（平安遺文1357号）という府官のほかに，治暦2（1066）年に観世音寺において法華経書写に結縁した府官人および左右両郭の男女等の中に見える「佐伯光時」（観世音寺文書）などの名が知られる。また筑前国関係では，貞観10(868)年の筑前国牒案に見える「権大目佐伯造」（平安遺文157号），元慶1（877）年に一切経を書写して観世音寺に納めた「権大目正六位上佐伯連春継」（観世音寺資財帳）などが知られる。しかし彼らの本貫地は明らかでなく，銅印の佐伯氏と直接に連関させることは妥当でないが，在地豪族の府官あるいは国衙の下級官人への進出が顕著になる平安時代中期以降，佐伯氏の場合も例外ではなく，そうすることによって郭内に一定の基盤を有するようになったことは十分想定できる。

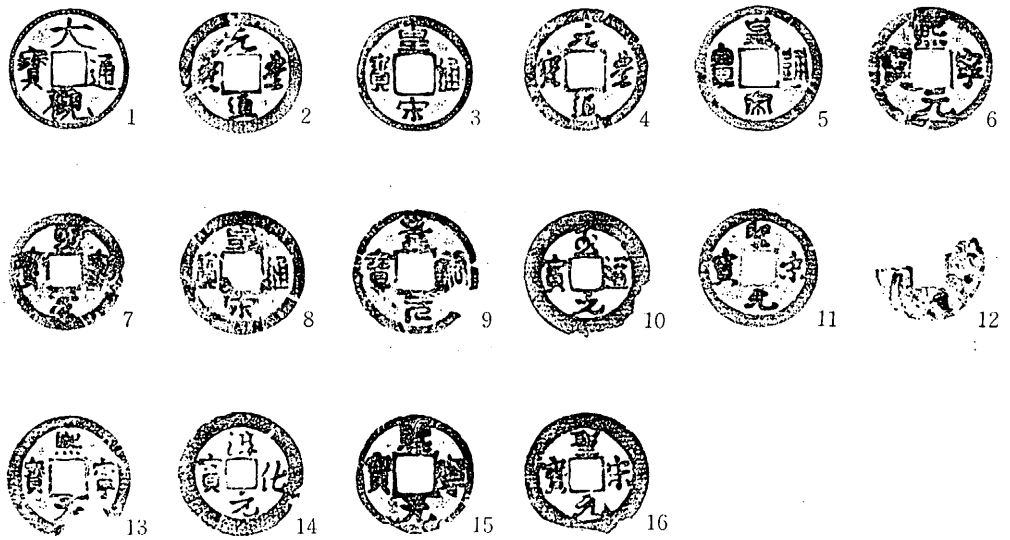
このほか，式内社である那珂郡住吉社の神官家にも佐伯氏が見え（吾妻鏡治承4年7月条）また史料的には検討の余地を残してはいるが，嘉承2（1107）年に僧頼源解に証判した「大分宮大宮司佐伯」（平安遺文1679号）も筑前国穂波郡に鎮座した大分八幡宮の神官と推定される。

大分八幡宮は宇佐八幡宮を勧請したものであり，その大宮司佐伯氏と銅印の佐伯氏との関係は明らかでないが，このことに関連して注目されるのが，銅印出土地が「府中宇佐町」に近いことである。府中宇佐町は永保２（1082）年に典代大中臣有助が八幡宇佐宮大宮司公則宿禰に沽却したものであり（八幡宇佐宮御神領大鏡），爾来宇佐宮領として郭内における宇佐宮の根拠地とも言うべきものであった。現在かかる地名は遺存していないが，字君畑付近と推定されており，銅印出土地とはほぼ隣接しているのである。従って特に確証があるわけではないが，十分考慮すべきことと考えられる。

以上銅印について述べてきたが，現時点ではほとんど明らかにおしえておらず，また銅滓やとりべなどの工房関係の遺物も出土しているので，いわゆる鋳物師との関係から考察する必要もあり，今後の検討を要する点が少なくはない。（倉住靖彦）

11. 銅　　銭（24図，図版22の１）

第４次の調査では計23枚出土している。そのうち，ＭＱ26区の暗褐色土からは熱気を受けたために６枚が変形固着したものと，折損したもの２枚があるので判読できるものは８種15枚となる。すべて北宋銭で，ほぼ11世紀から12世紀初頭にかかるものが多い。このことについては他の調査区についてもほぼ同じ傾向を示している。個別的には熙寧元宝が４枚，皇宋通宝が３枚と群をなしている。確実な遺構からの出土は11の聖宋元宝のみで，ＳＫ403土坑から土師器などと共伴している。また最上層の焼土面からは６～９までのものが出土している。中・下層からの出土はない。



25図　銅　銭　拓　影（⅔）

図版番号	銭貨名	外径 水平	外径 垂直	外縁厚さ	出土地点 地区	出土地点 層位	初鋳年	備考
1	大観通宝	24.1	24.35	1.4		表土	宋 徽宗 1107	
2	元豊通宝		24.3	1.3		表土	宋 神宗 1078	
3	皇宋通宝	23.15	23.1	1.35		表土	宋 仁宗 1039	
4	元豊通宝	25.0	24.55	1.55		表土	宋 神宗 1078	
5	皇宋通宝	25.5	25.1	1.4	MQ28	暗茶褐色土	宋 仁宗 1039	
6	熙寧元宝	24.8	24.5	1.5	MR27	焼土内	宋 神宗 1068	
7	熙寧元宝	23.6	23.65	1.55	MQ27	焼土内	宋 神宗 1068	
8	皇宋通宝	24.85	25.0	1.6	MQ27	焼土内	宋 仁宗 1039	
9	景祐元宝	25.3	25.0	1.6	MQ27	焼土内	宋 仁宗 1034	
10	至道元宝	25.35	25.35	1.45	MQ	柱穴内	宋 太宗 995	
11	聖宋元宝	24.15	24.05	1.65	MQ26	pit 2	宋 徽宗 1101	SK403土坑
12					MR28	暗茶褐色粘質土		
13	熙寧元宝	24.9		1.75	MR28	暗茶褐色粘質土	宋 神宗 1068	
14	淳化元宝	24.95	24.95	1.25	MQ28	暗茶褐色粘質土	宋 太宗 990	
15	熙寧元宝	23.75	24.1	1.2	MQ27	4層	宋 神宗 1068	
16	聖宋元宝	25.25		1.75	MQ27	暗黒褐色土	宋 徽宗 1101	
17					MQ27	焼土内		
18					MQ27	暗褐色土		6枚変形固着 銭種不明

(単位 mm)

14表 銅銭計測一覧表

五、おわりに

今回の報告は3・4次調査のもので，昨年の5次調査分につぐものである。3・4次の調査成果と問題点をあげてまとめとしたい。

3次の調査にて数条の溝が検出され，うちＳＤ304溝は南北方向に延びるものである。調査区の西端に接して南北方向の農道が走るが，第5次調査ではこの農道の西側にてやはり南北方向に延びるＳＤ501溝が検出されており，現農道をはさんで両側に2条の溝が平行に走っていることが確認された。

大宰府政庁中軸線からの距離はＳＤ501溝中心線で約701.34m，ＳＤ304溝中心線で約715.34mを測り，両溝間の西肩と東肩部の幅は約12mでその中心線は708.34mである。この側溝間を道路敷とすれば条坊の地割線上から約半町ずれるところから坊間道路と考えられる。ただ，ＳＤ501溝からは糸切り底土師器が，ＳＤ304溝からはヘラ切り底土師器が出土して両者間には時間的存隔りがあり，溝の築造及び廃絶の問題をも含めて今後更に検討されるべきである。

出土遺物では「急々如律令」墨書木札と「佐伯万善」銘の銅印の発見が特筆される。「急々如律令」は第2次調査でも土師器壷に記されたものが出土しており，中世民衆の信仰形態を考える上で貴重な手懸りとなるものである。銅印の考古学的調査による発見はきわめて珍らしいが，それに関連する遺構や年代の基準となるような遺物の共伴が見られなかったのは残念である。また，文献面からの考察もなされたが，現時点で解明されるものはほとんどなく，今後に残された問題である。

土師器については，第5次調査時には解明できなかった，ヘラ切り底を持つ土師器や，ヘラ切り底の土師器から糸切り底土師器への移行，古い糸切り底土師器の形態など，概略ながら把握できたことは，ひとつの成果といってよいであろう。

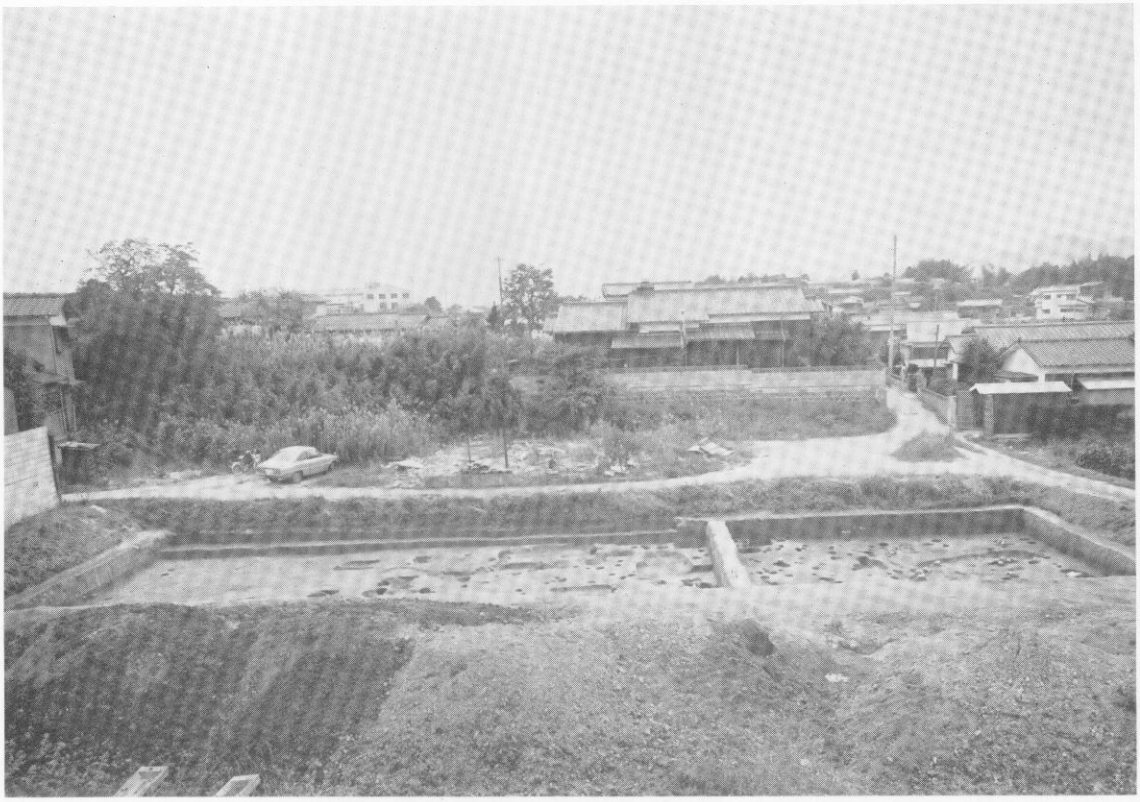
このように土師器の大まかな分類や編年の成果から，今後はさらにこれらを充実させるとともに，これに青磁，白磁，陶器類，瓦器，片口，緑釉陶器，灰釉陶器，古瀬戸，常滑などの土器類の共伴関係や量を肉づけするとともに，鋳型，フイゴ羽口，とりべ，鉄滓，銅滓などの生産遺物を結びつけ，日常生活の木器類，下駄，櫛，石鍋，硯，砥石，箸や，信仰関係の木札木偶，墨書礫などを加えることによって生活の復元をし，さらに井戸，柱穴，溝，土坑などの遺構との関連を理解するなど，横の組み合わせと変化をみつめることが，今後の整理報告の大きな課題となるであろう。この報告書が，そのひとつの手がかりともなれば望外の喜びである。

なお最後ではあるが，土師器分類の基礎となった各遺構の関連を表としてあらわした。すべての遺構についても明確にしたいが，まだそこまでは整理が進んでいないのが残念である。年代については全くの推測であり，あまり根拠のあるものではない。将来確実な資料で訂正されるべきものである。

土師器分類	推定年代	第3次	第4次	第5次	共伴土器
Ⅰ—2類	11世紀	SK341土坑 MF35区暗灰色粘質土 SK339土坑 SD304溝			緑釉香炉 黒色土器 須恵器椀
Ⅰ—3類 (浦城Ⅰ類)	11世紀後半～12世紀初頭				白磁5類 瓦器椀
Ⅰ—4類	12世紀前半～12世紀中頃	SD305溝			白磁3・4・5類 瓦器椀
Ⅱ—1類	12世紀中頃～12世紀後半	SK312 土坑下部 SK312 土坑上部 SK338土坑	SE401井戸 暗茶褐色粘質土		白磁3・4・5類 瓦器椀
Ⅱ—2類	12世紀末～13世紀初頭		SE401溝	SK520土坑	青磁7類 瓦器椀
Ⅱ—3類	13世紀前半～13世紀中頃	SK317土坑	SK407土坑 MP27区黒褐色土	SE505井戸 SE514井戸	雑器 7類，合子 磁器6・8類
Ⅱ—4類	13世紀中頃～13世紀後半	SK309土坑	SK424土坑	SK501土坑 SK513土坑	
Ⅱ—5類	13世紀後半～13世紀末	SK333土坑		SD502溝 SE516井戸	

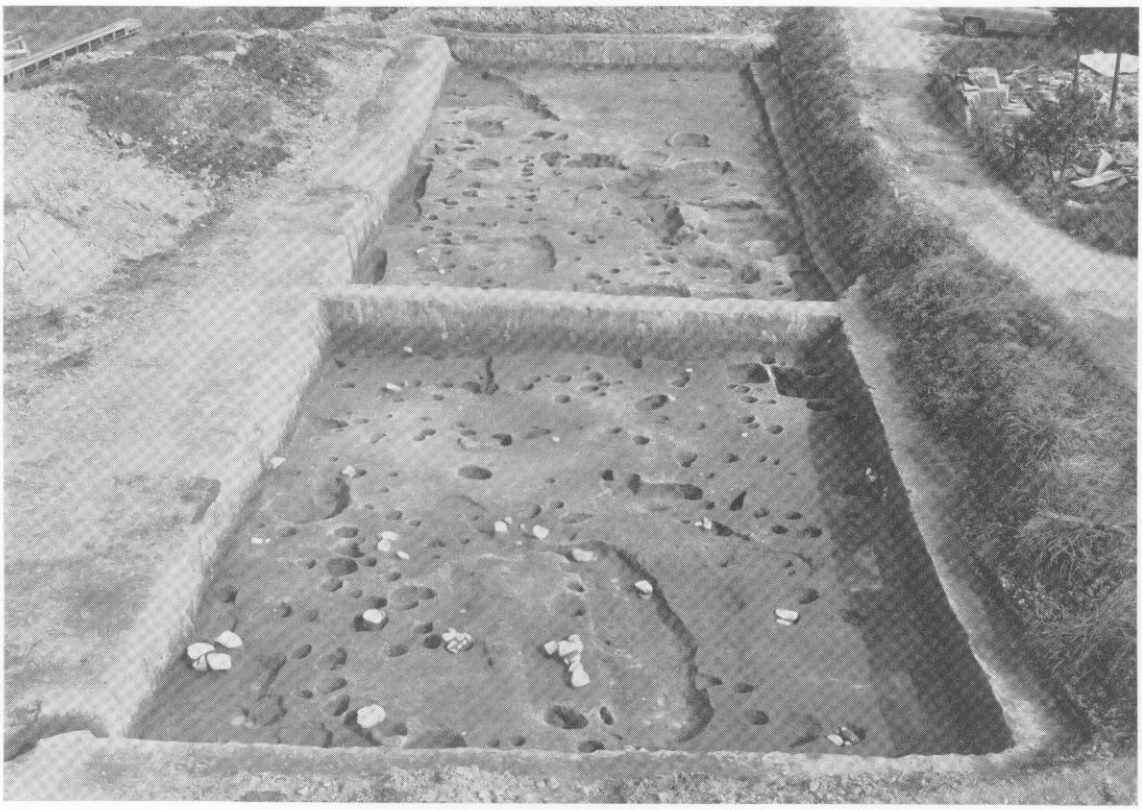
15表 土師器分類と遺構対照表

図　版

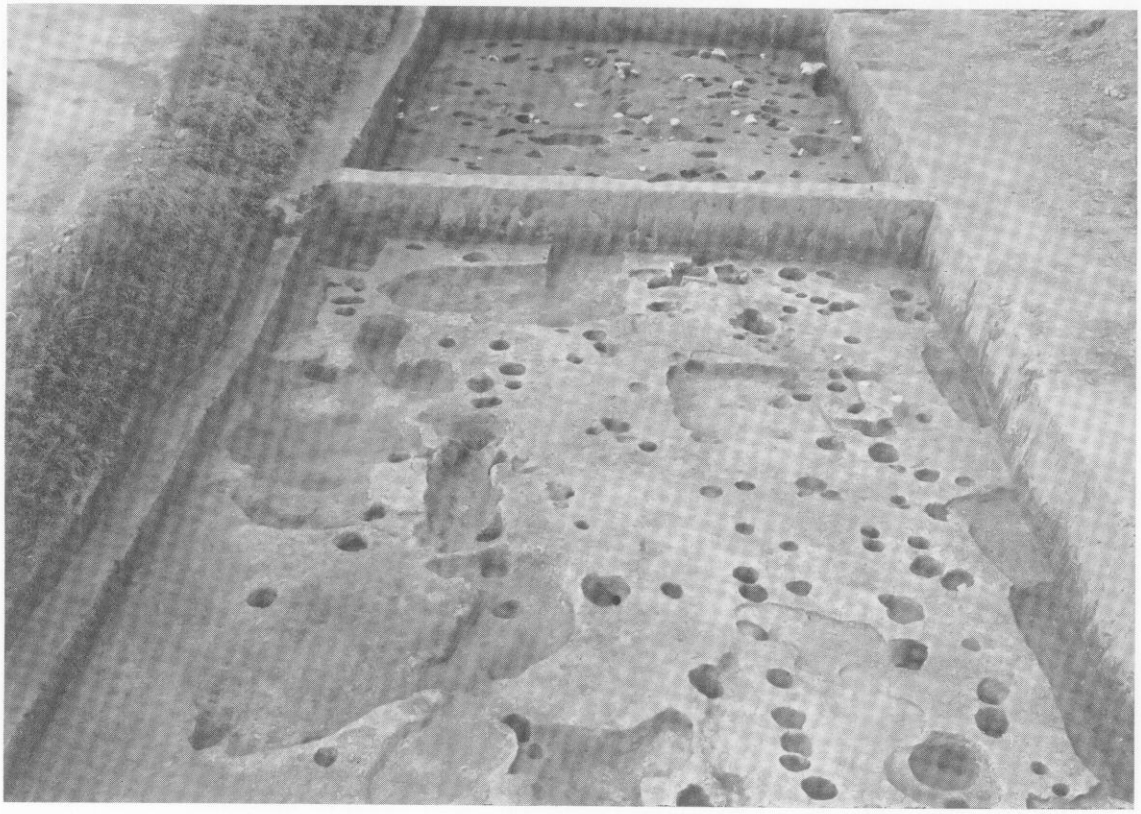


1．遺跡全景（北から）

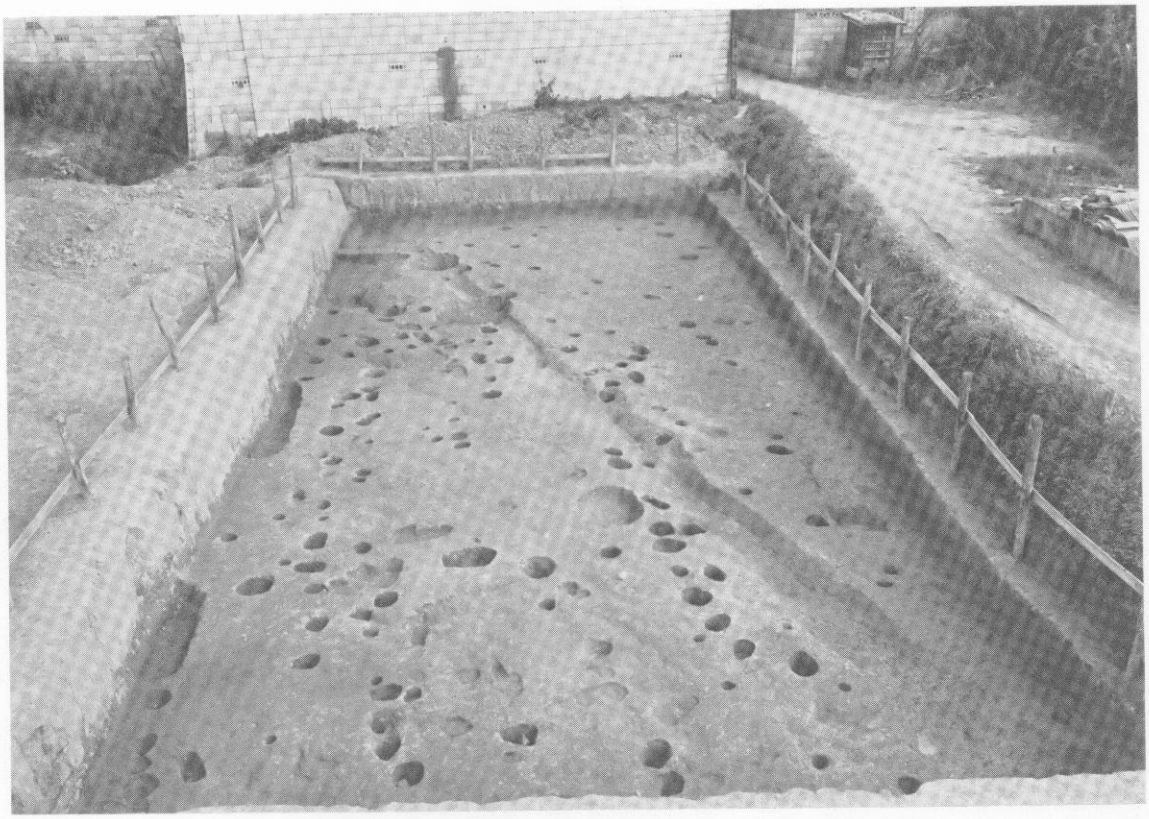
2．最上層建物遺構（北から）



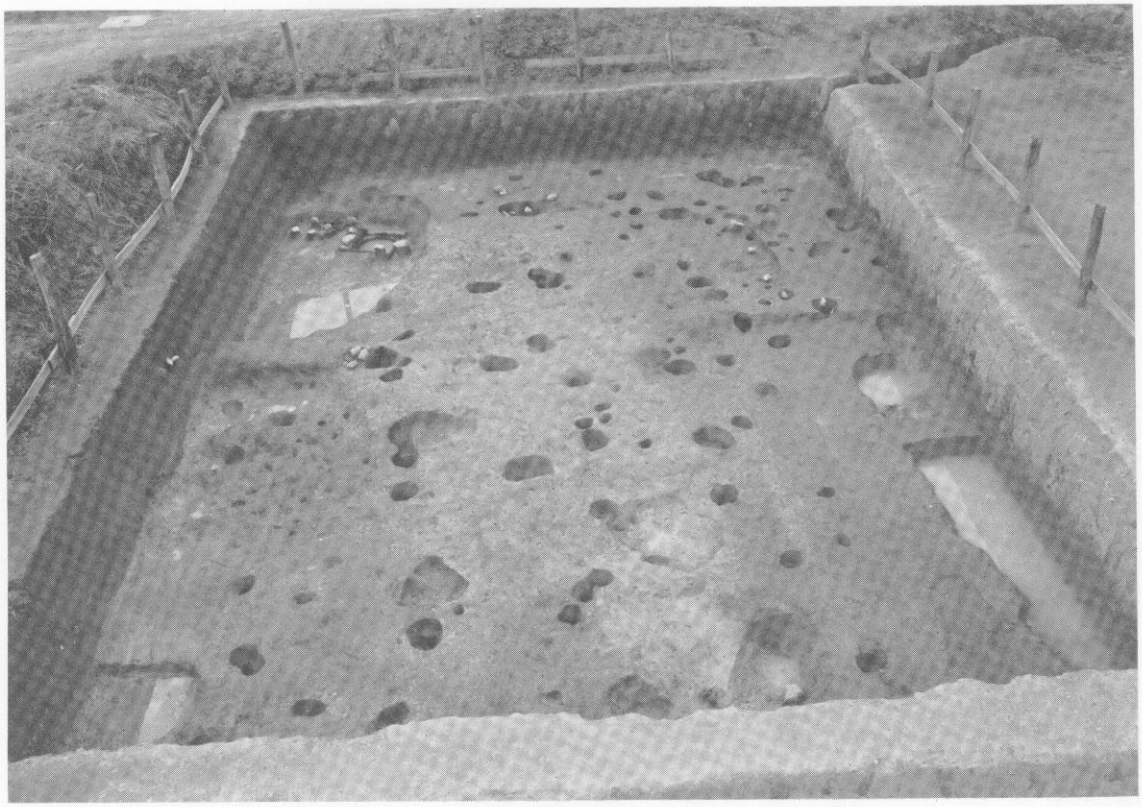
1．上層全景（西から）



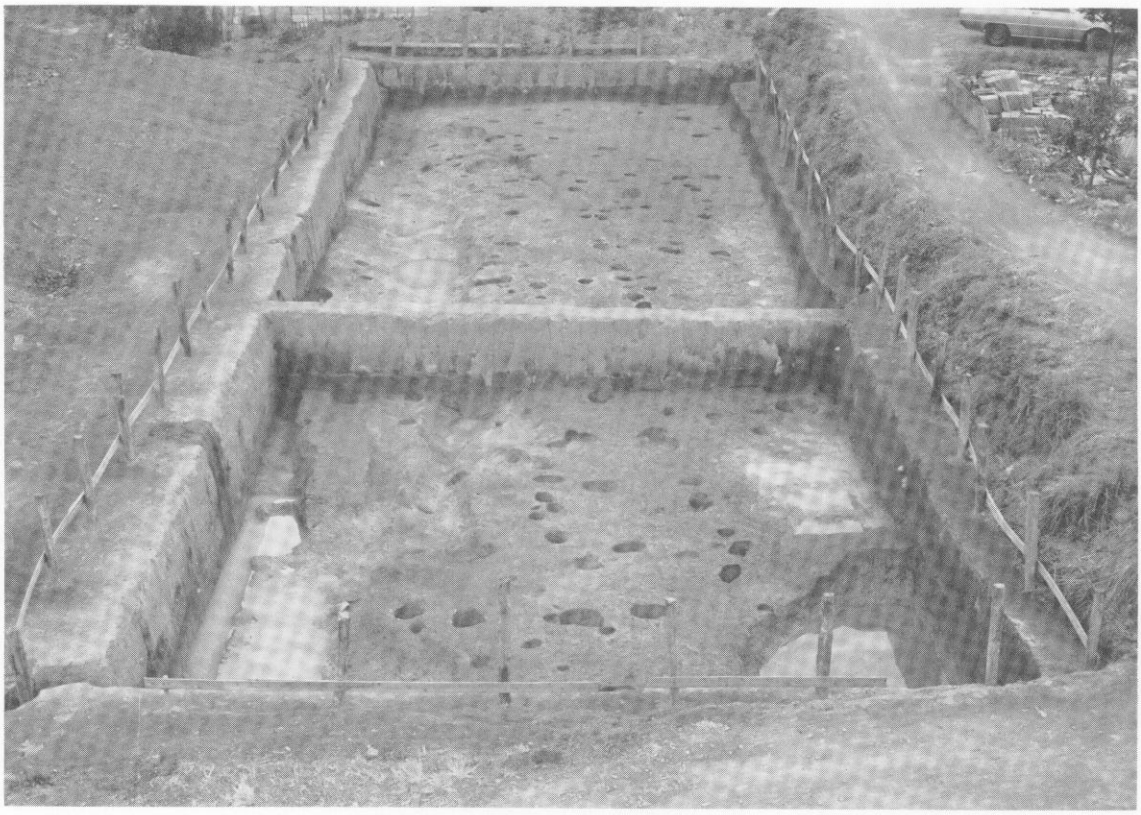
2．上層全景（東から）



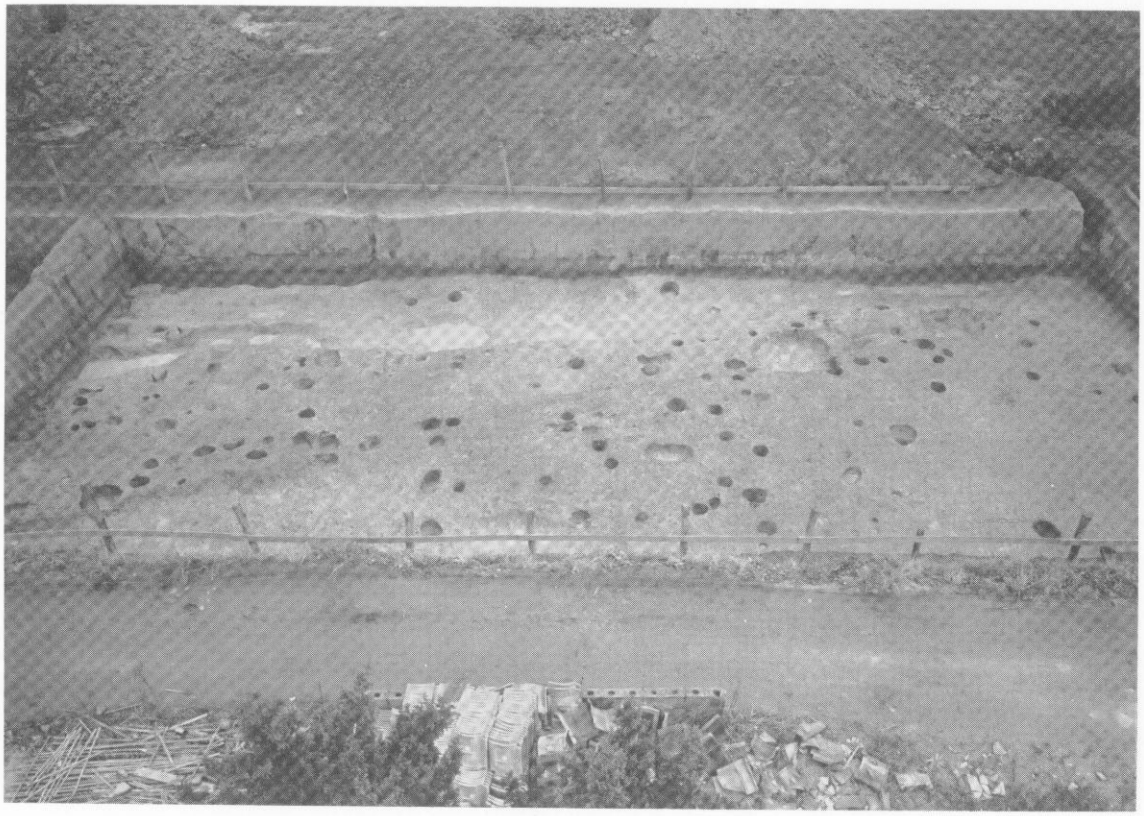
1．中層東区全景（西から）



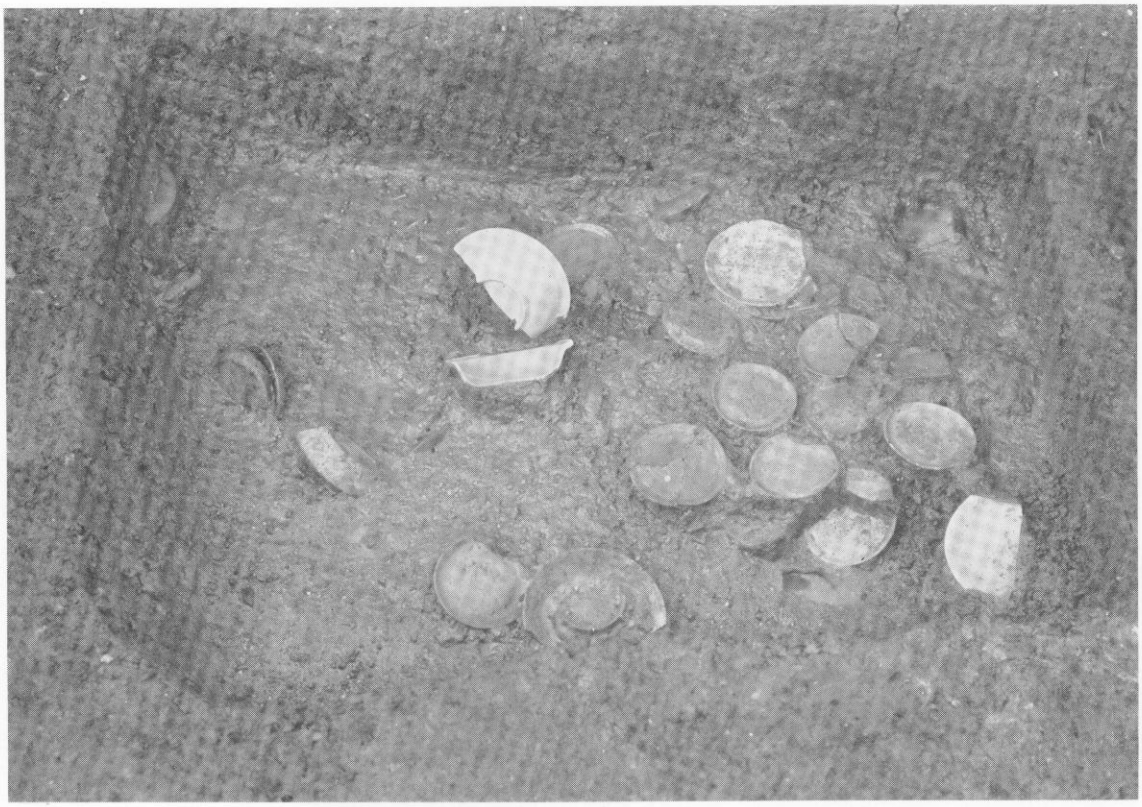
2．中層西区全景（東から）



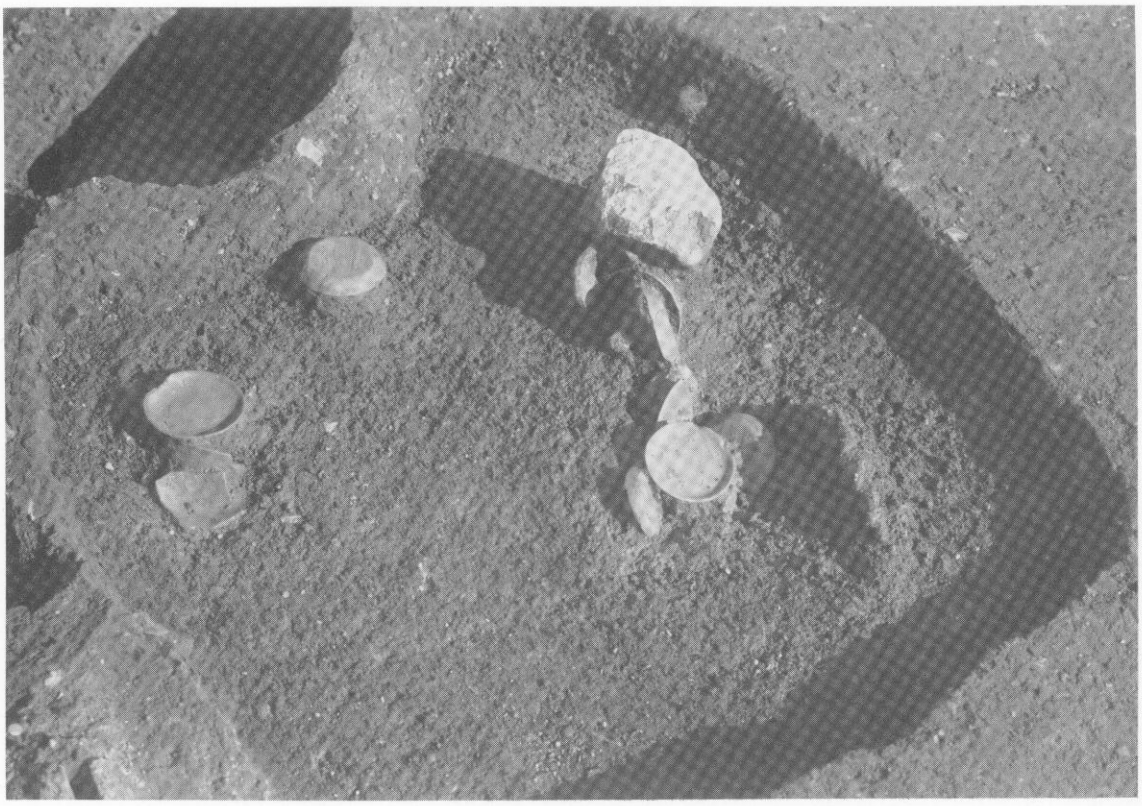
1．下層全景（西から）



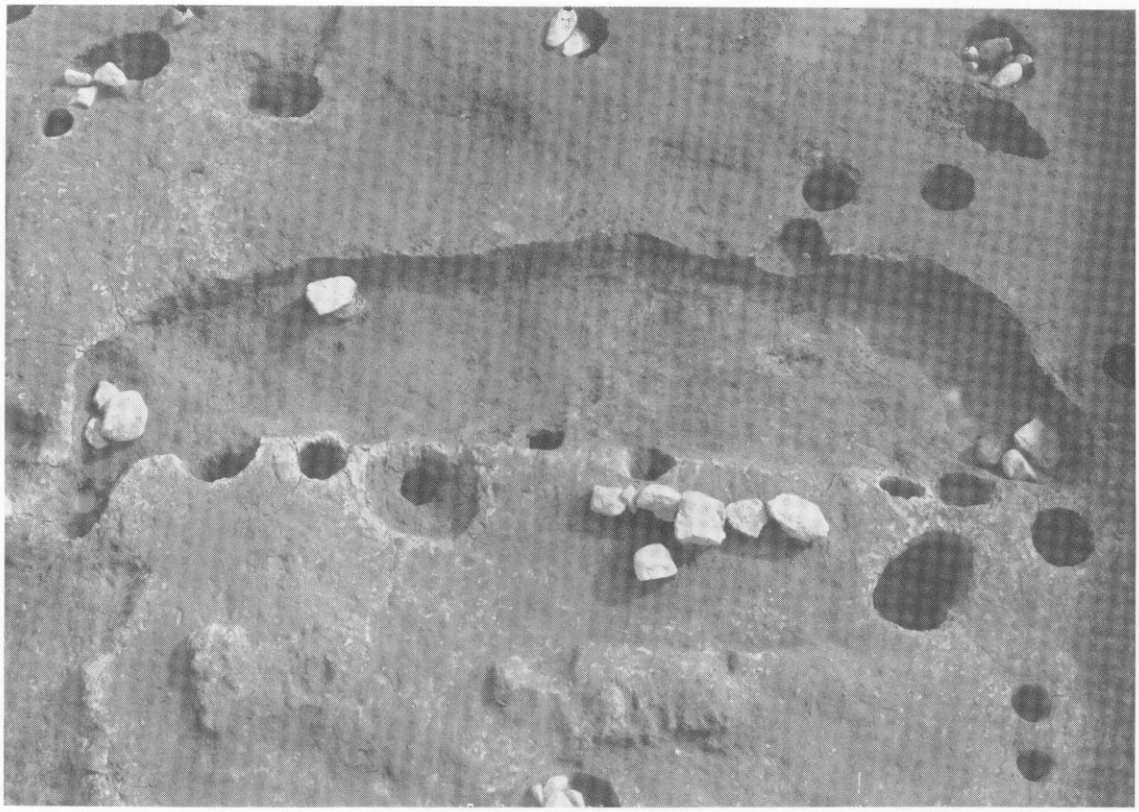
2．下層東区全景（北から）



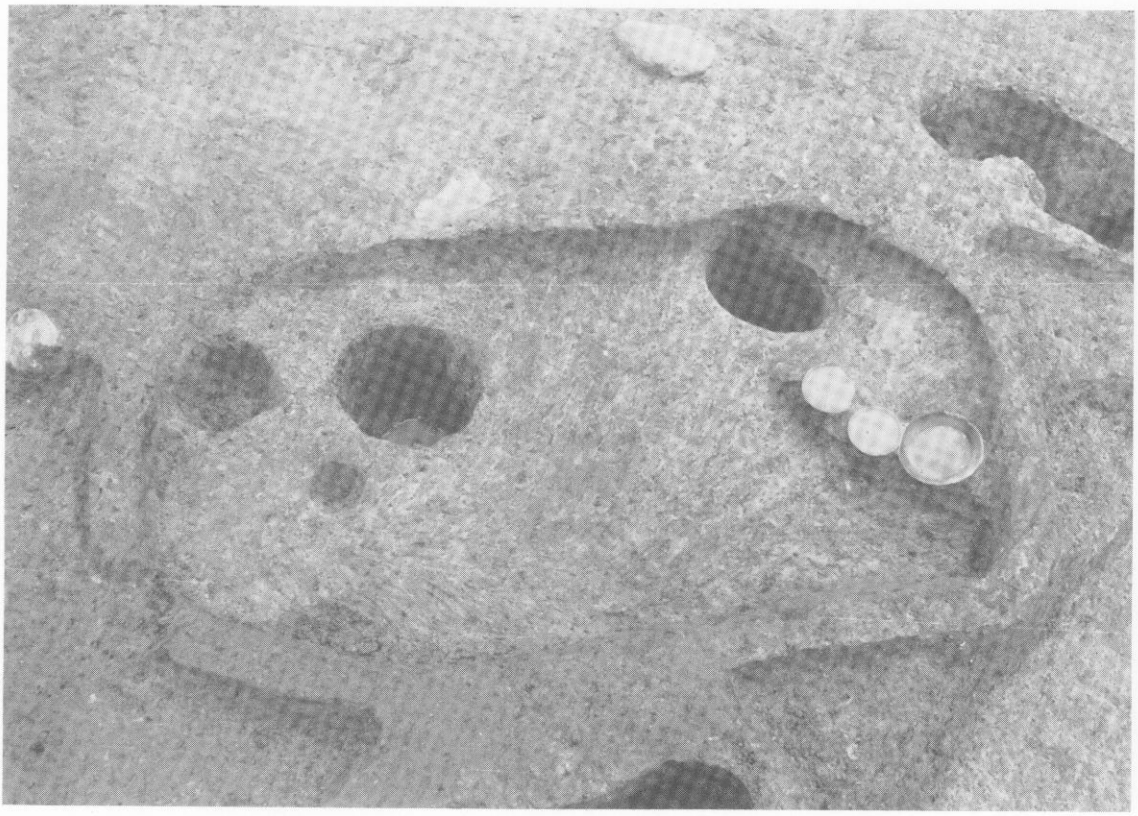
1．ＳＫ401土坑土器出土状態



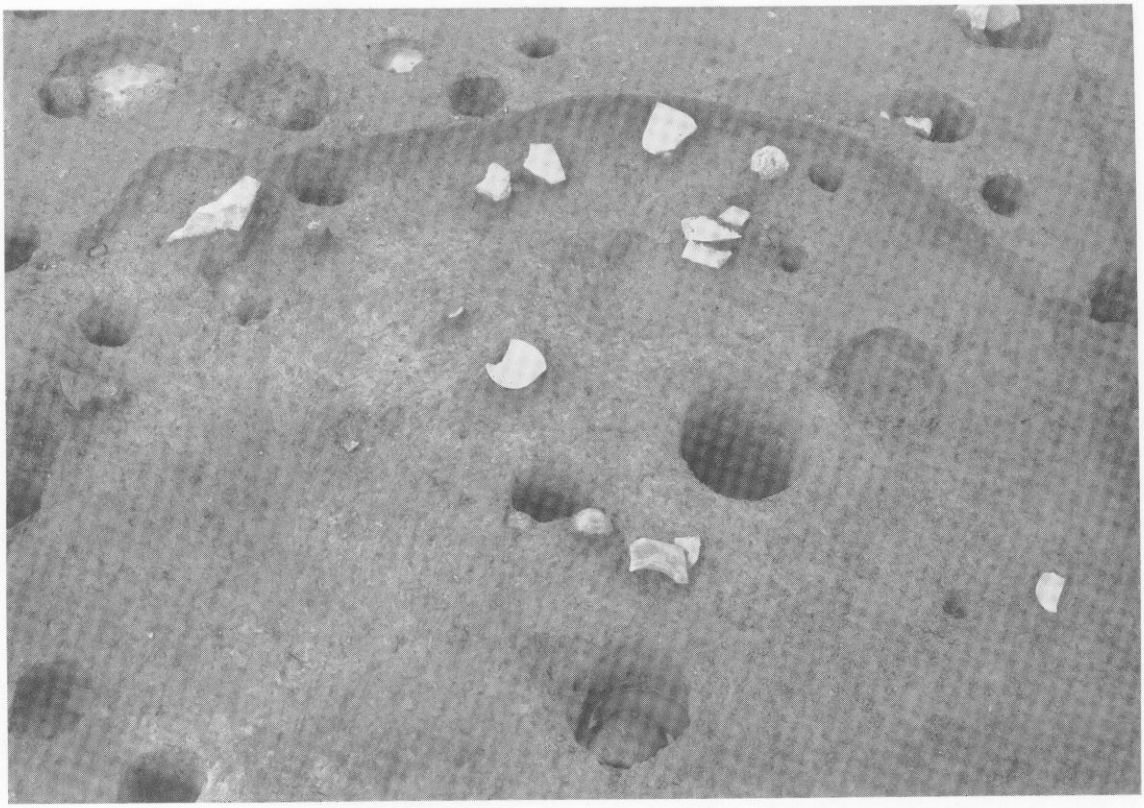
2．ＳＫ404土坑土器出土状態



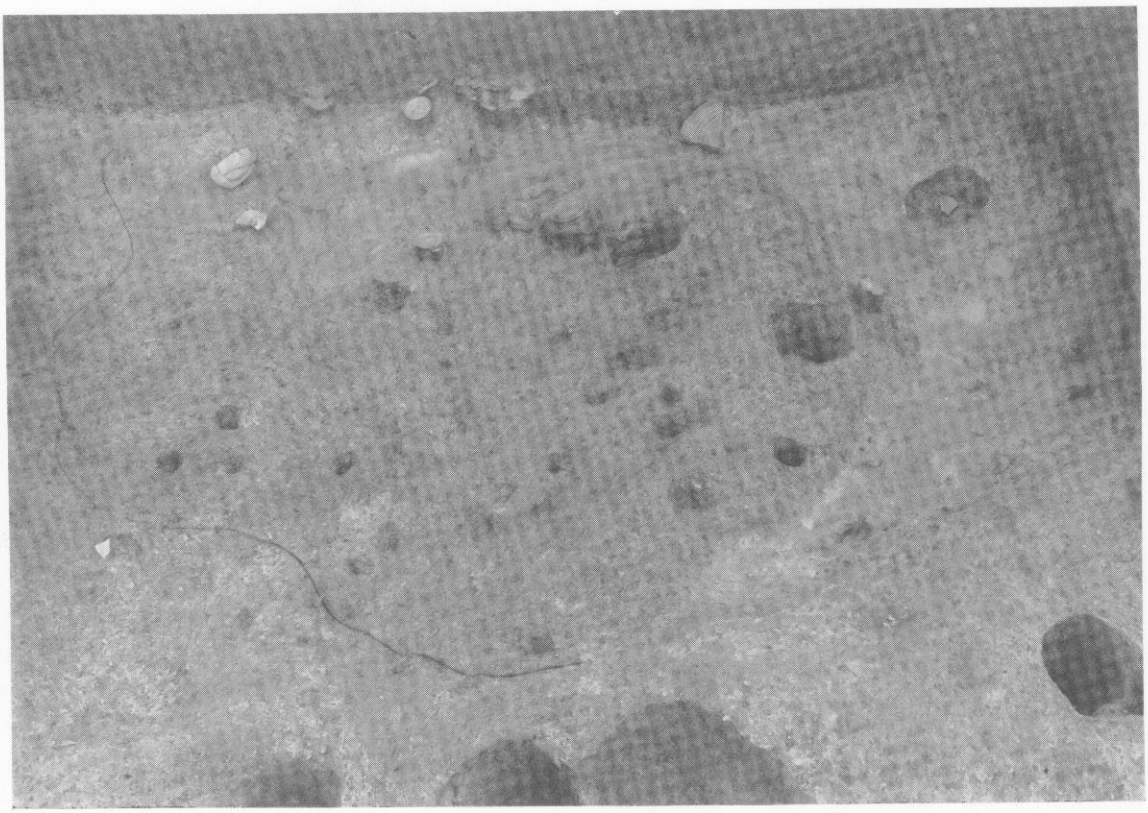
1．ＳＫ407土坑



2．ＳＫ414土坑



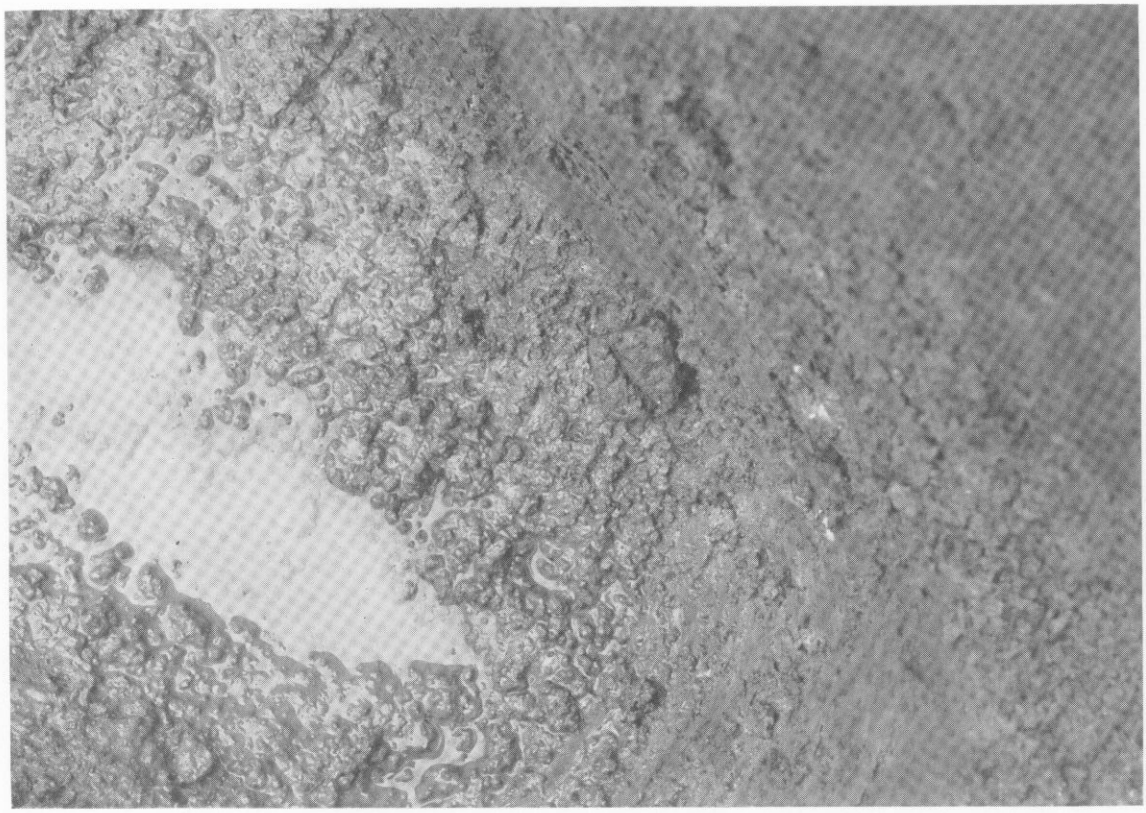
1．ＳＫ425土坑



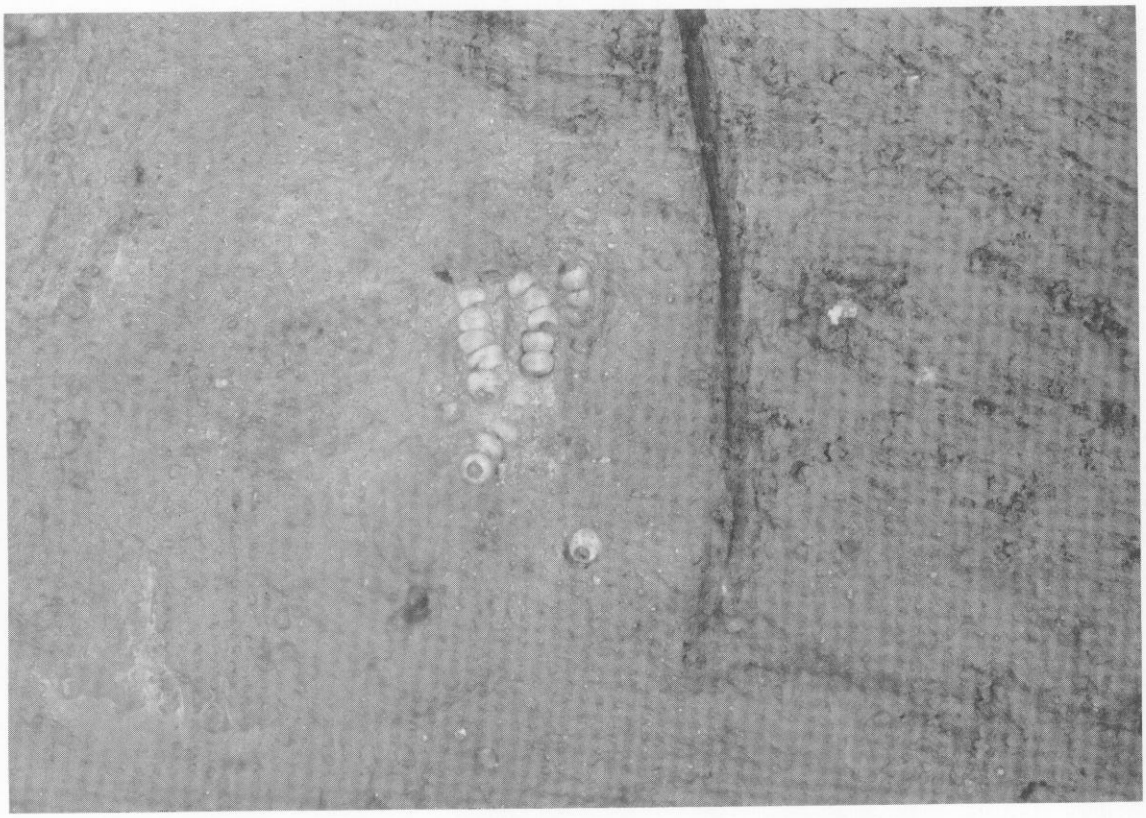
2．ＳＫ427土坑

1．ＳＥ401井戸

2．ＳＥ401井戸



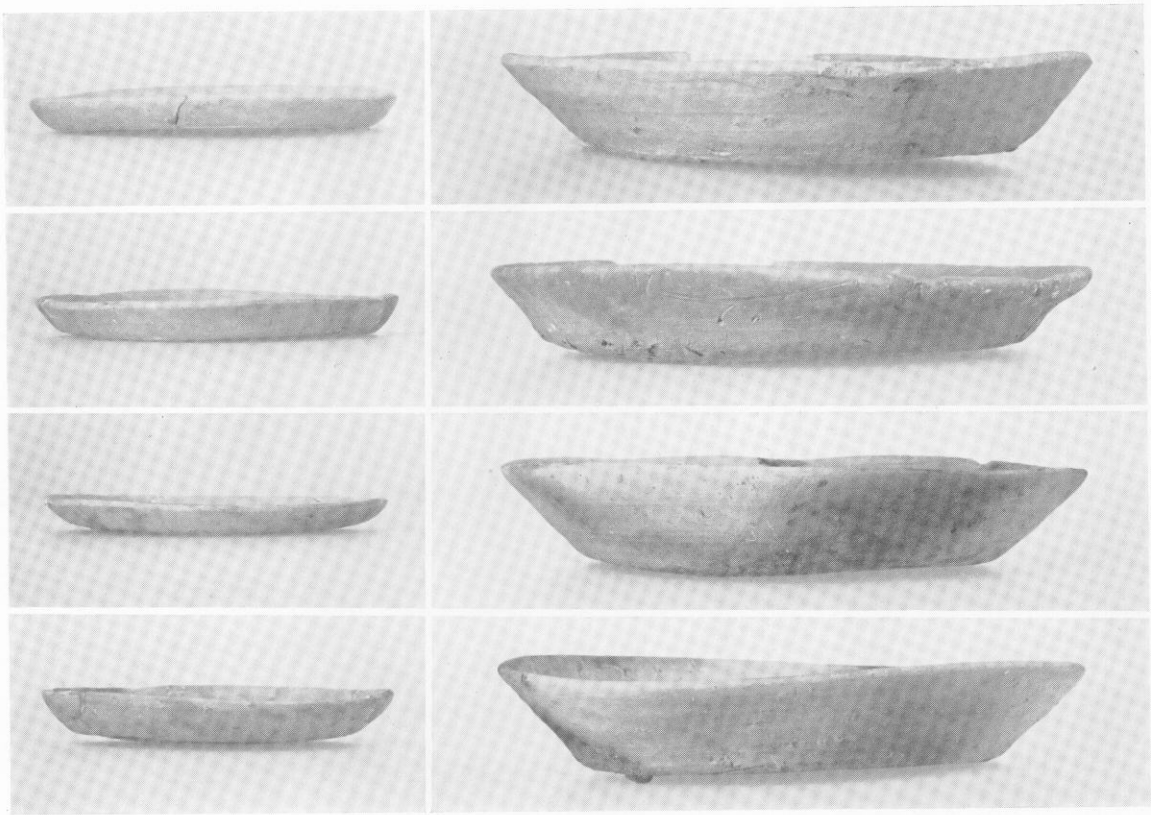
1．銅印出土状態



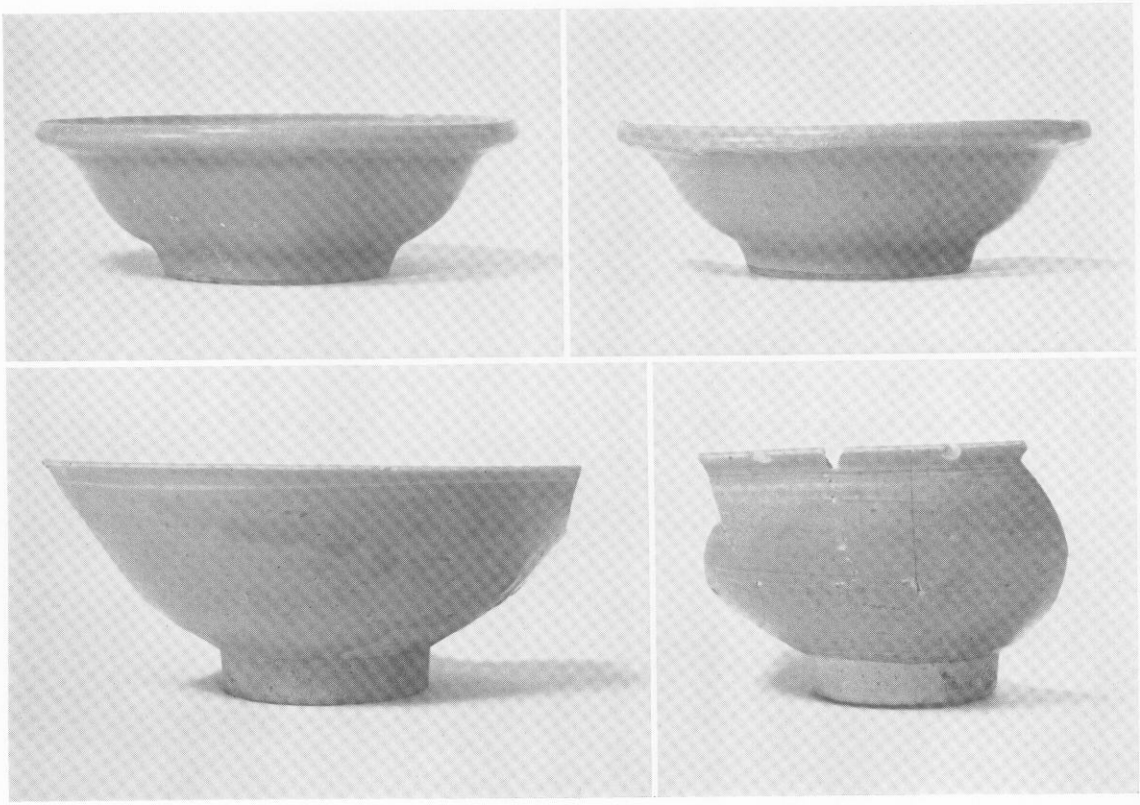
2．ガラス製小玉出土状態（ＳＫ427）

1．鞴羽口出土状態（上層）

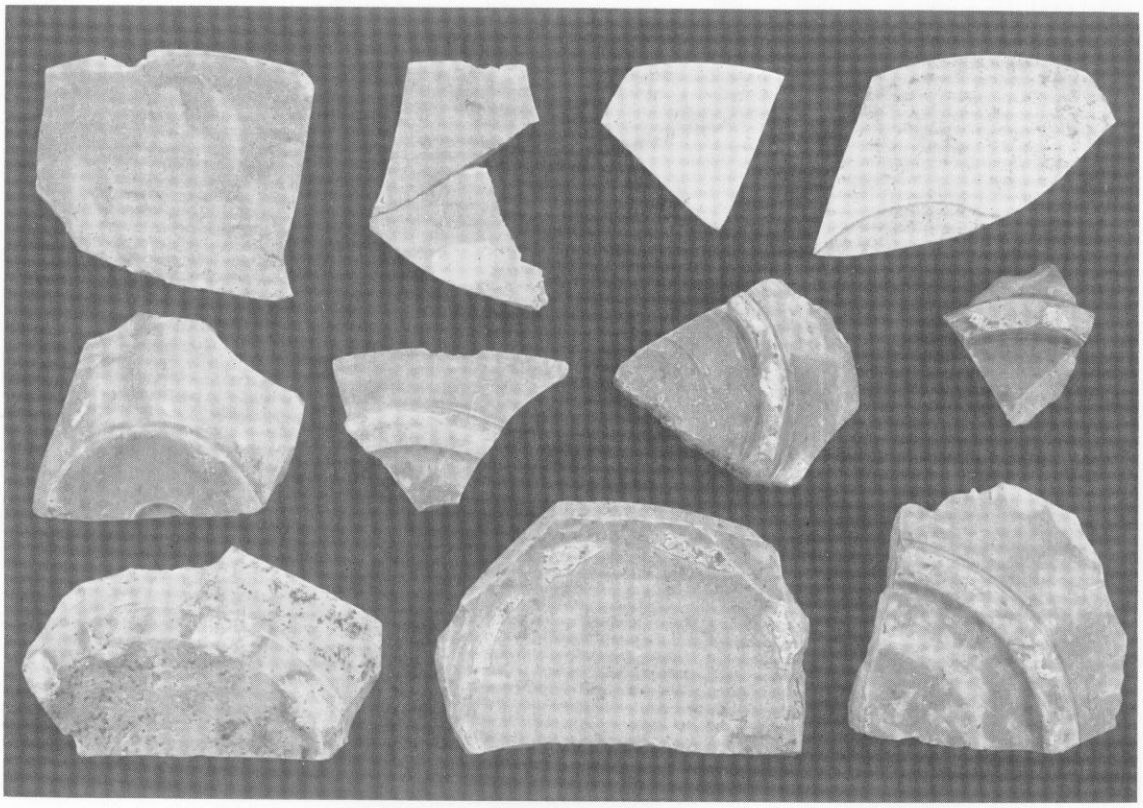
2．巴瓦出土状態（ＳＫ407）



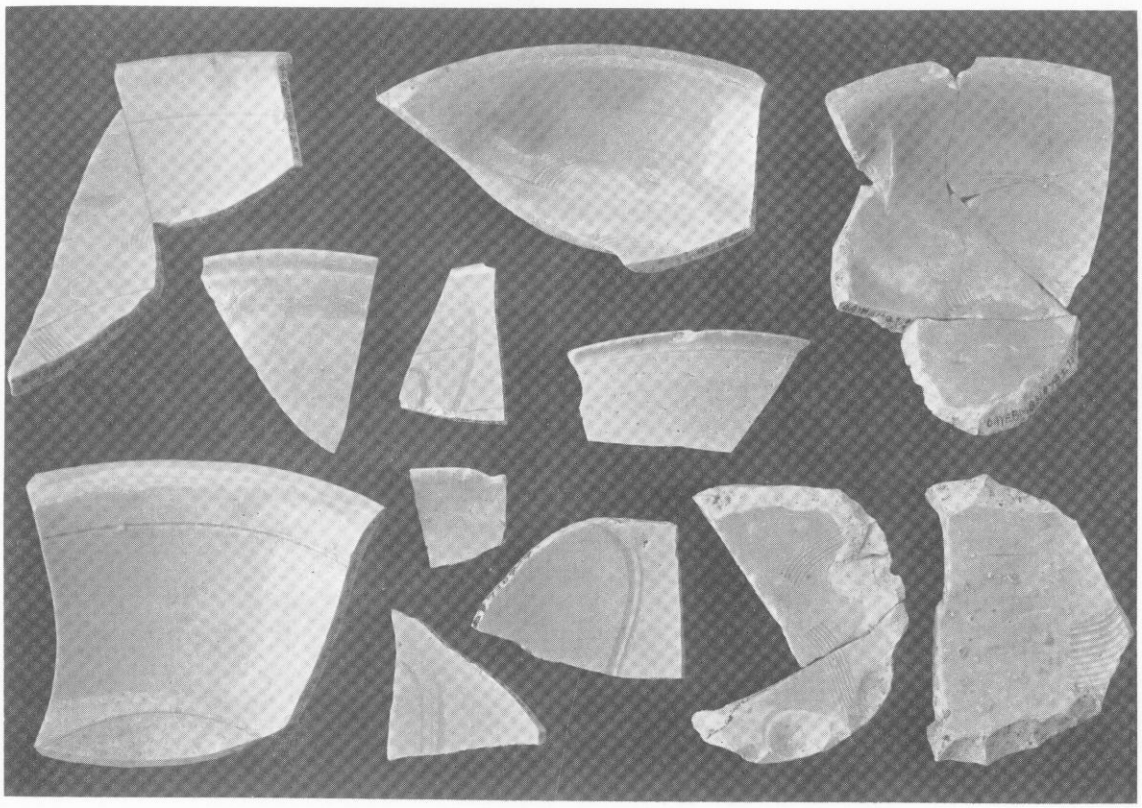
1．土師器（ＳＥ401井戸出土）



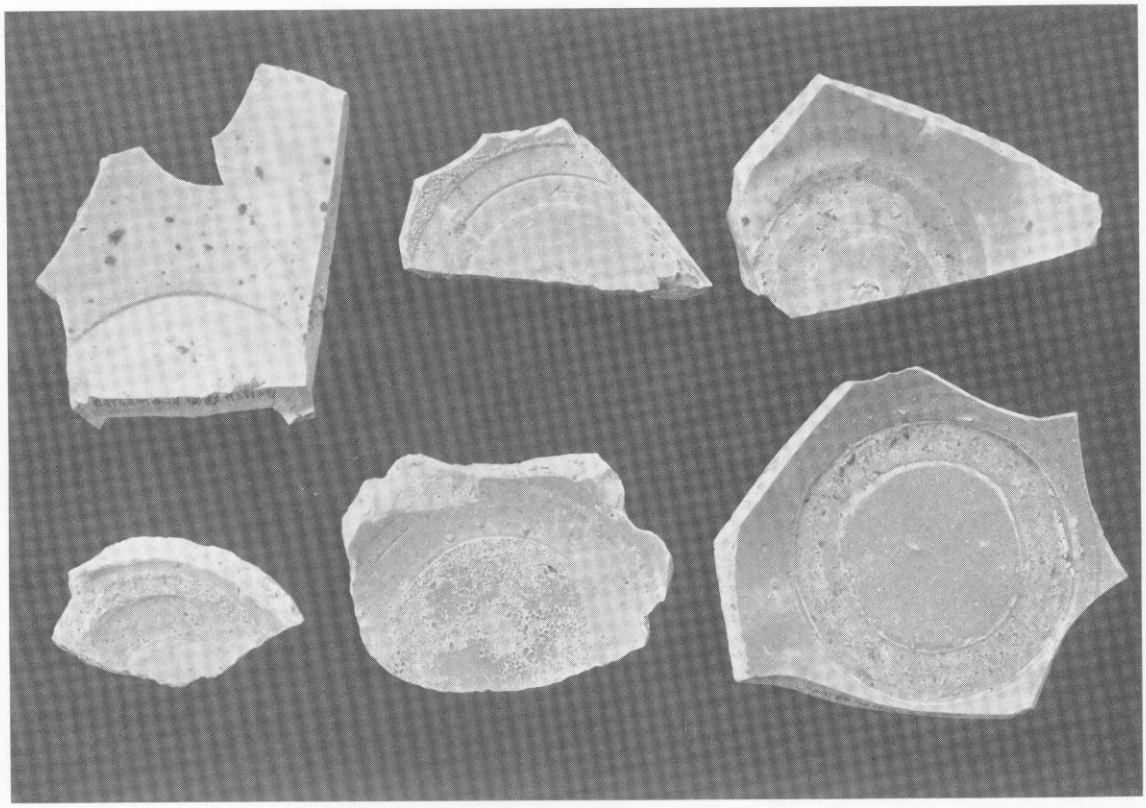
2．青磁８類（上），白磁３類（下）



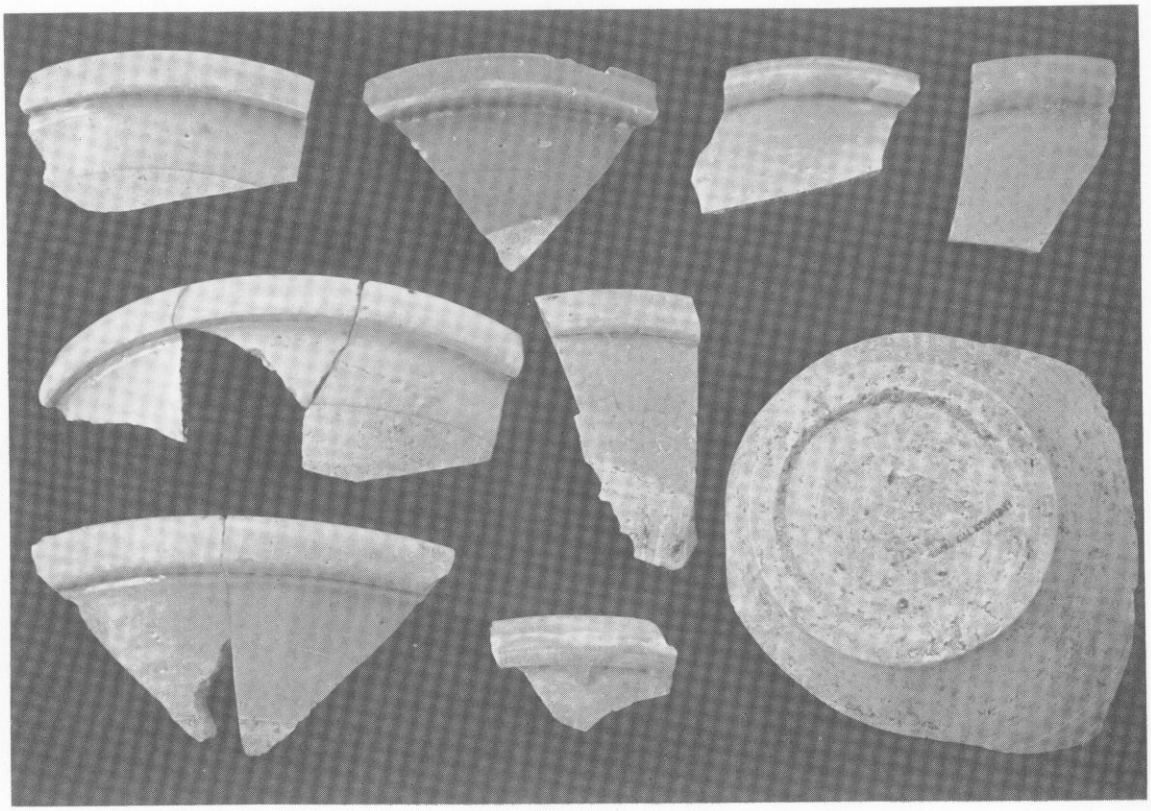
1．青磁　1類



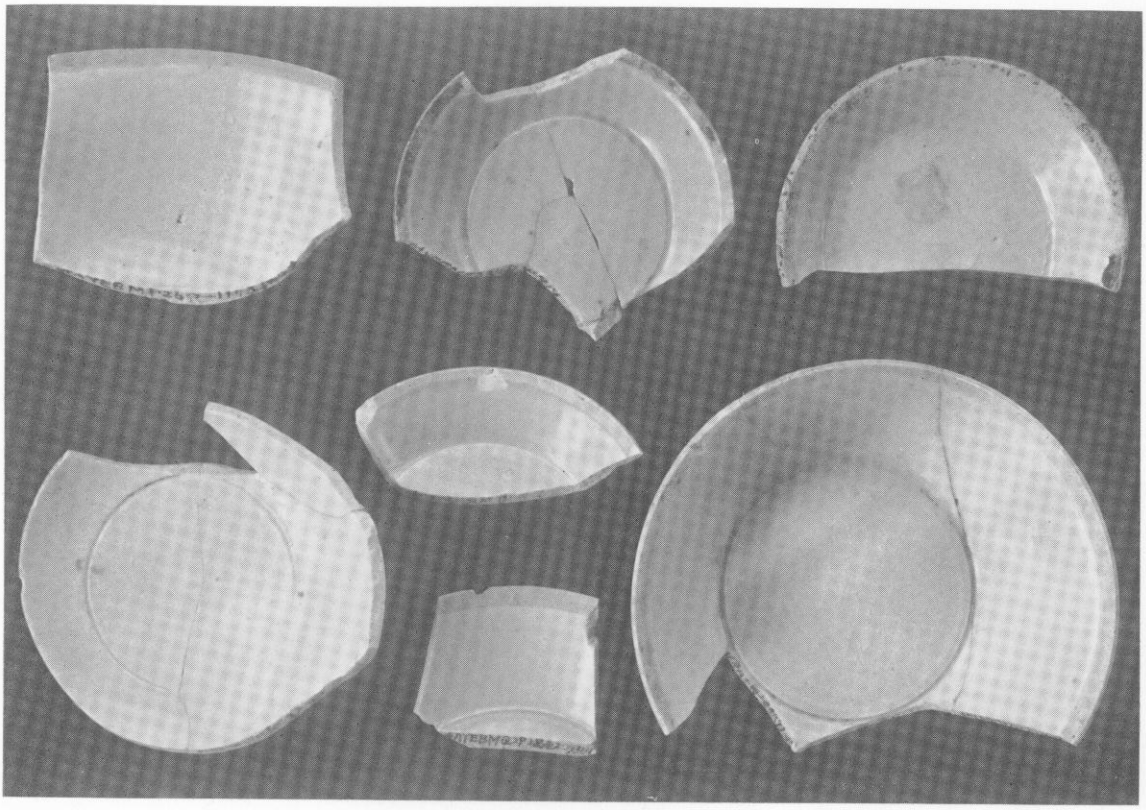
2．白磁　3類



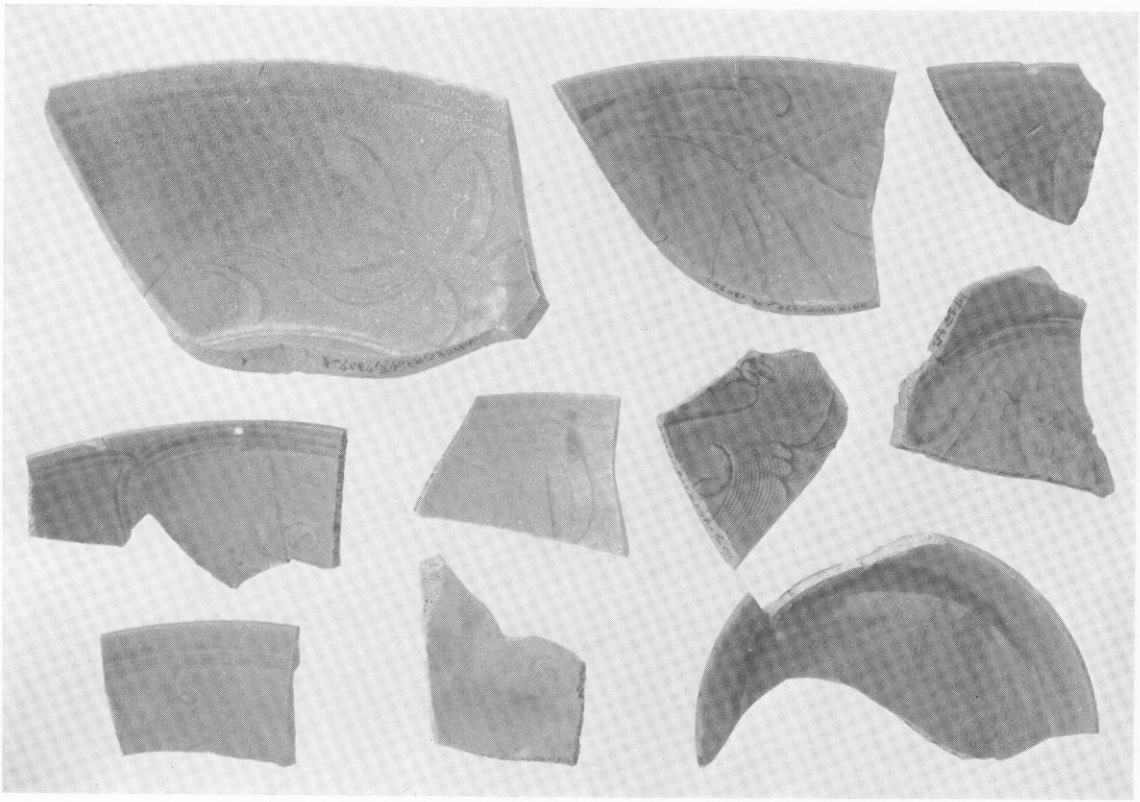
1．白磁　4類



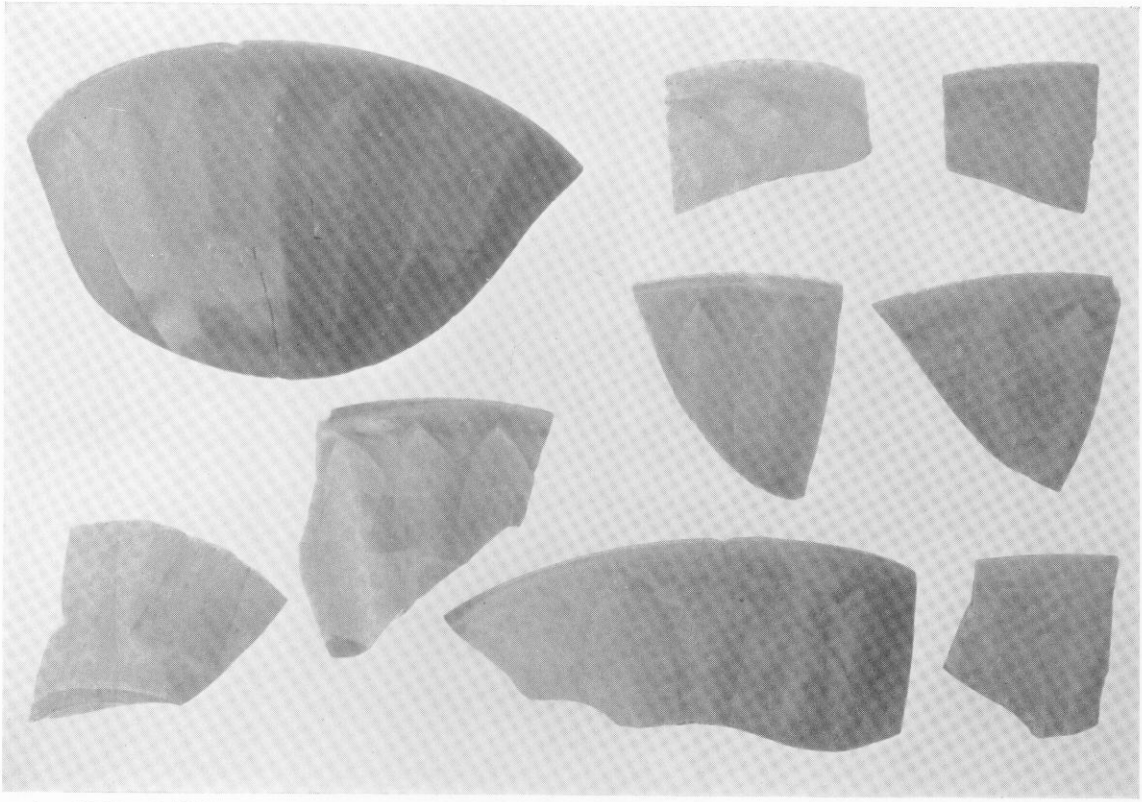
2．白磁　5類



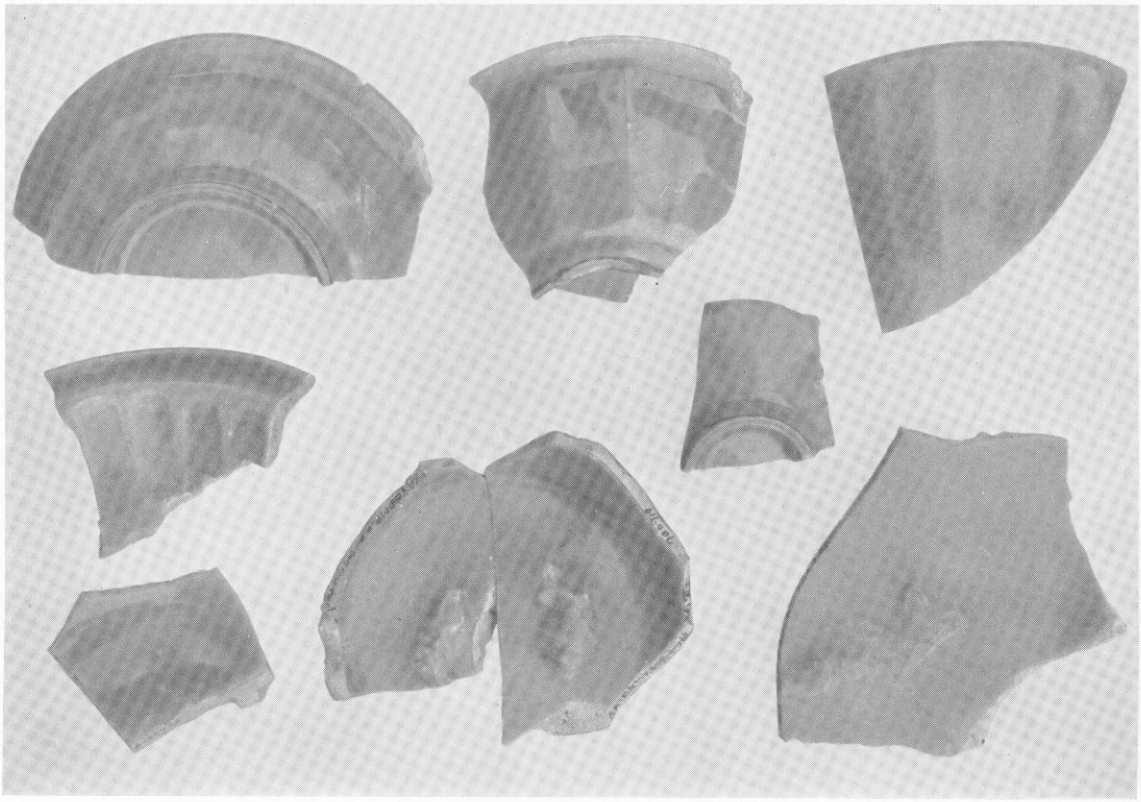
1．白磁　6類



2．青磁　7類(1)

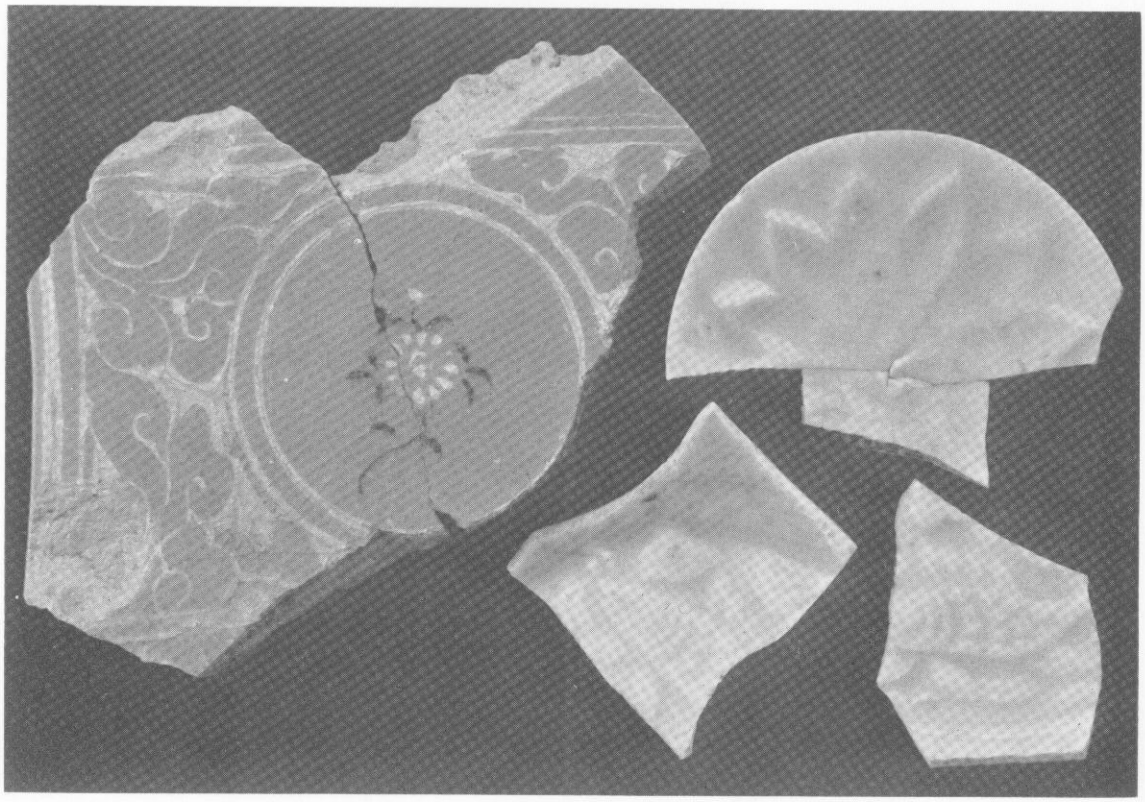


1．青磁　7類(2)



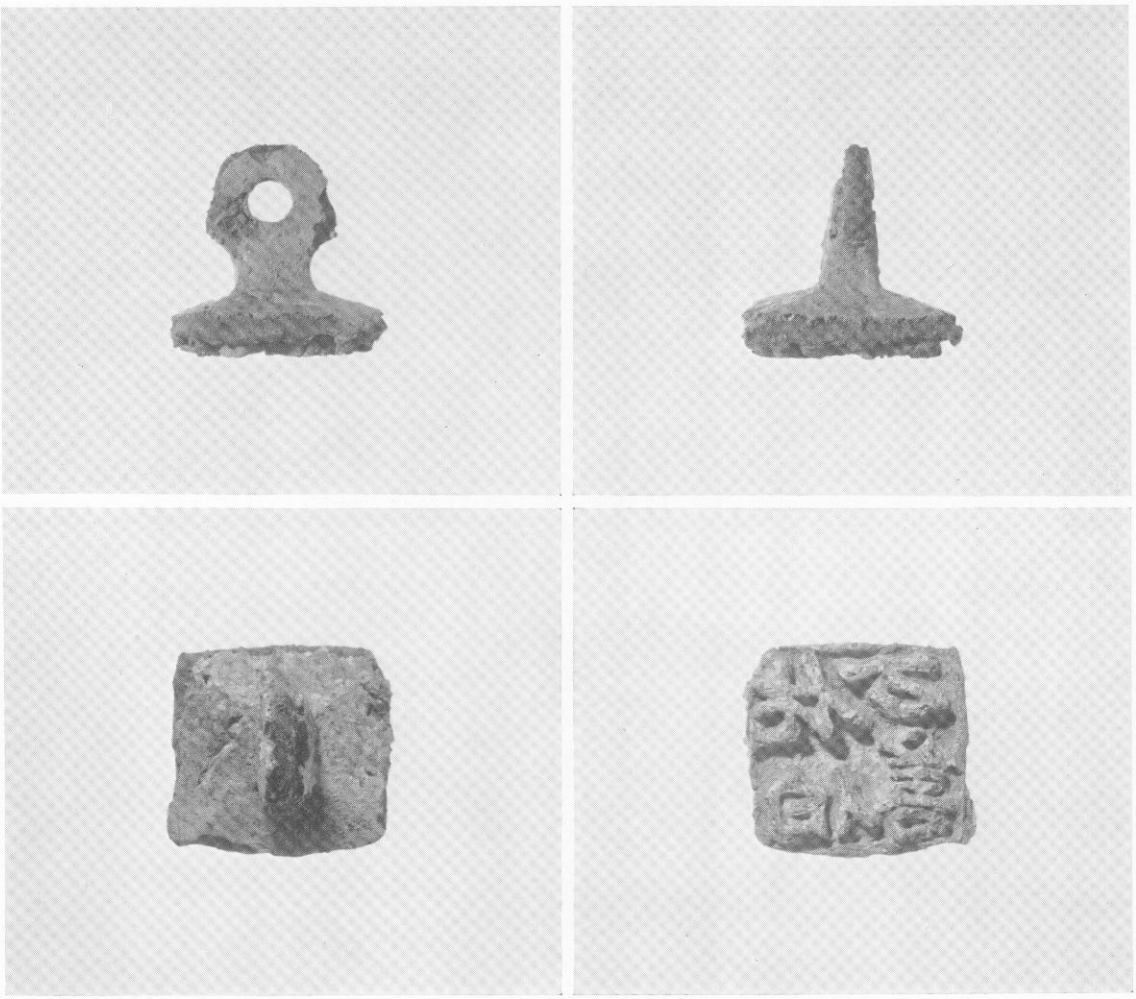
2．青磁　8類

1．青磁　9類

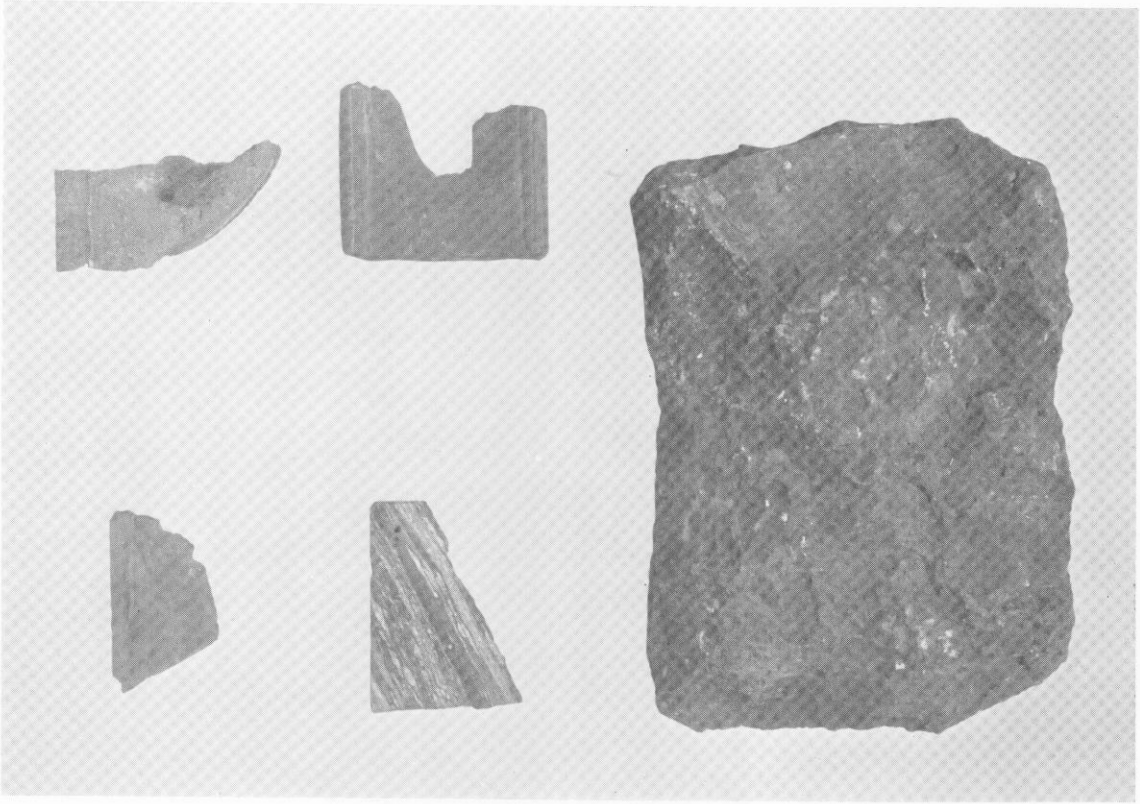


2．高麗青磁，青白磁

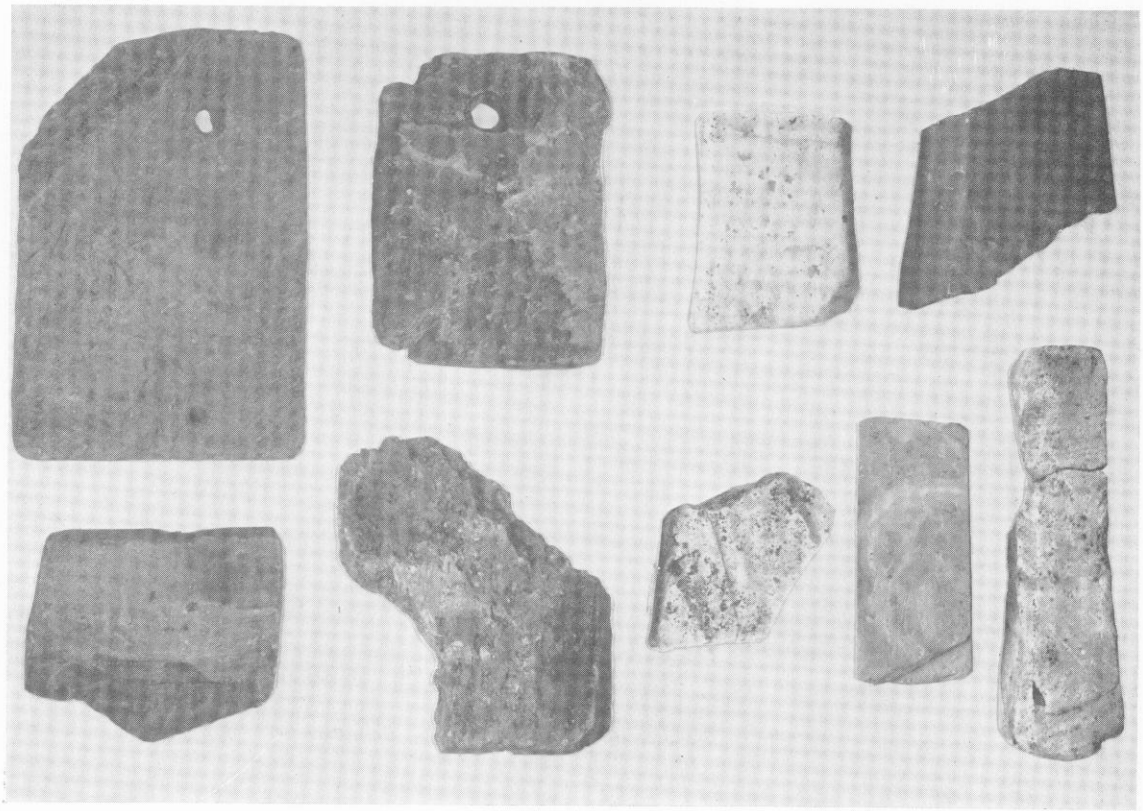
1．軒丸瓦



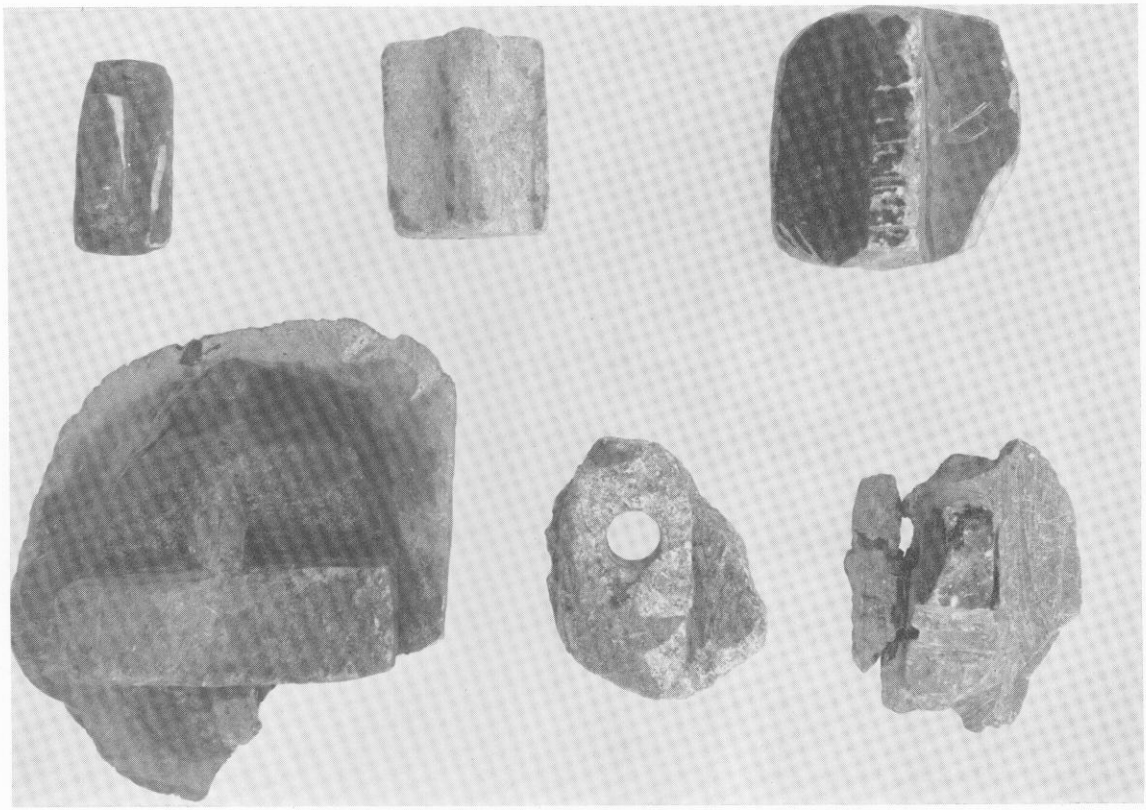
2．銅印（実大）



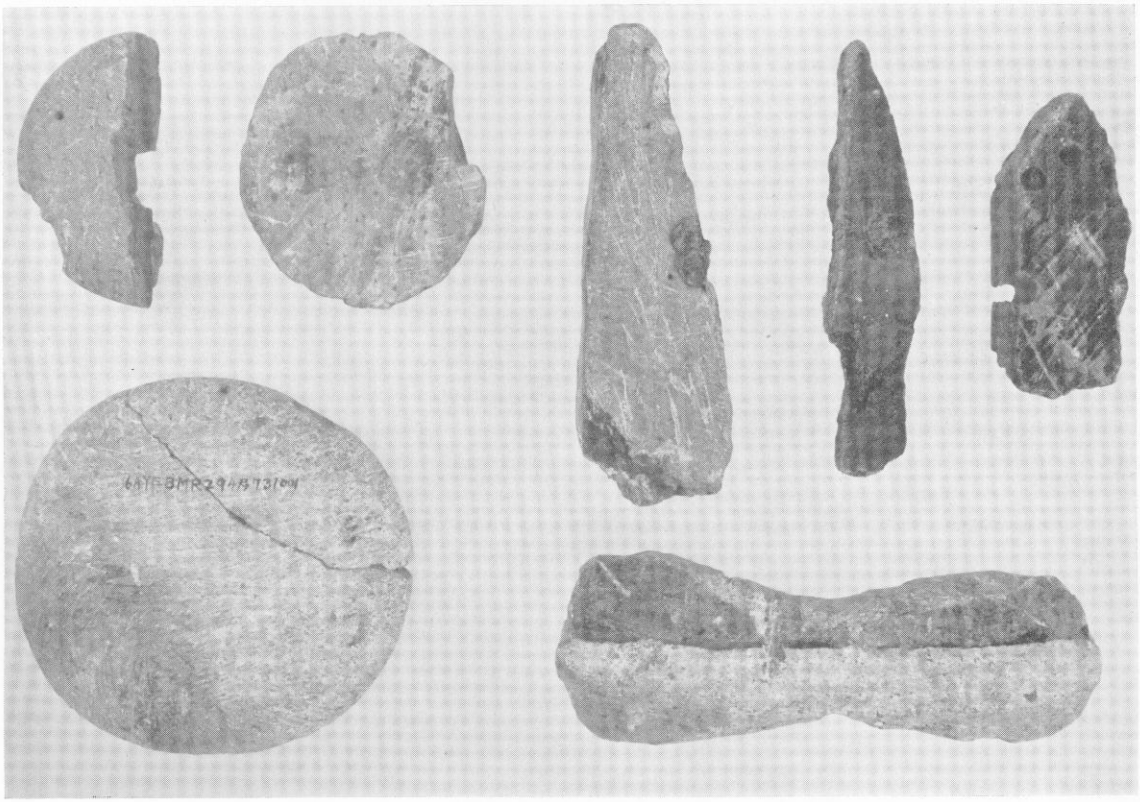
1．石製品



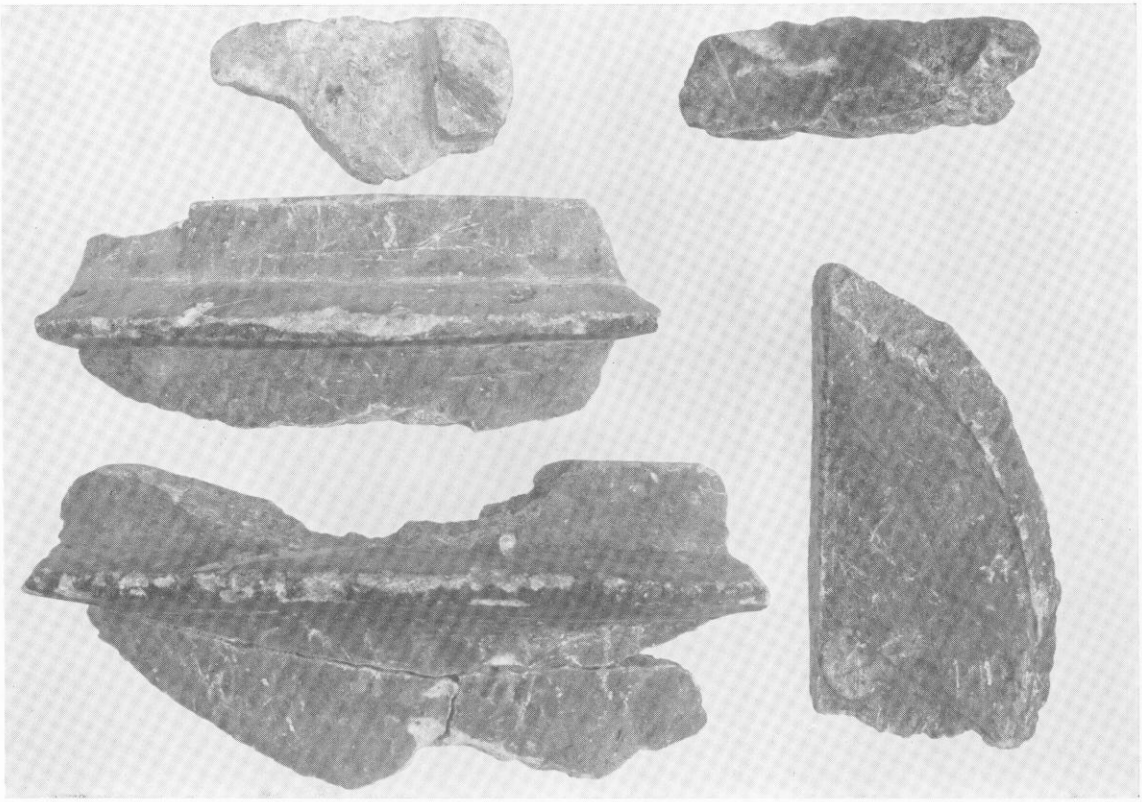
2．滑石製品 (1)，砥石



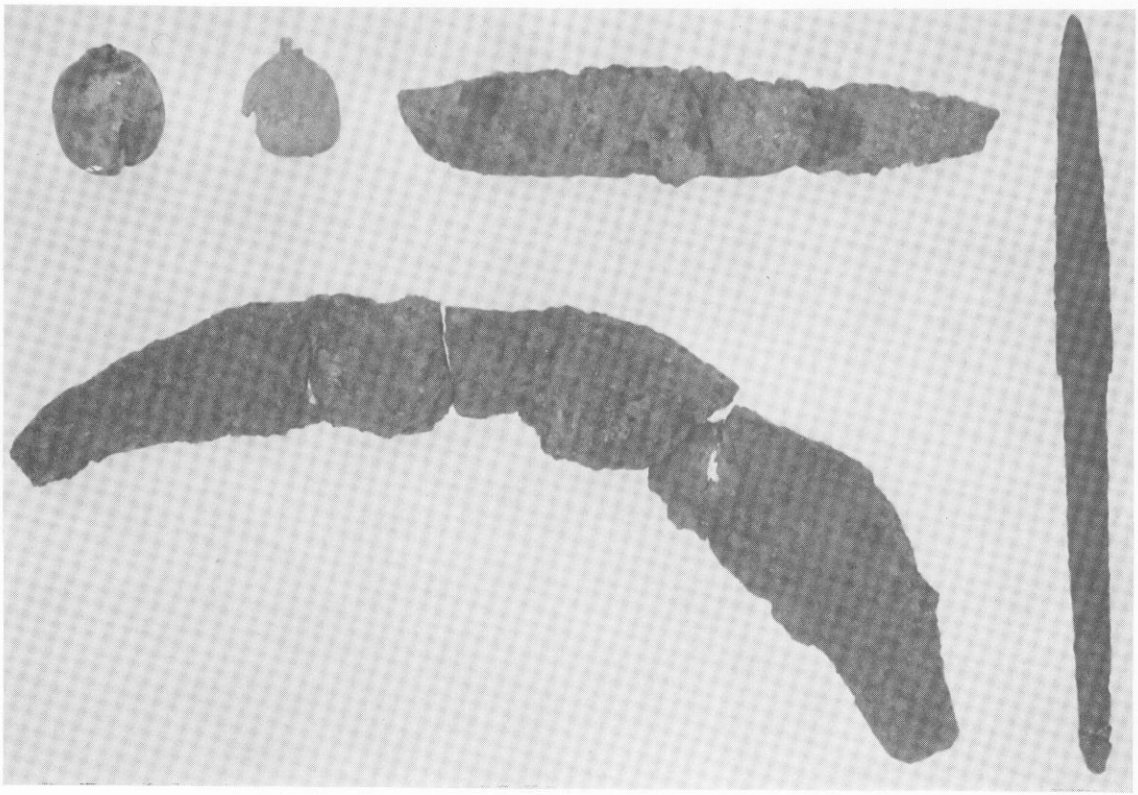
1．滑石製品　(2)



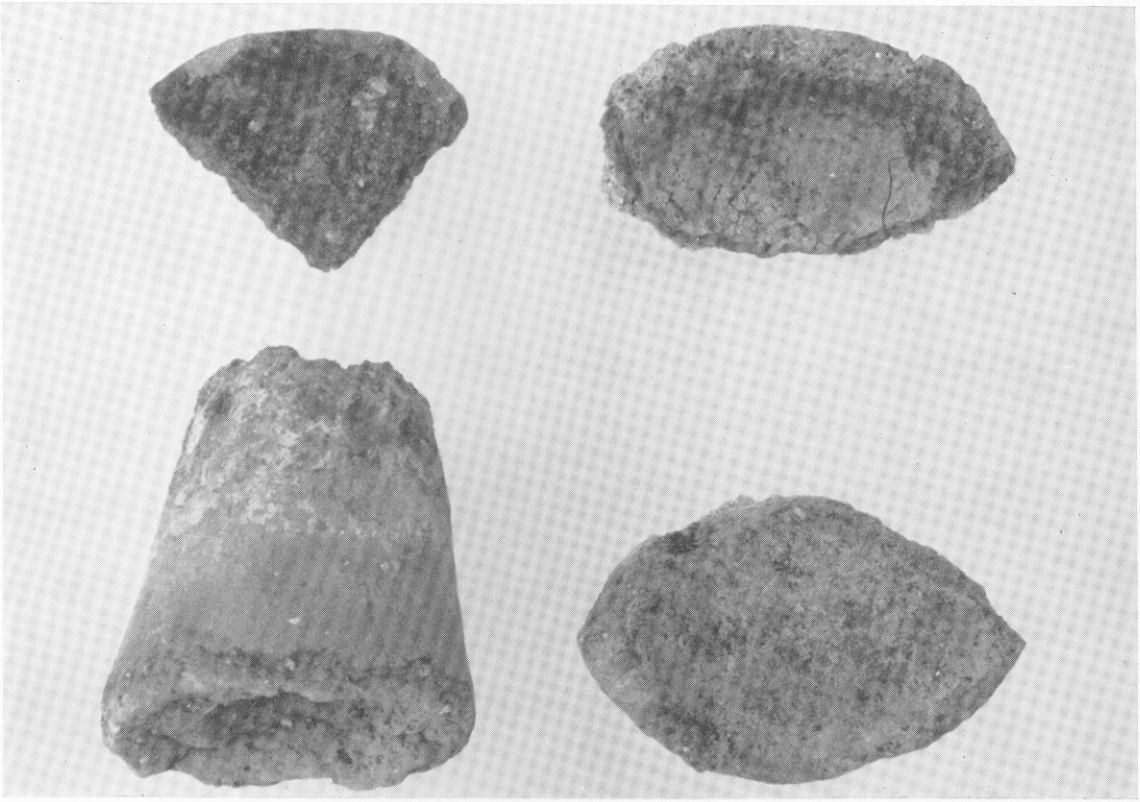
2．滑石製品　(3)



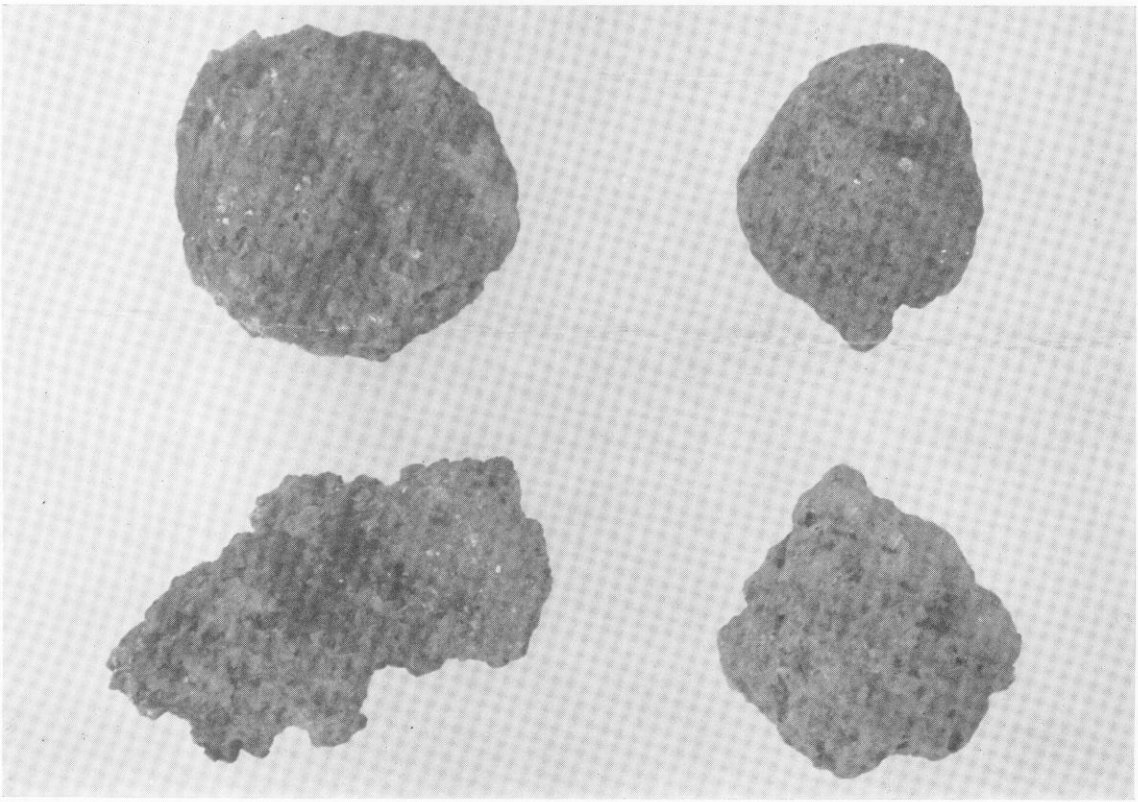
1．石　鍋



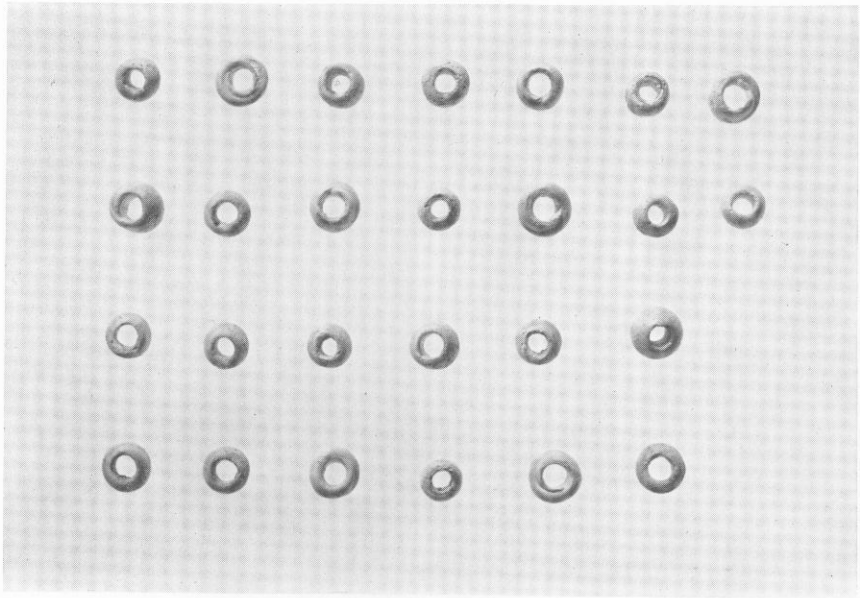
2．金属製品



1．とりべ，鞴羽口



2．鉄滓塊



1．ガラス製小玉（実大）

2．銅銭（実大）

福岡県筑紫郡太宰府町御笠川南条坊遺跡から出土した木製品の樹種名と材質について

九州大学農学部
松本　勗
林　弘也

出土木製品ごとの樹種名一覧表は別表として示す。

この調査結果を木工文化的に考察すると，出土品が鎌倉中期の木製品と考えられるだけに，金属製木工具の発達普及とともに，木材の使用目的に対する樹種と材質についての知識が豊富であり，それに伴った木工技術も，この時代には一応確立されていたと考えられる。

以下各樹種ごとに若干の考察を示す。

I　針葉樹材

1．ヒノキ

ヒノキ材はわが国では勿論，世界でも有数の優良材質で，木理通直で肌目はこまやかで切削その他の加工性は最もよく，仕上げ面も非常によく，さらに芳香と光沢を有する。したがって建築材をはじめ，あらゆる方面に用途が広い。出土品は，井戸枠（曲物），下駄および下駄の歯などである。

厚さ1cmの井戸枠曲物として使用されていたことは，ヒノキ材が長さ方向（繊維方向）の曲物として適しておるとともに，腐れにくく水湿に耐える特性を利用したものであり，サクラの樹皮でとめる技術とともに，当時は既にかなりの知識と技術とをもっていたことが推察できる。

下駄および下駄の歯は今日のキリ下駄やスギ下駄と比すれば，わずかに重いかもしれないが，細工が容易であることと摩耗が少ないことなどの理由によるものであろう。

当時のヒノキ材は天然林（九州以外の遠隔地？）から伐採して運ばれてきた大材であったであろうから，この大材からは主たる建築材や井戸枠などを採材し，その残りから下駄や下駄の歯などをとったものと思われる。

2．クロベ（ネズコ）

樹木の外見はヒノキに似ており，ヒノキ天然林中にサワラなどと混生していたものを，ヒノキと一緒に伐採し，遠く運んできたと想像される。材質はヒノキに比して幾分劣ることは今日では明白であるが，当時九州にはあまり存在しなかったと考えられるだけに，ヒノキ材と同様に使用されたものであろう。出土品は井戸の桶くれとして使用されている。

3．スギ

材質はヒノキに劣り，肌目はあらいが軽軟で切削その他の加工は容易である。出土品は箸，

曲物の底板，履物状木製品であり，現代においても利用されている使用法である。

Ⅱ 広 葉 樹 材

1．イスノキ

わが国では最も重く硬い材質のもので強度も大である。今日では主として南九州に産するが，当時は北部九州でも天然林の中にいくらかは存在していたと思われる。

柱根としての出土は前述の材質から当然であると考えられる。切削その他の加工は非常に硬いので困難であるが，表面仕上げは良好である。

今日の木製櫛はツゲ材が主であるが，明治時代にあってはツゲ材に次いでイスノキ材の櫛が使用されていた。これはイスノキ材の道管配列が散在状であるとともに，その内腔径が割合いに小さく，木部繊維の細胞壁が厚いために肌目は極めてこまやかで，さらに心材の色が帯紅褐色乃至紫褐色であり，またその色が変色しないことなどが櫛として使用されたものであろう。

下駄の歯に使用されたことは，幾分重すぎる感じもするが，明治時代においても，カシ，ブナ，ケヤキなどの重いものが，ホオノキのような幾分軽いものとともに下駄の歯として使用されていたことなどから，やはり摩耗しにくい性質を利用したものであろう。

2．アカガシ

材質は堅硬で強度もあり，そして保存性も中庸であるので，井戸杭として使用されたことは適正な利用と考えられる。

3．サカキ

サカキ材の道管配列は散在状で，肌目は割合いにこまやかであるので細工はしやすい。明治時代には木櫛や刷毛木地として使用されていたが，それよりも枝条を神前に供する宗教的意味が大きい。出土木製品は玉と目され，細工しやすいことからは理解できるが，それ以上の考察はむずかしい。

4．ニレ属

この属のものにはハルニレ，オヒョウ，アキニレなどがあり，いずれも材はやや硬く，道管の配列は環孔である。特にハルニレの材は強靱で割れ難い。このことから明治時代には曲木として，また木椀や独楽などに使用されていた。この樹木は九州の高地にも存在はするが，それより本州とくに北海道に多く産する。これに反して九州ではアキニレが多い。アキニレはイシケヤキとも称し，材は堅硬で車軸に使用されていた。

出土木製椀がハルニレであるかアキニレであるか不明であるが，明治時代の挽物としてはケヤキを最上としていた事実と，実際にハルニレが木製椀として使用されていたことは，アキニレ材においても木製椀が作られたであろうことが想像される。

5．アサガラ？

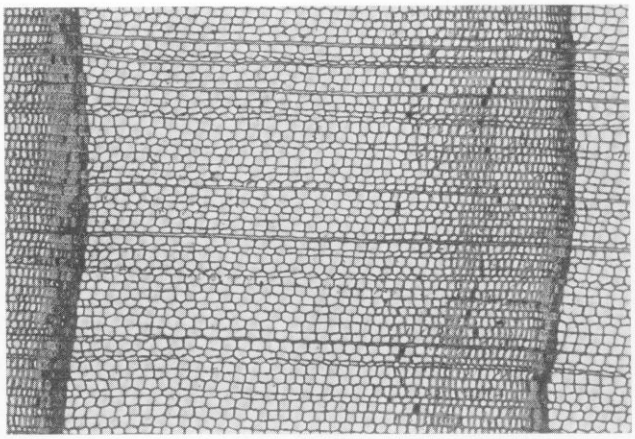
材の道管配列は環孔であり，明治時代にあっては樽の呑口に使用されていたが，その他の特別な用途はない。

出土木製板が何に使用されたのか不明であるので考察できない。

なお，出土木材の顕微鏡写真（横断面，半径面，接線面）を別に掲載する。樹種識別にあたっては，顕微鏡観察によって行なった。

番号	出土地点	品名	樹種名
1	6AYEBL SE502井戸内	下駄歯	ヒノキ Chamaecyparis obtusa ？ ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
2	〃 F2 柱穴内	〃	イスノキ Distylium racemosum
3	〃 E14	下駄	ヒノキ？ ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
4	〃 B2	櫛	イスノキ
5	〃 SE506井戸	井戸桶	クロベ（ネズコ）Thuja standishii
6	〃 SE503井戸内	木製椀	ハルニレ Ulmus Davidiana var. japonica ？ アキニレ Ulmus parvifolia ？ ニレ属であることは確実
7	〃 SE516井戸内	箸	スギ Cryptomeria japonica
8	〃 SE501井戸	曲物（井戸枠）	ヒノキ
9	〃 SE503井戸	曲物（井戸枠）	ヒノキ ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
10	〃 SE502井戸	井戸杭	アカガシ Cyclobalanopsis acuta
11	〃 SD501溝内	履物状木製品	スギ
12	〃 SE505井戸内	下駄	ヒノキ？ ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
13	〃	建築部材柱根	イスノキ
14	〃 C5	曲物底板	スギ
15	〃 SE501井戸内	板材	アサガラ Pterostyrax corymbosus ？ エゴノキ科
16	〃 SD502溝内	下駄と歯	ヒノキ？ ヒノキ科ヒノキ属であることは確実
17	〃 SE501井戸内	木製玉	サカキ Cleyera japonica

木製品樹種名一覧表



1

SE 506井戸　桶板

クロベ

Thuja standishii

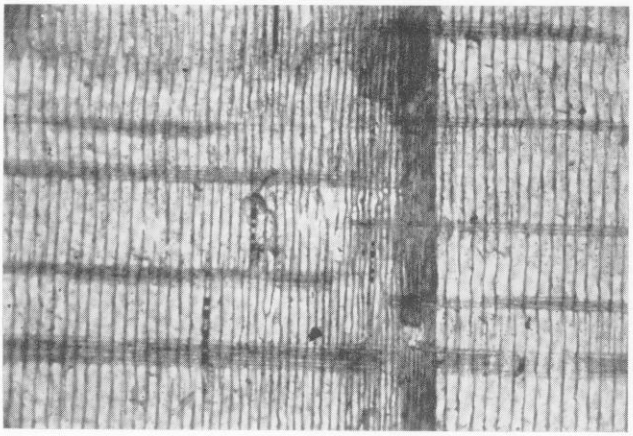
1．横断面　×31

2．半径面　×31

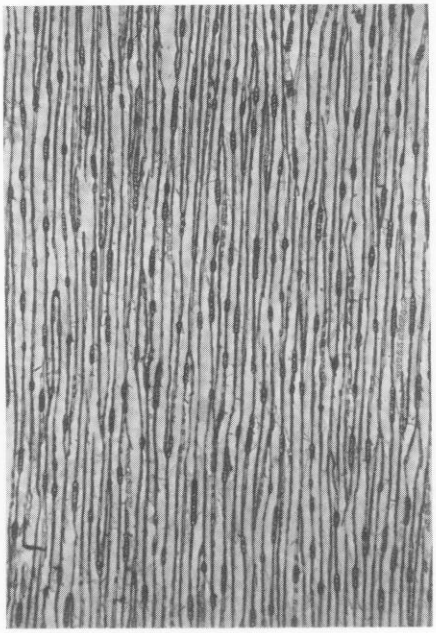
3．接線面　×31

4．接線面　×75

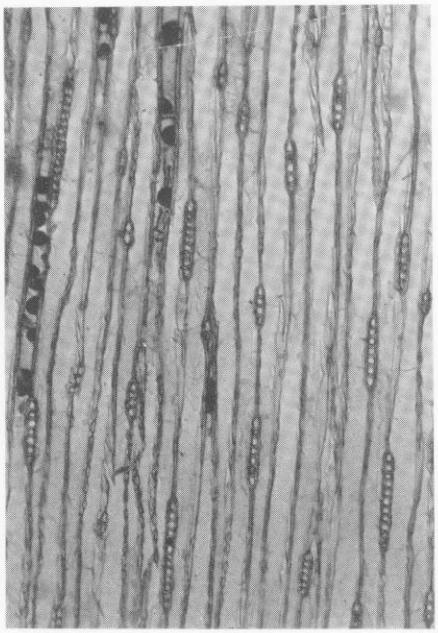
（木材断面顕微鏡写真）



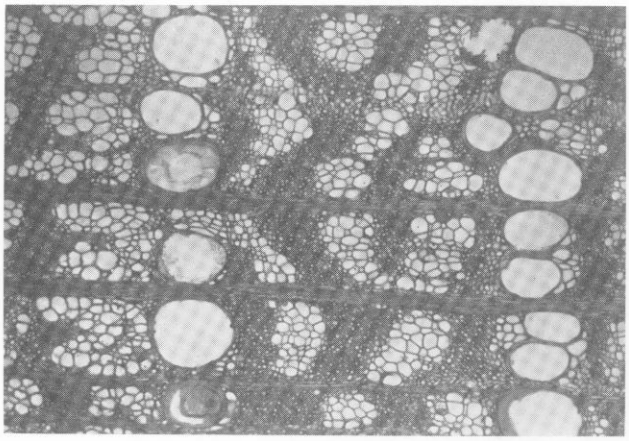
2



3



4



1

SE 503井戸出土　木製椀

ニレ属

Ulmus spp.

1．横断面　×31

2．半径面　×31

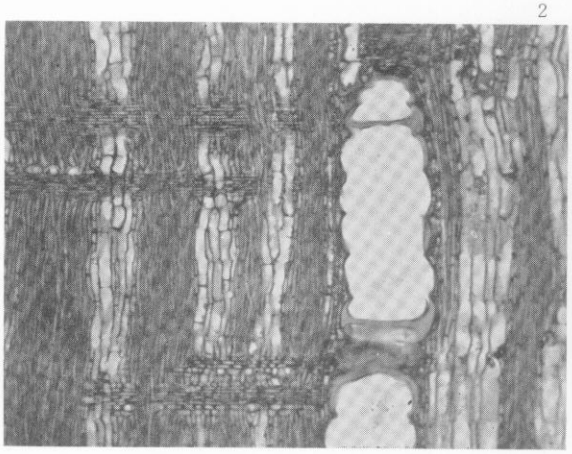
3．半径面　×75

4．接線面　×31

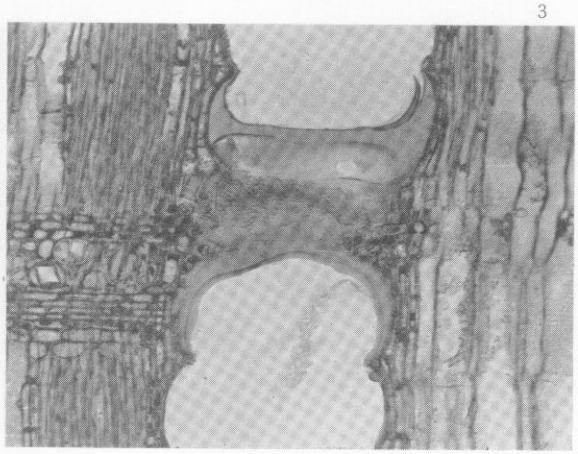
5．接線面　×75

（木材断面顕微鏡写真）

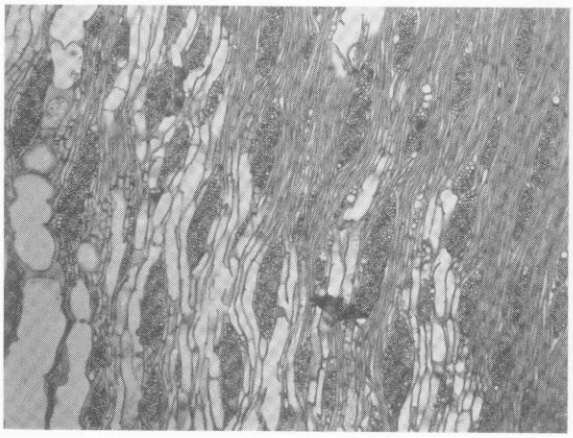
2



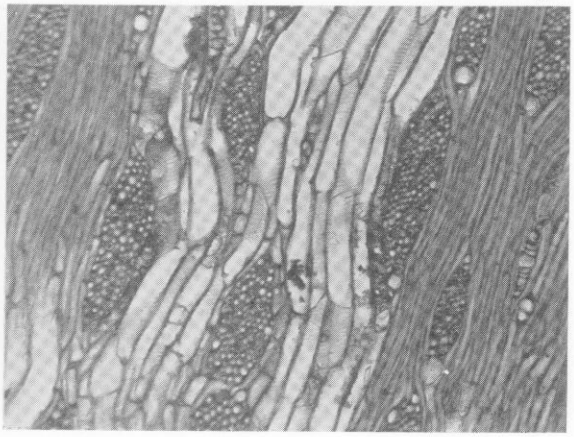
3

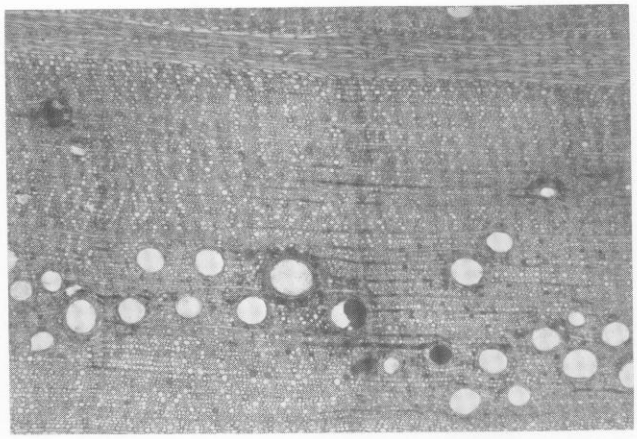


4



5





1

SE 502井戸杭

アカガシ

Cyclobalanopsis acuta

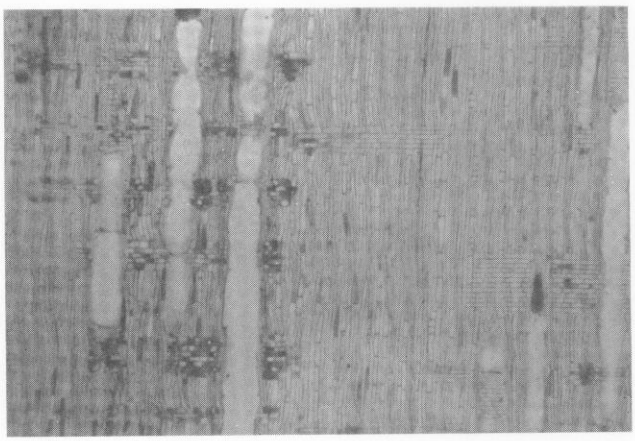
1．横断面　×31

2．半径面　×31

3．接線面　×31

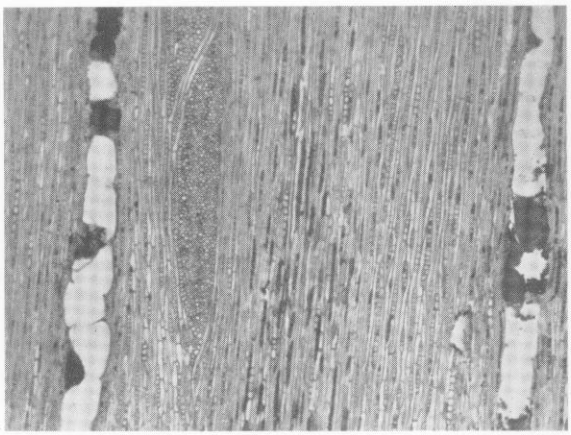
4．接線面　×75

（木材断面顕微鏡写真）

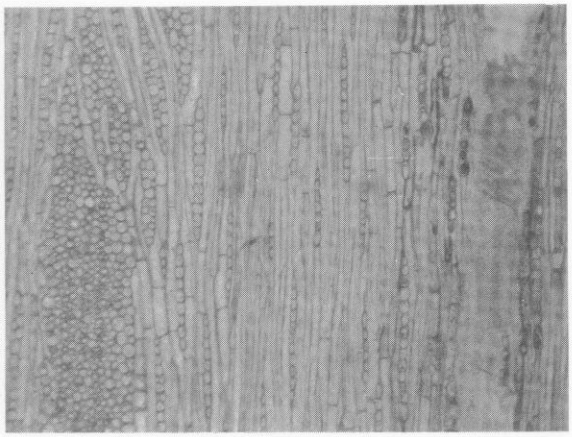


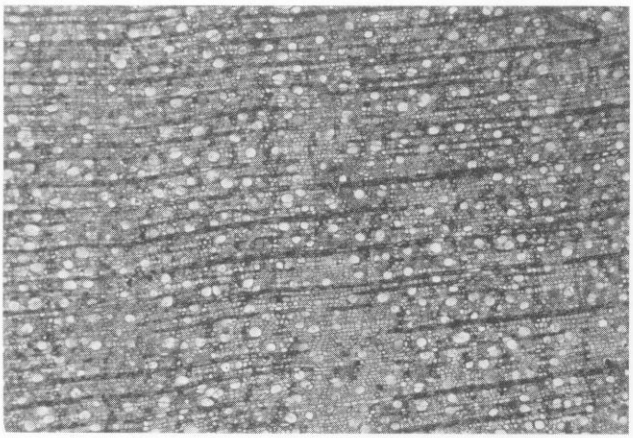
2

3



4





1

建築部材　柱根

イスノキ

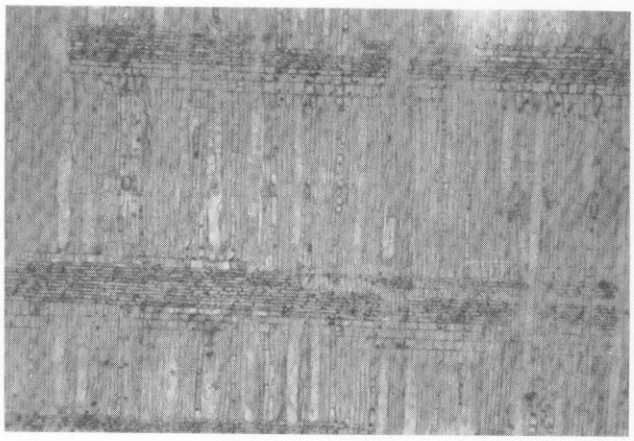
Distylium racemosum

1．断断面　×31

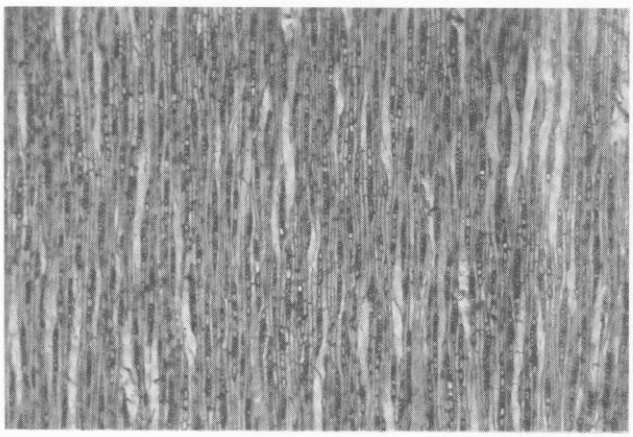
2．半径面　×31

3．接線面　×31

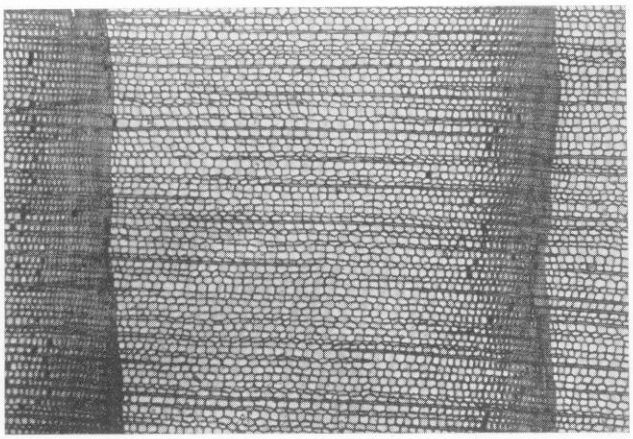
（木材断面顕微鏡写真）



2



3



1

LC 5 区出土　曲物底板

ス　ギ

Cryptomeria japonica

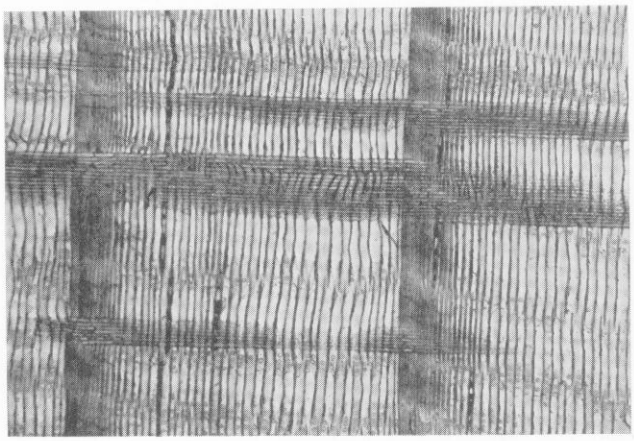
1．横断面　×31

2．半径面　×31

3．接線面　×31

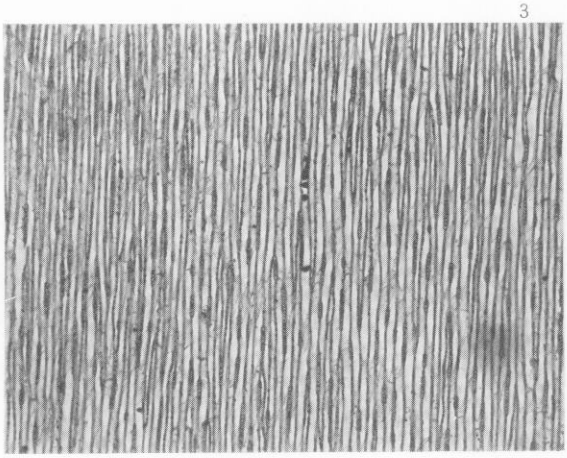
4．接線面　×75

（木材断面顕微鏡写真）

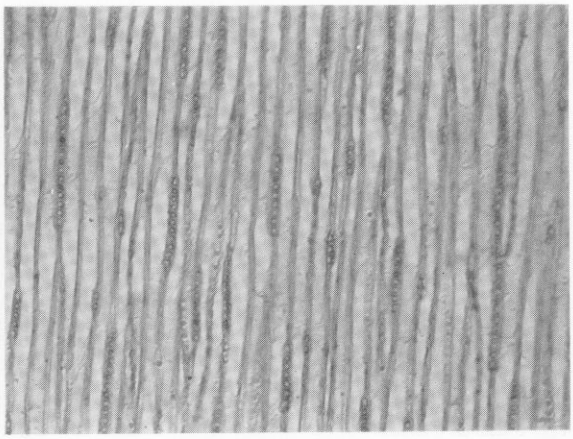


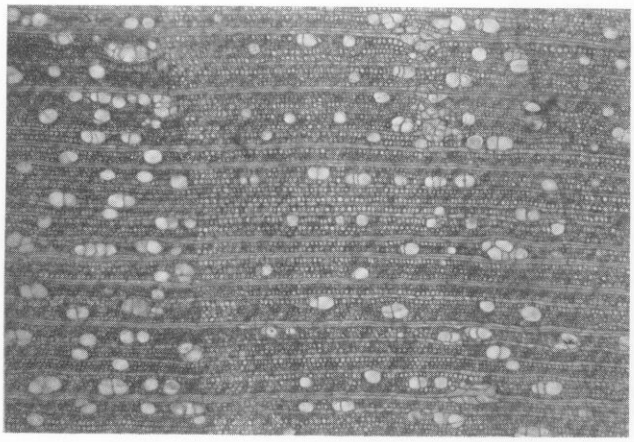
2

3



4





1

SE 501井戸出土　板材

アサガラ

Pterostyrax spp.

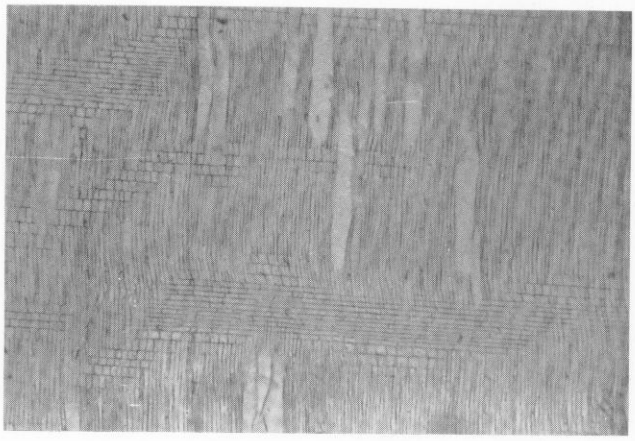
1.　横断面　　×31

2.　半径面　　×31

3.　接線面　　×31

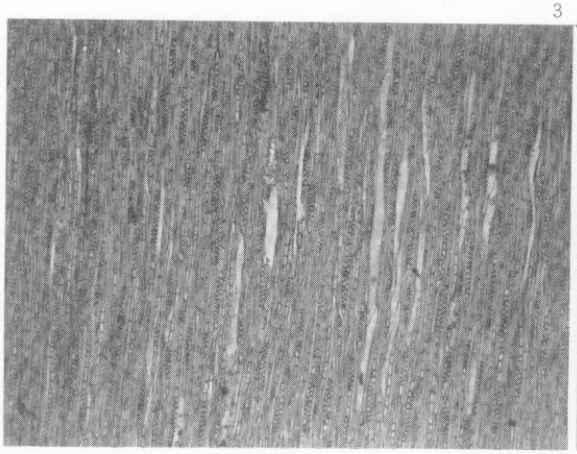
4.　接線面　　×75

（木材断面顕微鏡写真）

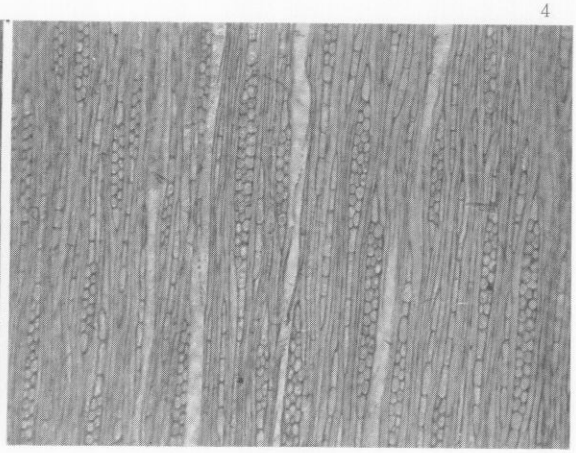


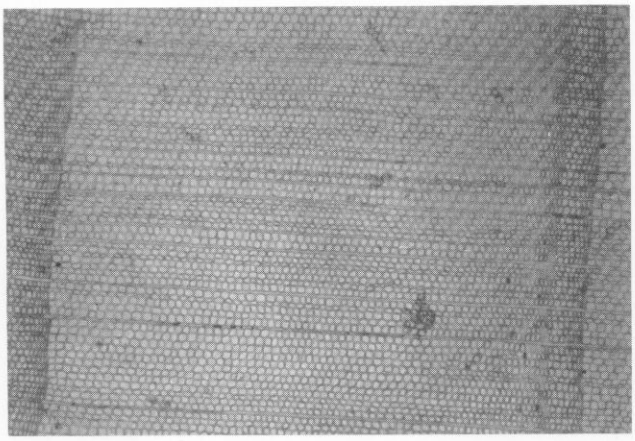
2

3



4





1

SD 502溝出土　下駄

ヒノキ

Chamaecyparis obtusa

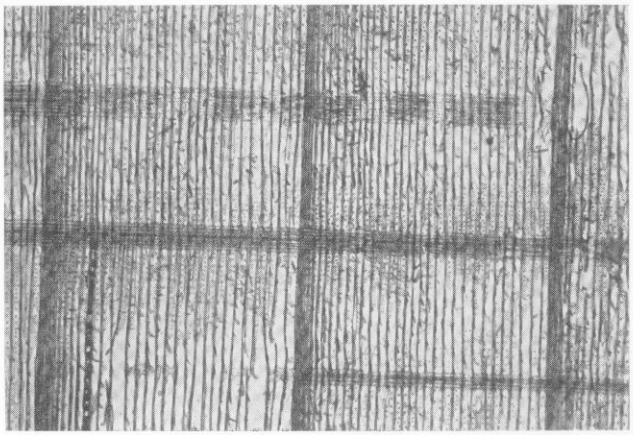
1．横断面　×31

2．半径面　×31

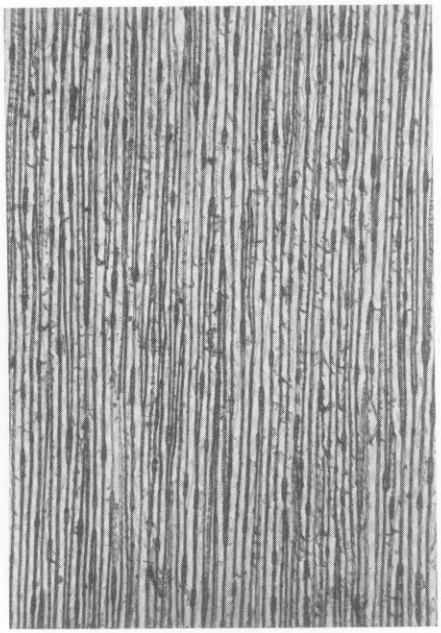
3．接線面　×31

4．接線面　×75

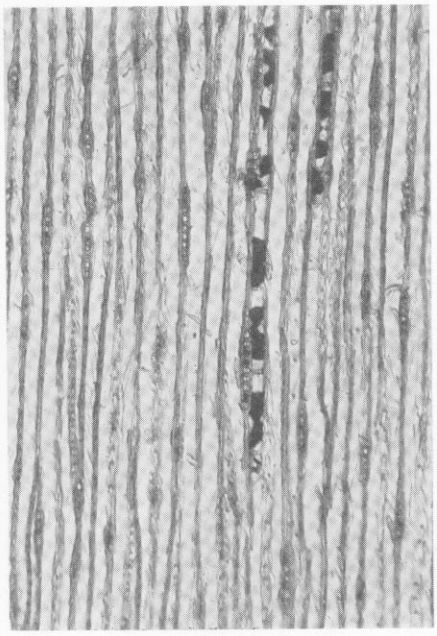
（木材断面顕微鏡写真）



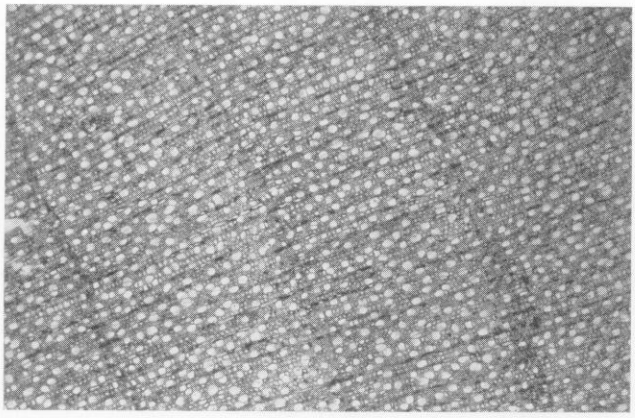
2



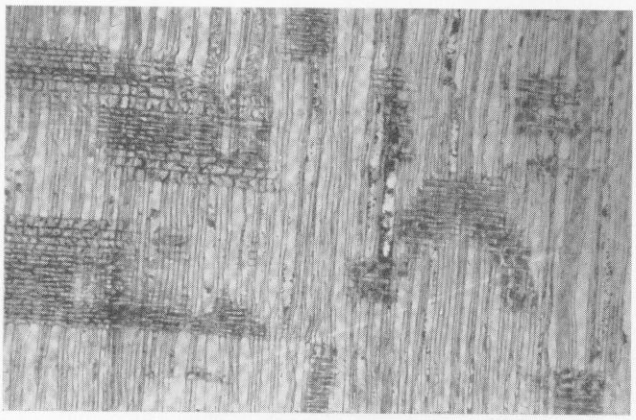
3



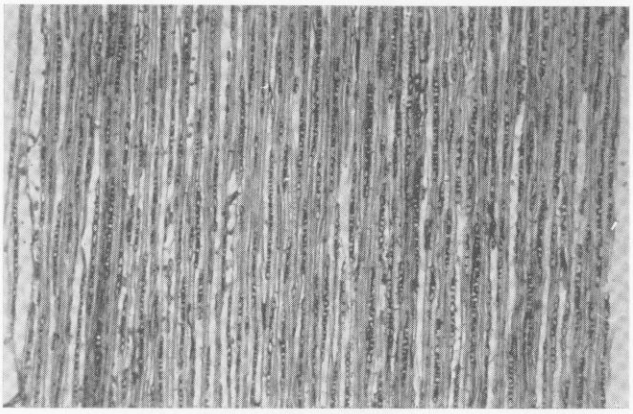
4



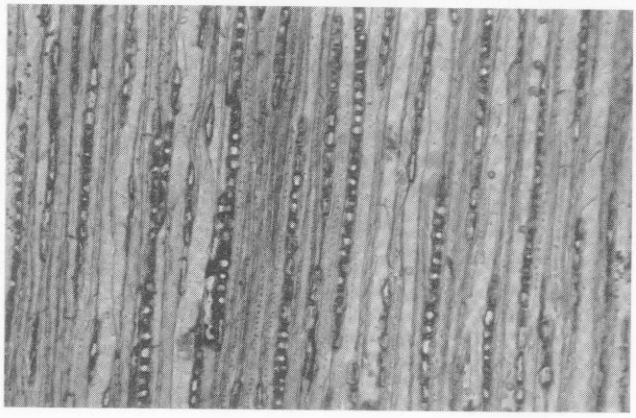
1



2



3



4

SE 501井戸出土　木製玉

サカキ

Cleyera japonica

1．横断面　×31

2．半径面　×31

3．接線面　×31

4．接線面　×75

（木材断面顕微鏡写真）

福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告

——第　3　集——

昭和51年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷　正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2の21